



# 岳 山

第三號

第十年



# 岳 山

---

第十三年第三號

---

大正五年五月發行



# 目次

(大正五年五月十五日發行)

表紙……………茨木猪之吉氏筆

## 挿圖

○枝折峠の半腹より駒ヶ岳(魚沼)を望む	……………	高頭義明氏撮影	……………	一頁
○駒ヶ嶽(魚沼)の絶巔より中の嶽を望む	……………	同	……………	八
○大湯村より駒ヶ岳(魚沼)を望む	……………	同	……………	八
○駒ヶ嶽(會津)の頂上より燈岳を望む	……………	同	……………	八
○平ヶ嶽の絶巔より駒(右)中(中)兔(左)の三嶽を望む	……………	同	……………	八
○平ヶ嶽の頂上より鶴ヶ嶽を望む	……………	同	……………	八
○平ヶ岳の一頂より絶巔を望む	……………	同	……………	一六
○駒ヶ嶽(魚沼)の絶巔より中の嶽(右)鬼嶽(左)を望む	……………	同	……………	二四
○シュトラールエックの小屋	……………	辻村伊助氏撮影	……………	八〇
○小屋よりフィンシユテラールホルンを仰ぐ	……………	同	……………	八八
○ガッグの絶壁とグロースシュレックホルン	……………	同	……………	九六
○グロースシュレックホルン頂上よりグロース	……………	同	……………	一〇四
ラウテラールホルンを望む	……………	同	……………	一一二
○グロースシュレックホルン頂上よりウエッテルホルンを瞰る	……………	同	……………	一一二
○グロースシュレックホルンの西望	……………	同	……………	一二〇



# 雜報

○雪中登山○初雪○登山者の氣招○一日半で大阪から富士山往復○京の山岳趣味○團體と登山研究○京都二中健兒の比叡登山  
競争○山のローマンズ○燒嶽爆發の農事關係○吉野群峰○大峰の花木

## 會報

○第九回本會大會豫告○第十四回有志晚餐會記事○第十五回有志晚餐會○名古屋の第二回有志晚餐會○今村氏送別及京都有志晚  
餐會○奈良市に於ける山岳講演會○會員通信○會長に由りて成る近刊豫告○白馬岳案内丸山廣太郎死す○新入會者



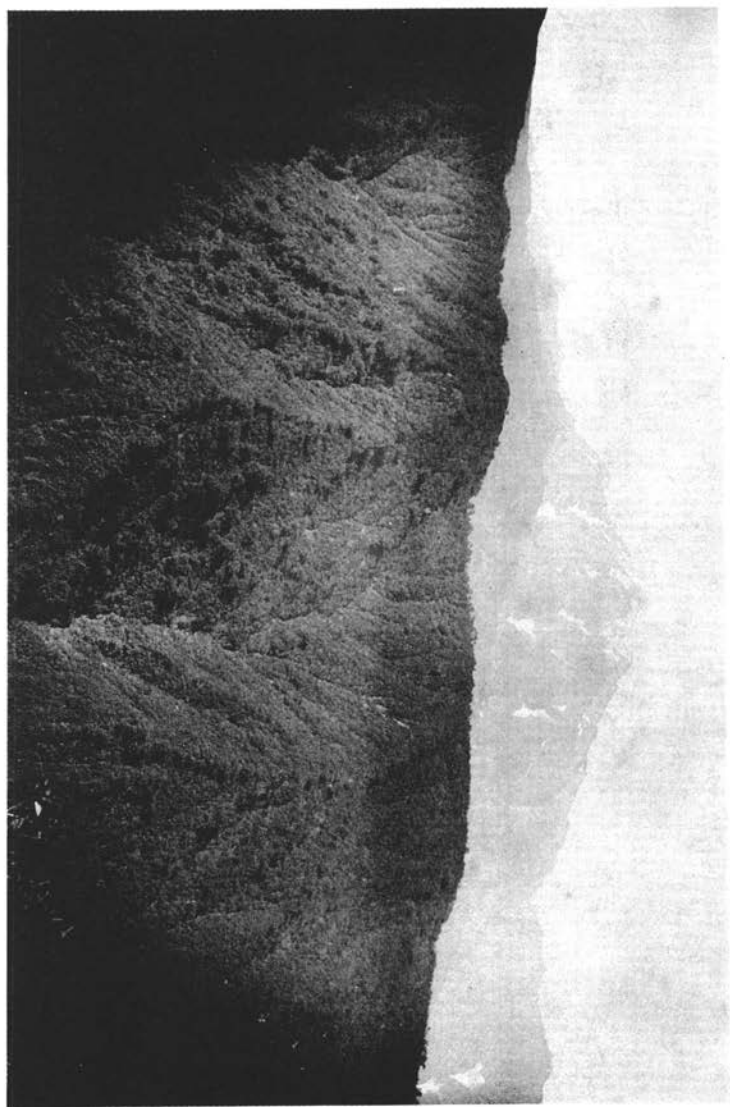


# 第九回大會開催

來る五月廿八日於東京

本誌「會報」欄を見られたし







## 平ヶ嶽登攀記

高頭義明

## 平ヶ嶽と鶴ヶ嶽

平ヶ嶽の記事は従来刊行された地理書には絶無であるから、極めて僭越で且つは大袈裟のやうではあるが、自分を主とした此山の記録とでも云ふやうな事と、自分が此山に興味を持つて、數回の失敗を重ねて、やうやく登攀を試みた筋道を一通り陳べて見やうと思ふ。

今から十五六年前に、自分が小出町へ遊びに行つた時に、三魚沼は深山地であるが、何と云ふ山が一番に高いかと、郡役所の書記をして居られた小島と云ふ人に聞くと、先年參謀本部の役人が調査されて、鶴ヶ嶽と云ふ山が第一だと申されたと咄して呉れた、これが自分が鶴ヶ嶽と呼ぶ山が、自分の住居してゐる國に存在してゐると云ふ事を知つた初めてであつて、何んぞなく氣持よく自分の耳に響いた、地圖を見ると輯製二十萬分一圖の日光圖幅にも、地質調査所の四十萬分一豫察圖にも明記してあるが、何れも標高を記してない、併し三魚沼の最高峰とすると、吾が北越の山岳中でも可なり高いものとなるから、二三年の中には是非に登攀してみやうと考へた。

歸宅すると大急ぎで地質調査所の二十萬分一詳圖の日光圖幅を出して見た、鶴ヶ嶽の高さと登山口を物色する意であつた、處が此圖には鶴ヶ嶽の名が載せて無い、豫察圖の鶴ヶ嶽の邊と想はるゝ所に、平ヶ嶽と云ふのが記してある、自分は平ヶ嶽と鶴ヶ嶽と云ふのは、同山異名であつて、越後では鶴ヶ嶽と呼んで居て、上州方面では平ヶ嶽と稱するのであるまいかと想ふて、越後名寄、新編會津風土記、

◎平ヶ嶽登攀記 高嶺

二

日本地誌提要、大日本地名辭書などを漁つて見たが、二山の記事は勿論のこと、何れの山名さへも見出すことが出来なかつたが、自分は心中では此二山を同山異名と臆断して居た。

其時から鶴ヶ嶽は好い名稱だと思つた、日本で鶴の字を山岳名としてあるのには、九州で有名な鶴見山をはじめ、鶴峠、鶴卷山、鶴根山、鶴飼山、鶴ノ子山、鶴谷山、鶴城山、鶴掛山、鶴木山などがあるが、鶴ヶ嶽の名が最も雄大で高潔で響きが可いやうに思ふ、平嶽は名稱としては感心もしないが、頂上が平坦であるから名づけられたらしく想像される、何れにしても中越の傑物らしい氣持がしてならない、自分は其折にはヒラダケと呼ぶのやら、またはタヒラダケと稱するのやも知らなかつた。

それから俗事に妨げられて二三年を過ぎた、間もなく山岳會が設立された、自分は二度程此山の登攀を思ひ立つて、其登山口と想はる、北魚沼郡の湯谷村ゆのたにや、南魚沼郡の六日町方面や、上州利根郡の藤原村へ照會して見たが要領を得ない、明治四十一年の五月に、東京から清水峠を踰えて歸國した時に、藤原村の入口の湯檜ゆひ曾そと温泉でいろ／＼聞いて見たが、平嶽だの鶴ヶ嶽だのと云ふ山は聞いた事がないと云ふて居る、其中に魚沼地方の人々が主となつて銀山平（後に記す）の開墾事業を起されて、自分の知己であつて隣村である高橋九郎氏が、高橋農場を建設された、農場の主任は白井又八と云ふて自分と主従のやうな關係のあつた者である、高橋氏と白井から銀山平方面の山岳に登るやうに、面會の時や便の折に毎々勸告される、そこで大平晟氏と銀山平へ見物に行くことになつた、自分は平嶽に登るのが主眼で、大平氏は燧嶽に登つて日光へ抜けられる、計畫で、時間の都合で同行もしやうと約束して、準備までしたが、出發の四五日前になつて自分は差支が出来て中止することゝなつた、已むを得ぬから大平氏に依頼して、平嶽に關係した一切の事を聞き合して貰ふことにした、大平氏が歸宅されて御土産話をされたので、はじめて此山の大體の見當が付いた、稱呼をヒラガタケと云つて鶴ヶ嶽と別物であること、只見川の支流の北又川の支流である中又川を登つて、高橋農場から二夜以上

の野宿をして往復することが出来て、案内者は大平氏が駒ヶ嶽（魚沼）の案内をさした櫻井林治と云ふ者で、大湯温泉で容易に雇ひ入るゝ事が出来て、山の頂上は苗場山式に廣濶であると云ふことが分明になつた、さうして大平氏は初めは平ヶ嶽に趣味を持たなかつたが、案内者の咄を聞いてから登攀して見たくなつたと附説された、自分は益々此山に登り度く思つて居たが、其翌年はふとしたことから登山時期を海外に過ごしてしまつた、昨大正三年六月には、高橋氏にも依頼したり、白井へも發信して平ヶ嶽の案内者を雇ひ入れて貰ふ事にして置いた、折しも其邊の五萬分一假製圖が刊行されたから、雀躍りせんばかりにして出發した、七月中旬に大湯温泉の東榮館に四五日滞在して、林治を案内者として駒ヶ嶽へ登つた、それから林治を連れて銀山平の高橋農場へ着いた、白井が兼ねて依頼して置いた案内者の大久保某は、銀山平の某養蠶所へ雇はれて來て居るので、自分等が銀山平へ行つたのが四五日遅れたのと、養蠶が少し平年より早いので、多忙の時期に向つて來たので、案内が出来ぬと云ふことになつた、白井が養蠶所へ談じて養蠶所では承諾して呉れたが、大久保某の妻君が臨月なので、妻君の方から不服が出たとやらで、大久保某は案内が出来ぬことになつて、折角白井が盡力して呉れたのも書餅となつた、大久保某の言に據ると、只見川の上流の白澤を登るが便利と云ふので、この登路は林治は知らないのである、大久保某に斷られてから白澤の登路を變更して、林治を案内として中又川を登ることに決定した、さて愈々多年の宿望を果す日が來たかと、早朝に起きて見ると快晴である、急いで結束していざ出發となると、人夫が一人居なくなつてゐる、元來湯谷村は行き詰りの山村であつて、大湯と樺尾又の二温泉があるから、他所から這入る人の過半は遊びに行くので、土地相應の贅澤はすることになる、随つて土着の人には他所から來て少しでも知られて居る者からは、かき合ひに餘徳があるものと考へて居るものが多い、銀山平の開墾事業が起つて、白井が高橋農場の主任となつてからは、賃金を一定するとか、其他にいろいろ改良を試みたので、表面からは誰れも文

句を出すものはないが、裏面では反感不平を抱いて居るものもある、その復讐か否かそこまでは知らないが、人夫の一人の勞働の割合に賃金が不足だと云ふて、前夜白井に叱責された男が、今朝になつて急に病氣になつたから歸村したと云ひ出して、林治と今一人の人夫が様々に説諭したが、白井が自分の所へ来て居る中に勿々歸村したことが分つた、銀山平の養蠶をしない農家は、蕎麥が半作だと云つてゐる、白井も數人の雇人を監督して蕎麥蒔をして居た、銀山平は夏期に耕作や養蠶に行くか、又は開墾事業に従事して居るのであるから、農繁期になると殊に餘分な人間が一人も居ない、信州邊であると金錢問題で人夫を得ることも出来るが、銀山平では先づ絶對に不可能と云ふべきであらう、白井は出来るだけ奔走盡力して呉れたが、どうしても人夫がないから自身で出懸けると云ひ出した、かうなると白井の事情を知つて居るだけに、さうして呉れと云ふことが出来ない、自分は平ヶ嶽を斷念して直に岩代の檜枝岐へ行くことに決心した、其年の十月に大林區の役人が平ヶ嶽へ調査に来るになつて居た、其時の人夫を今年から豫約して置くから、來年（大正四年）は是非來て呉れと白井が云ふから、自分も其氣になつて農場の人夫を一人借りて、其日に檜枝岐へ越した、檜枝岐から會津の駒ヶ嶽に登つて、岩代の山岳に殘雪の殆んど存在しないに驚いたが、同時に越後の駒ヶ嶽、中ノ嶽等に殘雪の頗る多いのを嬉しく思つた、平ヶ嶽には殘雪が頂上の處に少しく見えて居た、夫れから尾瀨沼へ行つて偶然に志村鳥嶺氏と落合つた、志村氏と燈嶽に登つて平ヶ嶽の雄大なるに見惚れた、前述の次第で平ヶ嶽を思ひ込んでから失敗ばかり重ねて居たが、今年（大正四年七月十八日）に平ヶ嶽の絶巔に立つて鶴ヶ嶽を望見することが出来た、以下その紀行を兼ねた案内記を書くことにする。

附記、平ヶ嶽はヒラダゲとも呼ぶものあり、蓋し山巔平坦なるより名を得たるものならん、此山は各種の地理書に漏れたれば、明治の初年には知るものなかりしが如し、夫れより新式の鐵砲の渡來してより、越後、岩代、上野の獵夫が次第に深山に入り、此山の特殊の山容によりてかく呼びしに



あらざるか、此山の地圖に露れたるものは、明治二十一年刊行農商務省地質調査所の日光圖幅なりとす、其一年前に刊行されたる、陸地測量部の輯製二十萬分一圖日光圖幅には、中岳と記されたり、誤記か誤植かとも思はるれども、余が日本山嶽誌刊行の時に、群馬縣統計書の山嶽部を一覽せしに、魚沼の駒ヶ嶽を上野の國界の如くに記されたるやに記憶せり、既に測量部または調査所の二十萬分一圖出で、より十年近くなりたるに、猶ほ訂正せざる縣廳の迂濶にも呆るれども、その縣廳等より十年前に提出せし材料を輯製したるもの故、駒ヶ嶽よりも高くして且つ南に在る中ノ嶽を、上野界に認めしやも知るべからず、同圖の只見川以西の國界には西より數へて、荒澤岳、白澤嶽、中岳、鶴ヶ嶽とありて、鶴ヶ嶽を北、南魚沼の郡界となし、鶴ヶ嶽より北方に走れる山脈中に、中ノ嶽、駒ヶ嶽の諸山を描きたり、此圖と同年に刊行されたる地質調査所の四十萬分一豫察圖もまた鶴ヶ嶽を以て郡界を北走せる山脈の起點とせり、以後鶴ヶ嶽を境界とせるもの頗る勢力あり、翌年に刊行されたる調査所の日光圖幅には、只見川以西の國界を西より數へて、入岩嶽 2008 平嶽 2170 とありて、平嶽を北、南魚沼郡界の東に記され、郡界普近（會津圖幅も参照せり）には鶴ヶ嶽の山名を缺けり、こは殆んど現今の地圖に齊しきものにして、入岩嶽とは鶴ヶ嶽のことなり、鶴ヶ嶽の稱呼は越後方面の名なるが如く、檜枝岐の者は何岩（昨年の手帳を紛失して失念せり）と呼べり、蓋し鶴ヶ嶽は古生層と花崗岩地に噴出せる輝石安山岩にして、山勢附近の山岳に異なるを以ての故ならん、昨年刊行されたる測量部の五萬分一圖出で、地形はじめて明瞭となり、平ヶ嶽（平嶽に作る）を八海山圖幅に、鶴ヶ嶽（影鶴山に作る）を藤原圖幅に收めたり、地質調査所の二十萬分一詳圖は、未だ全部の完結せざる故にや、地理學者の多くは同所の豫察圖に據り、約三十年前に出版されたる日光圖幅の正確なるものに採らずして、大日本地誌の如きも平ヶ嶽を省きて、鶴ヶ嶽を載せたり、此の如く鶴ヶ嶽の名は可なりの勢力ありてまた好名稱なれば、余は出所も知れざる新名稱の影鶴山

を避けて、鶴ヶ嶽の名を用ふるものなり。

## 平ヶ嶽に登る

平ヶ嶽に關しては前章に於て長々と陳べたが、まだ嫌焉ぬから此章の前叙としてもう少し記する、此山は深山中の深山であつて普通の道路から見えぬから、容易に瞻望することが出来ないし、それが原因で世人に知られて居ないのである、また蓮華群峰や妙高山や日光白根、男體山、赤城山、淺間山、富士山からも見えるには、見えて居る筈であるが群峰疊障の中にあるから、其獨特の形狀を認められることが出来ない、平ヶ嶽の偉大なる山勢を知るには是非とも燧嶽からせねばならない、越後方面の荒澤嶽や中ノ嶽や兔嶽も可いとは想ふが、登攀したことがないから斷言することは出来ない、順序として此山の所在を略説する必要がある、北越と上野の國境を略ぼ南々西から北々東に向ふて走つて居る山脈を、清水連嶺と呼んでゐる、人によつては三國山脈とも稱して居るが、三國山は各所に同名があつて混同の恐れもあるし、夫れに三國山や三國峠は往時は著名でもあつたらうが、國道が清水峠に移轉してからは清水峠を主要なるものと見るべきものと思ふし、位置から云ふても三國峠の南端にあるに反して清水峠は略ぼ中央に位してゐるし、高さも清水峠の方が二百米突以上も抜いてゐるから、自分分は清水連嶺と呼ぶ方へ賛成するのである、此連嶺の主軸の東端をなして居るのが平ヶ嶽である、即ち新潟縣越後國北魚沼郡湯之谷村と群馬縣上野國利根郡水上村の境界をなして居て、其山足は西北は劍ヶ倉山から北に延びて、北と南魚沼の郡界をなして居る兔岳と丹後山の間の一隆起の山脚まで行つて居て、利根川の本流の水源は此山と丹後山の間から發して居る、北は三條の山脈をなして、阿賀野川流域の只見川と中岐川と戀岐澤に截られて居る、其三條の山脈の西のものは中岐川の本流と、支流の二岐澤の間にあつて北端が大澤山である、中のものは二岐澤と戀岐澤の間を延びて更に只見川と北

又川の出合まで進んで居て、燧嶽から壯大に見えるのが此尾根と其東のものと重なつてゐるので、何れも蜿蜒として四里以上に亘つて居る、東のものは戀岐澤と只見川と白澤に断たれて居る、西南は上州の水長澤山を成して居る、南は上野、越後の界をなして白澤山と成つて居る、以上を平ヶ嶽の全部と見るべきであらう、越後方面の白澤と即ち中岐川の支流（灰又山の南のもの）と、上野方面の利根川の本流と其支流の水長澤の南の水源とで平ヶ嶽全部を周つて居るのである、鶴ヶ嶽と白澤山の間に大白澤山と地圖に記してあるが、これは平ヶ嶽の尾根が盡きた處であつて山と云ふよりは平地と見るべきであらう、平ヶ嶽の全部は花崗岩であるから大白澤山も花崗で無論平ヶ嶽に屬するものであつて、その東から鶴ヶ嶽に屬する火山岩となるらしい。

東京の上野驛の九時四十分發の夜行の急行列車に乗ると、翌朝の九時半に來迎寺停車場に着する、自分等が二十幾年前に片貝の小學校に通學して居た頃には、一尺許の作場道であつて人家など無かつたのが、今は三間餘の縣道が通じて五十軒許の人家が出來た、新來迎寺驛（魚沼鐵道）の輕便鐵道に搭じて九時三十四分に發車すると、十時十八分に小千谷驛に達する、そこから人力車または馬車で約五里を行くとト出町である、小出から爪先上りとなつて約三里を行くと、日本第一ラヂウム温泉の稱ある北魚沼郡湯谷村椽尾又温泉に着する、自在館と云ふ家が可いやうである、小出から人力車を通ずるが二人引きでないで、時々歩行させられて其効が少くない、温泉は温度が低いが往昔から著名ものである、小出から椽尾又に着く少し前に右に折れて行くと大湯温泉がある、椽尾又まで八町許りの距離である、大湯温泉は温度も可なりであるが、設備は椽尾又よりも下等である、東榮館と云ふのが可い、銀山平へ行く人夫や荷物は、悉皆この東榮館で世話することになつて居る、だから高橋農場へ通信するには此家に宛てるのである、椽尾又は温泉宿の外には人家がないから、大湯が湯谷村の奥底の部落である、大湯も椽尾又名勝も舊跡もないから遊び場所としては、くだらない處である。

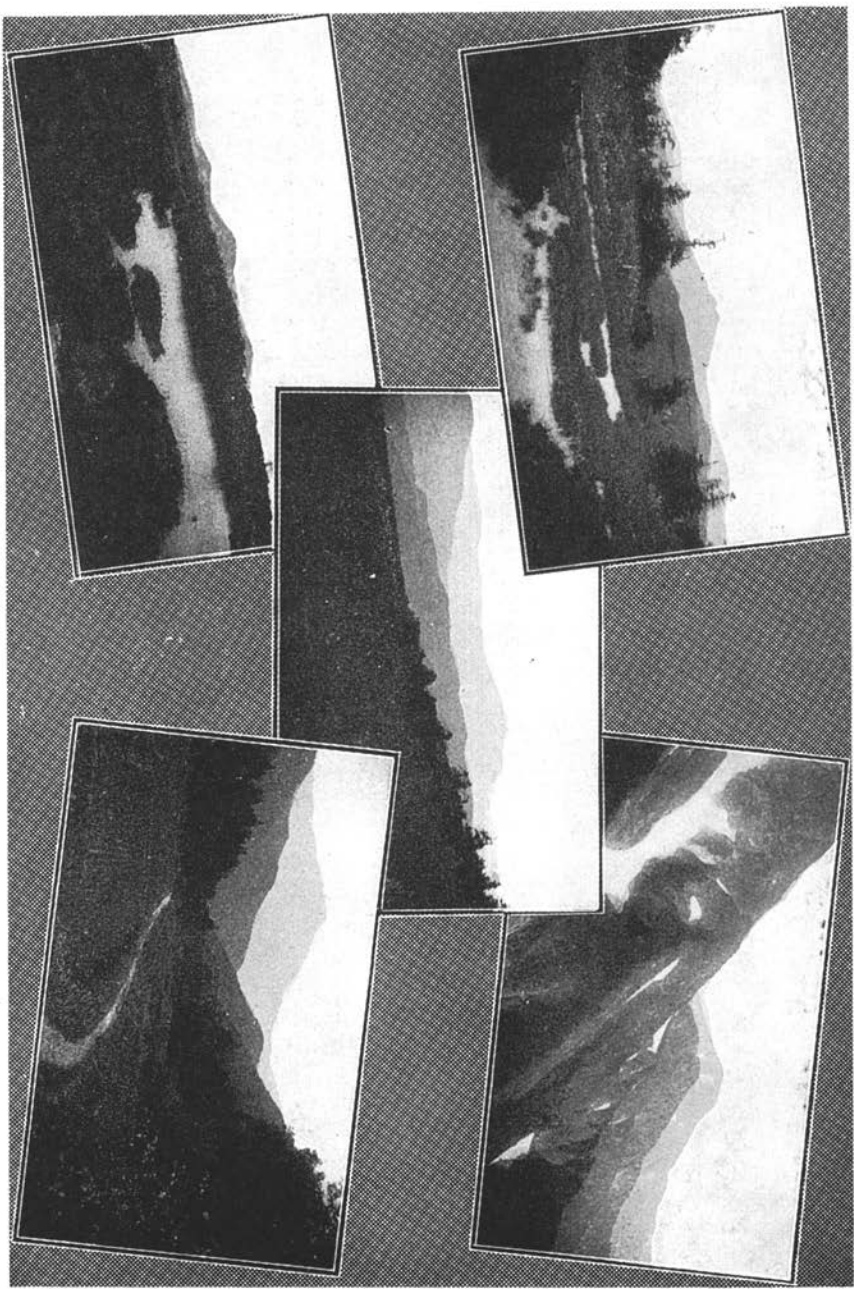
◎平ヶ嶽登攀記 高頭

八

自分は本年の七月十四日に新來迎寺の一帯下りに乗つて、小千谷から馬車を雇つて、小出の須田と云ふ旅館で中食した、兼ねて白井から依頼して置いたと見えて、下折立の區長の某が訪問して来て、昨年の十月に大林區の役人に行した人夫を、明日中に高橋農場まで遣すと云ふ意を告げて去つた、須田でゆつくりして居たので、夕刻に椽尾又の自在館へ投宿した、荷物と人夫の都合があるので、自分の従者の渡邊權一を大湯の東榮館に宿させた、夜になると渡邊が来て、東榮館の主人が弟を同行して呉れと依頼するが如何しやうと聞く、承知の旨を回答した、翌朝の六時に仕度が出来て十分に出立した。

椽尾又温泉から佐梨川の支流の橋を渡ると、一方登りとなつて二里十七町で枝折峠の嶺上に達する、其間には初終駒ヶ嶽の白皚々たる残雪を有してゐる雄姿を仰いで、頗る壯快の感じがする、道は樂ではあるが樹木の影がないから、日中に登るを避けて成るべく早朝に嶺上に達するが可い、温泉から二時間半ばかり費した、こゝまでは信濃川の流域であるが、峠から小倉山を経て駒ヶ嶽に通じて居る山脈が分水嶺となつて、前面は銀山平即ち阿賀野川の流域となるのである、此峠は大明神峠とも呼ばれて居る、尾瀬大(中?)納言が讒者の爲めに流罪となつて、此處を過ぎられた時に、大明神が現出されて路に枝折をされたと云ふ傳説がある、此峠を右に登ると五時間ばかりで駒ヶ嶽の八合目とも云ふべき處のアマ池に出る、それから約一時四十分で駒ヶ嶽の絶巔に至ることが出来る。

こゝで簡単に銀山平の説明をして置く、越後の南と北の魚沼郡の境界で、中ノ嶽の南に兎岳と云ふのがある、兎岳の尾根が東に延びて灰ノ又山となつて、それから北に行つて荒澤嶽となつて、更に東に延びて居る、此山脈と中ノ嶽、駒ヶ嶽の山脈の間を流れて居るのが、只見川の支流の北又川である、枝折峠から北又川に下ると、川の南方は處々に平地があつて、自然の桑樹があるから昔しから養蠶期になると、此山間で養蠶をしてゐたらしい、北又川が只見川と出合ふてから、只見川の上流に行くこと、



1 3 〇む望な岳窓りよ上頂の(沼魚)嶽ヶ駒  
 〇む望な嶽ノ中りよ嶽絶の(沼魚)嶽ヶ駒  
 2 4 〇む望な嶽ヶ平 大湯村よ嶽ヶ駒りよ嶽絶の嶽ヶ平  
 〇む望な嶽ヶ鷓りよ上頂の嶽ヶ平 中央  
 (影攝氏明袋頭高)



川の西方にも平地が處々にある、それが大略五六里以上も續いてゐる、其平地を總稱して銀山平と呼ぶのである、會津藩の頃には只見川の上流で銀鑛を採掘して可なり盛んであつたらしい、近年に此平の開墾事業が起つて、各所に人家が出来たが、日本でも有數な越後平野で成長した人から見ると、平ごころの話でなく、てんで人の棲む處でないらしく考へられるので、移民が尠ないらしい、甲州の野呂川谷などから見ると非常に美事な處である、會津方面の大平野を知らない山間の貧民を優待して開墾させるに限ると思ふ、自分は平野地で生活が出来なくなつたら、此谷へ引込んで、養蠶で米代を取つて、蕎麥や粟の岡物で補ふて、小出方面で蕨や蔞が無くなる頃に、蕨や蔞が此谷では盛んであるから、夫れを小出の町へ賣出したりする氣である、まだ棲めばいくらも収入を見出す事が出来ると思ふ、吳服屋が来るではなし、菓子屋が来るではないから節儉は思ふ儘に出来る、瀛車が通つて石炭臭い處に蠢々して居ないで、こんな處で暢氣に生活しやうとする哲人が農家に尠ないものと見える、村會議員や郡會議員になつて、愚にも付かない理屈を並べて居る者から見ると、どんなに氣が利いてゐて氣樂で國益になるか知れない、大氣焔はこの位で切り上げて、舞臺を平ヶ嶽の紀行にぶん廻す、實際此谷あつてはじめて平ヶ嶽が雄大で、また意味の深いものらしく成る様に想はれる。

枝折峠の嶺上を去ると荒澤嶽が前面に現はれて来る、路は一方下りとなつて駒と中ノ嶽が右に殘雪を光らして居る、峠を下り盡くすと銀山平の地となるのである、嶺上から一里五町で北又川に架した橋がある、此處を石瀧いしだきと云つて銀山平第一の勝地である、元來瀧とは奔湍の意であつて瀑布の義がない、こゝは奔湍であつて瀑布があるので無いから、よく下名したものと云ふべきである、夫れから平坦地となつて所々に人家と耕地がある、石瀧から二里許で北又川の一大支流の中又川の出合となる、中又川の橋を渡つて猶ほ北又川を左に見て行くと、一里弱で此川が只見川に逢合する、北又川に別れて右折して只見川に沿ふて進むこと、三十町弱で浪拜なみをかみの高橋農場に着する、また銀山平の一勝地であ

つて、尾瀬大納言が通行された時に佛陀の奇蹟のあつた所と傳へられてゐる、標高が約七百米突であつて、枝折峠の嶺上から約四時間を要する、高橋農場から二三町行くと只見川の河傍に温泉が湧出してゐる、銀山平の人々は只見川をアガ川と呼ぶのである。

自分が銀山平へ着いたのは十五日の午後二時であつた、白井はこれから岩魚を釣りながら途中まで出迎ふ意でゐたが、馬鹿に早く来たものだと思つて居た、間もなく檜枝岐から人夫が来た、自分は成るだけ同じ道を通ることを避けるのであるから、今度は平ヶ嶽を下つて只見川の上流から尾瀬沼へ抜ける考へてゐた、そこで人夫の經濟上からと其路に詳しい者を、檜枝岐から雇ふことにしてあつたのである、ところが白井が依頼して遣つた意味が疏通しなかつたと見えて、檜枝岐から来た人夫は平ヶ嶽で案外時日がかかるので、蕎麥蒔きに遅れるからと斷つて歸つた、白井が百方苦慮して呉れたが、只見川から尾瀬沼に行く路に詳しい者が無い、人夫の中の星定吉が一度通行した事があると云ふのを頼みにして、十六日の午前七時に愈々平ヶ嶽に向ふて出發した。

高橋農場から只見川に沿ふて二十町許行くと、往昔銀鑛採掘時代の遺跡である所の、墓場や採掘の場所跡などがある、浪拜と墓場の間には懸岐澤が平ヶ嶽から来て只見川に注いでゐる、平ヶ嶽から此澤に下ることは出来るが、此澤から平ヶ嶽に登ることは不可能であると聞いた、また二十町ばかり行くど大津又川が東から只見川に這入る、こゝから左折して大津又川を溯つて行くと、其日に會津の檜枝岐に達することが出来て、昨年に自分が其路を通行したのであつた、併し檜枝岐から郵便物を投函すると、九日以上の日数を費さないと思つて銀山平へ到着しないさうである、猶ほ只見川に沿ふて上ると灰瀑布がある、只見川の本流が瀑布をなしてゐて、午後になつて日光が瀑布を射るやうになると、瀑布の下の深淵から鱒魚が瀑布に向つて飛び上る、それが容易に瀑布の上に登ることが出来ない、無数の鱒魚が滔々として物凄く山谷に響き亘つて、倒さに銀河を崩すに似てゐる飛泉に、碧澗から白刃を擲



つやうに潑漑として躍り狂ふのであるから、鱒魚の豊富な年程それだけ一層の壯觀であるさうである、鱒魚は斯様に瀑布と惡戰苦闘を續けて勞れに憊れて、到底瀑布を登ることが出来ぬと斷念して、他に上るべき水路を求めてゐる、人間の猿智慧はこんな山間でも惡用されて居て、瀑布の下から瀑布の上に向ふて迂回した水勢の緩漫な人工の水路が作られてある、勞れた鱒魚は其水路を陸續として登つて行く、それを人間が見て居て下の入口を塞いで、上から手網で容易に捕獲するのである、自分が此瀑布を觀た折は午前九時であつて、鱒魚は看ることが出来なかつたが、瀑布だけでも可なりの壯觀であつた、鱒魚を捕へる漁夫小舎にゐた老人が、中食の菜にと云ふので焼いてゐた鱒魚の一片を自分に贈つて呉れた、瀑布から少しく行くところへ達した、是れが銀山平の最終の人家である、幾分か時刻は早いのであるがこゝで中食した、十一時十分にヒルバを出發して山毛櫛の大潤葉樹林の中に通じてゐる、岩魚釣りの通路を辿つて行くことになる、縣の事業として椎茸を培養してゐる所がある、熊笹を分けたり小溪を登つたりして二時四十分には只見川に降つた、こゝをキンセイと呼んで居る、こゝから只見川を上つて三時十五分に白澤の合に出た、此處で荷物を減するために米の袋を、降雨や増水があつても流失や濡らぬ用意して置いて行つた、只見川に別れて白澤を溯る、徒渉と云ふよりは全く川を蹈むのである、約一時間半で其日の露營地と豫定してゐた不動瀑布の上に来た、時計が五時半を指して居た、此處は樹木も多いし川にも近いしそれ以上には適當の場所がないから、平ヶ嶽登攀には非常な重要な地點である、こゝまでは岩魚釣りが来る、不動瀑布は般々として遠雷のやうな音をたてゝゐるが、斷崖峭壁で圍繞されて居るので其本體を見ることが出来ぬ。

翌十七日の七時に野營地を出發して白澤登りを繼續した、白澤は水量が頗る多くて、また山側の崩壊が稀で洪水も少ないと見えて、岩石に稜角がなくて水音が生じて居て、粗面質の岩石でも往々に足を込らして、危険千萬であるから歩行に非常の注意を要する、だから一朝豪雨に際會して水量が増し

## 山 岳

た時には、到底此澤を行くことが出来なくなつて、他に別路がある譯でもないから、野營地に滞在して、減水を待たないければならない、白澤を溯ることが一時間で平嶽澤の出合に達する、こゝから川を去つて白澤と平嶽澤の間に出てゐる尾根を登るのである、頂上までは飲料水も残雪も平坦地もないから、途中で日が没して雨でも降つて来ると頗る慘憺を極めねばならない、八時半に出合の處を出發して瀾葉樹林の下に繁茂屈曲してゐる石楠花や、熊笹を踏み分けて、馬の背のやうな尾根を直上りに登つて行く、登るに随ふて大樹が次第に稀疎となつて、熊笹がだん／＼勢を逞ふして来る、案内の人夫連は間斷なく熊笹や灌木を切り明けて進む、塞々して歩行の困難のことは筆紙にはとても盡し難い、時々木の間から平ヶ嶽の雄大な絶頂が右の方に露はれる、暫くで尾根の頂上に出て左の方に燧嶽が聳立しては居るが、此邊は熊笹や灌木が密生して居る極點であつて、籐と格子を越して美人を望むの觀がある、何分にも熊笹が八九尺以上もあつて群立して居るから、三間も距ると音ばかりして居て人影を見ることが出来ない、間もなく樹竹の絶えた小平坦に出た、陸地測量部の三角點の礎石があつた、こゝは觀測の折に樹竹を刈り取つたらしい、時刻は午後の三時である、また熊笹や密林の中を潜つたり踏み分けたりして行くと、七時に熊笹と樹木が全く絶えた芝生となつて、之に點綴してゐる植物や幾多の小池や残雪やが高山性となつて、眼界も俄に開けて幟畫的の大觀が現出して來た、こゝはもう平ヶ嶽の一頂であつて越後と上野を限つて居る山稜である、小池の傍に野營した。

翌十八日の五時に日輪が出た、六時十分に絶頂を指して登りはじめた、平坦な芝生に多くは小池があつて、矮小な灌木や熊笹の繁茂してゐる所がまゝあるが、展望を妨げるやうなことは少しもない、間もなく偃月形をなしてゐる可なりの大残雪を踏んで、七時五分に絶頂の三角點に達した、絶頂は渺々たる曠野であつて一帯の芝生に、小池が所々にあつて無數の南京小櫻が池を廻つて嬢娜として可憐を極めて居る、此曠野は三角點附近を最高點として居て、緩漫な傾斜をなして北方に低下してゐる

が、絶頂に特に隆起した地點がないから、曠野の全部を一望の下に俯瞰することが出来ないで遺憾と云ふべきである、三角點址の眺望は非常に宏濶であつて、南西に當つて近く鶴ヶ嶽が金字形をなしてゐる、其山貌と鷲色の山色より察すると火山岩である、鶴ヶ嶽の左には馬鞍狀の燈嶽がある、鶴ヶ嶽の右には尖端が天を衝いて居る日光白根がある、赤城と白根の間に男體山が見える、人夫の一人は男體山を富士山だか三四回も自分に質問した、淺間山が盛に噴煙してゐる、頸城の平野を隔て、妙高山が屹立してゐて、其上方に日本アルプスの北部が杳々として最後の背景をなして居る、また兔中、駒、八海、荒澤、大鳥嶽の連嶺は數十條の殘雪を有して居て、蒲原の平野も日本海も脚下に開展してゐる、快晴の日には佐渡も富士山も認めることが出来るさうである、此山上の大觀は吾が北越の諸山に比較すると、飯豊山の雄渾豪壯に對しては少しく遜色があるが、有名な苗場山とは正に伯仲の間にあるものであらう、さうして苗場山を人工入神の作と見たならば、平ヶ嶽は神作の拙なるものではあるまいか、絶頂から北へ向つて行くときと盃石と云ふ岩があると聞いたが、此日は不動瀑布上の野宿所まで戻るのであるのと、白澤を涉るときに足を少しく損じたので、歸途を急ぐ必要上から充分に山上を遊ぶことが出来ないのと、八時に絶頂を辭して野宿所へ降つた、絶頂の植物は大略チングルマ、大櫻草、白山一華、南京小櫻などで、越後と岩代の駒ヶ嶽、燈嶽と少々同様の觀がある、九時に野宿所を出發して三時十五分に平嶽澤と白澤の出合に下つた、五時五十分には不動瀑布上の野營地に着いた、もう豪雨が來ても大丈夫だとい同が安心して其夜は熟睡したが、自分は多年の宿望を果したから最も愉快に安眠に耽つた。

十九日は六時十五分に出發して、七時半に只見川の出合に達した、こゝで荷物の分配や中食の用意などして、九時十五分に只見川を溯りはじめた、一時間弱で右から澤が落ちてゐる、トクサと呼ぶ澤であつて檜枝岐から岩魚釣りが來てゐるさうである、此處から檜枝岐までは五里の間道だと稱して居

る、十一時に右からタカイシ澤の這入るのを見た、一時に三十瀧と云ふ奔瀧と瀑布を兼ねたやうな處に来る、三十瀧は通行することが出来ぬから、岩壁を登つて其上流に下るとシラツキ澤が左から這入てゐる、只見川の本流は深綠色をなして緩く流れてゐるが、シラツキ澤は岩石が悉く眞白になつてゐて、淡碧色の水が勢い強く落ちて来る、水を嘗めて見ると少し澁味がある、此澤は降雨の際には溪水がニコシ（米を洗ひたる水）のやうになるさうである、巖嶽圖幅に記してある深澤と云ふのが此澤らしい、シラツキ澤を少しく登ると木ノ葉石があると云ふので、人夫が取りに行つて来た、二時半に此處を出發して只見川の斷岸を登つて、一時間ばかり行つて只見川を徒渉して西岸を辿つた、暫く進むと右からマツクラと云ふ澤が来て居る、マツクラ澤の對岸の岩側が綫々筋のやうに見えるから鎧グラ（岩の轉か）と呼ばれてゐる、鎧グラの上方を登るのであるが、これからは人夫が詳細な案内を知らない、登つてから水が無いと困るから、まだ四時ではあるが此處に野營することにした、人夫が十尾ばかりの岩魚を釣つて来て、今夜は岩魚の寢入つて居るのを捕へて來ると云ふて、頻りに面桶を入れて居た網などを利用して、手網のやうなものを製作して居る、自分は岩魚の寢入て居ると云ふことを生來はじめて聞いたから、可笑しくなつて吹き出したが彼等は眞面目も大眞面目である、夜になると提燈を下げて自分にも同行して見ぬかと勧めたが、岩魚の寢入つて居るのも見物したいが夜中に巖岩を踏む勇氣もなくて行かなかつた、小一時間も過ぎると人夫が歸へつて来た、明日の仕度もあるから喰ふだけ獲て來たと云ふて、四十尾程持つて来た、成るほど岩魚も寢入るものと見える。

二十日は六時五分に出立した、直に只見川を涉つて對岸の岩壁を攀ちるのである、此邊の只見川は水量が多くて、自分のやうなコンバスの短いものは殆んど股まで達する、山側を躓り盡すと高原的の處となるが、潤葉樹林の下に例の熊笹が繁茂してゐて、展望もなければ歩行も決して樂ではない、山毛榉の大樹に通行者の姓名や時日が記してあるのを葉として、熊笹を分けたり踏んだりして進んで行

く、自分は友人の保阪定三郎氏の記名がある樹木を視て頗る可懐しく感じた、この邊は總て燧嶽の裾野である、只見川の本流が懸水をなしてゐる三丈瀑布を瞰下することが出来る、四時半に熊笹が全く絶えて一大曠野に出た、渺々とした茅の中に幾萬の黄菅が咲いて居て、美觀が譬ふるに物なしである、間もなく一小廢屋の前に出た、自分は太早計にもこゝを上州の尾瀬平と思ひ込んだが、それにしても只見川を躓えた筈がない、小一時間もうろついてやうく見當が附いた、マツクラから二里許り行くと魚釣りの小舎があると聞いて居たが、自分も人夫も二里と呼ばれてゐる處を、まさか朝の六時から十時間もかゝつて其處へ出たとは、最初の中はどうしても考へられなかつた、夫れから只見川へ出て川を溯つて行くと、左の山側に登る路があつてそこを登つた時には、眞暗になつて足下も見えなくなつて來た、其夜はこゝに野營して水に遠いので一飯を抜くことにして睡むつた。

二十一日は五時二十分に出發した、路は明瞭な細徑となつて七時に峠を下つた、こゝで昨日の夜食と兼帶な朝飯をして九時五十分此地を離れた、間もなく尾瀬沼へ出て燧嶽の登山口を過ぎて十時五十分長藏小屋に着いた、昨年的小屋は岩代の地籍にあつたが、本年は上野の地籍に山中としては贅澤過ぎる程な、旅店風の大家を新築して居る最中であつた、自分はそこから日光の湯本へ向つたが平ヶ嶽の紀行はこれで結末とする。

平ヶ嶽に登るには初冬の頃が可いと思ふ、白澤の水量も減じてゐやうし、熊笹や雜木の勢いが夏期のやうに旺盛ではないし、人夫も比較的の間暇であるから便利だと云ふのである、餘分の日子と防寒具の用意をして初冬に登るべきである。

人夫は本年四人を連れて居つてゐるから、これだけ案内者を養成した譯である、下折立の星甚太郎此男は二回登攀してゐる譯である、銀山平の星定吉、此男は熊狩をして居るから谷や澤の方は詳しく、以上の二人の中の一人が居れば案内は出来る、大湯温泉東榮館の櫻井次郎は弱年であるから保證

はしにくい、藪神村の櫻井兼吉は遠方だから豫定することは出来まい、序に云ふが人夫の賃金はこんなに多忙の中でも一日七十五錢であつた、しかし閑暇の時だと云ふて安いかどうかは談判して見ないから知らない。

博文館發刊の太陽第一年第一號に利根川の水源探検記が載つてゐる、自分は多分平ヶ嶽に登つたのではあるまいかと考へて居たが、利根川の水源は丹後山の東から出てゐるから、平ヶ嶽の絶頂からは尾根傳ひに行つたならば、三里以上もあるかもしれない、探検記の著者は山名を明記して居ないから、勿論臆断ではあるが八海山圖幅の無名の山か、丹後山の邊へでも登つたものらしい、さすれば陸地測量部と大林區の役人を除いては、自分が最初（土人は省く）の登攀者だと確信して居る、況んや寫眞や記文は下手ながらこれが嚆矢であると考へて居る。

これが立山の劍か赤石山でもあると、非常に天狗になれるかも知れぬが、二千百米突ではそんなに大袈裟にも云はれまい、併し自分個人としては山數はまだ碌々登つて居ぬが、十三の時から三十九の今日までに、自分單獨の力で人がまだ行つて居ない山へ登躋して、それに自分の記文と寫眞を載せたと云ふことは、生來はじめてゝあるから法螺でも自慢でもないが、自分は衷心から珍らしいやうな嬉しいやうな感じがするのである、自分としては以後にこんなやうな事のあるべき筈がないから、是れが最初の最後であることは申すまでもない、日本アルプス地方では熊笹の繁茂を見ることが出来ないやうであるから、稀にはこんな處へも來て見て戴きたいのである。

（大正四年八月稿）







## 赤石岳から鹽見岳まで

小倉伸吉

赤石登山のために、大正四年七月二十一日夜十一時半新宿發の汽車に乗つた、翌日は、午前九時過ぎに辰野で福岡行の伊那電車に乗り換へ、十二時赤穂で下車、人夫を雇ひ、荷物を負はして、大河原に向つた、中澤、落合の部落を過ぎ、市瀬峠を越え、鹿鹽を経て八時過ぎに大河原市場着、吉田屋に投じた。

○二十三日 聖岳から鹽見岳まで縦走したい希望を有して居つたから、豫め當地郵便局の島崎氏に案内者の周旋を依頼して置いたところ、山に詳はしい者に乏しい上に、生憎養蠶期で豫定の十日間も山に這入ることの出来る者はないと云ふので、今日一日は案内者探しに費やしてしまつた、會員前澤政雄氏は種々と盡力して下さつた。

○二十四日(半晴) 十日間では行けぬが、一週間位ならばといふ前澤市次郎といふ男を得たので、聖岳の方は見合はせ、赤石から鹽見まで縦走することに相談を決め、早速登山の準備に取りかゝり、そのほか下平由太郎といふ若い男を連れて十一時十五分に小澁に向つて大河原を出立した、荷物は小天幕、僅かの防寒具、米一斗六升及び副食物などで、至つて簡單であつた、市次郎は陸地測量部員に從つて、多年この地方の測量に従事したことのある六十近い男で、大河原では第一の山岳通であるとか、元氣盛んで仲々法螺も多い、由太郎は二十五六の若者で、今度始めて山に登るのだと云ふて居たが、數日間連れてあるいた所によると、極めて壯健で、實直な好い男である、小澁川の右岸に沿ふて進み、釜澤を経て四時半小澁湯に着き、此夜は此所にこめて貰つた。

◎赤石岳から鹽見岳まで 小倉

一八

○二十五日(半晴) 六時出立、小澁川の谷を登つて行つた、連日の晴天續きで水量少なく、徒渉は極めて容易であつたが、餘り油断した爲めに、高山瀧の少し下で足を滑らして、水中に轉がり、全身濡れ鼠となり馬鹿に寒くなつた、二十幾回かの徒渉を終り、八時四十分廣河原着、濡れた着物を悉皆乾かした、十時に出立して、荒川とフツ川との間にある樺などの茂つた暗い木立の急な尾根を登つた、二時舟窪を過ぎて、漸く樹木矮小となり、次いで偃松が現はれた、西河内岳と赤石岳との鞍部よりも少しく南方の國境の尾根に出で、それから少しく南に登つた所、駿州側に溝の様になつた細長い残雪を見出した、未だ早いけれども山頂は曇つてしまつたから、明朝早く登ることにして、雪の側に天幕を張り、(三時半)可憐な高山植物を褥として身を横たへた、夕方に大きい羚羊が向ふ側の尾根に現はれ、物珍らし相に三十分も眺めて居たが、遂に姿を隠した、夜になつて満月に近い月が飽くまでよく澄んだ高峯の空に、物凄いはゞ冷やかに輝いて居た。

○二十六日(快晴)空がよく晴れて居るので、昨夜は大分寒かつた、未明に寒暖計は四十度を示して居た、荷物を置いて五時半出立して、赤石岳に向つた、大聖寺平を経て、少しく急な坂を登つて、小赤石に達し、それから二三の小凸起を越え六時四十分頂上に達した、一年に一度あるか無いかといふ程の好天氣で、南アルプスの連峯は勿論、北アルプスの大半、中部アルプスの全容、伊豆半島、大島、富士、及び其裾を取巻く群山或は大菩薩連山や、秩父の群山などが、極めて明かに認めることが出来た、止まること一時間で、下山を始め一時間を費やして、野營地に歸還し、荷物を取り片付けて十時魚無河内岳に向つた、國境の尾根を北に進み、赤石岳と西河内岳との鞍部を過ぎて、尙ほ少しく北に登つたが、其上の國境には悪場があるといふので右方の駿州側に入り、偃松と白樺の密林をかき分けて山腹を横切つた、羚羊の通つたらしい道が所々にあつて、其所だけは樂に通れるが、道のない所は可成りに困難であつた、二時間の苦闘の後に辛くも魚無河内岳の頂上から、南南東の方向にあたる石

の空澤に達し、その急な澤を登つた、暫時で右の尾根に出て岩山を登り、カール状の窪地を圍む岩山の一角に出た、窪地には澤山の残雪があつた、この雪の少しく下方に小さい池があると、市次郎はいふて居た、魚無河内の三角點を見當てに、窪地の左縁に沿ふて、岩の崩れ易い急な坂を登ること數分で、二時十分には魚無河内岳と西河内岳との鞍部に達した、時は大分早いけれども、他に水を得られる適當な野營地もなく、天氣も面白くないから惡澤岳を明日として、鞍部の南側の平地を野營地とした、西河内岳の北側で、此所から三四丁の所に少しばかりの残雪があつたから、之れを採つて飯を煮た、夜は晴れたり雲が飛んで來たりして變化極まりなかつた、こゝから見た赤石岳は仲々に立派である。

○二十七日（半晴後雨）朝見れば富士山の巔は、雪が降つたと見えて眞白になつて居た、荷物を其儘にして、六時に惡澤岳に向つた、東に岩山を少しく登れば魚無河内岳の三角點がある、これから小さい假松の生えて居る、蟻の戸渡といふ様な所を、何回も通る、然し岩がしつかりして居るから心配はない、昨晩夜半から下痢し、今朝は飯も食はないので、腹に力がなく骨の折れること一通りでなかつた、寢るときに雪水を飲んだのが悪るかつたらしい、一時間ばかりで魚無河内岳と惡澤岳との鞍部に達し、それから惡澤岳に向つて急坂を登つた、始めは小さい岩であつたが、登るに隨つて大きな岩が積み重なつて居た、八時半頂上に達した、小さい社が祭つてあり、劔や幣束などが奉納してある、天氣は面白くなく、遠くの山は見えなかつたが、遂にはこの山も雲に包まれてしまつた、山頂にしばらく晝寢をして待つたけれど、晴れ相にもないから、九時四十五分下山を始め、同じ路を通り、十二時少し前に野營地に歸りついた、そのうちに雷が鳴つて大降りとなつたから今日は此所に滞在して、腹工合をよくすることにした、夕方にもまた雷雨があつたが、夜に入つてからは晴れて、月明らかになつた、大河原邊の者は、西河内岳を荒川前岳、魚無河内岳を中ノ岳、惡澤岳を東岳と呼び、荒川行者と

稱して登山する者があるといふことだ。

○二十八日（半晴後雨）七時十分出立、西河内岳の最高點を左に見て、西北に進み、駿州側で國境に一番近い急な石の澤を下りた、國境は犬の牙の様に切り立つて居るから、通過は餘程困難に思はれた、一時間ばかりで石が小さくなつて、木立の現はれた所に、市次郎が數年前に露營したといふ跡があつた、それから左に這入つて駿州側の山腹を横切つた、白樺の多い木立の中であつたが、道らしいものが付いて居る、九時十分西河内岳と次の山との國境の鞍部に着いた、之れから國境は西の方に向つて居る、矢張り白樺などの林の中を國境の少し北側を進んで行くと、縦類の繁つた暗い、木立となつた、こゝで國境は、今迄とは直角に北の方に向つて居るが、この方向轉換點の小山を避けて、向ふ側の國境に出て北に進んだ、それからは變化に乏しい例の暗い林で、時に白や黄の花を附けた二三尺の丈けある草原がある、十二時四十分測量部五萬分一大河原圖幅に海拔二六三六米突と記された點を過ぎて、國境を西北に進んだ、大きな偃松が密生し、左側は斷崖をなして居る、凸起を一つ越えて第二番目の山にあつたときに、國境を離れて無暗と右に降り、小西俣の一支流の谷に這入り、東に下ること約三十分で水を得、野營地をその左岸の白樺林中に定めた、時に二時五十分であつた、のちに雷雨が二度ばかりあつた。

○二十九日（半晴）六時半出立、北に向つて暗い林の中を登り、七時二十分國境に達した、木立と綺麗な草の生えた國境の尾根を進んで、一つ凸起を越えて小河内岳の登りとなつた、數丁の偃松の中を辛くもかき分け登り、次いで石の急な坂を登つて、九時半に小河内岳の頂山に達した、頂上は廣くて小さい岩が敷いてある間に、小さな偃松が生え、氣持のよい所である、測量部の三角點がある、餘り高山性ではないけれども、この附近では一風變つた山である、雲が來て眺望は少なくなつた、十時半出立、東北に向つて國境を下つた、偃松が多いが所々に切り明けがある、下つて次の山に取りついた、

偃松が大きいから信州側の絶壁を横切つて十一時十五分に第二の峯に達した、この頂上は狭くて御料局の三角點があり、第一の峯より少しく低い、こゝからは國境の尾根が西北に向つて居る、偃松が益々大きくなり、骨が折れるから、成る丈け信州側を進んで、十二時二十分第三の峯に着いた、此所を市次郎は拜所といふて居た、霧が來て全く方向も分らなくなつた、霧の切れ間を見て國境を少しく西に下つて、右に折れ、白樺の多い草原を下りて行き、間もなく三伏峠道に合した、こゝから、中俣の谷を北に向つて下ること五六丁で、一時三十分水を得て草原の中に露營した、後にまた小雨があつた。

○三十日(晴)今日は鹽見岳まで往復しやうといふので、荷を置いて本谷山に向つて、北に樅類の繁つた木立の中を登つた、間もなく國境に出て、低い木を押し分けて尾根を尙ほ北に登つた、朝の露で全身悉皆濡れて仕舞つた、次いで大きな偃松となつたが、所々に切り明けがある、市次郎が先に立つて、空身で急いで登つて行くから、自身も負けまいと我ん張る、五時半に本谷山の頂上に達した、偃松を切り明けてあつて、眺望がよい、北アルプスは槍ヶ岳以南が見えたばかりで、其北は雲に隠れて居た、これから雜木林の間を北に下り、小山を一つ越え、次の山にかゝれば、暗い木立に次いで、偃松の密林となつた、辛くも登つて五分萬一地圖に二六七〇米突とある峯に達したのは六時五十分であつた、この頂上も狭くて、偃松を切り開けてある、鹽見岳は東南に近く尖つた偉魁な姿を現はして居る、偃松の間を下つて、いよゝゝ鹽見岳の登りとなつた、大偃松を切り抜ければ、石の坂となり、次いで大きな岩山を一つ越え、それからは時々四つ這ひとなつて、岩に縋り附いて登り、遂に九時十五分に頂上に達した、眺望は仲々雄大で、南アルプスの大半が見えたが、北方の駒ヶ岳、鋸岳、仙丈岳などは雲に隠れてしまつた、北アルプスも見えなくなつた、しばらく休んで居るうちに、東俣の方から一組の登山隊が登つて來た、一高旅行部の守島、山口、荒川氏等の一行であつた、間もなく一行は

◎赤石岳から鹽見岳まで 小倉

◎赤石岳から鹽見岳まで 小倉

二二

北侯に向つて下つてしまつた、霧が来て眺望が無くなつたから、吾々も十時五十分西に向つて下山を始めた、登るときに通つた大きな岩山を越えて、國境と分れ、西に延びた尾根を下り、偃松と闊つて草の繁つた右の谷に降り、その谷を傳はつて下つたが、間もなく水が流れて居た、谷は南に向つた、傾斜は左程急でなく水量も多くない、一時十五分に中侯の本流に合した。中侯が三伏峠の附近から東北に流れて来て、突然東南に流向を轉ずる附近であつた、こゝからは中侯の谷を登つた、この谷は一層傾斜が緩かで前進が容易で、露營地に歸りついたのは、二時二十五分であつた、歸りには途中で日が暮れるかと心配をして居つたのに、案外に早かつたので、皆が呆れ顔であつた、市次郎からは「官員様は足が達者だ」と御褒めにあづかつた。

○三十一日(晴)七時半出立し中侯を登つて十五分ばかりで、三伏峠道に出で、尙ほ少しく登れば草原がある、左手數十間の所が國境で、南に金澤の深谷を見下ろし、また聖、兎、大澤、赤石などの高峯が見える、東北には白峯三山、鹽見岳などが見えて居る、峠道を數丁西に進んで峠の頂上となる、これからは樅類の暗い木立となり、ドン／＼下る、豊口山の東南の山腹を下れば、木が切り倒されて居て、路は大分悪い、少しく下れば木立が絶え、始めて柚人に出遇つた、十一時に寺澤の人家で休み、釜澤を経て、二時四十五分に大河原市場に着いた。

○翌八月一日には瀧澤、大草を経て、飯島に着き、此處から馬車と電車で宮田まで行き、次の日には駒ヶ岳に登つた、大河原方面にはよい案内者に乏しい様である、七月下旬は養蠶に忙がしいから、尙更案内者を得難い、此方面から山に這入るには充分其點に注意せぬと目的を達することが六ヶ敷いと思ふ。

# 東俣より鹽見岳に登る記

守 島 伍 郎

大正四年七月、予は學友二名と共に、西山温泉より廣河内を溯り、白峯三山を縦走し、東俣を下り、更に鹽見岳に登りたり。

## 一、白峰三山を縦走し、間の岳より東俣を下る

○七月二十六日 西山温泉より廣河内を溯り、大ヨモギ澤一泊。

○七月二十七日 夕立に襲はれし爲め、農鳥、間の岳間の鞍部に一泊すべき豫定を變更して、山陵に取り付きたる處より、約十五分程の窪地に一泊。

○七月二十八日 昨日の豫定變更の爲め、本日は多少過重なる道程となり即ち、農鳥、間の岳を経て、北岳に至り、再び間の岳に引き返して、東俣を下り、小廣河原（五萬分大河原、大井川の大的字に當る附近）の野營地に至らんとするなり。

六時四十分、一行は人夫大村富基を伴ひて、北岳に向ふ、人夫三名は直路ノツドリ澤を小廣河原に向け下らしめた。

農鳥三角點七時二十五分、間の岳三角點十時三十分、十一時、間の岳を發して、北岳に向ふ、三時半間の岳に歸着し、四時同所を發して東俣に向ふ。出發時豫定より遅る、事二時間、日没前に小廣河原の野營地に到達する事覺束なくなれり。

所謂三國岳に連る國境の尾根を辿る事十五分にして、適宜の個所より急傾斜の石溪を下る。ガラガ

◎東侯より鹽見岳に登る記 守島

二四

ヲ下りをひた下りに下る事四十五分にして澤に出づ、時に五時。之より下りは比較的樂にして、兩岸の傾斜も左程急ならず、第一支流會合點附近までは岳樺の密林にして、以下は梅、白檜等の針葉樹林をなせり。

六時、第一支流左より來會し、更に二十分にして第二支流左より、又少時にして第三支流右より來り會し、良好なる野營地を爲せり。之より小廣河原迄尙ほ二時間以上を要すべく、且岩魚止めの惡塲あるを以て、本日は此處に一泊する事として、中食の残りど、間の岳にて捕へたる鳥にて作りたる、怪しげなるスープを飲みて不安なる寢に就きたり。

○七月二十九日 五時四十五分出發、空腹をかへて緩々下る。所謂岩魚止め附近は、小瀑布重疊して稍々面倒なれども、其他は多くは氣持よき河原にして、河原の小砂の軟かにして、昨日より岩のみ飛び歩ける足に觸れ心地いとし、六時三十分。シラネ澤會合點に暫時休息せし時、下流より人夫連朝食を齎し來る、一行歡呼して迎ふ。

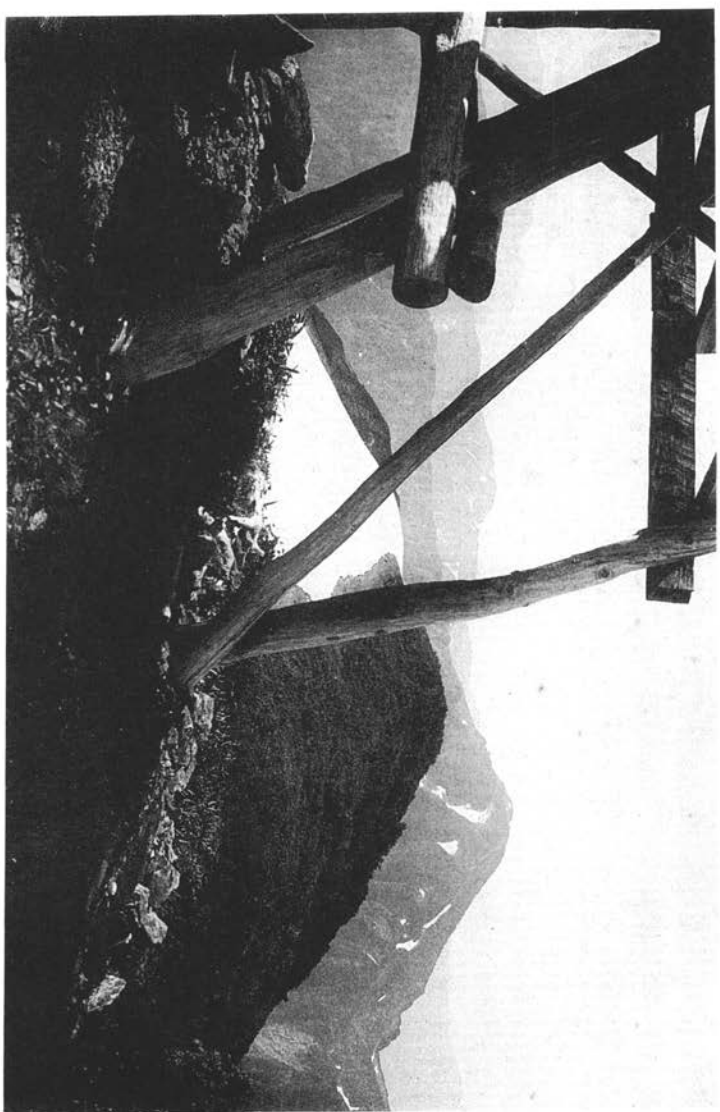
今日はどうせ半把なればとて、朝飯も緩々と喰ひて、七時四十五分出發、岩魚を釣りつゝ下り、九時小廣河原に着す。人夫の張り置きし天幕の主待ち顔に、廣々として心地よき河原に立てるを見ては、家に歸りたらん様の心地したり。

要するに東侯下りは、二三の小部分を除く外、極めて樂な、愉快な下りと云ひ得べし。但し小廣河原より以下は一部分（ザカ澤會合點より西侯との合流點に至る區間、後節參照）を除く外、全然不知なれば、保證の限りに非ざるも、五萬分によれば、森屋澤附近迄は略ぼ同様の道なるが如し。

時間は間の岳の三角點より小廣河原まで、五時間と見れば大過なかる可く、隨つて農鳥、間の岳間の野營地よりすれば、相當の一日程なるべし。

零時半、小廣河原を發して東侯を下る、下る事三十五分にして、本流と分れてタケ澤?（五萬分の





高頭義明氏掃影

駒ヶ嶽(沼魚)の絶壁中(燕)右(鬼)左(望む)



大井川東俣の東の字の下に、左より來會せるイケの澤に相對して、右より來會せる長大なる澤にして、大村富基は、ユキナゲ澤の一つ上に當るタケ澤なるべしと云ひしも、高頭氏の臆測圖とは符合せず。其他二三の澤に就きても、大村の言と臆測圖と符合せざる點あるも、未熟なる予は何れを以て正しとすべきや判斷する事を得ず。に入る此澤は東俣の岩魚止めを、出鱈目に陳べたるが如き地勢にして、兩岸の傾斜急にして、小瀑布重疊し、僅少の増水にてもあらば、登攀到底不可能なるべし。但し危険なる個所は無く、寧ろ面倒なる登りと云ふ可きものなるべし。大村其他の言によれば、之より少しく下に當れる、アイダレ澤の方、遙かに樂にして、登路として適當なりと。四時半、左方より長大なるガレ來る。此邊より假松帯に入り傾斜次第に緩なり。四時五十分、初めて稍や平なる野營し得べき地點に達して泊す。此澤の水源地に當れり。

## 二、鹽見岳に登り、北俣を下りて西俣に至る

○七月三十日 七時出發、登るに従ひ山々次第に現れ來るも、それと共に霧頻に上昇し初めたれば、振り返り、急傾斜のガレを、ひた登りに登りて、八時半鹽見と蝙蝠岳とを結び付くるリツヂに達す。(二八六〇米の記號ある地點)リツヂは之より鹽見へは剃刀の如く尖り立てるに反し、蝙蝠へは極めて平夷なるザクザク道をなせり。

リツヂに立つや、荷物を抛り出しつゝ、双眼鏡を奪ひ合ふ。湧き立ち騒ぐ霧の中に、靜かに嚴かに立てる聖徒等。富士、惡澤、赤石の左角、魚無河内、西河内、聖、小河内、木曾駒、御岳、乘鞍、槍、穂高等千山萬岳。遠き北の方は惜しい哉雲の中に遁れり、おぼろにだに見えず。直前の白峯三山、駒、仙丈などは勿論手に取る様に鮮かなりき。

人夫の一人が、鹽見の頂上に人ありと云ふに、驚き見上ぐれば白き姿の二つ三つ、双手を上下して

◎東俣より鹽見岳に登る記 守島

二六

盛に歡呼せるに、何とはなく戀しくなつかしく、今は山も岳もあらばこそと、スケッチブックも何も抛り出して、九時頂上目がけて登り出しぬ。利劍の如き巖角の刃のこぼるゝが如く、ポロ〜と崩るに注意しつゝ、四十分のひた登りに、にちみ出る汗を拭きもあえず、登り付きたる頂上の人は、小倉伸吉氏なりき。名乗りもそこ〜に快談快話。

氏は大河原より小澁を経て、赤石に登り、西河内、魚無河内、惡澤、小河内を経て三伏峠に出で、今早朝同峠を發して鹽見に來られし由にて、之より三伏峠に歸り、明日即ち出發後七日目に大河原に出でらるゝ由なり。人夫は大河原の前澤市次郎老人外一名を伴はれたり。(前文參照)

十時半、氏と別れて下り、先のリッチにて食事を済して、十一時半出發、直ちに北俣を下る。ガレを少しく下れば水出づ。下りは随分急なれども、單に面倒と云ふのみにて、危険の虞れ毫も之無し。鹽見のリッチの恐ろしく尖れるを顧み、惡澤の堂々どわだかまれるを望みつゝ、徹頭徹尾急傾斜なる澤をひた下りに下り三時半中俣の合流點に出づ。之より水量急に増加して、二三回膝に及ぶ徒渉をなせり。小西俣の合流點三時五十分。之より河原は廣々として心地よき地勢となれり、三十分休息して更に下る事二十五分、即ち四時四十五分櫻島着。更に少し下りてシンヂャヌケの登りに(五萬分大河原、西俣の西の字より少しく上流に横の記號ある地點)に泊る、時に五時なり。

今日の道は、昨日約四時間登り置きたれば、大分助かりたれども、小廣河内より一氣に行くごせば、大分困難なるべきも、決して不可能には非ずと信ず。

尙、間の岳より鹽見岳まで、國境の切明を縦走する道は、間の岳及び鹽見より双眼鏡を以て觀察したる處によれば、切明の跡は確かに存するも、大分荒れたる様子なれば、可成り困難なるべしと思はれたり。

## 三、西俣東俣を上下して新澤峠を経て西山温泉に歸る

○七月三十一日 豫定に隨ひ、予は一行と分れて西山温泉に出でむとす。一行は之よりシンダヤスケを登りて赤石山脈に入る豫定なりとす。

予の採れる道は、西俣を東俣の合流點まで下り、更に東俣を溯り、ザカ澤の合流點より舊伊那街道を辿り、途中一泊、新澤峠を越えて下湯島に出でたるものなるが、特に詳細の記載を要する迄もなき道なれば、唯二三を記載するに止む。

此道は大河原より三伏峠を越え來りて、湯島并に新倉に達する舊伊那街道なるが、現今は全く荒廢して、以前は一日程なりしもの、現今は一日にては多少無理、二日にては頗る樂なる、半把道となれり。最も空身なれば今も尙一日にて到達し得べく、又踏張れば空身ならざるも一日にて至り得べしと信ず。

七時半、一行と別れて人夫一名を伴ひ、西俣を下る。道は西俣を少しく下りて、適宜の場所より左手の叢林を、滅茶苦茶に登れば舊伊那街道に出で、之を辿りて東俣のザカ澤に出づるものなれども、予等は岩魚を釣りつゝ、東俣合流點に出で、更に東俣を溯りしが、兩俣を通じて、左程の悪場は之無かりしも、數回股部に及ぶ徒渉をなしたり。時間は兩俣を上下するも、ザカ澤まで四時間位なるべきも釣魚に熱中して約八時間を費し、爲めにザカ澤に入りしは既に四時なりき。之より道は舊伊那街道を辿るものにして、初めザカ澤に沿ひ、後之と分れて森中を行き、六時ザカ澤水源地に泊す。

○八月一日 七時十分出發、七時四十五分甲駿の國境、八時半別當代の三角點に達す。道は之迄針葉樹林を通じ、氣持よき樹下道なりしも、之より六萬平の叢林中に入るを以て、蔓など彌や繁りに繁り、困難を極めたりしも、伴ひたる人夫元氣よき男にて、重荷も厭はず、ひた急ぎに急ぎたれば、一

時遂に下湯島に出でたり。  
◎蒲田谷より穂高登山 中野

二八

## 蒲田谷より穂高登山 (大正四年八月七日)

中野善太郎

### 一、尾根まで

昨日は、「犬の窪」の小屋（蒲田より約二里半右俣にあり）より、槍へ登つた、道不案内に暴風雨に出會つて當さに撃退されやうとしたのを、大冒険をやつて辛くも絶巔を極めたのである、「降れば蒲田へ引返し」「晴れ、ば穂高登山」と決めて置たプログラムに従つて今日は穂高へ行く事にした。

起きて見ると、昨日迄の南風は西風に變つて、雲の纏はりを吹き去つて居る、憂鬱であつた昨日までの山小屋も、俄かに活氣づいた、一週間も絶えて得られなかつた高山の、朝の氣分をすつかり味はつた、「うれしいな」など云ふて、準備を整へる、七時出發、同行今田君は、此小屋を去るに當つて、土間には掃をかけ、鍋はきれいに洗ひ、蓆は捲きてと、云ふ様な工合に、よく働く男だ、そして體力強く、思慮周密と云ふ頼もしい男である、年齢も廿五歳の青年。自分は、飛驒山脈中前人未踏の險地である、云はれて居る場所に、向つて此男ならばと、安心して出かけたのである、冷たい朝風を迎へて、小屋を出た、駒鳥の聲が自分等を引き止める様に響く、名残惜しい氣がする、自分は、林道を五六丁下つて、「白出谷」の落合に立つて、行程を案じて居る時孤影悄然として歸途に就いた松井君を見送つて哀れにも物悲しかつた、四日の間苦樂を共にしたなれど、都合で別れねばならぬ君は、古びた蓑

を、朝風になぶらせて、森の中に消え行く姿を、見て氣の毒であつた、天氣は申分ない、暫らく地圖を擴げたり、山の格好を見たり、豫定線を引いたり、丁度林道から見ると、劍を並べた様な「ピーク」を挟んだ峽谷が、扇骨の要へ集めるが如くに、眼前一里ばかり見透しの出来る、河原の奥に落ち込んで來て居るのだ、そして其最右のものが巾廣く勾配緩かで、殊に比較的距離も短かいらしいので、それこそ自分を導いてくれるのだらうと、不安な決定をして、さて登ることにした、嬉しきは探檢の朝よ、雲際から落る瀧も有らう、毛氈敷きつめた花園もあらう、クレツパスの雄大、岩壁の豪壯、それ等のものが、前人未踏の境に、遠來の客を嚮らふ事だらう、澄明な碧空に向つて、差出づる刃の尖頭に、微笑を浮べて、自分を招いて居るのだらう、清い冷い風は、顔を洗つて行く、嵐氣澄明氣宇豁達、群がる累石も邪魔にはならぬ、小屋程の石を一つ宛乗越して行く、水は少しも無いと、思つて居たら、半里程登ると、其處には大ぶん豊富な溪流が出て來た、一寸徒渉の樂で無い程の水量が、此邊で悉皆、累石に吸ひ込まれてしまつて、半里の間、全く無水の河原を形式して居るのだ、斯様な事は小規模の物はありふれて居るけれども、之程大規模のものは、一寸記載に値するだらうと思ふ、昨日見たのは、水源の不明な落口で今日のは落口の分らぬ水源だ、大ぶん好い氣になつて、やつて來たが、さて近寄るにつれて、前に聳ゆる岩壁が、險しくなつて見える、そして自分の目がけて來た、右翼の泥流と、自分の位置との間に、頂上から延びた尾根が挟まれた、其尾根は是非越さねばならぬ尾根ではあるが、扱て越すとになると、直に喘がねばならぬ、其間に都合のよい乗越場所も來るだらう位な考へで、其事は深く意に留めもせず、唯河原を歩くのだ、谷は大ぶん細まつて、仔細な雪田の上に辿りつた、時刻は八時、右側に尾根は、益々高くなつた、不可能と云ふ程では無いが、乗越には困難になつた、河原を歩く方が苦痛が少いので、飽くまで河原を行く、此先如何なる場所に出會はさうと、自分は畢竟の樂するために、現在の苦を受くる事が厭なのだ、全く刹那主義だ、行ける處まで行け

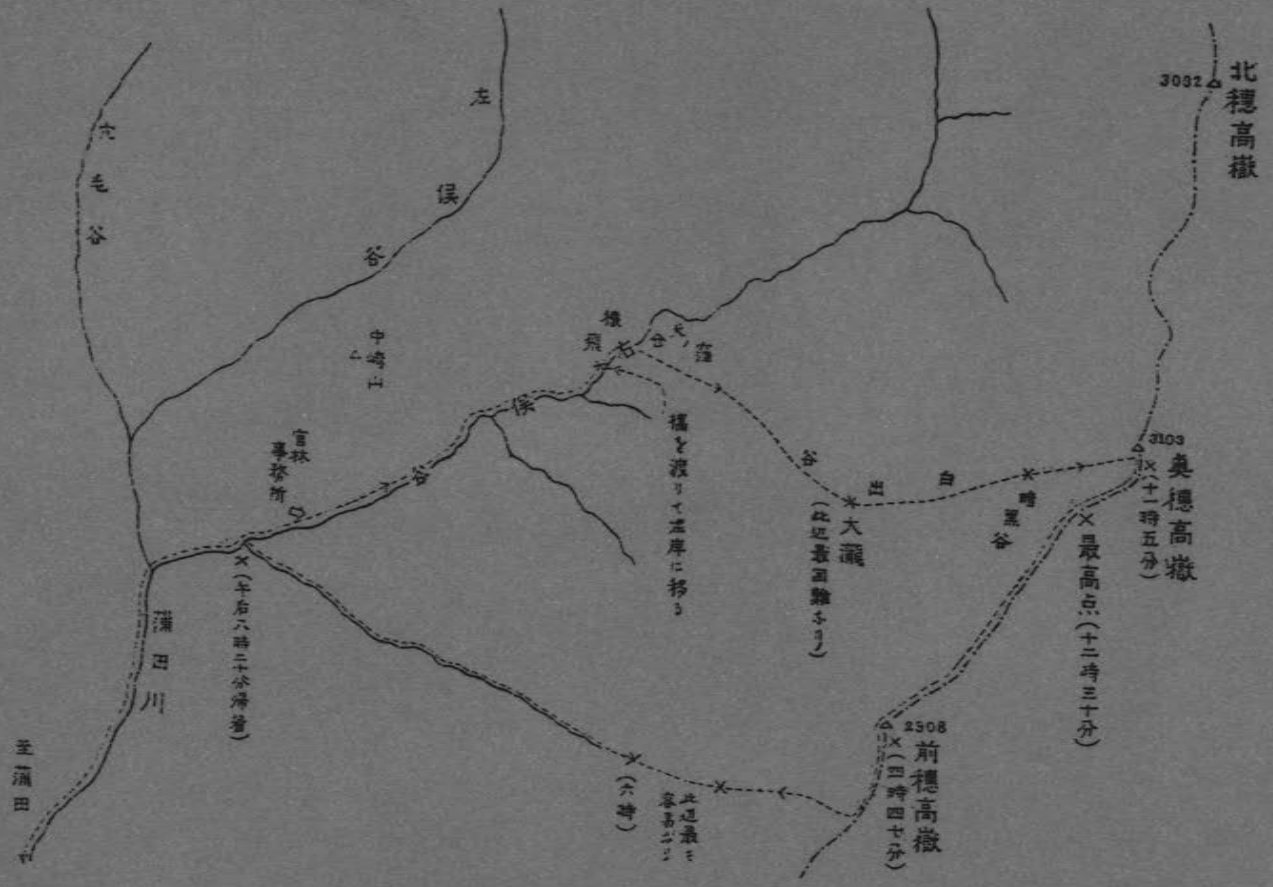
と云ふのだ、穴毛谷あなけに見る様な、雪谿二二三丁を渡つて、終に河原を辿り詰めた、河原から頂上へ一續きの勾配には成つて居らない、幾何學的の境界がある河原は、河原で緩かである、山は山で急である、其緩かな部分を終へて、急な部分は始まるのだ、絶頂かさもなくば、それらしいものは、頭の上に衝き立てられた様に見える、殆んど一氣に行け相ではあるが、併し行程を案じると、嘆息せざるを得ない、左右兩側から迫せまつて居るが、左を見ると、段々瀧の百間も續いて、それが殆ど直立状の岩壁に、高くく圍まれて居る、右を仰ぐと殆ど六七十度の角度を持つた、峽谷が雪谿二二三丁の奥から始まるのだ、併し左側の瀧の縁には、植物が茂つて居るだけ、登攀に便宜が與へられるのだ、終に、其處の横這ひを餘儀なくせられたのだ、最困難な場所は、二個所程であつたが、全體に亘つて仲々の危険である、樹の根に縋り、草の葉に助けられて行くのだ、引けば落ち相なカンゾの莖は、幾度か自分の身體を預かつたのだ、高く行けば密叢だ、而も其間に、廓の如な岩角があつて、行手を拒むのだが、此方危険は少い、視線を遮る木の葉で、谷底を隠して居るばかりでも、一段難有いわけである、此處の横這ひ五六丁が間に、一時間を費して瀧の頭に出た、ズボンズボンを股から下へ裂かしてしまつた、露の深かつた爲めに、全身しどくになつた、太陽は遙か向の岩壁を、黄金色にした、風の吹く毎に腰の邊がすやくと、先は穂高の關門を通過したのだ、これで登攀の試験に合格したのだ、同だと自賛して喜んだ、濕氣を負ふて風に吹かれると、身體が引きしまる様な氣がする、之から愈々人跡未踏かと思ふと、一層うれしい感じがする、併し嬉しいのは心持ちで、別に變つた風物も見當らぬ、唯信州境上迄、一連の石片である、瓦を流した様な工合に、天迄届く程高く長く延びて居る、兩側は此泥流の續く限り、頑丈な岩壁である、植物は一帶に少い、雪谿二個所を通り越して、六合邊で、不思議な峽谷に出會はした、右側の岩壁に穿たれた恐ろしく暗い峽谷だ、水は仔細な瀧になつて、落ち込むが、勿論雪融けだから、涸れる事もあるだらう、谷巾徒らに狭く、兩岸徒らに高く、そ



れに不規律な屈曲が手傳つて、光線の來る所がないのだらう、深いか淺いか薩張り不明だ、暗谷場所本物のそれだ、例ひ穗高山へ幾百人登つたとしても、之こそは永久の暗谷場所よと雪谿の上に立つて眺めた、岩片の上を渡るのも苦しいが、雪谿の上を喘ぐのも樂では無い、一寸十丁も續くのだから厭になる、高まるに運れて恐ろしい、踏損じたら大變だから。「天氣は殆ど理想的だね」と呼びかけると、今田君は「難有い事だ」と云つて居る、笠の中腹まで霧が降りて居たのが、次第に消えて膨大な雪谿が幾筋か、薄紫の中に光を放つて居る、南の空に金色の雪がむつくり起き上つて、更に其間電線状の織雲が、綾を織つて居る、「何と云ふ幸福だらう」など言ひ合せて居る、一時間後の運命も知らずに陽氣な事を言ふて居る、吾々を岳神は笑つただらう、自分は四日來の責任を、今日一日に償却せねばならぬ境遇にあるだけ、空の模様には神經を惱ました、鎧を投げかけた様な岩塊に包まれて、泥流は漸く巾狭く岩片は漸く細く、鋭くなる、五十歩行つては一息、三十歩行けば一息するのだ、其都度後を振り向いて笠の一連に視線を注ぐのが例だ、八合目まで雲は引上がった、自分の足も穗高の八合目にある、自分は此場合誰か大きな刷毛でさつと一刷毛あの邪魔物を掃いてくれたらばと實にじれつたかつた、石片が細まるに連れて、何だか足場が不安な氣がする、餘程考へて脚を運ばねば、こんど載せた其足場の方一間位するゝと、筏にでも乗つた工合で下へ滑るのだ、始めの間は不安の念に打たれるが、慣れて來ると、今度はそれが面白くなる、到底五間の十間のと下へ落つる様な事はないのだ、恐いのは石片の角だ、足袋の二足もはけば幾分よからうか、林道から約二里を登りつめて、信飛の境上(尾根)に着いたのが十一時五分、豫期した程の難路でもなかつたから、時間も林道から四時間足らずで來たわけ、先づは一安心である。

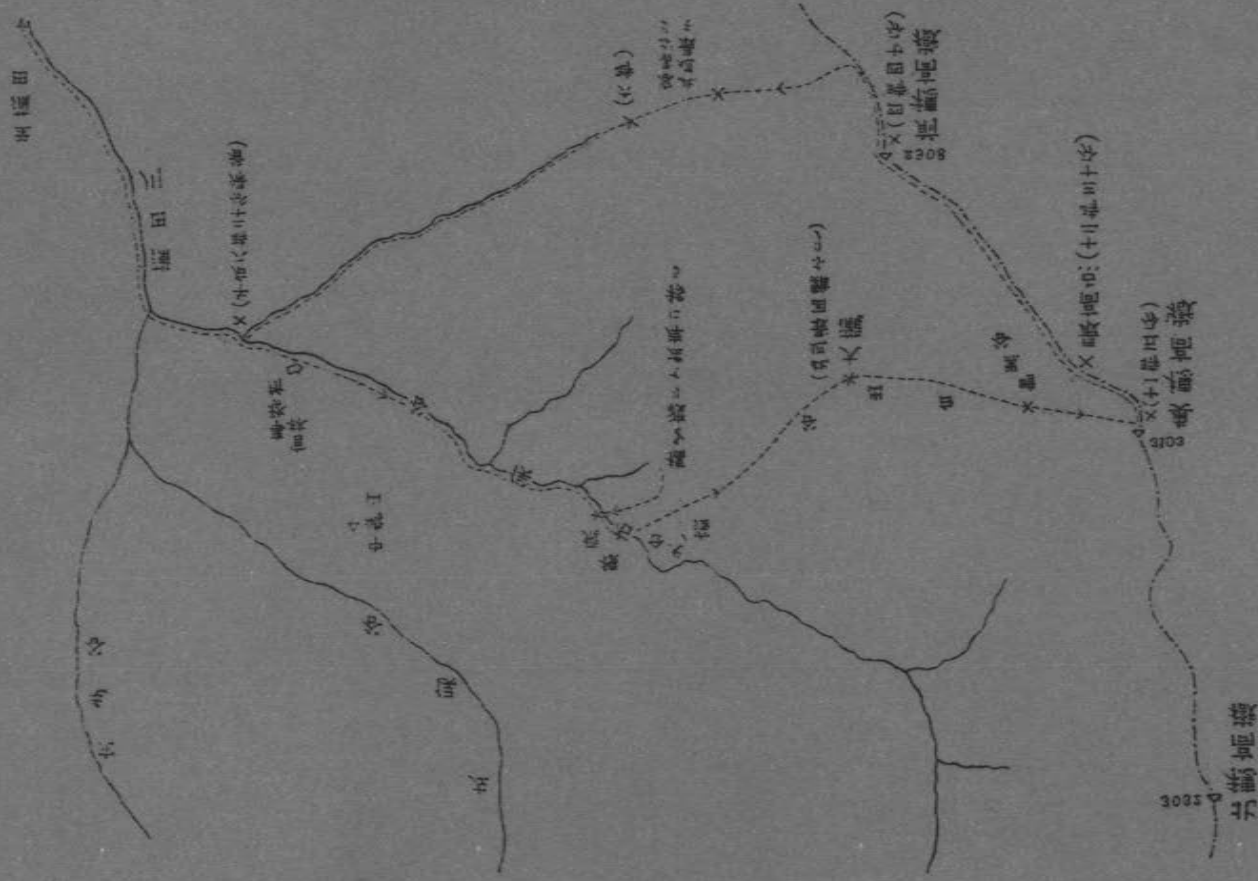
## 二、尾根傳ひ

扱て困つた事が出来たのだ、それは一時間前まで自分等の歡喜をそゝつた笠が見えなくなつてしまつた、それのみか南北にかけて、たつぷり暗雲に包まれてしまつた、何と云ふ無慘な話だらう、殆ど力抜けしてしまつた、自分が山小屋に寝たり半熟飯食つたりする事は、手段なのだ、岩壁を攀ちたり、河原を走つたりすることも、宇宙の絶景を眺めたいからの手段なのだ、地理を案じたり岩石を調べたりするのは、素よりのこと、草花を集めることや、繪具をいぢる事は柄にもない、唯古人の言つた「日本は大きいな」と云ふ様な語を味つて見たいのだ、判じ切れない登山慾に促されて笠へ登つたのは、一週間ばかり前だ、不幸にも濃霧に捲かれて散々な目に逢ふたのだ、鎗へ行つたのは昨日だ、是亦暴風雨のために命からくゞだつた、今日こそは日頃の鬱憤晴らしよと、期待は彌が上に大きかつた、其大きかつただけ落膽も大きかつた、乗り懸る様な岩塊乾燥無味な河原草鞋を擦り減らして、足の裏がイラ／＼とほてるだけの收穫とは、なさけなかつた、奥穂高の三角點は直傍ではあるが、前途の心配があるからそれを左に見て、力なく南に方つて、尾根を傳ふ事にした、僅に東方信州方面が薄霧に窺はれるのみだ、其亂れ打つた群岳の中に、二流三流のピークが指摘せらるゝのみだ、角度は可なり急で其間に一木一草ないが、刻目が細いから之程なら敢て難儀でも無からうと思つた、丁度信州方面へ延びて、穂高や其他の隆起を有つ一支脈の發する三又點に達した、蒲田谷から湧いた雲が、四邊を罩めて來た、少しも行手の見當がつかない、晝飯を食しつゝ、霧れ間を待つことにした、地圖を開いたが、標高の記入はない、併し一萬以上だらうと想像せられた、こんな高いのに何故標高が記入して無いだらうかと怪しんだ、側に立てゝあつた、古杭を讀んで見たり合羽の裂け拾つたり、暫らく不安の念に驅られて突立つて居ると、意外にも人の聲が聞えた、オーイと幽かな音がするのだ、



此圖は陸地測量部五万分一地形圖燒嶽國幅の上に覆ひて透視せられん事を要し、國境線及び三角点を突き合せれば登路の何れの谷によりしか判明すべし、此圖は著者の原稿により編輯せられたるものにして、極めて大畧を示したり、点線は登路にして時間地名等は著者の記入に由れり

吾國正源萬望御恩州府臣一君愛國高義顯畫の十百願之人怒許はろり神  
 如朕の國高嶽以の川流而御心也如御心也如御心也如御心也如御心也如御心也  
 思ふ人一人の國正源萬望御恩州府臣一君愛國高義顯畫の十百願之人怒許はろり神  
 名也、此嶽は御恩州府臣一君愛國高義顯畫の十百願之人怒許はろり神



空谷の聲音以上にうれしい聲だ、此方も力一杯オーイと呼び返した、自分は茲四日來今田君と松井君の外に人顔を見ないのだ、そして住居は蛇の出さうな大森林中の小屋に、辛うじて風雨を凌ぎ、山と云へば赤禿や黒禿の大塊ばかり喘いで居るのだから、原始生活だ、時間に於て空間に於て、到底蒲田から五時間や八時間、三里や五里の境遇にあるとも思へない、全く隔世の感を持つた自分に人間の聲は懐かしかった、斯様な時に面識が如何のご考へる必要はない、信州人でも、越中の人でもだ、乃至は朝鮮の人、英吉利の人、此方は暫時エネルギーを貯へて居るので、オーイを連發してやつた、向から來るのは苦し相な聲であつた、そしてそれ以後尾根を渡る間に、二回ばかり應答したが、遂に未見の儘になつた、何處へ行つたか夢見た様な心地がする、海路の日和ではないが待つに限る、一時的の斷雲が數回往來したので、最高峯を發見する事が出來た、前にはピラミット型の銷壁を控えて、其後に巨鐘を伏せた様なのがむつくり出て居る、それが全く直截的に見えるので、心配になつたけれども、その巨鐘迄の間に尙ほ恐ろしい場所が、雲間から出たのだ、これには面喰つた、巨鐘も心配だが、その巨鐘迄の間が一層現實の心配だ、其直前に瞰下す鋸齒状の上を、自分等の足は許されるであらうか、其先決問題を解決するには、案じるより這ふじろを其儘實行するより致方がないのだけれども、自分の體方と云ひ、度胸と云ひ優に通過に耐へ得る事を自信して極めて、徐々と辿り始めたのだ、一帶が風雨のために、岩片が緩んで居て、よほど細心の注意を拂つても、其盤程の石、石油鑛程の石が、足に任せて轉ろげ落ちるのだ、勿論登る時よりも下る時が面倒だ、然るに果して、其面倒な下りに出會つた、實際出會つて見たら、三又點で見るより以上に險しいものだ、凡ゆる方法を講じて行かなければならないと云ふて、そんなに良方法と云ふても有りはしない、飛行機にでも乗つたら知らず、如何な金力と権力とを以てしても、やはり一步一步と此鋸の目を刻まねばならぬのだ、呼吸を謹んで體の平均を失せない事や、身體全部の筋肉を使用する事や、いざりの眞似して行く事や、そんな方法は

## 山

殆ど衝動的に出て来る、昨日槍を軽蔑した罰が来たのだ、一段降ると、うれしいが、直前に迫つたのが今来しにも勝る險壁なのだ、恐縮せざるを得ない、大きに自信を持つて居たのが、全く盲目蛇的の自信であつたのだ、スタンブ押しした様な猪の足跡は偶々見られるが、近頃人跡は至らぬ様だ、否人跡はあつても、自分等の歩む以外の方面にかも知れない、そして愈々高峯の基まで、到着したのだ、上を見るべからず下を覗くべからず、唯海の行手にばかり、眼を注げと云ふ様な掟を破つて、斷雲の間から足下を瞰下した、飛驒方面に向つて掛値のない數百間の谷底に向つて直截である、其間に少しも眼界を蔽ふものがない、餘程用意して居なければ釣り込まれる様な心地がする、足下にこんな斷崖を瞰下して、二三十間直立の絶巔に向はんとするのだ、今田君は切りに足場を探がす間、其岩柱に凭れて腕を拱き乍ら、扱て最後の五分に勇者にならうか、危きに近寄らず君子にならうか、窮追した運命を悲んだ、實際天下の險ともあるべき場所を、案内無しに來た事の無暴を顧みた、それに雨粒も時々來る、風も募るのだ、殊に不可登と云ふ歴史的背景に付き纏はれて、自分の足は試みても試みても、駆逝かすだ、恰好な手懸りは一つあるが、それが若し緩んで來たら何としよう、さりとて下る事も又容易な事でない、所謂二進も三進も出來ぬ事になつたのだ、鐵棒や、木馬や、梁木や、そんなもので、少しは心得もある、此腕が殆ど感電した様に、ふる／＼震つてばかり居る、今田君は度胸が座つて居る、否已むを得ないのであらうが、それにしても強いと云ふて置かう、兎に角登つた、そして自分を杖で引き上げてくれた、斯くして、穂高山脈最高最險の頂上に立つた、到底槍などの比に非ずと話し合つた、思ひ出しても痛快な氣がする、信州へ延びた支脈の裾の方に黑影が五六動いて居た、先程のオーイ發信者は、分明したわけだ、此方は絶頂に立つたと云ふ勢で鼻が高い二三度呼び合つた、刃の尖端に見えても來て見ると左様にもない、三人や五人まで位腰卸せるだけの餘裕はある、側に比較的新しい穴があつたので、不思議に思つたら今田君は落雷の跡だらうと解釋した、濛々と雲が湧いて來足下の深谷

を隠してくれたのは、願ふてもなき好都合だが、見晴しは零だ、富士を望むと云ふ様な事は空想に終つたとしてもだ、槍笠硫黄乗鞍の向三軒兩隣位頭を出して呉れ、ばとじれつたく思つた、記念と云ふ事に餘り大きな趣味を持つて居ない自分も、其邊の恰好な石を選んで、岳神然と起し立て、一服して居ると、一時に垂んとする、出發せねばならぬ、絶頂を極めたと云ふ衷心の喜悅はさる事ながら、少しも眺望が利かぬ、西北の彼方に野口五郎らしいもの、東北の彼方に、大天井らしいもの、何れも一寸頭を出したばかりだ、残念であつた、併しながらそれは贅澤な話だ、思一度行程に及ぶと景色など騒いで居られぬ、先づ此處から下る事が非常の困難だ、更に其先如何なる場所が出て来るか一寸先ならぬ一丁先は暗だ、否半丁見え透いたら如何に難有い事だらうか、相も變らぬぎりの出來損なひよろしくと云ふ有様で、岩柱を降つた脊梁の上だ、斷雲は時々自分を驚かす様に、鋸齒狀の尾根を窺はせる、何處まで續く事だらう、後門の狼は、前門の虎になつて前途に横はつて居る、併し今更ながら引返す事も出来ないから、唯其間に一物も障害の少なからん事を祈り、勾配の少しでも緩ならんことを願ふばかりだ、狂雲から出沒する奇峯が餘りに壯大であつたから、一寸輪廓だけスケッチブックに記した、同じ様な形のもが笥の差し出た様に突立つて居るから、一々ピークに名も無いも道理だと思つた。

待つ居ても霧は霽れない、行ける處を行くのだ、信州へ行つても、飛驒へ行つても致方ない、愚圖愚圖して居ると、時間が逼るから、足に任せて行けるまで行くと云ふのだ、兎に角尾根に沿ふてさへ居れば、前穂高へ行けるだけは確實だ、信州を歩き、飛驒を歩く、登つたり下つたり、數多の突起の八合又は九合邊を鉢巻させて、飽くまで行くのだ、無暗矢鱈に這ふのだ、不思議な事には今迄殆んど絶望して居た、膠狀質の如な霧がすつと晴れかゝつた、暫らく凝視して居て、自分は方向を誤らなかつた事を悟つた、そして想像の前穂高も頭を出した、眩暈のする程な、岩壁二三を横這つて、白出谷へ續く泥流の上まで落延びた、巾二三丁から五丁もある、大泥流が一直線に谷底へ續く、これが今

◎蒲田谷より穂高登山 中野

三六

朝の豫定線だつたのだ、自分等の辿つた方面よりは障碍少く見える、其泥流の八合邊から直上二十分ばかりで、尾根に登つた、寒さは非常に倍して来る、食事は一層寒さを添へるものだ、馬の脊で食事する様だと云ふて笑つた、赤壁と白壁の好視線に入らない、せめて其間に一個所ものんびりした様な場所が見せつけられたら、荒み切つた自分の神経も幾分和らげた事であらうに、そんな處は樂にしたくても無い、それに再び霧は塞がつた、今度は雨も大ぶん繁くなつたあはたいしき有様に、今田君の急がしさうな態度を見ると、悠々一服もなし得ない、三時半だ今田君は尾根を、自分は信州方面の岩角を偃松拾つて、南へくくと進んだ、暫らく行つては方向を案じるのだ、前にはピラミット型の隆起があつて、其後にオベリスク狀の尖端を仰いで、若し其オベリスクの尖端が前穂高でなければ白出谷の大泥流を下つて、林道から歸らうと決めた、何となれば其時直ちに歸るとしても、蒲田迄は一里、日を暮さなければならぬのだ、それに身體も惜しく無い迄草臥れては居る、天氣も天氣だ、何れにしても其オベリスク迄行つたら歸らうと云ふのだ、何と云ふ馬鹿らしい考だらう、今朝から殆ど三千米突以上の、等高線を傳ふて來た、自分に二九〇八と記された標高を踏んだとて、それが何の權威でもあるまいに、然るに登ると決めた處まで登らねば、氣が濟まないのだ、樂しく歸るよりは苦しく登りたいのだ、遂に其尖端まで、十七貫を運んで、扱て見廻しても、それらしくもない、然るに其次位にあるのが古杭のそれらしく見えたので、所詮と極め込んだら、例ひ豫定外の部分であつても必然とあつて見れば殘して置く事は出來ない、道程は二丁内外だらうが、それは重荷の上に小附こづけをせられたのだ、元氣な時の五丁よりも今の二丁が苦しい、心ばかり急いで足は中風の如くになつて動かぬ、呼吸も苦しい、氣息奄々の態度で登りつめた、山勢少しは此邊衰へて居るから、危険は少い時計は四時四十分を示す、クシャ／＼の地圖を開いて居ると、二錢銅貨程の雨滴が其上に幾つもなげつけられた、そして自分の歩いた國境の線を五萬分の一で切つて見ると、今朝から約半里(併し行程を延長したら



長したら三里以上ならん）而も其間に約六時間を費して居る、最少し正確に云へば五時間と三十二分を費して居るのだ。

振り返つて北方を仰ぐと洋上の巨艦が怒濤を捌くが如く、狂雲のたゞ中に鎮まつて微弱な人の子をあざ笑ふ如くであつた。

### 三、下り道

下りは小鍋谷からしやうとするのだ、今田君は此處迄は立派に來た事があるのだから、小鍋谷の道に就ては大船に乗つた心地半分、蒲田迄歸つた心地さへした、然るに濃霧のために全く方向が不明になつてしまつて居ると云ふ、霧れるを待つのも限りのないことだ、時間には限りある事だ、已む得ず暫く南へ行つてそれから下りにかゝつた、峻険の度は大した事はないが、鋭い石片が疲れた脚の邪魔をする、足袋の先に指先が紅く並んで居る、思ひ切つて下つた、雨は小やんだ雲は霽れた、密叢に踏み込んだ、尙行くと尙密叢だ、「道が間違つた、今田君は今更乍ら歸らぬことを言ひ出した、最少し岳頂上近く下ると丁度だつたと云ふ、餘り大事を取り過ぎて南へ行き過ぎたのだ、及ばざるに如かずと、こんな處で味は、された経験は忘れられまい、有難くもない経験だが、小やみの雨は再び降り出した今度の降り方は一層元氣がよい、非常に降る、真田帽も透すメリヤスの襯衣も透す慘憺たる話だ、全く今朝からだまし打に逢ふた様な氣がする、青い空に美しい戈先が、尖端に笑を浮べて、自分を招んだのだ、招ばれるまゝにいそ／＼として出かけたのだ、それに何ぞや此始末でも言ひ出し度くなる、昨日は槍に今日は穂高に降るの降らんの騒ぎでない、流すのだ、白樺や岳樺で鐵條網が出來て居る、下手に登ると油を塗つた様に滑らかいので轉んで胴を打、足でも挫く、轉んだいけは下るのだからなご苦しい負惜み言つて、猿公の眞似の出來損ひ見た様に下るのだ、此位の難儀も、自分は初めての經

◎蒲田谷より穂高登山 中野

三八

験だ、これが徹底どでも云ふものだらうか、書物の上の徹底は知らぬが、これが果してそれなら徹底が厭になつた、出来得べくば最少し妥協して貰い度いのだ、雨も少しにして、密叢も粗叢位にして、濃霧も薄霧位にしてもらひ度いのだ、非立憲と言はれやうが構はない、六時半谷に降り着いて、ホット一息をつく、早速一服とポケトを探したら煙草はべた／＼褐色の汁が白い上衣を流れて居た、殆んど、極端迄に疲れた、身體を金剛杖に支へて、さて下を見ると、谷の兩側から土砂が崩れ込んで、それが雨敲きに出會つて、紅い土煙が上つてポツとして居る、暗色は附近を罩めて居る正確な話では無いが、蒲田まで三里あると云ふのだ、殊に其間二里は河原傳ひだと云ふた所で、三里のものが五里あつても致方ないのだ、少しでも明りの間に出なければと急いだ、途中に相當な瀧のあると云ふ事も聞いて居る、悲觀せざるを得ない、自分は此處を下るためには、如何なる手段も取らうと思つた、體裁などを願みる隙はない、思ひ切つた姿だ、ズボンなどびら／＼後に翻つて居るが、それを繕ふ程贅澤な事は考へないが、併し待つて呉れと云ふ語を出すまいと決心して累石に出没する今田君の跡を追つた、否待てと云ふても疲れたとは云ふまい、完全な耳奄盜鈴であるが混亂に混亂した、今田君の神經を是以上激昂させることは不可であると思つた、めた、河原はさして困難とする程では無い、否此附近では最も樂である、石が細くて圓いそして勾配緩徐だ、唯途中で十數箇所、鐵砲流しの跡が塞がつて居るのが邪魔物であつた、苦しい様な時には何もかも一度に來る如に思ふ、意地の悪いものだと云へ、偶然に出來た事ではないが、空腹が耐へられない迄になつた、今田君の渡した辨當を受取つて、ガブリと水を汲み取つた、そして立食で流し込んだ、其間五分も経つたらうか、暗色は漸く自分を包んだ、中崎尾根が見え出したので喜び勇んで、林道まで出た、幸に大きな瀧もなかつた、日は全く暮れた美しい星の瞬か笠の上に見える、途中で袖小屋に立寄つて一休した、最初、盜賊と見誤られたのは、可笑しかつた、眞暗の道に軌道が白く光つて居るのでそれに、導かれて恙なく蒲田へ到着した

時に九時半。

## 燧ヶ岳より飯豊山まで (二)

志 村 鳥 嶺

### 一、東北の山

日本アルプス地方の登山が、最も趣味の多かつたのは、今より約十年程の昔であつた。日本山岳志の著者高頭氏が、大天井岳の所在登路等に就いて、山麓の村役場に照會されたが、十分に要領を得られなかつたと云ふ話は、今から考へて見れば殆んど事實とは思はれない。夫れ故、其の當時の日本アルプスの、横断とか縦走とか云ふことが、いかに世人に耳新らしかつたか想像も出来ぬ。其の後約十年間に、我が山岳會員の登山運動は、日本アルプス地方のどんな山でもいかなる谷でも、其の登路や名稱を、一々吾人に暗記せしめる程になつた。時に參謀本部の五萬分一の地圖が出来てからは、日本アルプス地方の形勢は、掌上の紋様を見る様に明かになつた。併し日本の他の地方の高山は、まだ暗黒な部分が多い、東北地方の中央山系の部分には、記録などに載つた事のないものが澤山ある。御神樂岳とか狸々森(狸が森の誤りにて如斯山名なしとの説あり)とか平ヶ岳とか云ふ様な山になると、随分日本の山岳通と云はるゝ人々でも、一寸様子を知て居る人は少いと思ふ。又尾瀬沼の風光とか飯豊、鳥海などの雄大なものは、日本アルプス地方にも、其の比類が少いのである。夫れ故これ等の地方に登山旅行を爲す人々の爲めに、尾瀬と飯豊の梗概を書く事としよう。

## 二、旅行の豫定

大正三年七月七日、高頭氏よりの通信に接した、之れは東北地方旅行に關したものであつた。先づ其の日程は、

七月十五日、自宅出發越後國北魚沼郡大湯温泉泊り。十六日、駒ヶ岳登山。十七日、中ノ岳より枵尾又温泉泊り。十八日、銀山平高橋農場泊り。十九日、同上、滞在。二十日、平ヶ岳登山、野宿。二十一日、平ヶ岳を下り高橋農場泊り。二十二日、鶴景山登山、野宿。二十三日、同上下山、高橋農場泊り。二十四日、福嶋縣南會津郡檜枝岐村。二十五日、駒ヶ岳登山。二十六日、赤安山登山。二十七日、燧ヶ岳登山。二十八日、木賊岳登山。二十九日、帝釋山登山。三十日、狸々森山登山。三十一日、御神樂岳登山。八月一日、若松市。二日、東山温泉。三日、猪苗代湖。(舟遊) 四日、盤梯山登山。五日、飯豊山。六日、同上。七日、羽前五味澤。八日、朝日岳を登りて立木村に至る。九日、秋田市。十日より十三日、酒田を経て歸宅。

此豫定によると約一ヶ月に亘る大旅行である、中には吾人が平常から登山して見たいと希望して居つた山名が列擧されてある、猶ほ左の順序で自分にも途中から此旅行に参加する様にこのことであつた。

七月廿二日、午後二時三十分、長野發、同九時七分大宮着。同十時三十一分、大宮發。廿三日、午後八時四十分、若松市着。廿四日、若松より靜川まで十五里、(人力車を通ず)。廿五日、靜川より内川まで歩行十里。廿六日、内川より歩行約六里にて檜枝岐に至る。

廿六日に檜枝岐に達すれば燧ヶ岳以下の諸峯に登山することが出来る。檜枝岐は下野栗山郷の山陰にて非常な寒村である、勿論米麥等を産せず。

高頭氏の手紙の末尾にも、檜枝岐に達する途中にて、白米を二三斗購入し來るべしとの添へ書きがあつた。

### 三、出發の準備

自分は早速、此旅行に参加すべき豫定で、種々の準備を始めた。先づ第一に會津若松を迂回するはあまりに遠距離である、或は下野から入らうか、地圖を調べて見れば確かに通路がある、此方面は下野國上都賀郡今市町役場に照會した。それから群馬から入らうか、之れも地圖には立派な通路がある、此方面は上野沼田町の小林區署に照會した、兩者何れも早速返事が來た、今市役場からも沼田小林區署長からも、詳細に親切に、道路宿泊地人夫等に關して回答されてあつた。下野から栗山を経て檜枝岐に入るは、なか／＼困難である、沼田から利根川の支流片品川に沿ふて進むのが便利がよい、特に燧ヶ岳の麓なる尾瀬沼附近を通過するのである、二十七日に此地に達すれば、同日燧ヶ岳に登る豫定の高頭氏にはこゝで出會する事が出来る。高崎から尾瀬までは途中二泊すればよい、廿二日に長野を發し、一旦上京し廿三、四の兩日當時開會中の大正博覽會を一瞥して、廿五日上野を發し、片品村追貝に達し、廿六日同村戸倉に入り、廿七日戸倉より四里を徒歩して尾瀬沼に至ることに決定した。以上決定したときは、高頭氏は既に出發された後であつたから、旅程を變更した通知を發することが出来なかつた。

### 四、出發前上京

七月廿二日上京、廿三日及廿四日の兩日大正博覽會を見物した。一般の殖産工藝品には注意しなかつた、日本アルプスの模型や、其の他高山に關するものもあつたと云ふが、もとより見る氣にもなら

ず、見やうとも思はなかつたから、何處にどんなものがあつたか知らなかつた。

此二日間は主として繪畫と彫刻の美術館だけを見た、實に立派だ、技巧を凝して絢爛人の眼を奪ふの色彩はあつた、しかし此多數の中、何れが世界的日本の、大正の大御代を記念すべき作品であるが、何れが百世の後までも傳はる者であるかと考へたときに、吾人は非常に失望した、しかし、之れは恐らく自分許りではあるまい、以上の様な考へがふと胸に浮んだ時、再び觀る勇氣も失せて、館外に飛び出したら、福引とかに蝟集する觀覽者が、押し寄せ押し返し實に雑沓を極めて居る。各種の興行物が客を集むる爲めに、囃し立つる樂隊の騒々しさ、耳を聳する許りであつた。冷靜な眼から見るときに、彼等は狂して居るのではないかと怪まれた。俗惡な色彩よりも、自然の花の香に酔はふ、一時も早く雑沓せる都會を離れて、太古の森林に包まれたる、靜寂なる尾瀬沼の澗に、漣漣の音を聽かう。

## 五、上野より沼田まで

廿五日の早朝、上野を發して高崎に達し、高崎より電車に乗つた、伊香保行の浴客多く、車中は随分雑沓した。十一時二十分澁川に着いた、車を下りて積善館の店先へ、ドツカと身を投げ出した、赤城嵐が冷ヤリと身にしみたとき、始めて自分は蘇生した、恐ろしい惡魔の手から、遁れた様な氣がした、後から追つて來る、追手から遠く距れたときの落人は、こんな氣分がするだらう。

十二時積善館の前から、沼田行の鐵道馬車に乗つた。

今朝上野で買つたまゝ、見る暇もなかつた國民新聞を、衣囊から出して見ると、暴風雨の警報が有つた、深厚なる低氣壓が九州四國を襲ふた、本日中には東京附近を通過するだらうと書いてあつた。登山旅行でなくても家を出るときは、先づ第一に天氣を氣遣ふのは當然だ。まして長途の旅行、特に山地の旅行をしやうと云ふ自分には、ひどく恐怖の念を起させた。今日は早朝から天氣模様は怪しげ

であつた。此記事を見て僅々一時間半許りしか過ぎぬ内に、猛然として劇しい雷雨となつた、風もすさまじい勢であつた、馬車の線路は全く泥水の流れとつなた、雷鳴と疾風との爲めに馬は全く立ちすくんで、御者はどうすることも出来ぬ、しばらくして暴風雨が静まつたので、馬も漸く歩き出した、利根川の崖上綾戸と云ふ所が、非常によい景色だつたさうだが、風雨の騒ぎで見ることが出来なかつた、沼田町へ着いたのが二時半。

沼田へ着いたなら小林區署を訪ねて、先日の手紙の禮を述べたいと思つて居つたが、まだ雨が降つて居るのと、高平へ行く馬車が直ぐ出ると云ふので、訪問することが出来なかつた、何んだか義理を缺いて、すまぬ様な氣がした。沼田の町は赤城山麓の高原に在つて、一小都會を爲して居る、利根の支流片品川が其の東南方を深く浸蝕して、深谷を穿ち、高い臺地を成して居る。火山の噴出物より成れる粗鬆の地質であるから、地をいくら深く掘つても水などは出ない、町内に殆んど井戸と云ふ者がないと云ふことだ、町民が飲料とする水は、路傍に引いてある流水である、之れが普通の下水溝などと異ならぬ様な設備だから、随分不潔極まるものだ、之れを見ると彼の水道だの、衛生だのと騒ぐのは滑稽な話した。町家は皆屋根の低い平家が多い、夫れも板屋根で皆石が載せてある。

## 六、沼田から高平まで

沼田を出たのが三時半、高平まで三里の間、路は次第に爪先登りになつて居る、屈曲高低甚だしく、特に拳大の砂礫が一面に敷てあるので、さなきだに動搖の激しいガタ馬車の事であるから、其の激動の爲めに、自分は脳震蕩を起さなければよいがと心配する位であつた。乗合の客も高崎から澁川までは、伊香保行の東京方面の紳士連が多かつた。澁川から沼田までは、三人の齋買商人と十三四歳の小娘とであつた、沼田から高平までの間は、自分の外には足尾から來たと云ふ鑛夫一人と、五十許の老爺

◎謎ヶ岳より飯豊山まで 志村

四四

ど、三人のみであつた。前に述べた様な砂礫の路を進んで行くど、高平の一里程手前で、車輪が破壊してしまつた、さあどうすることも出来ぬ、仕方がない、御者も乗客も一緒になつて、車の修繕を始めた、何とか輪だけ拵めることが出来たが、人が乗つては危険だから、皆徒歩して静かに歩かせた、之れで意外に時を費し、高平へ着いたのが午後の七時であつた、自分は明日戸倉まで行く都合から、猶ほ三里先の追貝まで行かねばならぬ、しかし追貝の方へ歸る馬は時間が遅いので、もうなからうど馬車宿で云つて居た。日は暮れる馬はなし、荷物があるのでどうすることも出来ぬ、特に人夫を雇はふとしても、夜路の事故應ずる者がなし、殆んど困却してしまつた。同行して來た工夫は、利根の水電の工事を目當てに來たのだから、やはり追貝まで行くのである、自分の困つて居るのを見て、荷物を背負つて行かうと云ひ出した。しかし其の容貌の瘠惡なる、身體一面に何か腫物が出来て居る、若し或る論者が云ふ様に、容貌が人格を表はす者どすれば、之れから三里の夜路、途中は人家も村里もなく、二里に近い栗生峠があると云ふ事であるから、こんな男と同行するのは非常に不愉快である。殊に彼は馬車の中で、空腹と疲労とで困難して居ると云ふ事を云つて居つた、今急に荷を擔ぐなどと云ひ出したのは不思議である、こんな譯で工夫を頼むことを躊躇して居ると、都合よく追貝の先の須賀川へ歸ると云ふ馬が來た。荷物をすつかり此馬に托し、馬子の提燈を自分が持つて、田舎道をすたすたと出掛けた。

愈々峠道へかゝると、思つたよりも急峻で、右に左に曲折して居る、雨の爲めに大きな石が洗ひ出されて居るので、馬も人も足元があふなくなつて歩けぬ、深い谷の間から鎌の様な三日月が見える、暗い谷の底でホト、ギスがしきりに啼いて居る、何とも云へぬ凄い景色であつた、ふと先刻の工夫を思ひ出して、ゾクゾク身體が慄ひた。



## 七、追 貝（吹割れの瀧）

追貝へ着いたのが、午後の十一時半であつた。追貝には今利根水電工事の工夫が、二千人から居るこの事、一時は一萬人も居つたさうである、田舎に似合はぬ射的玉突などの遊戯場が有つた、純良な田舎の風俗が、全く彼等の爲めに破壊されたとか、荷物は其の儘須賀川まで馬に托し、淀屋と云ふ旅舎へ泊つた。

廿六日、追貝より戸倉まで五里、一日の行程としては餘りに近距離なれば、追貝の名勝「吹割れの瀧」を見て、ゆる／＼こゝを出立せんものと、早朝瀧見物に出掛けた。

「吹割れの瀧」に就いて、關東の山水にこんな記事があつた。

『片品川の追貝川を入れむとする處、千歳橋と云ふ奇橋、懸崖の上にかゝる。上流も下流も巖のさま水のさま、まことに目さむるばかりの風光也。』（中略）千歳橋の上流、數町に當りて、片品川は全石を底となして、石の幅一町以上にも及ぶ、水は石の上をうすく蓋ひて流る。その底の全石右岸より懸崖となりて裂け來り、左岸に達せむとして達せず、左岸よりまた懸崖となり、右岸よりの懸崖とわづか五六尺を隔て、延びゆき、右岸に達せんとして達せず、圓味を帯びて左岸へひきかへす。その大盤石の裂けて一落せる様、恰も、平假名の『て』の字の如し、高さは數尺なるが、右岸より裂けたる懸崖は、長さ八十間、左岸よりの百二十間、合せて二百間、隙間もなく水流れ落ちて瀑となる、中央數十間のところは、川を横斷して、向ひ合ひて、深淵に落ち込む。嘗て試みに三十尋の繩に石をつけてさげて見しに、底までは達せざりき』と云ふ、一種の水晶簾が二重になりて、川にかゝれりとも形容すべし、この瀧は『名を何と云ふぞ』と問へば、童子答へて曰く『吹割れの瀧なり』と

水大に減じなば、同じ吹割れの瀧を、或は縦にあらはすべく、或は横にあらはすべしと思はるゝ大

◎巖ヶ岳より飯豊山まで 志村

四六

盤石、長く數丁も下につゞきて、その間馬脊の如き長巖川を横斷せむとするものありて、終に大瀧と稱する瀑布となり、その下は水ゆるく流る、兩岸の絶壁一曲せるが爲めに、千歳橋までは見えず、吹割れの瀧より下へかけて、對岸に巨岩直立し、長さ數十間に及ぶ、曰く障子岩なり。上流に島あり松之に生ず、曰く浮島なり、浮島の右には、千人隠れと稱する巖窟あり。左には女夫岩あり、吹割れの左岸に屹立する藤山の上より、對岸を見るに、障子岩の上、一山更に全骨をあらはして高く天を衝き、紅葉之に黙綴す。日暮れむとして、暮烟何處ともなく生じ、夕陽の名残は、なほ天にありて、綿の如く、ちぎれ／＼に山を越えゆく雲、紅にして淡し。單に瀑の奇なるのみに非ず。このあたりより千歳橋までの溪流のさま、優に之れ天下の絶景也。童子曰く「夏は沼田より見物に來る人少なからず」と、又曰く「東京より見物に來る人もあり」と、されどこの絶景、未だ天下にあらはれず、山水も亦遇不遇あるかど、いたく惜まるゝ也。

此文よく吹割れの瀧を叙したれば、自分は贅言を述べますまい。

## 八、追貝より須賀川まで

吹割れの瀧を見物して、追貝を出發したのは午前十一時頃であつた。追貝から須賀川までは二里、物淋しい田舎道を、片品川に沿ふて上つて行くのである、途中は別に取り立て、云ふ程のところもなかつた。午前一時頃須賀川に着いて、昨夜何物を托して置いた馬子の家を訪ねると、こゝから戸倉まで荷物を運んで呉れる人夫まで、頼んで置いて呉れた。田舎者の朴直と親切には何時も感心する、厚く禮を述べて、擔夫に雇ふて呉れた石井嘉七を先に立て、須賀川を出た、時は午後二時頃であつた。

進むにしたがつて片品川の谷は益々狭く、人家もたゞそこゝに小部落を爲して居るのみ、野に出て耕す人もなく、道に行き交ふ旅行も見えねば、森閑としていかにも日が永い様な氣持ちがした。土

出と云ふ所を過ぎて峠があつた、峠から遙かに戸倉の部落が見えた。

## 九、戸倉の部落

戸倉に着いたのは午後の五時頃であつた、旅舎と云つてももとより專業の宿屋ではない、萩原助作と云ふ農家で、副業にやつて居るのだ。舟河原鑛山事務所と云ふ札が掛けてあつたが、別に事務員なごが居るのではない。

此戸倉から會津館の檜枝岐までは、九里の間全く人家がない、こゝも随分偏僻の地で、米は勿論麥も出來ぬ、こんな山間に、どうして人間が住んで居るかと思はれる程であつた、戸数は僅かに三十戸許、それが皆萩原姓で、此部落に松浦が三軒、星野と云ふのが一軒あるだけこの話しであつた。宿の主婦の話によると、今日あたり會津の馬が、檜枝岐から尾瀬の峠を越えて來る筈故、草を刈つて待つて居ると云ふことであつた。高頭君は豫定によれば昨日檜枝岐へ着いた筈であるから、檜枝岐から馬喰が來れば、君の様子も分る故、馬を待つたのは宿の主婦のみではなかつた。

高頭君から依頼されて有つた白米を、購入しやうとして主婦に相談したところが、いくら檜枝岐でも村中探して、あなた方の食ふ米位が無いことはない、わざ／＼此處から、運んで行くにも及ぶまいこの事であつた。

## 十、戸倉から尾瀬沼まで

廿七日午前五時半戸倉を出發した、人夫は萩原久松一名を案内者とした、戸倉の部落を離れると間もなく、山路となるのである、こゝは明治戊申の役に、會津藩士が官軍を悩ました處と聞いて居る、誠に狹隘なる谷底を、溪水に沿ふて僅かに道を通せるのみゆるゑ、一夫之れを守れば、萬夫も越ゆるこ

◎鑑ヶ岳より飯豊山まで 志村  
どの出来ぬ要害の地である。

戸倉より早や半道以上来たかと思つたとき、路傍に山神の社があつた。

午前九時舟ヶ原鑛山に着いた、近頃少しく採掘を始めたばかりで、僅数の鑛夫が居る、往昔里人が船を作つて尾瀬沼へ浮べたところが、大洪水の爲めに、其の船が此山の上にある原まで、押し上げられたと云ふ傳説があるので、舟ヶ原と呼ぶのださうな。

二十分許り鑛夫の小舎で休憩して出發した、路はこゝから著しく急峻となつた、此坂路は三平坂と呼ぶさうな、三平の名を冠するからには、何か由来がありさうであつたから人夫に尋ねたが彼は何も知らなかつた、坂の途中一杯清水と云ふ冷水の湧き出るところで休んだ、他所でもこんな急坂の途中に、冷泉の湧き出して居るところがある、戸隠の不動澤にも一杯清水と云ふがある、坂路を登りつめた時が午前九時五十分であつた。こゝからはまだ尾瀬の湖水は見えなかつた、熊笹が一面に生えて居る峠の頂上で、昨日戸倉の宿で話して居つた馬喰が、數匹の馬を人足に引かせて來たのに行き會つた直に高頭君の事を尋ねて見ると、檜枝岐の宿で、昨日駒ヶ岳に登り、今日この下の尾瀬へ來る客があると、云つて居つたと云ふことであつた、自分は之れを聞いて覺えず、雀躍して喜んだ、こゝから一時間許りで尾瀬沼に達することが出来る、道程は戸倉からも檜枝岐からも、同様であるから、檜枝岐から登る高頭君と、こゝから下る自分とは丁度湖邊で邂逅するであらう、自分は豫期して居るが、高頭君は自分が會津から來ると思つて居るから、定めし一驚さるゝであらう、一割も早く湖邊までと、人夫を急がせて峠を下つた。

今朝から曇つて居つた天氣は、峠の頂上へ登つた頃から、カラリと晴れて、一きは炎熱を覺えた。湖水の岸に達したのは午前十一時頃であつたらう。

鬱々たる太古の儘なる森林の間に、展開せる深碧の湖面、岸に寄する小波は、靜かに美しき砂を洗

つて居る、燧ヶ岳は、中禪寺湖の男體山と云つた様に、對岸に其の圓錐形の頭を擡げて居る。北海道の外こゝにしか無いと云はれて居るエゾセキセウが、大きな實を着けて居るのを始めて見た。

湖岸の森林中を横過して、長藏の小屋に入る。内に七十許りの老爺がしきりに岩魚を焼いて居つた、自分は何より先に高頭君が來られたかと云ふことを聞いた、まだ何人も來ては居らぬとの事故、人夫を小屋に休ませ、檜枝岐道を一二丁進んで見た、すると遙かに草原の間に、三個の人影が見える。雙眼鏡にて望むに多少荷を擔へし二人は従者で、キャラコ帽を戴けるが高頭君であることが明かに分つた、自分は笠を脱いで高く振つた、高頭君の一行は自分が此處に居やうとは思はぬから、始めは他の登山者と思つて居られたが、近付いて自分であることを發見されて帽子を高く振られた。

## 十一、尾瀨 沼

尾瀨沼は水面が海拔五千四百六尺の高さにあつて、燧ヶ岳熔岩が溪水を堰き止めて出來た、堰止湖であります。田中阿歌麿氏の研究によれば、水温は表面十七度（八月下旬）、深度八米突にて十六度、水色はフォーレル氏の第九號と第十號との間に、透明の度は四米突三十、他の湖水に比して頗る透明であるとの事だ。沿岸は到處ツガ、モミ等の針葉樹林が、鬱蒼として居つて、幽邃を極めて居る。長藏の小屋は湖の北岸にあるが、其の北は又一面の草原になつて居る、之れが奥沼平と呼ばるゝ野地である。植物分布の有様は、日光赤沼ヶ原と殆んど同様である、しかしクロバナロウゲが一面に咲いて居つたのには驚かされた、自分は本種の自生せるのをこゝで始めて見たのである。

午後は附近の採集をも爲さずして、高頭君の越後からこゝまでの旅行談に花が咲いた。午後四時頃小屋番の老人が、三十分許の間に二三十尾の岩魚を釣つて來た、之れを原料として、高頭君が、歐洲仕込の西洋料理を、二三品作らうと云ふことであつた。自分は老人の竿を借りて岩魚釣りを試みた、

◎淺間山の初冬 冠

五〇

高頭君の一行は銀山平で岩魚釣をやつて見たが、全く釣れなかつたさうであつた、夫れ故自分の留守に、君は従者と自分が釣れるか釣れぬかと云ふ事で、賭をやられたさうであつたが、一時間許りの間に六七寸のもの四尾を釣つて歸つた、しかし賭に勝つたのは誰れであつたか聞かなかつた。尾瀬沼の風光は殆んど天下一品である、彼の三景だの八景だのと所々に名勝があるが、この様な風景は自分が今迄見た景色の内には先づ少ないと思ふ。

湖上の夕暮の景色を見んものと、小屋の傍に繋いであつた、燧ヶ岳丸と云ふ小舟に乗つて湖中に出た。沼尻の夕照も湖面に跡を残さず、湖上の漣音もなく、燧ヶ岳の影次第に黒み行くとき、自分は其の静寂に堪へられなかつた。

## 淺間山の初冬

冠 松 次 郎

大正四年十一月十九日。日歸りの遠足に半日程付け足して、淺間山のいぶきに接しようとして、午前十一時二十五分、上野發の汽車で、小諸に向つた。好く晴れた日だけれども、遠き地平線には灰色の横雲が、断れ間なくたいなはつて、熊ヶ谷邊迄は山と云ふ程の山を見ず。長閑なる武藏野の遠近を打ち眺めても、遠き連山の威容を見ずしては、何となく物足りない感じがする。

高崎近くへ來ると、行く手に淺間が高く蟠り、盛なる噴煙を吐いて、關東の平野を睥視してゐる。其右には榛名あり、赤城あり、日光あり、右手に聳ゆる秩父の連峯は、今し雲の扉を排して、稜々たる兩神の嶮山の左に、いやが上にも高き、雁坂、破風、甲武信、三寶の大岳の、天半に霞める様は、

誠に心往くばかりである。

汽車が遅れた爲、碓氷で夕榮の空を仰ぎ、インジゴに暮れ行く榛名の山色を眺めて、輕井澤の高原に出た頃には、日は全く西の夕雲に隠れ、十三日の月は既に中天に到り、其光りに透き通して見る唐松の密林の展開し來る様は靜寂として、高原の蕭殺の氣は巨人の噴煙に和して、底しれぬ寂しさを覺える。

午後七時頃小諸に着き、小諸館と云ふ旅舎に投じ、客間に通されて見ると、もう炬燵が切つてある。そして其上にチャブ臺を置き、夕餉をむさぼるのが、山國の冬らしくつて嬉しかった。

十一月二十日。午前六時少し前に宿屋を出た。空は薄曇りだけれども、雲は非常に高い、まだほの暗い小諸の町を通り抜け、八幡祠の傍から裾野へ出て、暫く行くと、道は松林の中に没して、一路寂寥囀する鳥の聲も少い。林の切れ目からまだ薄明の飛驒山脈を一瞥して一休みする、佐久平を隔て、蓼科山の圓頂が随分高く聳え、其右の八ヶ岳の頂點には、一抹の横雲がたなびいて、遙か下の千曲川の上を、根なし雲が三つ四つ五つ、東の方へふわ〜と動いて行く。

今朝は暖かつた、逆も十一月の月末とは思へない位で、霜解け道がじく〜する。赤松が少なくなると唐松が殖える、終いには唐松のみの大林の中を行く様になつた。昨夜月の光りで見えた時には、もう枯林になつてゐるものごのみ思つてゐた唐松林は、まだ二三分通りしか落葉しないで、七八分の紅葉が樺色にほうけて、極目の山谿を埋め盡して、その奥から堂々ささし昇つて來る旭日が壯大に見えた。

午前七時五分、七尋石を左に見て、暫くの間登り、蛇堀川に添つて行く。谷向ふの紅葉も美しい。間もなく道の遙か向ふに家が見える。これは夏登山者の休憩所になる淺間館と云ふのださうだ。名は立派だが極めて粗末な山間の一軒家に過ぎない。爐の傍に腰を下ろして、西北を眺めると、蓼科山の

右に連らなる低山の上に、雪の皴鮮かな大岳が落ち付いてゐる。木曾駒らしい。

この家の主人は里へ降つて、みすばらしい姿をした、母親と四ッ程になる小兒が寂しく留守居をしてゐる。物淋しいのにはんやりしてゐる小兒は、私共の姿を見ると、堪まらなくなつたと云ふ様に、いきなり傍へ駈けて来て、『おぢさん何處へ行くだ、煙り見に行くか』と人なつ、こさうな目を向ける。ドロップを遣つたら、喜んで食べてゐたが、案内者が煙草を吸つて居るのを見ると、その煙管を取つてすばくど吸ひ始めた。よく淋しくないねと聞いたたら、俺らも町へ降りるだど、悲しげに云ふ、けれどもこの山奥の住家の外には、頼るべき處もない身の上だど、云ふのを聞いて、物哀れになつた。

小谷へ降りて丸木橋を渡る、その上には氷が一寸程厚く張つて、上を行くと迂りさうだ。檜林の中の堆高い落葉の中を、がさくど音を立て、行くと、道傍に炭焼の竈が三ッ程ある、又橋を渡つて右側に上る、谷川にはもう眞白な雪の様に泡立つた氷が、兩岸に張り詰めて、其中を一筋の谷水が、小さな音を立て、流れて行くのが、もう間もなく凍りさうだ。

午前九時五分、一の鳥居へ出た。是れが山道にかゝるので、此處が一合目ださうだ。小諸から二里半になる、可なり高くなつたので、おく霜白く、すがれた草や、生氣あせた熊笹を分けて行くと、足許がぱりくど、いたげな音がする、大分樹が疎らになつた、そして唐松の形ちが庭木に欲しい様にならずんで見える。

顧みると西方に乗鞍が見え出した。その山態の上半は全く雪に蔽はれて、朝日に反映したプラチナ色の雪の小皺が、微紅色を含んで漣の様に美しく光つて見える。

同じ様な道を登ると、枯木密林の牙山がまだ幾分の黄葉を残して、直ぐ前に仄々として連らなつてゐる、そしてその下の谷が稍々深く、向側の崖下に不動の瀧と云ふのが懸つてゐるが、水は著しく少ない。午前十時観測所へ着いて中食の半を食ふ。十月末までは所員が詰めて居るさうだけれども、今



はびつしり戸締りがして、前に出てゐる手洗鉢が凍り着いてゐる。歩いてゐると左程でもないが、少し休むと底冷がして堪まらなくなる。

観測所の四五丁上に、火山館と云ふ小さな宿屋がある。四年程前の夏の大爆發の折、噴出した焼石に打たれて、屋根の所々に焼穴が明いて、柱が焦げ、床板が破れ、その下の地が大きく掘じられてゐる。幸に危険を豫知して、その二三日以前に降つたので、人畜の被害は無つたさうだが、今見ても中々凄惨な感じがする。こゝから噴火口迄は一里位しかない、山の五合目邊になるだらう。

谷から吹き揚げて來る硫黄の香が鼻を衝くと、胸がすく程冴えくした氣持になる。傍の小谷を見ると硫黄の流れで一杯で、その瓦斯が青色をしてよくと騰つゐる。深山の谷で嗅く硫黄の匂ひは、都會の脂粉の香りよりも遙に原始的で氣持が好い。

可なり崔嵬たる黒斑山を左に見て、牙山を廻ると湯の平のなだらかな高原へ出る。存外潤い原で、四周の山々がごろ／＼してゐるせいも、非常に柔かな感じがする。唐松や樅の疎林を縫つて行くと、唐松の落葉が一杯にしきつめられて、足許がふく／＼として、庭園でも歩いてゐる様な氣持になる。

下草の様に美事に延蔓つてゐるコケモ、が、眞紅の實を鈴實りに着けてゐるのを、一つ摘んで見たら甘酸ばくつてピリ、とする。岩高蘭の實がどす黒くなつて、その間に岩鏡が夥しく赭色に光つてゐる。石楠がこの寒さに長い葉を力なく垂れて、すがれた草は横ざまに仆れ、青いものは縦の葉に、石楠の葉、それから向ふの山腹に偃松の様な色彩をして、べつ／＼と擴がつてゐる熊笹位ゐるものだ。處々に大なき穴が明いて居る、爆發當時に墜石の爲掘じれたものだ云ふ、恐ろしい勢ひなものだ。右手に連なる枯林の茂りの上を越して、前掛山が大佛の肩の様な、丸い頭蓋骨をヌーッと出した。その頂上の岩間を、幾つかの小裂壙が、灰色をして垂れ下がつてゐる。磊々たる無數の赭岩が無造作に天空に築き擧げられてゐるのが、尨大な孤線に統一されて、堅剛なそして如何にも悠大な山容に形

成してゐる。氣持のいい山だ。

湯の平を横ざると、六合目の標杭が岩の中に打込んである。少し行くと全く岩の領分になつて、草一つも見當らない。八合目邊から道が稍々急峻になつて、右方の崩岩の上に新雪が溢れてゐる。行く手を佔くと、深淵の様に透徹した初冬の蒼空を脊にして、噴火口の大岩壁が丸くくつきりと浮び上つて、濛々として渦巻きながら、上州方面へなだれて行く淺間の煙りが夥しい。

烏帽子、湯の丸、四阿の山々が直ぐ鼻先に連つて、草津の白根の右端からも、白雲の様な一塊の噴煙が長閑に昇つて行く。其右奥の晶燦たる雪の凝りは越後會津の山々だらう。輕井澤方面から六里が原の方向は、噴煙に蔽はれて全く見えない。鬼押出の一部が灰黒色をして、群馬の高原にのさばつてその向ふの稔かさうな山々の間に、大笹田代なぞ云ふ山村がちよんぼりと見える。

薄雲りの天氣が八時頃から快晴になつて、もう上州、越後、越中、飛驒方面には雲影なく、僅かに秩父山塊の上に横雲がまつわつて、その上に高い富士山の翠色を見つけた時は嬉しかった。西北方妙高山や戸隠山彙が、濃碧に峙つて、その後には連らなつてゐる焼山火打岳が眞白だ。

西北より西南の空に、白龍の如くに蟠れる北アルプスの壯觀は、冬の登山旅行には餘りに大きな御馳走だつた。白馬から乗鞍に到る山々が、一膜の霞も着けずに、まざりと眼界に展開して行く、その峻巖にして然も微妙なる大雪堤の、プラチナ色の空線を見入つてゐると、蕩然として實に現實の我あるを忘れしめる。

大きな蓮華岳の後ろに針木岳が隠れ、其左の七倉岳の右に越中の立山が純白の山の額を差し出して、同じ七倉岳の奥少し左に隔つて、赤牛岳の様な雪山が横擴がりに見えた。晶々たる雪の唯中に、槍ヶ岳の穂先のみ、エボを着けた様に眞黒に尖つて居る。霞澤岳にも可なり雪がある、御岳も頭を擡げた、木曾駒山脈が蓼科山の左後に連つて、八ヶ岳の上を超越して仙丈岳、甲斐駒、白峯の北岳が、凸

兀として挺んでゐる。金峰山に續く山脈と、甲武信に連らなる山々が横雲の下にしやがんで、眼下に擴がつてゐる千曲の谷が美しくい。

午前十一時四十分、火口壁の上端に登つた。「今日は山が大分焼けてゐます、何時もなら下の柵や龜裂がよく見えるのですが、この煙ではダメでせう。」と案内が云ふ。噴火口一杯に濛々と巻き騰る煙を、暫くの間眺めてゐたが、吹曝しの山嶺で眞向に受ける寒風に身が縮まる様だ。襟色、手套をしてゐても、しきりに頭痛がする、水鼻が出でそれが直きに凍りさうだ。

輕井澤へ降りる豫定だつたが西北の風が強烈なために、煙が續々とその方へ巻き下つて行くので、斷念して又小諸へ戻ることにした。少し下にある巨岩の傍にしやがんで、中食を遣はふと結び飯を出したら、ざくざくと氷りつめて逆も食べられない。岩の裂け目には一杯に氷りがしめて、直ぐ下の前掛山の裏面には新雪がべつとりとべつとり付いてゐる。そして右端の岩の間から埃の様な煙が幾筋も縫れては上つて行く。

頂上に止まること約三十分、飛驒山脈を眺めながら湯の平に向つて降り始める。降り早い。火山館、観測所などを僅かの間に通り抜けて、檜林の間に来ると、足許に大きな獸の足痕が道なりに付いてゐる、犬のにしては餘り大き過ぎる、淺間館に立寄つて、茶を飲み中食をしたためた時、その話をすると、此處の者がつい二三日の前に枯枝を集めに登つた時に、谷の方から熊が駆け上つて來たので驚いて樹の影へ隠れたら、熊の方でも氣が付いたと見えて、又谷の方へ逃げて行つたと云ふ。晩秋になると木の實、草の實が多いので、上州の方からでも登つて來るらしい。淺間館を出たのが午後二時十分。道が追々と樂になつて、足取りが自づと早くなる。馳て裾野道へ出て唐松林の中を行くと、日は大分西に迫つて、大風が東の方から吹き暴れて來ると、木々が擦れ合つて、絶え間なくかたかたと音がする。飛驒山脈がもう西の空に高く霞んで、夢の様に淡く、然し明瞭な輪廓を連ねて、その盟主

◎伊吹山雪中登山 越馬

五六

たる一萬有餘尺の槍ヶ岳は、高く天空を指してゐる。

午後四時、小諸停車場に着き、上り列車を待ち受ける、汽車が遅れて午後五時過に發車した。明月皎々として高原を照し、顧みると淺間の上には横雲が一杯に擴がつてゐる。確永を越え、武藏の平野に出る時分には空は全く曇つて、遠近に明滅ある燈火の光りがなつかしく思はれた。

東京から一日半かそこらで、彼の大火山の淺間山へ登つて來られる様な、便利な世の中に生れ、然もそれを利用することが出来る私は幸福なものだと思つた。私の自然に對する飢渴も大分癒えた。私の小さな噴火口も當分は鳴りを靜めることだらう。

## 伊吹山雪中登山

越馬境

江州の伊吹山は所謂名山に屬すべきもので、高さは僅か千三百七十七米四に過ぎぬが、太古日本武尊の故事から近くは關ヶ原戰役の歴史的バックになつたから人口に膾炙してゐる。

登山口は數ヶ所ある、西の方面からは伊吹村の太平寺、大久保より、南の方面からは春照村の上野彌高上平寺より、東の方面からは古屋より、獨り北方は山又山で登山路はない、誰しも登山者は鐵道を利用するため最近捷路の春照上野の南口より登るを可とする、關ヶ原驛より美濃路をとつて藤川を經、寺林上平寺より登るよりも、寧ろ二驛先の近江長岡驛に下車する方がよい、況んや京都方面からの登山客は長岡驛に尙更下車すべしである。

自分達は京都大學々友會登山部の一行で今更叡山愛宕の月並も面白くなしこの事故、壯快な雪中踏

破を江州迄手を延ばして伊吹山を擇んだのである。

二月二十日の午前六時半、同勢二十八名は武者振して七條ステーションに集まつた。

雪中登山とあるので扮装は一樣でない、飛行帽にジャケツで身を固め都市聯絡大飛行をやりさうなものもあれば、軽快な洋装に一丈の青竹を持つた者もある、流石に和服はなかつたが、通學其儘の靴穿きの豪傑もあるが、大抵は厚い襯衣に學生服外套脚絆（若くは巻グートル）草鞋といふチビカルのものである、中には物々しやバンド堅くスキーを背負つた日本人離れをした強者もゐて頼母しい、關西スキー界を牛耳つてる中山校長を戴いた二中の教諭も臨時に加はつた。

凍雲低く垂れ互列愈々加はり、驛前の廣場はくろがねを敷いたやうに凍てついてゐる、六花繽紛と降つて來たが暫くにして止んでしまつた。

「これちやあ江州は雪だなあ」「伊吹山の積雪果して何尺」「絶頂迄行けるかしら」「俺だけは絶頂へ死んでも行くぞ」と各自喋々私語、意氣冲天肩を聳かし双腕を撫してゐる、銀雪に彩られた愛宕山は密雲に半腹を見せ、新雪堆かき懐かしい叡山は全容を露はして吾等の壯舉を祝するもの、如く思はれた。

汽車に飛び乗ると車中にスキー客あり、御所拜觀だ博覽會見物だと有象無象が騒いでる中でも、山の士が續々見えるのは嬉しい、前日から山麓に泊まつてゐる今村氏、今曉未明先發した中山校長一行のスキー隊に加はる練習客と一目見て知つた。

山科に來ると又白いものが霏々と落ちてゐたが大津で止んだ、琵琶湖を圍繞する四明、比良連峯は全く亂雲に包まれ、斷雲裡に微かに銀白を輝かし、いと壯嚴に自分の心胸に響いた、草津守山野州八幡、雄心勃々の吾等には、此汽車這へるが如く遅い、送迎する田畑廣袞十里皆是白、又もや宇巴と散り亂る、其豪快さに一同快哉を叫んだ、誰か「伊吹山が見える」と怒鳴るとバタ／＼窓を開けてニ

ヨキ／＼雁首を差し出す、前面に當つて巨鯨の如く横はつて見るから凄しい氷雪が、全部覆ひ被さり群山を睥睨して吾等を近づけぬ威嚴があつた。

やがて近江長岡に着くとドヤ／＼待ち兼ねて飛下りる時當さに九時四十分、谷村君をガイドにして一行廿八人、ゾロ／＼連がる、改札口を出て獨木橋を渡り田畦を北に一直線に行くこと數丁で小丘がある、殘雪點々消えやらすもうガリ／＼と嚙つてゐる意地汚なしがある、其處を抜けて桑畑を通ると數丁で高番の村落に出る、柳ヶ瀬關ヶ原間の立派な美濃路を横斷して尙も北へ北へ一本道を通ると又數丁で春照村に入つた、こゝには伊吹山登山客の泊まる旅人宿もあれば小學校も、郵便局もあり一通りの用は辨じられる、長岡停車場より約一里、村の淳朴な人々は吾々の一隊を珍らしげに門口に出て見送してゐる、後で聞けば「學生さん達がこの雪中に登りに行つたが本年の初登山ではあるし無事に歸ればいゝが」と危んで心配してくれたさうである。

村の中途から右に折れ、數丁雪白き道を行くと山麓の上野村に来る、今迄は僅かな殘雪であつたがもう草鞋が喰ひ込む程積つてゐる、こゝで登山料として一人前二十錢宛か徴收されるさうであるが、吾々はこの關所を素通りして三の宮神社の境内に遅れた者を待つべく休憩した、未だ十時半恐ろしく早く來たものだ。

愈々一合目へかゝる、峠に來た時、上から一散に下りて來る大阪毎日新聞記者に會つたが「一合目で中山がこつてる」とまるで弟子扱ひに言ひ捨て、去つたが、積雪尺餘、主に前縦を辿つて峠通有の電光形に上る、兎の足跡か猿の跡かまさか熊ではなからう、兎に角獸類の足跡があつたが吾々のメンコのやうな不恰好のものに比べると、たとへば梅花數輪情なき風にこぼれ落ちたやうに可憐に見える、何時しか村落は脚下に在り、其昔矢叫びの音血の流れ、鎬を削り屍を山と積んだ古戰場姉川は、幾多の悲劇を流して靜まり返つて白布の如く瞰下される。

これから觸目するところ一面の白妙、雪中を彷徨するのである、喘ぎ／＼差足拔足、細長い筒形の穴を作りながら、一合目に着くと盛にスキー隊が沁つてゐる、見渡すと絶好のシーフェルトで御師匠番の中山稜長は、杖を巧みに操縦して快走疾驅してゐるのに引きかへ練習中の今村幸男氏は、少し沁り出すともう尻餅をついて御座る、挨拶を交換し二隊聯合し大阪毎日の乞ひに任せて紀念の撮影をする。

破れ小舎（海拔約四百米突）を後にして十一時元氣に出發する、これから愈々本舞臺にとりかゝる、絶巔は吹雪に包まれて見えないが京都出發の際の杞憂も伊吹嵐に一揉みにケシ飛び、日光が嚇とさしスカイラインはカツキと天半に引かれてゐる、併しながらそれと忽ち白雲に閉され、今は山も雲も草も木も小舎も皆眞白だ、人迄白くなりかゝつてゐる、萬象を白晝化した。

自然は、伊吹山に色を選んで只二つのみ與へた、夜に黒を、晝は白を、黑白相争ふ曉夕は容赦ない嚴寒を使嗾して人間の視ふを許さなかつた。

腹は、北山時雨ならで深雪に、兩の足は埋められて抄らぬ、だら／＼登りなので苦しくもない五百五十米突程の二合目に來たが、石標が只首だけ雪中から出してゐる、二合目から三合目にかゝる間が一寸急峻で、初めて山らしくなる、先の人の足跡に見當をつけて足を運ばないと脛迄没入してしまつて困難だ。

伊吹山ぐらゐると、高をく／＼つて杖を持つて來なかつた自分達二三人は、少々面倒になつてきた、日がキラ／＼と雪に反射して目が痛い、下を見るとエスキモー人種の様な格好で眞白な高原を黒いものが蠢動してゐる、一合目のスキー隊なることは言ふまでもない、二三尺の積雪だからウツカリしてゐるとすばりと腿部迄入るので曳々空元氣をつけて單縦陣を作つて登る、三合目邊に來ると今迄穩かだつた氣流が一變して、東側の谷間にドツと吹き下す山嵐に、表面の軽い雪は渦を卷いて天上し、猛烈

◎伊吹山雪中登山 越馬

に密集廻轉して夜叉の如く狂つて自分達を捲込んだ、眼鏡は悠ち曇り口耳に雪粉填充し顔面はビリビリした、狂風怒號初めての威嚇をこゝで受けた、この難關も豫期したこと故軽く受け流して尙踏込み行くと、今迄山腹しか表はさなかつた亂雲何に驚ろいてか動搖し初め、天颯一掃藍銚色の大空は、ブラチナの如く光つた白頭——それは吾等の極めんとする絶巔である——を包んだ、綠葉に圍まる白花こそ最も視覺を刺戟するものにあらずして何ぞ登山隊は一層元氣づいた。

三合目から四合目は、中休みとして比較的平坦であるから積雪は甚だしい、此處で初めて吾等より先登者あるのを知つた、それは巨人の跡が連綿と上に向つてゐる輪かんちきを使つてゐるなど囁き合つてゐる中に、颯と上空より聲あるや粉雪の何億萬分子が突風のために宙に舞上り、生けるが如く活動してゐる壯觀は逆も雪中登山でなければ味へぬ特權である、それがケロリと忘れたやうに止んでしまふと、思ひがけなく二個の小舎を遙かに望見する「あすこが四合目だ」「晝食はあすこ」と誰かが言ふ、併しあせればあせる程ポコ／＼入つて抜けない、只白砂の如く凝結してゐるのでズボンにしみるやうなことはなくポロ／＼落ちてしまふ、氷結すれば迂るし溶解しかければズブ濡れになるし今頃が丁度よい、小舎の前で四五の小動物が動いてゐる、猿！と叫んだものがあつたが明かに登山者と判明したのは其後數分たつてゐる、馬鹿に疲勞した足を不自然に高く揚げるのが辛い、歩度を狭くして且片足で全身を支ふこと常より長いので、終には脚氣患者のやうにダルクなつて來た、皆胴切りされたやうに上半身だけ雪の表に出して漸やく四合目に到着したのは十二時、振り返つて見ると白綿の上に炭團を行列させたやうに下からやつてくる。

先客は一足違ひに出發して百尺程上の雪崖を登つてゐる、帽子に白線を巻いてゐるので「オーイ三高カッ」と呼ぶと「八高だ」と應へる、扱は八高山岳會の連中だと思つてると「直ぐ來給へ」と元氣のいゝ誘引の聲がかゝる「追付くよ」と鸚鵡返しに言つたものゝそれどころでない、腹がペコ／＼で

六〇



眩暈がしさうだ瘦我慢も限りがある、小舎前に案内者が二人焚火をしてゐた、其正面の板に「御茶料一人前金五錢」と筆黒々と書いてあつたため、その原始的な清淨無垢な靈山が急に不二山や御岳のやうに俗化したやうな感じがして休むのが厭になつたので、背後のも一つ上の破れ小舎迄行つて慾も何もなく雪の上にグツタリと尻を下ろし、こるも遅しと辨當を開いた。

今迄は湧躍して來たので萬象氷つてる此寒さにも流汗淋漓たるものがあつたが、暫らくバクついてる中に全身ゾク／＼して、足の先はちぎれるやうに痛い、風は絶えず吹き捲つて高寒は會釋もなく追つて水を浴びせられるやうだ、「パンやチースはポロ／＼に凍つてしまつてタンクは舌にくつゝいて痛くて食へなかつた」と辻村氏は、ユンクフラウ登山談に云はれたがこゝで握り飯を喫した時は實に冷たくて堪らなかつた、ユンクフラウと伊吹の寒さの差は「痛くて喰べなかつた」と「冷たくて堪らなかつた」の差であらう。

もう寒くて居ても立つてもゐられなくなつた、眺望は何しろ約七百米突のところであるから頗るいい、西南脚下に琵琶湖が遺憾なくレンズに映る、森々漫々たる大洋中一青螺の浮ぶは謠曲に名高い竹生島で例へば數奇をこらした庭園の置石に似たり、遠く白雲の彼方髣髴たるは叡山暮雪の連脈恰も吾等と高度を競ふが如く繪のやうであつた、一同飯を喰ひ終るや「出發しやう」と自分は言つた、かうして一時間も憩ふてると、疲勞はくる睡眠が催はす寒冷は増す凍傷を起す、一同も寒冷身を裂く如く一刻も居堪れず飛び出したのは零時二十分。

終に本舞臺中の本舞臺に入るのだ、もう黒いものごいつたら雪の底から僅かに首だけ擡げてゐた灌木さへも埋没し、只雪まぶれになつてゐる登山隊の蠢爾たるのみである、素より登路は數尺の下に隠れて形跡さへなく、足跡を頼りに喘ぎ／＼登攀するのだ、四合五合間、西方に當つて大きな谷が口を呶いてゐるので落ち込まぬやう右手にとつて行くと思つて第二の難關に遭遇した、谷底にごつとおめ

いて吹込む吹雪と來たら物凄、白煙むらむらと奔騰する如く見るとアレヨと言ふ間なく包圍攻撃を受け、横撲りに雪粉は飛んで來て人影を沒せしめ、糢糊として五里霧中の體、ボタンの穴ポケット迄侵入し眼耳鼻も襲はれざるなく瞬時も皮膚を曝露して置くことは出来ない、用意の頭巾襟巻手袋は嚴重に緊縛し皆潜水夫のやうな形相になつた。

併し勿論降雪ではなく吹雪であるから烈風さへ息をつけば却つて壯快な気分になる、知らない間に六合目邊に來ると既に一千米突に及ぶから頂上は頭上に聳え、しかもスロープは依然として急峻を加へ雪は更に深さを増す、一行は絶えず頭上遙かに子熊のやうに登つてゐる入高諸君と、オーイ〜と掛聲を交換し鼓舞振作して昇る、早く絶頂に着きたい焦慮は、迂遠に電光形をつくる距離を狭めて勝手に行くことスポリ腰迄埋まる、杖のない自分は往々右手左手を杖の代りに雪の表面に突いて支へ棒に代用するので、其度毎に五指も切れ血が溢れ出するばかりに痛かつた、この深雪中を草鞋の儘昇つたものもあつたが、全く先導の入高諸君が輪かんちきを穿いて路をつけてくれたお蔭であつて君微かりせば非常な辛酸を嘗めたやうに私から感謝した。

日本アルプス登山中、例へば槍ヶ岳針木峠白馬岳のやうな夏の大雪山は、雪が堅いために草鞋がめり込まず歩き易いが、一步毎に膝迄入る新雪には一寸降參する、同行の伊吹君は初冬スキーで絶頂迄上つたが今日は、スキーには雪が堅過ぎて危険を感じ四合目からアッタラ肩に背負込んでしまつた。少しでも休むと體熱はどしどし放散して却つて互寒の毒牙に穿入されるから、四合目の中食場から曳應々々上下相呼應して一心に昇る、絶頂は頭上にあるが依然として渉らない。

何時しか「もう九合目に來た」と歡聲が湧く、海拔千三百米突餘之から絶頂迄は殆んど平地續き九合目の石標に着いた時はホット長大息をした。

何たる奇觀！山麓から今迄は高大な厚い綿の中に蓋が這つてるやうな氣がしたが、絶頂即ち九合目

に來ると、其綿は櫛で引いたやうに筋立ち絶え間なく吹き荒む寒風のため、皆凍結してしかも花をつけた枝状をなしてゐる其花叢を踏み躪つてゐる氣がした、餘りザク／＼今迄のやうに、足が入らないため上ツ迂りをしてこれも歩き悪い、二三丁の間此氷原を心持登つて行くと遂に目指す絶頂へ着いたのは一時半であつた。

絶頂には吾等より巨大な雪塗みれの日本武尊の石像が、嚴然と高天ヶ原から天降られた如く屹立せられいと神々しく拜せられた、ビュー／＼と全山鳴動するばかりの物凄い唸り聲を立て、山上から振ひ落さうとしてゐる、指も切れ鼻も耳も落ちんばかりの寒さウヰスキーを啜つて僅かに體温を保つ。遅れた連中を待ち合せてゐたが、ま／＼してゐる中には此御神像のやうに凍りついてしまふので、奮然雪中をこけつ轉びつ一丁程東の三角點まで行く、三角點は半壞して雪に埋れ餘命少なく見えた、此時の高寒状態の一端を洩らすと、自分の外套は板のやうにこわばつてまるで銅像の洋服のやうに突張つてゐる、ボタンが筈らないので手袋を外したら指が眞ッ赤に太つて末梢神経は死んで自由が利かなくなつた、口に入れて一生懸命に息を吹きかけやうとすると指にバリ／＼當たるものがある、是なん口髭が一本々々氷りついて一寸口を歪めると嘘のやうに痛い、傳へ聞く日露役冬季滿州對陣の際歩哨の髭が氷りつき出血したと、恐らく此絶頂こそ零點下何度か計る豫猶もなかつたが滿州以上であるのは斷言する。

再び御神像へ戻ると先着の八高子と吾々の登山隊の全部集合してゐたので記念撮影後一同打ち揃つて山靈も苦笑し海若も驚かんばかりの萬歳を三唱して京都帝國大學陸上運動部と八高山岳會を祝福し合つたのは近來の痛快事であつた。

眺矚亦豪快伏宕、脚下に打ち伏す白衣銀冠の諸山、右矚の大湖は言ふ迄もなく大琵琶で、左顧脈々たる連山を隔て、指呼の大海は、神風薫る伊勢灣に相違なく其漂渺の眼底に映つた時は餘り意外で視

◎伊吹山雪中登山 越馬

六四

覺を疑はせた、此絶大觀にガタ／＼慄えながら欣喜してゐる無髻の人々が申し合せたやうに二本の氷柱を鼻下に垂らしてゐたのは、滑稽を通り越して寧ろ悲慘の光景であつた。

かれこれ半時間もゐたので既う全身凍え、堪らなくなつたので一同飛出した午後二時であつた、首も手もスツカリ包み、目だけキヨロつかせ走り出す、下らば元氣なものですぐ九合目に來た是から五合目迄稀有の痛快な藝當を演じたのは豫期せぬところであつた。

それは雪迂りである、四十度もある雪崖を一直線に急下するので、一度反動をつけて仰向けに寝て迂り出すと加速度は加速度を増し果は四十珊の砲彈のやうにサツと雪煙を擧げ唸りを生じてケシ飛ぶ早さ目にも止まらず快走する、之が若し夏の日本アルプス大雪田やうに堅かつたら、情性止まる能はず粉碎されてしまふが具合い、事には未だ柔かいので、自由に兩手双足を雪中に突つ込めばズ／＼と頬雪が身體を自然に埋め、勢ひ次第に阻められ勝手に止まることができる、若し夫れ尻餅をつき兩手を前に兩脚を天に上げ迂らんか一瞬二三十間を飛下してしまふ、一行三十餘名雪達磨の如く一齊に濼々たる雪煙を揚げ白珠を迸らし銀波を散らすさま白龍天空より舞ひ下がつて來るやうだ、中には列を離れマントにくるまり團子の如くゴロ／＼轉がり落ち目を廻はしてキヨロついているものもあれば、愛杖を手離しアレ／＼と見る間に針の如く小さくなり自身も毬の如く轉がり追撃してゐるものもある、顔だけ雪中から出し他は全身埋没し目をパチクリしてゐるものもあり、歡を盡し興酣にて四合目についたのは二時半登攀程の困苦少しもなく駆け下りるやうにして忽ち一合目のシーフェルトに着たのは三時で案外早かつた、中山氏一行は最後の努力を集中して手練鮮やかに迂つてゐたが吾々の急轉直下に比すれば思ひ半ばに過ぎるものがある。

こゝへ來ると、氣温は高し身を裂く風なく、雪は淺し人里に近く、時刻は早し疲れも癒えたのでゆつくり中山氏の怪氣焰を謹聽した、傍には抜目のない大阪朝日の記者は吾等の下山を待ち受けて萬年筆

と原稿紙を目の前につき出した、一合目の峠を下りかゝると綺麗な廣大な銀山も處々剥げ落ちて赤土色の地が出て来るので悲觀する、瞬く間に三の宮神社の境内を過ぎ上野村から春照村田旅館に腰を下ろしたのは四時、伊吹村の豪家なる同行伊吹君の好意で名物鯉汁の饗應を受けた、内臓迄凍つたところへ沸々の熱汗を吸つた時は五臟六腑に泌みわたり其うまさ又格別であつた、夕餐を済まし長岡驛に向つた、道々振り返へると夕空に聳えたる銀白の山姿よくまあ登れたものと思へるほど怖ろしかつた、六時八分の汽車で八高の諸君と東西袂を別つた、伊吹登山案内の圖解が構内に出てゐたのは氣が利いてゐた、高さ四五四尺とあるのは覺え易いので未だに忘れない、車中の三時間は凡て登山の快氣焔やら苦楚談で話の花がそれからそれへと咲いた、京都へ下りたのは九時十分あの底冷えのする京都の冬の夜が臺灣に入つたやうに暖かく思はれた。

かくして伊吹山雪中登山は無事に成功した、之を要するに雪中登山の感想は目新しい新發見も無いが大體に於て次の點を注意しなければならない、老婆心までに蛇足を加へて筆を擱く。

第一 十二分の防寒具。

第二 輪カンヂキと特に長い杖(但し雪柔らかき時)。

第三 懷爐、興奮劑用酒、魔法壇。

第四 なるべく團體なること。

第五 長く休まぬこと。

## 南湖大山方面探検記

野 呂 寧

山

## 一、探 検 目 的

「タロコ」蕃は合歡山、壽菜主山方面及木瓜溪口より花蓮港海岸、三棧、「タツキリ」兩溪口と「タツキリ」社並「グウクツ」社方面の探検に依り其東、南、西三方面の狀勢を察し地理の大様を觀測するを得たるも其の北方殊に内「タロコ」蕃の最奥たる「タウサイ」蕃の所在は之を知る能はず此地方は深く中央山脈に入り南湖大山麓に位し南湧蕃に接し又「シカヤウ」蕃に近邇し溪頭蕃と通ず而して南湧蕃は操縦に依て官命に遵ひ近時「タロコ」蕃と相敵視するの狀にあり依て之を用ひて先導せしめ南湖大山に登りて以て合歡山及「タツキリ」方面の觀測と連絡し以て「タウサイ」蕃の地勢を測圖し併せて南湧蕃社の配置と交通路を調査し且「ビヤナン」鞍部より中央山脈の連列と「シルビヤ」山及大霸尖山の位置を測定せんとす然れども南湧蕃は敵蕃たる「タロコ」蕃を探るに同意するも自己の區域を査察せらるゝは後日討伐隊の侵入を招くの因となるものとして深く之を恐れ吾人の行動を監視する殊に嚴なり故に南湧蕃に就ては之を通過の間其の一端を觀取し從來此地域を跋躋せる警察官吏に聽きて其の大體を録取することせり。

## 一、探 検 隊 編 成

探検隊は左の諸員を以て編成せり。

蕃人は軍隊を恐るゝこと甚しく「ガオガン」蕃討伐以來殊に恐怖の念盛にして探検行動に軍人の參加するは次で強勇なる軍隊を誘致するものとして之を忌避する甚しきを以て竹中大尉は之を蕃務本署勤務警部とし其の服装を以て入蕃することせり。

南溟蕃人等が軍隊を恐怖するの一例としては南溟蕃社の勇壯なる壯丁團を守備隊と呼稱し軍隊の兵士が妻帯せざるを見て彼も亦妻帯せず其の一度妻帯せる者にして之を離別し守備隊員として剛勇を誇る者さへあり又己の子の勇猛を希ふて「ヘイタイ」と命名したる者あり以て彼等蕃人が軍隊の勇猛を畏怖するを知るべきなり。

以上計 三十四名

搜索隊

隊長	警部	警部補	警部補	警部補	警部補	警視	陸軍	同	同	同	同	同	蕃務本署
小島仁三郎	松本勇作	村山政良	大道謙	大	道	謙	竹中政雄	三	一	齋藤武彦	財津久平	野呂寧	
							金子惠教	歩兵大尉	測夫	寫真手	技手	技手	技師
							宜蘭廳						

## 二、探 検 行 動

南湖大山方面の探検は大正二年十一月以來宜蘭廳をして天候蕃情を探究し適當の時期を選定せしめ而して「タロコ」蕃討伐開始に先ち之を實施すべきことゝし爾來期の至るを待ちたりしも冬季は山嶺積雪深く且陰鬱の天候相次ぎ目的を達するに可ならず加ふるに南溥蕃人は屢々濁水溪域等に出草し兇惡を逞うし蕃情良好ならざるを以てす宜蘭廳は此間に處して操縦に力め南蕃溥と「タロコ」蕃との感情を疎隔し漸次敵愾心を挑發し遂に大正三年四月十五日「ビヤハウ」社土目「ウイランタイヤ」を宜蘭に招致し「タロコ」蕃討伐上南湖大山探検實施の必要を説き先導警衛を命じたるに漸く之を快諾せり即直に行動準備を調へ小官は蕃務本署員及竹中大尉と共に四月二十三日臺北出發同日宜蘭著廳長と探検上の協議を調へ二十四日探検隊員一同叭哩沙に集合し翌二十五日を以て行動を開始せり。

之より先南溥蕃「キンヤン」社土目「ユウカンロツケ」は「クムウヤウ」社土目「ハユンバナ」と共に兩社勢力者を會し揚言して曰く日本人の南湖大山探検は名を「タロコ」蕃探查に假り其の實南溥蕃を精査して軍隊を導き我等を討伐せんとするものなり「ビヤハウ」社の「ウイランタイヤ」等が誘導するは誤れるの甚しきものなり吾人は之に對し極力反抗以て之を阻止すべきなりと即ち之を精査するに「ウイランタイヤ」が此探検嚮導に當て之を自社に謀らず獨り其功を擅にし利を專にするを嫉み己亦之に参加し功利を分たんとするの意なるを明にせり即ち別に之を操縦して共に嚮導警戒に當らしむることゝし彼等喜て命を奉するに至れり。

四月二十三日「ガオガン」蕃「カラホ」社に南溥蕃人六十餘名來襲し一小社六戸三十餘名を全滅せしめたりとの桃園廳の報告あり及「シキクン」社蕃人の傳ふる處に依れば「マナウヤン」社蕃人は今回の南湖大山探検は其の實吾社の避難地を探查し打撃を加へんとするものなるを以て歸途探検隊員を要



撃し之を全滅せしむべしと又「マナウヤン」社蕃人數名は「タロコ」蕃に使用して日本人の探検を傳へ協力阻止すべきを以てし又其の狀報を南灣蕃の「クムウヤウ」社に致して南灣蕃人を脅し其の他諸種の浮説流言を放ち小策を弄して南灣蕃人を動かし探検行動を妨ぐることに力めつゝあり共に深く意に介すべきにあらざるも亦此行動に對する一警戒と爲すべく搜索隊は特に細心の注意を以て蕃情の變化を探查監視しつゝ行動を繼續することとせり。

四月二十五日 晴、氣温午前六時 叭哩沙 二十三度、午前十時 圓山 二十八度  
正午 濁水 三十度、午後九時 シキクン 二十一度五

午前七時叭哩沙發「ビヤハウ」社蕃人土目「ウイランタイヤ」以下二十名先導炎暑を冒し濁水溪磧を遡り九芎湖、圓山を經濁水監督所に晝食し烏帽子山、「ルセアン」を經午後六時二十分「シキクン」據點著泊行程九里十四丁。

四月二十六日 晴、氣温午前五時 シキクン(約二千六百尺)十七度、午後一時、ムルロアア山(七、六五七尺)二十度  
午後九時 ビヤハウ社(約三千尺)二十一度

早朝隊員全部を召集し搜索隊に對し小島搜索隊長より探検に付各自の任務を命令し訓示を與へ警戒及蕃人操縦上特に注意を加ふ金子警視更に嚴密なる訓諭を爲し日夜戒心萬難を排して任務を遂行すべきを以てす小官は最後に探検の目的を説き今や「タロコ」蕃解決の期目睫の間に迫り此行成功を得ずんば遂に其の期なきに至るべきを以て幾多の危険と困苦缺乏に堪へ誓つて成功を齎して總督閣下の特命に答へ以て吾人の任務を確實に貫徹すべし若し此目的を達せざれば復た下山の時なきを告白し以て各自の決意を促せり。

「ビヤハウ」社蕃人七十餘名昨二十五日「ビヤハウ」社より「シキクン」社に來著し一行を迎ふ茲に於て土目「ウイランタイヤ」以下九十餘名をして先導後衛行李を負はしめ一行隊伍を整へ午前七時十分「シキクン」據點を出發し「シキクン」社を過ぎ其の背後の稜線を登る坂路急峻にして樹木密茂す然れども蕃人の通行頻繁なるもの、如く通路意外に良好なり九時四十分稜線上清水の僅に湧出する所

◎南湖大山方面探検記 野呂

七〇

あり「シキクン」社の狩獵小屋十棟許其の傍にあり又蕃人の移植せる椎檜數十本あり一行此處に憩ひ十時發登る二十分時右山下「シシツ」溪(「シキクン」據點南方下にて濁水溪に合するもの)の左岸に「シキクン」社の避難地を見る溪口より溪に沿ふて遡る約三十丁許又其の南方稜線を越えて背後の「シナツコフ」溪には「マナウヤン」社の避難地ありと云ふ更に進で登る檜樹漸く多く石楠の花美なり午後零時二十分「ムルロアフ」山頂に達す南湖大山より三星山に連る分水線上にして標高七、六五七尺山頂樹木焼けて茅草低く瀦水二あり水豊にして清く飲むに足る以て大部隊の露營に適す又展眸開濶なり殊に天氣晴朗にして滿天雲霧なく南湖大山の險山高く聳えて西に延び「ビヤナン」鞍部を経て北「ボンボン」山より棲蘭山に連る而して「ビヤナン」鞍部の西より西南に折れて「シルビヤ」山及大霸尖山を越し「シルビヤ」山及南湖大山には雪尙深きを望む又東方には南灣蕃の諸山を展眸す即ち測圖を行ひ晝食を爲す、午後一時二十分發分水線上を東方に行き更に東南方に急斜面を降り二時三十分「キャンダワ」溪底に達し三時發溪に沿ふて下る三時四十五分道右岸稜線に登る休む十五分間。

「キャンダワ」溪は東に流れて瀑布を爲し三星山より來る「タイヤフ」溪と「トロツキフ」(岩下の義)にて合流し湖水を爲す周圍約五丁此間一里許、之より「モヘン」溪となり「クバポー」「クルゲーフ」二社の間を流れ「コーゴツ」社の下に至り大濁水溪に合す、四時發四時二十分稜線頂に達して稜線上を南方に下る行く十分間許左下方に硫氣臭盛なり、温泉湧出すと云ふ五時三十五分樹林を脱して草野に出づ元「ビヤハツ」社の部落ありし處眼下「ビヤハツ」溪あり南湖大山より出づ其右岸階段狀の高地に三部あり「ビヤハツ」社とす下段の部落最大なり「ビヤハツ」溪は東南方に流るゝ二里許り左岸稜線の蔭に「クムウヤツ」社「キンヤン」社を右岸尙遠く「バボーカイカイ」社を望む之より急轉直下六時四十分「ビヤハツ」溪底に達す村山警部補以下「ビヤハツ」社蕃人全部及「キンヤン」社土目「ユウカンロツケ」等多數出で迎へ一行を導き午後七時「ビヤハツ」社蕃務官吏駐在所著泊す行

程約八里。

此夜金子警視等は「ビヤハウ」社土目「ウイランタイヤ」及「キンヤン」社土目「ユウカンロツケ」  
 「クムウヤウ」社土目「ハユンバナ」等を會し南湖大山探檢の先導警衛方を命じ遂に三社より二百餘  
 名を出し七日分の糧食を携行して此任に全ふすべきを諾し「ユウカンロツケ」及「ハユンバナ」等は  
 明朝歸社糧食等を準備し蕃丁を率ゐ明後二十八日中に「ビヤハウ」社に集合することゝなれり茲に於  
 て探檢員は二十七日、二十八日「ビヤハウ」社滞在二十九日早曉出發登山に決定す。

四月二十七日 晴、氣温午前六時 午後八時 ビヤハウ社 約三千尺 十七度九 午後一時 ビヤハウ社 二十五度

「ビヤハウ」社滞在。

「ビヤハウ」社の蕃人は全部擧て業を休み酒を醸し餅を搗き筍を採り鶏を贈て一行を歡待し又勢力者  
 は小官等を家に招きて饗す蕃情至て平靜なり。

「ビヤハウ」社の老頭目「イチノノカン」を見る年六十餘白髮衰顔視力薄く歩行亦自由ならず「ウイ  
 ランタイヤ」先妻の父にして社老として勢力殊に大に「ウイランタイヤ」の如き常に其の指命を受く  
 其の説に曰く南澳蕃は「ビンサバカン」より南湖大山を越え「ビヤハウ」其の他の地方に來り獵し地勢  
 の優秀なるを察し十名の勢力者移住し來り各社に分在す「イチノノカン」は「ビヤハウ」社の第四代  
 土目にして「ビヤハウ」社は第三代土目の名に依て命せられたるものにして當初「ビヤハウ」深左岸  
 「シキクン」社よりの通路茅原稜線上にありて數十年前今の位置に移れるものなり、唯「クムウヤウ」  
 「バボーカイカイ」二社は「タウサイ」より移住せるものにして其系統を異にせるものなりと云ふ。

四月二十八日 晴、氣温午前六時 午後六時 ビヤハウ社 約三千尺 二十度 正午 ビヤハウ社 二十五度八

「ビヤハウ」社滞在。

「バボーカイカイ」社土目「ウイランタナ」來り申告して曰く内「タロコ」蕃「シイバウ」社土目「オ

プスウイラン」は日本人が内「タロコ」蕃偵察の爲めに來るを聞き出草して之を南湖大山に邀撃せんと聲言し居れり故に最も勇敢なる壯丁十名を出して探検隊を警衛すべしと、之を許す。

夕「キンヤン」「クムウヤウ」二社蕃人約百二十名「ビヤハウ」社に到着す。

四月二十九日 晴、午前四時「ビヤハウ」社(約三千尺)十七度二 午後二時「コッコク」(約八千尺)十三度一  
午後五時「コッコク」十一度二 午後十時「コッコク」八度

午前五時「ビヤハウ」社發、社の西南端「ビヤハウ」溪底に下り隊を整ふ隊員三十四名の外「ビヤハウ」「キンヤン」「クムウヤウ」「バボーカイカイ」四社蕃人老壯婦女子を併せ二百七十餘名「ウイランタイヤ」「ユウカンロツケ」其の長たり午前七時行進を始め溪を遡る一隊踴躍志氣旺盛なり九時十五分「クルーフ」に到る道之より右に折れ小枝溪に入り傾斜漸く急なり此に至る溪底路は粘板岩及石灰岩の轉石層々相重り諸所懸崖を爲し苔蘚滑にして歩行甚困難なりしが一昨年の大洪水に破壊せられ却て平易となり此行艱險を感じる少かりし九時五十分溪奥絶壁下に到る溪水此處より盡く即水を掬して晝食す十時十分又發し右に峻坂を登り稜線上に達すれば溪を隔て、前方南湖大山の東峯聳え懸崖絶壁樹木其間に繁茂し瀑布幾條其大なるもの高數百千尺奇勝云ふべからず左に稜線を登り斜に山斜面を横斷し峻坂を登り分水線上に達し絶壁頂の危道を左に進んで「ピンサーラン」山に達す午後一時十五分なり南湖大山東峯の支脈にして「ビヤハウ」溪と大濁水南溪との分水を爲す一時二十分斜面を下り一時五十分溪底に達す「コッコク」と云ふ大濁水南溪の源頭にして南湖大山の直下に位す「ビヤハウ」社蕃人の守獵小屋十數棟あり溪邊に天幕を張り露營す高さ約八千尺、樅の類鬱蒼たり行程約五里。

四月三十日 晴、午後曇少雨 午前零時「コッコク」(約八千尺)八度 午前五時「コッコク」六度八  
午後八時「シールンルウヤン」(約一萬千尺)八度 午後六時「シールンルウヤン」(約一萬千八百尺)四度零度

午前七時「コッコク」露營地發右岸斜面を登り十時稜線上に達す「ロンガン」とす高さ一萬尺許巔頂茅草地にして展眸自在なり南方低鞍部を隔て、約十吉米に「クウサイ」蕃の耕作地を見遠く内「タロコ」蕃方面を望み「タツキリ」溪の流域を窮ふべし十時二十分發右に稜線頂を見て其の斜側を登り十

時四十分南湖大山頂直下の平底谷「ブナーガン」に達す休憩晝餐此間露營地を選定せしめ午後零時二十分發雨を冒して左方急傾斜の溪谷岩石の間を攀ち一時山頂凹所に達す瀦水池あり周圍約三丁水淺けれども清し即ち其側に露營を構ふ此地を「シールンルウマン」と稱す海拔約一萬千八百尺雨時々至り雲漸く密にして展眸する能はず行程約三里。

五月一日 晴、

午前二時シールンルウマン(約一萬千八百尺)零度午前五時同所二度八  
午前九時南湖大山頂(一萬二千四百三十尺)三度七  
午前十一時シールンルウマン(約一萬五千五百尺)五度午後六時エキザヨウ溪合流點(約四千尺)十九度

前日來の露營土地高く氣壓低く呼吸促迫胸部の壓迫を覺ゆる殊に甚しく頭痛岑々として食慾不進飯喉を下らず眠らんと欲して忽ち夢驚き終夜昏々として遂に安眠する能はず從來屢々高山巔に露臥し高層氣壓の變に遭ひたるも未だ斯の如き苦痛を覺えず一行皆感を同うせり而して氣温零度に下り凍風更に寒を送り蕃人の如き殊に苦痛を訴へ盛んに火を焚き僅に夜を徹せり。

天明天氣晴朗滿空一點の雲霧を見ず歡喜奮躍急ぎ山巔に登る白霜道を蔽ひ殘雪蔭に積む岩崖險阻呼吸促迫午前六時南湖大山最高巔に達す海拔一萬二千四百三十尺巔崖高く懸り屹として北臺灣の中樞に崛起す山頂三座鼎足の勢を爲して東南西に屹峙し最高巔は西方に位し南、中央尖山(中央山脈に位し四方鋭尖なる無名岩山なるを以て形狀に依り新に命名せり)より畢祿山、合歡山に連りて中央山脈を爲し東に延び東峯を通じて西に曲り「ビヤナン」鞍部に中央山脈を導く而して南峯は東南に走りて「タツキリ」溪口の三角錐山及清水山に連り「タツキリ」大濁水南溪の分水嶺を爲す。

東、南、西の三峯相距る一千米許三峯の會する所高原狀を爲して傾斜緩に粘板岩の碎片を以て蔽ひ其の東峯と西峯の間及西峯と南峯の間には一階を下りて更に傾斜緩なる平底谷を爲し各谷底幅百米乃至二百米長千五百米以上伸びて急溪に變ず其の前者は北より西に走りて「シカヤウ」社に落ち大甲溪となる之を北谷とす後者は即「ブナーガン」の谷にして南より東に走り大濁水南溪の源頭を爲す之を南谷とす而して東峯の東北側及南峯、西峯の西側は共に斷崖絶壁を爲して深溪となり前者は「ビヤハ

「タウサイ」溪にして「タツキリ」溪の源流西峯の西側は大甲溪の源頭たり。

溪頭蕃より「タロコ」蕃に通ずる蕃路は「ビヤナン」鞍部の上方より中央分水線を登りて北谷に下り東南二峯の鞍部を越え南谷に出で南峯分水嶺の下方鞍部を経て「タウサイ」に達するものなり。

南湖大山は全山粘板岩より成り硬質砂岩に硅岩を交ゆ東峯は粘板岩の層面を露して削立し到底攀ぶべからず西峯は兀々たる岩石殊に偉觀を呈す南峯は岩崖の間榎松密生して山巔尙青し北谷は兩岸樹木少く地勢亦險峻ならず奇勝に乏しと雖南谷即ち「ブナーガン」は東峯及南峯の斜面岩崖削立屏風の如く之を繞らし榎松、梅、樅の類鬱として茂り怪岩之と錯綜し岩角石樹の美花妍を競ひ枯木柱の如く白く綠樹と相交り更に一段の景を添ふ而して谷底には水涸れて碎岩迂曲流を爲し白檜低く這ひ榎松等の妙趣と相俟て一大庭園美を爲す而して山壁風を遮り最も宿營に適す惜むらくは水涸渴し其上端僅に少量の水を湛ふるのみ。

底谷の奇勝に加ふるに巔頂雄偉の大觀を以て南湖大山は實に臺灣否日本第一の雄大なる大山と稱すべきなり眸を放てば南は遙に苛萊主山より東合歡山、北合歡山、畢祿山、中央尖山の中央山脈の高嶺を望み其の東方には「タロコ」大山より塔山に連り又三角錐山、清水山を眺め其間「タツキリ」溪の流域を觀望し「タウサイ」蕃内「タロコ」蕃の蕃社を瞥見す其の北に亘りて大濁水溪域より南濁蕃の領域に及び飯包尖山、三星山、「タビヤハン」山を見更に大南灣方面より東海の洋々たるを遠望す北は「ビヤナン」鞍部を過ぎて中央山脈は東北に折れて「ボンボン」山棲蘭山に連り濁水溪域より宜蘭平野及大料崁溪域を見西に倚りて北に大霸尖山其の南に「シルビヤ」山あり山下「シカヤウ」「サラマオ」蕃を近く指呼の間に收め大甲溪の源流を究む而して更に遠く白狗大山より守城大山を望み白狗蕃、霧社蕃及埔里社地方を察するに足る。

内「タロコ」蕃より「タウサイ」蕃一帯の地即ち「タツキリ」溪奥の地勢は溪口の急峻絶壁なるに似ず比較的緩徐にして兩岸の山脚稍々緩に樹木茂り蕃社其間に散點し交通甚しく困難ならざるが如く其の中央山脈に達するもの即ち畢祿山以北の分水線に達するもの之を苛萊主山及合歡山に登るに比すれば更に容易なるが如し又「シカヤウ」蕃は中央尖山南方鞍部を越えて「タウサイ」蕃と内「タロコ」蕃の間に出で交通頻繁なりと云ふ。

山巔に止まる三時間半充分の観測を行ひ探検測圖の目的を確實に達成したるを以て山を下り露营地に歸る十時三十分なり之より先山巔觀測中溪底に當て二發の銃聲を聞く「タロコ」蕃の發射する處なりとして警戒蕃人は十數發を應射せり加之「マナウヤン」蕃人の通報に依り「タロコ」蕃は探検隊に對して警戒を加へ居るの事實あり永く此地に止まるは危険の虞なしとせず況んや既に目的を達せるをや即ち急ぎ露營を撤し「ピヤナン」路を踏査しつゝ歸途に就かんとす案内蕃人等往路を取らんとして肯せず慰諭百端漸くにして諾す正午出發程を急ぎ北谷に出て中央分水線上に登り西に向て下る右方は懸崖絶壁を爲して濁水溪谷となり左は急斜面に依て「シカヤウ」溪谷となる危道僅に馬脊頂を通ず行走殊に險難なり此頃より左即ち南西方は尙晴天なりしも東北方は雲霧深く鎖して窺ふべからず行く十餘丁にして左方斜面を走る道稍易なり一里餘にして右方針葉樹林の急斜面を下り一里半茅原の緩斜地あり其下に小溪水ありて露營の豫定地なり然るに連日の晴天に水涸れ宿すべからず即ち又急ぎ一里半を下り濁水溪底に達し「ピヤナン」社上流約二十丁「エキジョウ」溪合流點に露營す午後六時半露营地より此處に到る約八里之に山巔の往復二里を加へて約十里一萬二千五百尺の高地より四千尺の溪底に達す一行困憊落伍せんとして僅に助けられたるものあり著後直に蕃丁數名を「シキクン」據點に送り探検遂行の報告を爲す。

五月二日

曇

午後午前二時

エキツヨウ溪合流點

(約四千尺)

十二度

午前五時

同上

十九度

三

雨

正午

シキクン、(二千六百尺)十七度

午後九時

シキクン十五度

◎南湖大山方面探検記 野呂

七六

午前七時出發「ビヤナン」社土目「ロミンナボ」等途中に來り迎へ先導す七時半「ビヤロン」社の溪底に達し少憩専ら「マナウヤン」社に對し警戒しつゝ徐行し「マナウヤン」社の避難地たる左方支溪「ボーブル」溪及右方支溪「シナッコフ」溪の地勢を觀察し其溪口に造れる溪底の掩堡を見十時三十分「シキクン」據點に安著す行程約三里半。

蕃務本署長に探検成功下山の報告を爲す民政長官代理より左の電報を領す。

南湖大山方面探検隊は困苦に堪へ險阻ヲ履ミ能ク豫期の目的を達したりとの報に接し欣喜に堪へず茲に貴官一行の勞苦を謝し且其の成功を祝す。

依て次の返電を呈す。

探検成功は總督閣下並閣下御指導の賜ものに外ならず然るに深厚なる御賞詞を蒙り汗顔の至りに堪へず探検員を代表し謹で拜謝す。

此日「ビヤハウ」社蕃人來り告ぐ曰く「シキクン」社蕃人等の報に依れば日本軍隊は「タポー」溪より南灣蕃に進み「ビヤハウ」「キンヤン」等の蕃人南湖大山行動不在に乘じ蕃社を討伐すべしと「ビヤハウ」社蕃人は驚怖家財を負うて山中に避難せりと我案内蕃人等之を聞き動搖し蕃情騒然たり即ち其の虛妄を辯じ試に濁水に來り其眞否を確むべしと漸くにして惑を解くを得たり要するに「マナウヤン」「シキクン」等の蕃人は百方小策を弄して我行動を妨げんとするものなり若し此浮説登山以前に行はれんか或は探検行動を中止せざるを得ざりしやも知るべからず。

五月三日 曇、朝雨午前六時シキクン十七度  
午後三時ボンボン溪十六度二

午前七時「シキクン」據點を發せんと蕃人間に浮説百出行を危み行かんと欲して又止み止まんと欲して又行き依違決せず操縦諭示漸く決し其一部三十名許歸社し一行三十四名蕃人二百四十五名を從へ八時出發「ルモアン」守備小隊、烏帽子山據點に寄り午後二時「ボンボン」溪著泊行程五里十三町。



五月四日 曇、氣温十六度七。

午前七時四十分「ボンボン」溪發圓山九芎湖を經十時三十分吠哩沙著搜索隊員を吠哩沙支廳に集め連日行動の勞苦を慰諭し探檢成功を謝し解隊す終て午後三時發羅東を經五時宜蘭著泊行程九里。

五月五日 雨、宜蘭滞在宜蘭廳に出頭探檢殘務を處理し南溁蕃事情を調査す。

五月六日 曇。

宜蘭を發し蘇灣より乗船。

五月七日 晴。

午前六時基隆著九時歸府す、四月二十三日出發より正に十五日間五月一日觀測終了後天候日々不良にして雲霧深く鎖し風雨連日寒氣加はり蕃情亦良好ならず若し登山一日を後るれば到底此効果を收むる能はざりしならん眞に天祐と謂つべきなり。

隨從し來れる蕃人は成功後臺北觀光を許可するの約なりしが吠哩沙に至り流言に惑ひ前途を懸念し引返す者「ビヤハウ」社蕃人六十餘名ありて臺北に隨伴し來りし者「ビヤハウ」社六十三名「キンヤン」社八十八名「キガヤン」社十七名「クムウヤウ」社八名「シキクン」社三名計百七十九名なり。

ス ウ イ ス 日 記 (三) (千九百十四年七月二十三日—八月一日)

ベルン (Bern.)

辻 村 伊 助

街には、絲の小雨がしどく降りそゝいで、アヴェニユーのスマカケノキの青葉わか葉、しつとり

◎スワイス日記 辻村

七八

濡れた石だ、みを、行き來の人の靴音も静かに、レインコートではなんだか少し膚寒むいもの、様子が、先づ、春の朝のそれも若葉しぐれの曉け方と云つた調子、七月も半ばはどうに過ぎた、二十四日は、まるで感じが異ふ。停車場からブラッツへ出ると、霧が深く、オーベルラントの山はもう近いなごうなづかれる。

汽車の中でも停車場でも、博覽會のびらばかりで、この分では、やり切れまいと思つたが、來て見れば、別に心配したほどの騒ぎでもない。ブリュックフェルトの丘の上に、木立の奥に白い建物がちらくして、青、白、赤、綺麗な彩をとりませた大旗小旗が、風もない街のうしろにだらりとしたのも、アーレの水は緑に冴えて、切つたての崖は昔ながらの鐵城に、敵はもう遠く落ちのびたそのあとへ、朝がけに乗り込んだ勇士のやうに間がぬけてゐる。

迎へに來てゐたポルティエに荷物をあづけて、朝飯は、白らく明けにたゝき起こされた國境のバーゼル(Basel)のピュフェーで、使ひ残した獨逸の銀貨で、もう此の夏はこつちへ來ないつもりだから、總仕舞にもど大袈裟に詰め込んだし、此の天氣では、街から今朝は山は見えずと、大通りを落ちつきはらつて、雨の中をぶらりく、傘もささないでやつてくる有りさまは、我ながら勇ましい。

第一に眼についたのが登山用具、これは場所がらなり場合が場合で、欲しい奴が大分あるが、有り金残らずはたいも、限りがなささうだから素通りにする。次は晝はがき屋、これは金はかゝらないが、集めるとなるとかさ張つて、すでにハイランドで四百枚、ノルウェーの五百枚、ベルリンのオペラものが三百何十枚、スウィートケイスの一つはフィルムと晝ハガキで、ものゝ五貫目はあらうといふ始末、どうせベルンには二度や三度は歸つて來るつもりだから、その折りのことゝして、こゝもさつぱりと素見して通つた。洋服屋の旅行服も、さしあつて用はなし、シュネーフーンの帽子飾りも、一と月から山に入るには、邪魔になるばかりで腹のたしにはならないと、扱て次が本屋、これはまづ

正面を切つて這入り込む、鼻眼鏡のおやぢが出て来て、何を買ふんだつて顔をしてゐる、さあ店には這入つたが、買ふものにはまだ腹案がない、何れにしても、地圖と教科書が何につけても必要だから、地圖はジークフリートの五萬分の一地形圖、フィンシュテラールホルン群山の折り本、オーベルラントの有名な山は、残らずこれに含まれてゐる、次にテオドールパス、これにはミシャーベルやモンテローザを始めとして、マッターホルンからダンブロンシュに及んでゐるから、四千米突を目安にしても、一と月の山登りには荷が勝ちすぎる、扱て参考書だが、帯は愚か、襷にもならない本ばかりで、あれでもなし是でもなしと、やつと搜がし出したのがオーベルラントで四冊もの、登山案内、

Dr. H. Dübi:—Hochgebirgsführer durch die Berner Alpen. I—IV Band. 〆、もう一つはスウイス山岳會出版の、ウルネルアルペンの案内記で、

Clubführer des Schweizer Alpen-Club:—Urner-Alpen. I, II, Band. この兩方は記事も精しいし、記載も極めて明瞭である。ポールのガイドブックは日本から遙るく持ち廻つて、バルカン半島をのぞいて全歐洲は云ふに及ばず、北アフリカの旅行でも、泊りくのホテルの寢臺で、暇さへあれば繰りかへして、もう日本へ送り返してしまつたから、更ためて買ふ用はなし、思つたより登山案内はないものだ。

扱て、本をかゝへて四つ角を左りに曲ると、宿のモンビシエー(Mon Bijou)、ファウストの歌にでもありさうな、ホテルの名前が氣に入つたから、パーゼルから電報をかけて置いたが、取つてあつた室も、小綺麗な角座敷で、氣持ちがい、何をしてゐたんだいって格構で、晝はがき用のスウートケイスが、ポルティエは一時間も前に着いたさうで、室の真中にばかんとしてゐる。取りあへず、寝起きのままの顔を洗つてしつとりした衣物を着かへると間もなく晝飯だ。

酒の上もあるし、汽車の疲れでぐつすり晝寝をする。何しろ、昨日の午後三時三十三分に伯林をた

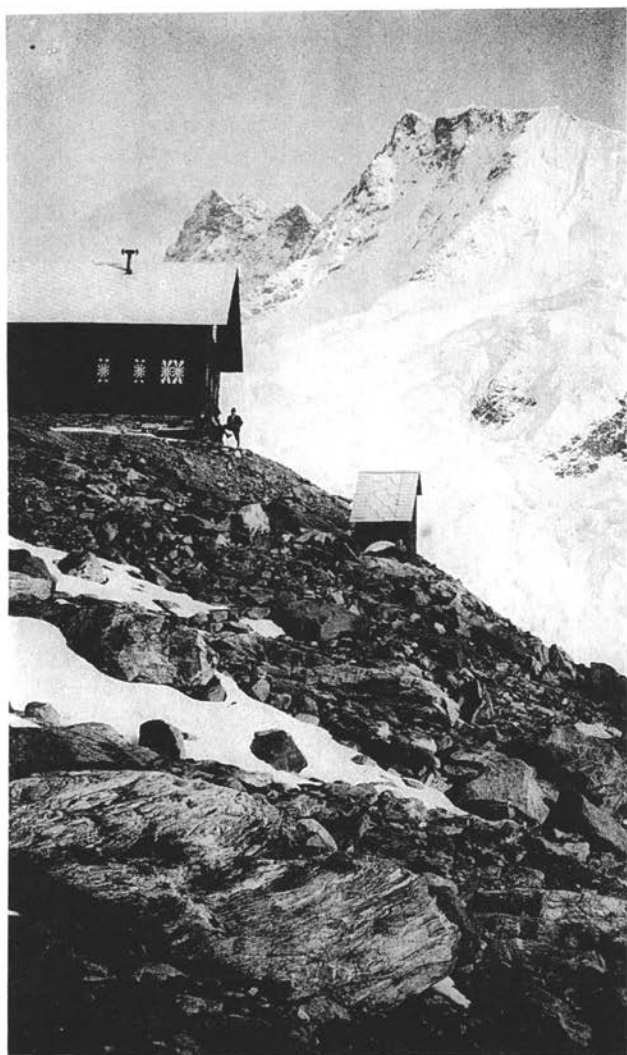
つて、いくら急行だつて、エヤフルトからフランクフルト、アム、マインと、トューリンゲンの森をぬけて、ラインガウを通つて、エルザースを素通りにして、國境のバーゼルで一時間待たされて、オルテンを通り越して、さてこのベルンだから、十八時間の乗りづめでは、うっかりソーファに寄りかかつて、室がごろ／＼動くやうな氣がした。眼がさめると二時少し過ぎ、窓に小雨は淡くかすんで、十五分目の時の鐘だらう、ごこかの會室の鐘の音も、京の寢ざめを思ひ起してなつかしい。

ベルンで第一に行くべき場所は、クライネ、シャンツェ (Kleine Schanze) とアルビネス、ムゼウム、キルヘンフェルトの橋のたもとは、今日は山が見えないから、明日のこととして、レインコートに身をかためると、霧雨の中を、氣持ちよくぬれながら、また大通りにやつて来る。街に出て最初に眼につくのは、大路の四つ角に建てられた、いろ／＼な形の噴水である。オーベルラントはすでに高原で、ベルンは街を貫ぬくアールの急流を、絶壁の底に瞰下ろした、丘の上に築かれてあるが、水が十二分に街に行きわたつてをるのは、スウイスの都の特徴であらう。噴水の多くは十六世紀の建造と云ふが、一つ／＼おもむきの異つた、古びたのが、それを見ても由緒ありげに思はれる。山岳會の陳列場は、ワイセンハウスプラッツから、右に曲つたツォイクハウス、ガッセで、建てものはミュンヘンみたい

に立派ではないが、千八百七十四年に、萬國聯合郵便大會が初めて開催されたと云ふ、曰くつきの家だから、門口にカントンの紋章をうつて、表からのぞき込んだばかりでも何となく微くさい。

二階に上ると女が出て來た。入場料は五十ソントイム、階段のとつつきからすぐ陳列場で、室に入ると、第一にイムフェルトのマッターホルンと、シモンのユンクフラウ群峯シュルツペのレリーフが眼につく、殊にマッターホルンのは、塗りあげた色の調子が、何とも云へない感じがする。剝製の箱は素敵に大きなもので、シヤモアの立派なのが三疋、シュネーフーンに狐やフェレーなどは、冬毛と夏毛をわけ

て、山草をあしらつた大きな臺にのせてある。地圖にスケッチは、無論のこと壁一面にかけてあるし、





大小のレリーフに動植物岩石の標本から、寫眞、繪畫、彫刻。畫や寫眞の大きいのは、博覽會に出品されて、立派なのは少ないが、木彫りに一ついゝのがあつた、ベルククリスタル (Bergkristall) と云ふ題で、水晶の周りに、髯の長い小人が三人かたまつて、鑿で削つて置き物である。

登山用具の陳列室は、まあ一度這入つたら、一寸、出られまいと思はれるくらゐで、ロープにアルペンシュトックは無論のごと、リュックサックに救命用具、食器、食糧、何足あつたかといふ勘定もしなかつたが、ネイルドブーツにカンジキが柵一つばいに並んで、隅の方に草鞋が一足、疲勞れたていにぶら下げてある。ロープとリュックサックは、ティンダル博士がワイスホルンの登山に使つたと云ふ、頑固な奴だの、救命用具では、丁寧にかつぐばかりにズックの擔荷に包んだ、等身大の人形まで並べてある、繙帶の間から蒼ざめた顔を半分だして、御前も氣をつけなよつて云つてるやうなのが氣持ちが悪るい。さうく、去年の秋は、伯林で、山から落ちた奴を村へ擔つてゆくところを書いた油畫を見たが、ティロールの山が畫の大部分を占めて、人間のかたまりは下の方に小さいから、畫題はちよつと氣になつたが、感じはこれほど露骨ではない、何も選りに選つて、山の上から落つこつた奴を書かないでも、外に畫題は澤山ありさうなものだが、あゝやつて怪我をしたところできへ、名畫の仲間入りのできるどころを見ると、なか／＼馬鹿に出來ない、無事に頂上に辿り着けば、名畫は愚か、何の題にもなることだらうといさゝか氣が強い。さう云へば、イム、バンネ、デヤ、ユンクフラウ (Im Banne der Jungfrau) には、アイスメーヤを見物に來た旅の男が、クレヅァスに落ちて、やつと死骸を引つぱり揚げた瞬間の、朦朧とした寫眞があるが、いくら畫や寫眞の題になつても、こんな擔荷で下ろされるのはいやだ。アクシデントは、アルプスだけで年に何百件とあるし、エーデルワイスを探りにいつて、下らない山で往生したり、冬の間、村の近所で雪に埋つたなんてのは別にしても、本式の山登りで死ぬものが、山岳會の年報だけで、毎年八九十人はあるんだから、陳列品に、御前も氣を付

けなつて顔をされても仕方がない。道具は便利かどうか知らないが、まあ、御厄介になることだけは御免を蒙りたい。

高山蝶の標本もよくそろつてゐる。山草は措葉では餘り見映えはしないが、エーデルワイスは生品と變らないし、その外の色の變るものは、寫真に彩色したのがあるからよく分る。アルペンローゼ (Alpenrose: *Rhododendron ferrugineum*) とエンツイヤン (*Euzian: Gentiana acutis*) と、雪線近くまで生える云ふソルダネルラ (*Alpenglockchen, Soldanella alpina*) が、まづアルプの山草の代表者と云ふ格である。

三時間ばかりたつと門限で、例の番人が追ひ出しに來た、戸口にそなへてあつた名簿を見ると、日本、加賀正太郎と、ゴシックで無くてはとも感じの表はれない、平たく云へば、いかにも山登りらしい、達筆に認めてあつたが、千九百十年の秋のことで、シャモニーの歸りに寄つたんだらう。日本なんか引つこまないで、一緒に來ればいゝのにと思ふにつけても、なつかしいより腹が立つた。扱て表に出ると、雨は上つたが雲はまだどんよりと、街の上に垂れかゝつて、日の永い頂上だが、もう暮れかけたやうにうす暗らい。

ペーレンブラツクから街をつつきつて、キルヘンフェルトの橋に出る、雲は暗らいが、いかにも高原らしい。ユンクフラウを真ん中にして、ブリュームリスアルプからドルデンホルンまで、オーベルラントの名のある山で、一萬尺を超えたのが、三十三も見えると云ふが、今日はベルプの裾が、雨雲から滲じみ出てゐるだけで、雪らしいものはまるで見えない。

アーレの急流は、深い崖の底に渦を巻いて、氷河の水に特有な、それを思ふだけでも胸の躍る白味がちな蒼色が、S字に街を横ぎつてゆく。崖の上は、ブンデスバラストが青葉の上に屹えて、クライネ、シャンツェの木立の間に、鐘塔の頂は、雨雲に觸れさうになつてゐる。雲はじつと動かない。



流れにそうて、崖の上を、アーレ、シュトラークからミュンスターの下を通つて、川なりに、ぐるつと大まわりに廻つて、大通りに出ると、刻の鐘が六時を報じて、飾りたてた兩側の店に灯が入る。登山用具、晝はがき、洋服屋と、さつきの店を門並みにのぞきながら、ヒルシェングラーパーベンのホテルに歸る。

晚餐は、酒も登山前だからひかへ目にして、室に這入ると地圖と教科書を散らかして、いよ／＼させまつた計畫に取りかゝる……。

散々考へたあげくだが、案内記を見ると、また計畫がひつくりかへつて、日本にゐた時分は、モンブロン、ユンクフラウ、マッターホルンの三つに登つて、あとは一萬尺内外の、餘り金のかゝらないところで我慢しやうと思つてゐたのが、此の冬思ひがけなく一と月をスウイスで暮らして、山登りの見當も相應につくし、ユンクフラウとメモンヒも正月の末に登つてしまつて見ると、つい慾が出て、下らない山を數でこなすよりは、いつそ大袈裟にやつつけやうかなんて、野心もまんざら起らぬでもない、アルプスに幾座の高山があるか、梅澤君みたいな熱烈な愛山家は、一寸世間に類が少ないと見えて、まだ山岳高度表も出版されないやうで、私にはまるで見當がつかないが、四千米突を標準にして數へると、シャモニーの附近で見わたしたところ十一ある。スウイスではイタリヤの國境を含むウァリスの附近に、よくは數へても見なかつたが、四千六百三十八米突のモンテ、ローザを始めとして、三十ばかりは見出される。無論、尾根の突起や、頂上の一角などは別にした話で、それを入れた日には果てしがないが、それ等の中にも尾根づたひには行かれないのが少なくない。オーベルラントには全部で九つ、高さの順に書きあげると、

Finsteraarhorn, 4275m. Aletschhorn 4182m. Jungfrau, 4165m.

Mönch, 4105m. Gross Schreckhorn, 4080m. Gr. Fiescherhorn, 4049m.

◎スウイス日記 辻村

八四

Gr. Grünhorn 4047m. Gr. Lauterarnhorn, 4043m. Hinter Fiescherhorn, 4020m.

だから、ユンクフラウとメ<sup>ン</sup>ヒを除いて、七座の高山が残つてゐる。やりかけた序でだから、計畫は随分大それたものだが、まづ此の残りの四千米突を片づければしから平らげて、まだ期節が過ぎなかつたら、ミシャーベルのドームに、ナーデルホルンとモンテ、ローザ、<sup>ネット、フット、ユート、アイ、グレン、マ、シ、ユ、ス、パ、イ、ル、ト</sup>暇があればマッターホルンへ登つて、氣がむいたらモンブロンだが、これは此の冬ユンクフラウで、<sup>Net stozig, nime spatziht</sup>なんて、ガイドの奴が馬鹿にしてゐたし、危険は餘りない方だから、氣が向きさうにも思はれない。

登山の期節は、このくらゐの高さになると、雪線はずつと麓になつてしまふし、第一、二千米突以上の山では、天氣が悪るければいつでも吹<sup>シユネーション、ユト、ワルム</sup>雪で眞夏だつて冬と同じだが、何れにしても、八月一つばいと限られてゐる、七月も半ばまでは、グリムゼルやゲンミバスの峠に雪があるくらゐで、急な山にはとてもとつ付けない。私は別に日數に制限はなし、懐ろ都合さへ満足なら、今年の冬までこつちで暮らして見たいんだが、山登りの方は時期があるから、さう思ふやうには登れまい。インテルラーケンで落ち合ふ筈の近藤茂吉君は、倫敦からやつて来るんで、急がしくつてくどか、何とぞかんどか體裁のいゝ事ばかり並べたて、旅行は一月限り、九月一日は夕方までに是非倫敦に歸るんだなんて、几帳面なことをしやべつてゐた。

ところで、旅行は近藤君と一緒に、八月一つばいやることにして、この二十六日に、インテルラーケンで出會す約束になつてゐる。何がさて倫敦で逢つたときも、先生掛け引きがうまいから、グラスゴーから週<sup>ウキーク、エン、ド</sup>末でわざ／＼やつて來たと云ふのを思ひにさせたつもりで、時に、僕はどうも急がしくつて、登山案内記の頸つ引きはとても出来やしないよ、萬事君に一任することにしたのだから、どこをどう通つて、山に登らうが登るまいが、すべて君の隨意でいゝつてんで、計畫は一切、人におつつけてしまつた。山で怪我をしても知らないよつて嚇かすと、そのつもりで傷害保険をつけて來たから

大丈夫だつて、飲み込んだものだ、傷害保険をつけさへすれば、危険は身に及ばないと思つてゐるらしい。それに遺言はちやんと金庫にしまつてあるから、後の心配は少しもないなんて、その用意周到なものには一驚を喫するに價する。そこで右の如く、計畫は一切私が引きうけた譯になつたんだが、何ぼなんでも相談しないわけにはいかないから、こつちも急がしいし、面倒くさいなを工面して、幾枚も幾枚も、折り／＼變更されたプランを書いて、ノルウェイから送つて置いた上、いよ／＼此の二十六日に、インテルラーケンで會合と話がきまつたのだ。

登る山はオーベルラントで以上の七つ、ウァリスの方を加へて、四千米突の山岳を、此の期節に、十はどうあつても登つてしまはう、此の次に來ると云つても、おいそれとは行けないから、何でもかんでもこの十だけは平らげやうつてんで、豫算にはすでに五千フランを計上した。次に登路だが、グリンデルワルトから入るとすると、最初がグロース、シュレックホルンで、オーベルラント第一の嶮山と云ふのに一寸氣がさしたから、路順は少し悪いが、グリムゼル、パスからローンの溪へぬけて、コンコルディアの小屋を中心として、比較的樂なフィンシュテラールホルンを先きにして、足らしの上で、大ものにとつ付かうかとも考へはじめた、がそれは近藤君と相談の上にしやう。

晝寢をしたせいばかりではない、山登りが近づくこと、いつもの癖だが、居ても立つてもゐられなくなつて、夜は落ち／＼寝つかれない、いろんな夢を見て、びつくりして飛び起きるのは毎晩のことだ。今夜も會堂の刻の鐘が、一つ打ち、二つ打つてもまだなか／＼眼がさえてゐる、と思つたが、いつの間にかどろ／＼したと見える。

睡られないと云つても、朝は七時頃まで床に入つてゐたから、顔を洗ふと、眠むけはさつぱりとどこかへ行つて、氣持は今日の天氣みたいにはつきりして來る。カフェー、コムブレで朝食が済むと、ひつちらかした荷物を一通りかたづけ、停車場前のプラッツから電車に乗つて、博覽會の見物に行く。

◎スワイズ日記 辻村

八六

街はづれだから、場内は思ひきつて廣くとつてあるが、陳列場は大したものではない、然しそれに就いては斷言は決してしない、何しろ高山植物の陳列と、山岳會館と、狩獵に關する陳列場だけ見て歸へつちやつたんだから、餘り文句を云ふ資格はない。山岳會の出品に、木造の小<sup>グリーン、ヒュッテ</sup>屋があつたが、形もよし、東屋がはりに庭先きの一つ欲しいと思つた。博覽會が終ると、いづれどこかへ持つてゆくんだらうが、どの山に建てるのか聞かなかつた。場内には寫眞のいゝのが大分ある、日本でもかう云ふ出品ができるやうだといゝがなあと、つくづく羨しい。シーにシュリッテンは、遊就館みたいな氣がする、登山服や帽子には、着るには惜しいやうなのが澤山あるが、あんななりで登つた日には、氣がひけて思ひ切つた離れ業ができまいと、どうせ買はないんだから冷かして通る。狩獵館の方も非常に面白い、シャモアやヒルシユの首だけ剝製にした飾りものが、場内の壁一面に並べてある。熊なんかも、カントン、ベルンの紋章にするくらゐだから、昔はこの邊にも澤山ゐたに相違ないが、今でも相應に捕れると見えて、大小どり交せた剝製がかなりある。漁業の方は素通りにして、御隣りの美術館に入る。山の繪があるかと思つたが、たつた二三枚で、印象の残るやうなのは一枚もない、それから、油畫のかなり大きな奴で、今だに譯の分らないのがある、何でも男だか女だか、人間らしいのがぶつ倒れて、其の胸中から、女が飛び出して宙に浮いてるんだが、何のつもりだか見當がつかない、首をひねつて立つてると、可愛らしい子供をつれた佛蘭西の女がやつて来て、これはどう云ふ畫なんですつて聞かれた、實はこつちから聞きたいくらゐ、何だかさつぱり分りません、今考へてる最中ですと答へたら、今度は誰の畫ですつて聞いた、一寸のぞくつもりで出品目錄も買はないから、作者の名前も同様に見當がつかない。

一時頃にホテルに歸つて来る。晝飯が濟むと、ポルティエに荷物をあづけて、買ひ物がてら街をぶらついて、その足で停車場へ行く、インテルラーケン行きの發車は、二時三十五分、ミュンシゲン

經由の急行で、この間が一時間と十分かゝる。

アーレの鐵橋を渡ると、ベルンの街は白壁や石造の建物が、青葉の上に遠のいて、線路は、樅の立ち木にしきられた街道に沿うて南へむかふと、廣ろくとしたウィラーフェルトの牧場になつて、青々と草の茂つた丘の上に、なつかしいシャレーの赤屋根が、林檎か梨か、くだもの、青葉の中に見えるのが、空は柔かに晴れ渡つて、セザンヌの畫でも見るやうな氣がする。左は、ながく横たはる丘の木立で、エンメンタールと限られて、南から右手へかけて、残雪のあるキザにひ割れた岩山が、トッーンの岸のシュトゥックホルン (Stockhorn, 2193 m.) の山脈だから、シンメンタールはあの裏山の蔭になららしい。

汽車はミュンシングンの小さな町で一と息入れて、なほ南へつゞく高原をまつしぐらに走ると、シュトゥックホルンの左に並んで、トッーンの湖水の南に屹える、ニーセンのピラミッドが、頂に雲がなびいてゐるが、カンデルタールに落とす北側の褶に、残雪が獅噛みついているのが、手にとるやうに見える、麓は樅の密林で、その山の裾と、高原にはさまれた、トッーンの水はまだ見えない。

そのうちに、左の窓から、氷で築きあげたユンクフラウとメモンヒが表はれた。乗客は——可なり込んで、中には、登山服に身を固めて、アルペンシュトゥックに頬杖つたいかめしいのも交じつてゐるが、——一齊に左の窓にかたまつて、あつと驚ろきの聲が、室の中に漲ぎつた。實際驚ろくべきはその雪で、冬見たときと少しも變らない、ユンクフラウの頂上の直下に、ギーセングレッチャーのゑぐり取つた斷崖の左には、シュネーホルンの薄い山陵アルトが強い午後の日に透きとほるかと思はれる、氷河の右はシルベルホルン、それも眞つ白で、黒いものは岩のかけらも見當らない、そのうちに左の端にアイガーが表はれる。

この三山とニーセンの間には、むくくした雲が湧き上つて、ブリュームリスアルプの群山は、山

◎スワイズ日記 辻村

八八

頂の氷が、キラリまつしろな雲の上に光つた。いで、まもなく隠されてしまつた。湖水から流れ落ちる、アーレの急流を渡ると、グリュエーシスベルグの森の麓に、遠くトラーンの城が望まれる。

ハイムベルクの裾を廻ると、町は次第に窓に近づいて、三山は木立の蔭にかくれてしまふ。五分停車ですぐ次のシュエツリゲン (Schenzigen) に行く、こゝは湖水のはづれで、インテルラーケンまでは水に浮んでも行かれるから、乗客の大半は降りてしまつて、あとは、大分静かになつた。汽車は湖水を西から南へ廻りはじめ、シュトックホルンはもう頭の上になつて、岩ばかりの尾根が左に盡きたところに、シンメンタールの落ち口がある、左の方はひろく見わたす水の上に、三山はもう頂だけが前山の上に見えるだけで、その左には尖つたグロースシュレックホルンの山頂に、白い點が二つ見えるが、二羽の白鳩 (Die Zwei weissen Tauben) がそれである。トラーンの水は蒼く澄んで、北側から湖水の半面にのしかつたベヤテンベルクの絶壁には、夏草か、緑は岩の間にまだらに見えるが、さすがにもう残雪はない。

が、この目ざましい景色は、まもなくアウセルベルクの蔭にかくれて、右側の窓にはニーセンの裾が、汽車にすれへになるくらゐ近く、左には丘の下にひろく見をらす草原のポプラの果てに展げられた、湖水の北をかざる山ふところに、オーベルホーフエンの村が、小さく望まれる。丘は緑に覆はれて、そのうしろに黒木の森の、山また山のあなたがエンメンタールにつらくらしい。

シュピーツを過ぎると、もう二十分で、アーベントベルクの樅の木立も、鮮な若芽が萌えて、そこに圍まれた野や畑も、冬來た時とはまるで國が異つたやうだ。湖水はだんく狭くなつて、ベヤテンベルクの麓には、絶壁の間に、大瀑小瀧が絲を亂してかゝつてゐる、そしてその頂から、ハルデルに曳くなだらかな斜面には、緑の原に赤屋根の村がのぞまれる。

かうして再、インテルラーケンに歸つて來たのが午後の四時、プラットフォームに飛び下りると、







人込みの中に、にこ／＼して、例の氣の抜けたポルティエが待つてゐた、荷物を持たせてベルネルホーフに入る。

### インテルラーケンの五日

先き程電報を戴きまして、丁度表二階があいてをりますからつてんで、旅の宿屋も御なじみになるゝ氣持ちがいゝもんだ。香水の象徴シンボルみたいな細君が出て来て、おや、いらつしやいまし、又山ですか、今度はどちらへなんて、佛蘭西寄りの生れだけに、しきりに、御世辭を並べてゐる。とりあへず室に通つて、着かへた上、庭のテレースに下りて来る、前に来た時は、一面に雪だつたが、庭にはブラタヌスが茂つて、廣葉の蔭に並べたテイブルでカフェーを待つと、葉漏の日かげがちら／＼して、陽氣は涼しいがどこも夏らしい。人通りもなか／＼あるし。兩側の店はどこも綺麗に並べたてゝ、見ちがへるほど景氣がいゝ。

空はうら／＼かに晴れ渡つて、緑になつたルーゲンの森の上に、ユンクフラウはもう片蔭で、今にも溶けて消えさうな霞の奥に、ぼ／＼と淡い雪の輪廓が認められる。アーベントベルクの麓、ハイムウエー、フルーの頂には、赤い小旗が風に翻つて、ルーゲンバルクの、ユンクフラウ、ブリックにも國旗をかゝげた、町の様子は、どうしても避暑地で、退屈さうには見えないが、いかにも用のなささうな連中がぶら／＼通る。カフェーが濟むと、その仲間入りをして、ホヨーエウエークの大通りを、御なじみの寫眞屋にやつて来る。娘だらう、これは顔は知らない、晝はがきを見ながら店さきに立つてると、いきなり、後ろから、ヘル、ドクトール！、てんで大きな掌を出されて、びつくりして振りかへると、例のニクス老人だ。大きな寫眞機をかゝへてるから、何處へゆくんだつて聞いて見たら、ナッハ、ルーゲンバルクつて云ふ。何うです、一緒に來ませんか、森でナトール、テヤーテルがあ

◎スウイス日記 辻村

九〇

るんで、これから終ひの幕を撮つしにゆくんです。今日はウヰルヘルム、テル、ですつて誘はれたが、まあ近藤君が来れば、誘惑されるにきまつてるから、明日のことにして御免を蒙る。

仕度は、いづれ近藤君が来てからのこととして、何か参考になる案内記でもないかと、郵便局の少し先きの、ウヰーリの店に這入り込む。冬の間もちよ／＼来たんで、肥つた主婦さんがにこ／＼しながらやつて来た。本は餘り無い、繪はがきを仕入れて、街をひと廻りしたが、どうも大變な景氣で、方々のカフェーではコンツェルトがあるし、前には閉つてたクアザール (Kunsaal) の正門にも、人が大勢たかつてゐる。宿に歸ると灯がともされて間もなく晚餐だ。

亞米利加人が多いのを氣にしたせいでもあるまいが、主人に案内されて食堂に通ると、タイプルの仲間、佛蘭西人に英人が二人、こんな町で出會す連中は、ごこの國人でも、暇人に相違ない。話しても相應に持て、カフェーが濟むと二階に引きあげる。

二十五日は、朝から雨が降つてゐる。窓からはルーゲンの森が、霧の間に見え隠れするだけで、終日山の影は見えない、表へ出ると、昨宵の二人が玄關に立つてる巴厘をつかまへて、しきりに何か聞いてゐるが、相手はオーベルランデル、ドゥイッチ一點張りで、何をしゃべつたつて、腹がへつて口がきけません顔をしてゐる。何事かと思つたら下らないこつた、トゥーンの湖水の岸にはどう行くんだつて聞いてるんだ。初めての國へ来るんなら、地圖の一枚ぐらゐはづんだつて、大した損になるまいが、殊に英國人には、かう云ふ手合ひが少くない。暢氣なのかも知れないが、同じ國の中でも、土地をはなれると、から駄目だ、さう／＼ハイランドの旅行中、ローデナン (Rowardenan) から、ベン、ローモンド (Ben Lomond) に登つたが、嵐の中で、霧が眞つ向うから吹き下ろして、地圖と磁石では少々心細かつたけれど、それでもどうにか頂上まで辿りついたが、宿に歸ると、グラスゴーからやつて来たハイランダーが二人、私のあとを登つて来て、山の中から散々呼んださうだが、返事が

ないから下りてしまつたなんて、人を案内のつもりでゐた、私も呼ばれたのは知つてゐるが、待つてゐるのは厭だし、道づれば邪魔だから、さつさと御免を蒙つた次第だが、かう云ふ「旅行家」が少なくない。雨には少々氣がひけたが、大した降りでもなし、室にはかり閉ぢこもつて、腹工合もあまりよくない場合だから、案内——と云つても一筋路でわけはないが——ぶら／＼、一緒に湖水のふちへ出かけてゆく、御禮のつもりか知らないが、一人は傘をさしかけてくれる、相憎く先生丈が低いので、骨のとつさきで眼を突つきさうで閉口した。

ウンテルゼーエンの村路を左に曲つて、くだもの、木の茂つた、牧場の柵に沿ふて湖水に出る。雨足は次第にしげくなつて、水みちの白く亂れた湖には、水鳥が群れて遠淺にシルフの茂げるあたりから、墨繪のやうに霞んでゐる。ニーセンは無論見えない。岸の石の上に腰を下ろすと、雨にぬれた外套が冷や／＼して薄ら寒むい、山入り前だし、風邪でもひくと大變だから、先きに別れて宿に歸ると、近藤君から電報が届いてゐた、倫敦からかけたんで、明日の晝に着くとしてゐる。

午後は雨もひごくなくなつたし、室にはばかり閉ぢ籠つて、頭が少し重くなる。山に這入れば髪も刈れず、幸、時間つぶしに筋向ひの理髮所に行く。おや職人が變つたな、と思ひながら鏡に向つて、刈りながら新聞を讀んでると、親方が出て来て、鏡の中をのぞき込んで、やまた入らつしやいましたねつてんで、まだ顔を覚えてゐる、職人と入れ更つて刈り初めたが、話はやつぱりルーゲンバルクの野天芝居で、役者はごこのもんで、衣裳がすばらしいなんて、髮結床らしい對話がはじまる。

頭はせい／＼したが、天氣は相變らず煮えきらない。大通りをぶらついて、カフェー、オーベルラントでコンツェルトを聞きながら、暇をつぶして大通りをぶら／＼歸りかけると、ニクレス老人に呼びどめられた、また這入り込んで話しこむ、御蔭で時間もたつて、宿に戻ると燈ともし頃、晚餐が濟むと、連日の寢不足なり、天氣は悪るし、思ひ切つて早く床に這入つたが、さつぱり寝つかれない。

◎スウイス日記 辻村

九二

次の日も朝から雨で、起きぬけに湯に飛び込んで、さつぱりしたところで朝飯にする。陽氣はづれで素敵に寒むい、荷物を始末して、手紙を書いてると、そのうち十一時になる。カレーから来る急行は半に着くから、雨の中をブラッツをつつきつて、プラットフォームで待つてると、そのうち汽車が着いたが、近藤君の姿は見えない、は、あ乗り遅れたな、來たら一つとちめてやらうと、手ぐすね引いて宿に歸る。それにしても、電報までかけるときながら、變だと思つてポルティエに聞くと、今はベルンから着いたんで、カレールの急行は少し遅れたんださうな。失策つたど大急ぎで飛び出すと、停車場の出口で、レインコートを引つかけた大男が、杖を振つて相圖をしてゐる。や、來た、今、迎へに行つたんだよ、君の事だから、てつきり乗り遅れたと思つて歸つたところなんだと説明すると、あれはベルンから來た汽車さなんて、何れポルティエに聞いたに相違ない。

きめて置いた室は、廊下つゞきの裏二階で、アーレの上に、ハルデルの櫃カネが窓に近い。差しあたつての相談もあるし、馬鹿話なんて餘裕は、藥にしたくもない。それに二人とも、日本に差しせまつた用事ができて、電報をかけるやら、手紙を書くやら、近藤君はコード、ブツクの首つ引きで、今日はたちまち暮れてしまつた。

二十七日、三日ぶりで眼がさめるやうに晴れわたつた。カーティンをあけると、朝日がさつとさし込んで、正面に聳えたユンクフラウに、中腹のグッギグレッツチャーから、湯氣のやうに霧が湧きあがる。メオンヒの頂上は雲にかくれて、ラウテルブルンネンの左につゞく、シンニゲブラッテの山腹から上には、雪が眞白ろに積つてゐた。アーベントベルクの頂上には、綿帽子をかぶせたやうに、昨日の雨は山では雪であつたと見える。

ウエストン氏の紹介もあるし、取り敢へず、スウイス山岳會を訪問して置かうと思つて、事務所を聞くと、主人もよくは知らないが、停車場前のホテル、メルクルで、度々集會があるやうだなんて

云つてゐるから、二人で出かけて訪ねて見ると、會の事務はヘヤ、フィッシャーが引き上げてゐると云ふ話だ、フィッシャー氏は郵便局前の寶石屋さんである。ところが主人は留守だつてんで、山のことなんか、てんで氣にもとめてない女が番をしてゐたから、午後訪問を約して引きあげる。

天氣もよし、少し街でもうろつかうと云ふんで、大通りをぶらついて、一先づ引き上げると間もなく晝飯だ。室にばかり引つ込んで、も始まらないから、食堂を出るとテレースの椅子に腰かけて、キルシェワッサーを飲みながらカフェーにする。昨日の陰氣な雨に引きかへて、今日はまた、胸の中まで透きとほるやうな上天氣だ、往來にはしつとりと塵も静まつて、プラタヌスの廣葉をゆするそよ風も氣持ちがいい。

ホーエウエークを、二人とも啣え煙管で、のそり／＼、歩きまわる。近藤君は、身の丈一間に垂んとする大男、これでも日本人は小さいつて云ふ氣かつて顔をして、大股に、寛歩をはこぶ様が、そばについてるだけでも氣が強い。フィッシャー氏はまだ歸らない、クアザールから、ホーヘン、マッテの草原を散歩して、歸り途に大通の煙草屋に這入り込む。近藤君がしきりにシガーを撰んでる間に、何氣なく入口を見ると、玻璃扉にグルンダーと記してある、おやつと思つて、貴君は、日本から山登りに來た、加賀つて男を知つてますかつて、念の爲めに聞いて見ると、お、ミスター、カッ、ユンクフラウに登る前にヘッスターを世話したことがあります、國から二三度葉書を貰ひましたつてよく覺えてる、無性者の加賀から、葉書が二三度は奇蹟である。

先づ取りあへず、ヘヤ、フィッシャーのことを話すと、入會なさるんなら、誰か友達と二人で、紹介しましやうつて云つてくれた、とにかく、出直ほして來ることにして引き上げる、カフェーで休んだが、天氣がいいから、室の中はざつと人類館といふ體裁だ、往來には、亞米利加人が六分通り、英吉利、露西亞がこれに次いで、澤庵人種はてんで見あたらぬ。

◎スワイス日記 辻村

九四

四時頃に、又グルンダー君を訪問して、いよ／＼正式に入會の件を依頼する。丁度、本宅の方から來てゐた弟に店をあづけて、一緒に表に出る、Sektion Oberland (千九百十五年から Sektion Interlaken と改められた) のトレジュレーは、郵便局の向ふ角の銀行にゐるんだ、入會も濟み、會員證も貰つて表に出ると今度は買ひものだ。

食糧は明日のことにして、アルペン、シュトック、リュックサック、ネイルドブーツ、シュタイゲルアイゼン、それからスウェーターに、スウェーターコート、手袋、寫眞のフィルムはツェルマツトへ出るまで買へないから、十六本を用意した。

宿に歸ると、ポルティエが、Vor emene Wyli ischt opper cho u het zunach welle. 先刻あなたに面會に來た方がありませんと云ふ。名刺はと聞くと、後程上りますと申して歸りまして御座いますと答へる。誰だか見當がつかない、どんな人だ、男か女かつて問ひたす。えへ……その男の方で、え、年寄り……まではわかつたが、それから先が、分るやうなポルティエではない。何れ大した用事ではあるまい、ことによると寫眞屋のニクス老人かも知れない、さう云へば會員證に貼り付ける、名刺形の寫眞が必要だ、思ひだしたから早速出かける、訪ねたのは老爺ではない、どうして急がしくつて、そんなに早くはとでもなんて、いやに急がしがつてる奴を、無理に頼み込んで、明日の午後四時までに出來上がる約束をした。

時にガイドだが、私は初めから、此の冬エンクフラウとメヨンヒへ登つた、シュトイリを連れてゆくつもりで、まだ交渉はしてゐないが、グリンデルワルトで逢つてから、定める筈にしてゐた、ところが、グルンダー君に聞いて見ると、奴は達者だが、少々離れ業をやるんで、どうも安全と云ふ點から考へると……なんて、餘り賛成はしてくれない、いろ／＼相談したが、丁度カナダから歸つて來てるフ・イツ (Eduard Feuz) といふのが、人間もしつかりしてゐるし、ロッキーでファースト、アッセン

トもやつてるし、あれなら確かだといふ話になつた、そこでグルンダー君の店に、呼んで貰ふことにして置いた。

夕飯が終ると、隣のピュフェーで、キルシュワッサーを飲みながら、いよ／＼差し當つての計畫にとりかゝる。近藤君は、山の剣呑なことなんか眼中に置いてない、なあにかまふもんか、グロースシュレックホルンから取つつくのさ、グリーンデルワルトからすぐに這入らうつてんで威張つてゐる。案内記は萬事、私の受け持ちで、先生、まだ驚かされてゐないから、しきりに、なアにいよ、かまはないよを連發してゐる。

ベデカーには、「シュトラールエック、の小屋より、シュレックザッテルを経て、登り七——八時間、(ガイド、八十フラン)、極めて困難」としか記してない。

ボールのアルバイン、ガイドには……………

グロース、シュレックホルン(四〇八〇米突——一三三八六呎)、下部及び上部グリーンデルワルトの氷河を境する山稜<sup>リッヂ</sup>の最高點。アルプス諸山の山頂のうち、最、壯大なる、最も危險なる山容を有す。三面の岩壁は急峻にして、殆んど積雪をどめず、只、ラウテラール、ザッテルに對せる北側の斜面のみは、辛うじて積雪をどめ得る最急限の長き傾斜をなす。かゝる状態にある山岳に於ては、微小なる震動によりても、雪崩<sup>アヴァランシュ</sup>を生じ易し。……………

としてある。アヴァランシュを生じ易しは少々恐ろしいが、登る奴がみんな死ぬと極つた話ではなし、街の中をうろついてゝも、電車にひかれたり、自働車にはねどばされたり、念のいつた奴になると、身體をよくする筈の病院で手當てを受けて、御丁寧にいろんな藥まで飲まされても、生きてゆけない位だから、これは死ぬのも生きるのも、場所によつたことではない。ここによると、山に登らないで麓にゐると、かへつて、死ぬやうな目に逢ふかも知れない。何だか登らないとかへつて

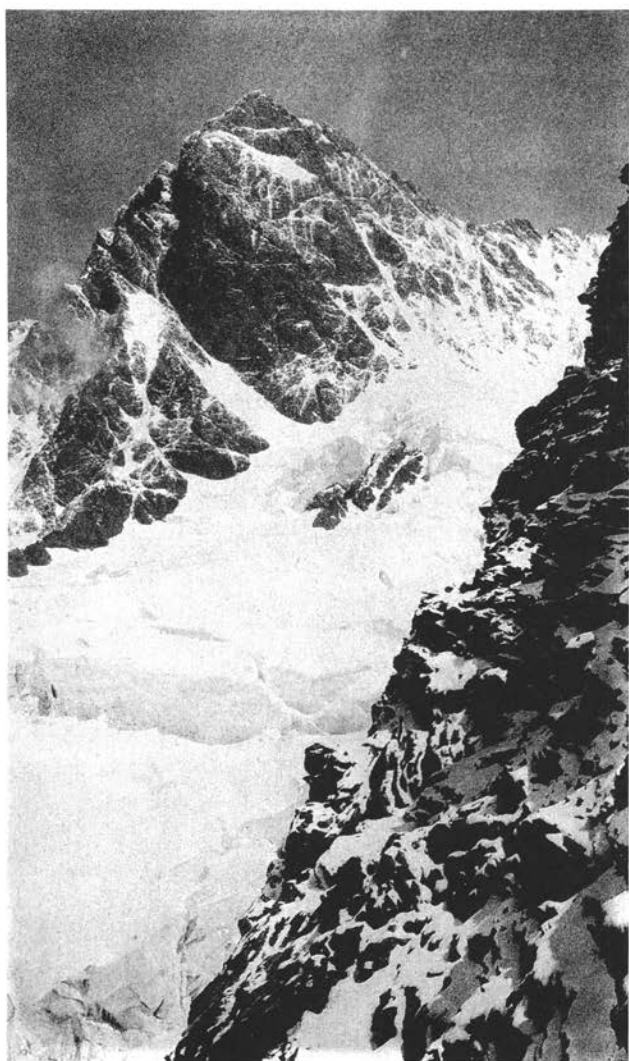
危いやうな氣がしてならない。生きて行くには登るに限ることも考へた。いやごうしても登らう、その方が安全だと、二人の間に解決された。

で、あとは豫定通り、オーベルラントの四千米突を、片つばし平らげて、それから、ウァリスの山へ這入らうと云ふことに評議一決した頃には、往來の人通りもちらほらになつて、山に近い町は、ブラタヌスの上葉を甜める夜の風が、明け放した玻璃扉から冷や／＼吹き込んで、酔ひざめの身體は、ぶる／＼するくらゐであつた。

七月二十八日、デジュエーネーに下りてゆくど、ポルティエがやつて來た、昨日の御方が御待ちですつてから、はて誰だらうと玄關に出ると、胡麻鹽の髯男がぶつきら棒に突つ立つてる。物貰ひか、それにしては、選りに選つて、日本人なんか目つけなくつたつてよささうなものだと、少々變な心持ちで、何だつて聞くと、今度は名刺を出した、見ると、ベルクフェーラー、クリスチャンヘッスラー (Christian Haesler) としてある。は、あ加賀の連れてつたヘッスラーだ。

近藤君を呼んで、朝飯を、庭先のテーブルで食べながら、様子を聞く、奴は懷中から、ガイドの手帳を取り出して見せる。年が年だけに、随分大勢案内したと見えて、中には、とても讀めないやうな名筆も交つて、盛んに塗りつぶしてある、あつた／＼、千九百十年八月二十五日、日本山岳會員、加賀正太郎、文句が中々振つてる。案内は實に老實なりとしてある。扱て、いづこのガイドにも有り勝ちのこと、賃金の事はよく始めに定め置くべしと、賞めるんだか、けなすんだか、體裁のいゝ、惡る口が墨黒ろ／＼と記してある。賃金のことは、始めに約束すれば、その上は欲しいと云つたつて、鏝一文くれてやる考へもないから、その方の心配はいらないが、かう記されてあると、彼の人格に立ち入つて、穿鑿もちとして見たくなる。山登りの人夫に、人格も大袈裟な話したが、本で見たり、話に聞いたりするスウィス、ガイドの行爲は、時として、同伴する登山家自身より、遙かに立派であり、また、







尊敬すべきのが少なくない。登山そのものは、國家の爲めに利益なんか、あつても無くつても、それはさし當つて、私達の知つた事ではない、たゞ私達の心に、言葉に表はし得ない、満足を與へれば充分である。疲労とか、危険とかいふ問題は、今、私の眼中に無い、たゞ最高峯に立つて、——晴れてゐれば幸である、霧の深いのも一興であるが、——或る特種の感じが、胸に湧けば充分である。——私達の行動に對して、登山の経験のない人は、又は経験はあつても、疲労の外に何物をも味ひ得ない人は、馬鹿々々しいと嘲笑ふ。嘲笑ふは人の勝手である、私自身も、登山を別に賢いことゝ賞めて貰ひ度くはない、えらいことゝは思つて居らん、が、心よいことゝ信じてをる。隨つて心よさを味ふべき登山に、心よからぬ人間の御供は眞つ平らだ。

兎に角一先づヘッスラーは歸してしまつて、前年、加賀に推薦したグルンダー君の説を聞くことにした。

雨は降らないが、天氣は餘り思はしい方ではない。遠山は雲にかくれて、その暗憺たる雨雲の裾に、風につれて見え隠れするシンニゲブラッタの樅の林は、麓は黒味勝ちな葉末に、柔かい緑は萌えてはゐるが、山腹の斷崖に、一刷け、薙の見えるあたりから、雨雲の滲じむだ空へかけて、曉方の小雨が、山では雪になつてゐたのか、染め上げたやうに、まつ白ろになすられて、見るからうを寒むい。雨外套をまごうて外へ出る。

グルンダー君の店先で、いろ／＼打ち合せをしてゐる中に、約束のフォイツがやつて來た。短かく刈り込んだ鬚ひげに、白髪之交じしつた、年の頃は五十餘り、何だかスウイスらしくない男だ、英語も少しは話す、先づ我々の計畫を話して置いて、扱て賃金の問題だが、一山幾何として計算すると、雨や雪で小屋に滞在する場合は、別に拂はなくつても差し支へはないが、残らず積もると、オーベルラントだけで、一寸八百フラン、二人のガイドでは、食糧をこつち持ちにして、六百四十餘圓に相當

◎スウイス日記 辻村

九八

する。どうせシーズンが過ぎれば、登りたくつても登れない譯だから、日當で雇ふことにした。そこで約束は山岳會の規定通り、一日三十フランづゝ、もう一人のガイドは、グルンダー君の説によつて、老練なヘッスラーをつれることにして、それもやはり同じ賃金である。随分いゝ商賣だが、まかり間違へば命にかゝはることだから、文句を云ふべき場合ではない。

約束がきまると、食糧の買物に出かける、グローセル、アレッチ、グレッッチャーの、コンホルディヤの小屋には、小屋番がゐて、萬一の場合に、食糧は得られるが、それも、馬鹿くしく高いのは云ふまでもない、それまでは、小屋はあつても、番人はゐないから、少なくとも十日間の食糧、それを少し餘分に見積つて、二週間分の用意をする。ホエーエウエークの大通りをぶうつと歩けば、仕度はすぐにどのへられる。すつかり揃ふと、随分な荷物になつた。

マッギ(スーヴ種)、十二連(一連六個)

二、半キログラム、砂糖

四分ノ三キロ、プルーン (Zwetschgen)

一キロ、シヨコラート、カイエー (Chocolate cailler)

一、紅茶

半キロ、珈琲

一〇本、蠟燭

一、靴油

一、食鹽

四分ノ一キロ、バター

二分ノ一キロ、チーズ

六、六〇

一、四五

一、五〇

四、〇〇

二、五〇

二、〇〇

一、二五

〇、三〇

〇、三五

一、〇〇

一、三〇

パン

六個、レモン

小壘三本、コニヤック

五、タンダ

五十グラム、胡椒

ビュントナー、フライッシュ (Bündnerfleisch) 冷肉

一、腸詰 (Zungenwurst)

それから煙草は、John Cotton's mix. が一バウンド、全體合せると随分な荷物で、これに、ロープにアルペンシュトック、シュタイゲルアイゼン、ランターン、着がへのシャツなんかを加へると、私達の荷物なんか、とても持つて貰へさうもない。

午後も買物の追加やら、會員證に署名して貰つたり、手紙を書いたり、ホテルにあづけて置く荷物を作つたりして、仲々忙がしい、それでもどうやら片づいて、先づ明日は出發と話も定つた。晚餐には、グルンダー君を招いて、三人で會食する、食後は例によつてキルシュワッサーを乾して、いよいよ御別れと云ふことになる、若し何か危険にでも遇つて、再び歸れないやうな場合には、荷物全部はグルンダー君をわづらはして、日本へ送ることに主人に依頼した。

これで先づかたづいた、荷物は一まどめにしまつたし、手紙も大ていにして、扱て何か用事はないかなと思つてると、近藤君が這入つて来る、煙草をふかしながらカフェーを取り寄せて、又馬鹿話を始める。往來が妙にしーんとして氣になるから、窓をあけると、街燈の二列に行儀よく並んだ大通りは、人つ氣もなく寢静まつて、空はまつ暗に曇つて、南の風が冷やくする、もう十二時を過ぎてゐた。

寢床に這入つても、いろんなことが頭の中にごちゃ／＼して、仲々寝つかれない、そのうち思ひ出したのは、近藤君の遺言で、差しあたつて、遺言するほどの用事も思ひ出せないが、假りにもシクレッファスに落ちて死んだとする、すると、新聞で書き立てる、——まあ一寸想像して見たんだが、——すると、日本の山の氣になつて、知らない他國の山に入り込んで、見當が付かないで死んだんだ、地圖の一枚も持つて行けばいゝになつて、死人に口がきけないと思つて、自分達に引きくらべて、勝手なことを書き立てるに相違ない、死んでしまへば、生きてる奴の文句なんか、聞えないからかまわないやうなもの、それでは山岳會や、第一折角取り調べた、案内記に對して申しわけがない。ぼんやりして死んだんではないぞ、死ぬ氣で死んだんだと、云ふ程ではないが、ことによると、死ぬかも知れないと思つて死んだんだぞと、一寸一筆残して置いた方が、生きて歸つたつて、別段損にもならないからよからうと、又燈をつけると、有り合せの紙つ片れに、これから山に這入る、無理には冒さないが、危険に出つかすかも知れない、死んだら何分宜しくと、日本山岳會と、宅のものと、國にある二人の親友に書き置きをした。

それで、まづ、その方は安心だが、寢やうとすると、今度は天氣が氣になつてならない、途中から降る雨や雪なら、いやでも豫定の行動を取るから、差支へはないが、朝から雨で、仕度の濟んだ上、もう一日滞在は、何とも以て恐れ入る。晴れてゐるといゝが、氷河の寫眞をうんと撮して、かう云ふ工合に、切つたてになつた山の麓に三人をあしらつて、雲がバツと山の中段だけに渦巻いて、尾根と麓の氷河にだけ、日があたつてるといゝがなんて、考へて見ると大人氣ないが、何しろ遠くで見たばかり、また、想像の外には材料がないから、いろんな幻を書いてゐるうちに、ウンテルゼーエンの會堂の鐘は、一つうち、二つうち、三つうつて明け易い夏の夜は、しら／＼と窓掛の隙を漏れて、うすら寒い敷<sup>ベッドシート</sup>布に、明け方の光はさし初める。

七月二十九日となつた。

グリンデルワルトへ

天氣は、思はしくないのは通りこして、これはもうとても見込が無い。遅かれ早かれ雨となるは必然だが、それでも慾目が手傳つて、風向きで、少しでも雲が明るくなると、そら大丈夫だ、ね、見給へ、明るくなるよなんて、下らない心配ばかりくりかへしてゐる。仕度はすつかりと、のへて、食事はカフエーコムブレに、腹のたしになりさうな冷肉を、例の青葉の下で詰め込んでゐると、大通りをロープは肩からはすつ掛けに巻きつけて、御約束の身ごしらへにアルベンシュトック、リュックサククははち切れさうに膨らんだのを脊負ひ込んで、のつし〜と、一足ごとに力足を踏んで、二人のガイドが現はれる。

發車は八時三十五分、ウンテルゼーエンの古塔の頂は、雨雲につかへさうになつて、ハルデルの縦クニネの森に、湧き上る霧は、いつになつても晴れる様子はない、汽車はアーレの流れに沿うて、街の裏手をつつきると、間もなく終點のオスト、バーンノーフに着く、グリンデルワルト行きの乗り換へは九時發で、切符の買ひ替へに、初めて會員證を利用して、二割五分減きの特典にあづかつた。フォイツが見えないんでさがしてゐると、奴は停車場に店を出してゐる、娘のどこにゐたんだ。汽車はそのうちに、ポエーデリを横ぎつて、ラウテルブルンネンタールに入る、左はシンニゲブラットのすぐ麓で、新しい、昨日一昨日の雪が、雲の間にまだらに見える、ルーゲンの裾をまわつて、ヘッスラーの産地、ウクルデルスウクルを通り過ぎると、リュチーネの流れは雲の底からあふれるばかりに、谷を包む黒木の森の、下をうねつてたがり落ちる。縦には柔かく緑が萌えて、ひら〜と、風に亂れる白樺の、青葉若葉の、幾重にも入り亂れた谷奥に、汽車は靜かに登つて行く。

ツワイル ユチーネで、私達の這入つた室だけは、二ダースばかりの、亞米利加人をつめ込んだ客車と離れて、本線から左に別れて、グリーンデルワルトに向ふ、シェワルト、ルエチーネの、雪解けの水はなか／＼多い、兩側の絶壁に氷はないが、雲は、冬來たときと同じやうに暗く、この狭い溪にかぶさつて、落葉松や樺の蔽ひ茂つたのが、谷をなほ更ら深く思はせる、流れをはさむ段丘に、右は切つたての岩壁であるが、心持ちなそひになつた北の丘には、石をのせた板屋根の百姓家が、まるで吾妻川のふちでも旅するやうな感じがする。

我慢に我慢してゐた空は、もうこちらへ切れなくなつて、ぼつり／＼、硝子窓に打つつけた雨脚は次第に繁くなつて、十時十五分に、グリーンデルワルトに着くと、傘なしでは、少しこたへるくらゐな降りになつて來た。取り敢へず、停車場の待ち合ひにかけ込んで、考へ込んだが、室に這入ると、急に大降りになつたやうに、屋根を洗ふ雨の音が骨身にこたへる。

私達は無論出かけるつもりだが、今日のうちに着く筈のシュトラールエックの小屋までは、ウンテル、グリーンデルワルトの氷河をさかのぼつて、六時間はたつぷりかゝる、が、こゝで泊るのも業腹なり、さればと云つて相手が天氣では、喧嘩にもならず、煙草ばかりふかして、窓に近い氷河の裾をにらめてゐると、外で立ち話しをしてゐた二人がやつて來た、出かけるのかと思つて身仕度に及ぶと、荷物が重いから、トレーガーを今日一日だけ雇つてくれと云ふ掛け合ひだ、荷物は重いには相違ないが、決して脊負へない位ではない、素人の私達のリュックサックだつて、彼等に對してさう軽いとは思はれぬ、私は着がへのシャツ、厚毛、薄手を取りませて四枚、白のスウェーターにスウェーターコート、履きかへの靴、下が二足、地圖二部、登山案内二冊、繪はがき形の寫真機にフィルムが十六本、帽子や雪除眼鏡、石鹼、齒磨なんて雑物は數へないでも、大形のリュックサックは一杯に膨らんで、もうこの上は押し込めない位になつてゐる。彼等のご比べても、殆んど重さに異ひはない、然し、今迄



は汽車の旅で、これから雨の中を登るのに、途中で弱り込むやうでは外聞が悪るい。ガイドが重すぎる云ふんだから、苦しいには違ひあるまい。兎に角我々のリュックサックは我々で處分するが、それでもトレーガーが必要だつて云ふのかと、一應問ひたゞして見た、奴等はまた相談をはじめたがどうも、二週間分、荷が多すぎるから、シュトラールエックまで雇つてくれと云つた。聞いてゐた近藤君は、何と思つたのか聲を勵まして、宜しい！と怒鳴りつけた。そしてこれにつけ加へて曰く、我々はすべて、ガイドの言葉に従つて行動をとることにしてをるから、若し御前達が、是非かうしなければならんて云ふなら、すぐに實行しやう、責任ある行動さへとれば、それで宜しいつてんで、恐ろしい權幕だ、傍にゐる私も少々薄氣味わるい。

二人とも顔を見合せて、一寸、氷河の上で暴風雨にでも出會したやうな顔付きをした上、どうも今日一日だけは、是非トレーガーをご申し出でた、やがて二人とも人夫をさがしに行く。

おい、何だつて怒つたんだい。

怒りやしないさ。

だつて怒鳴つたぢやないか、天氣のせいかね、僕もちつと氣をつけやう。

いゝや、あーやつて嚇かして置くと、後で正直に仕事をすると思つたからさ、トレーガーを一日雇つたつて、身代限りはしやしまひし、怒る奴があるものか、僕は何か掛け合ふ時は、いつもあの手をやるんです。

成るほど掛け引きか、商業上の仕事は、何でも劍呑だつてことだが、かう云ふ談判にも、掛引きがあつちや、その道のものでなくては、うっかりガイドにもなれない。そのうちに、叱られたやうな顔をして、二人とも歸つて来た、あとにのそくついて来た老人が、その御入用のトレーガーで、なんだこんな爺に脊負はせたつて、何の足しになるもんかなんて思つたが、年寄のくせに、足はなかく

◎スウイス日記 辻村

一〇四

達者で、アルペンシュトックには、ペーテル、カウフマン (Peter Kaufmann) と銘のうつてあるところを見ると、今はグリンデルワルトの名簿にはないが、昔は鳴らしたガイドの成れの果てかも知れない。は、あ、グロース、シュレックホルンへ、な、なる、なんて、自分は小屋まで、歸る約束だからかも知れないが、いやしくもオーベルラント第一の嶮山とあるのを、別に氣にも留めない様子、毫碌したのか、それともそれ程にも感じないのか、山に千年てなり形が第一心憎くい。

さうかうするうちに、午前正十一時、降りしきる雨の中を停車場をはなれて、だら／＼路を、村の方へ一行五人歩き初めた。兩側のホテルから、大勢首を出して見送つてゐる。

宿は避暑客で、殆んど満員と云ふくらゐ、雨で往來は静かだが、名物の木彫りや、晝はがきを並べた店先きには、ちらほら人だかりもして、晝飯の仕度をしてゐたらしいウエイターが、セルヴィエットを手にもつたまゝ、窓からガイドに、行く先きを聞くのも、山よりの村らしくて面白ろい。一行はこれ等の眼に迎へ送られて、ホテル、ペーヤの角を右に曲る。路は牧場の柵の間を、だら／＼に下りて、もう小さな實を結んだ、果物の木の下をくね／＼折り曲つて、ルネチーネの流れに出る、川巾はやつと三四間で、小橋の向ふからすぐ、メッテンベルク麓の麓が、急な傾斜になつて、それと右側に逆か落しになつた、アイガーの直下、ウンテル、グリンデルウエルデル、グレッツェル (Unter Grindelwälder Gletscher) の霧の下から、水色に氷塔の現はれた、頭の上を目かけて、千鳥がけの細道を辿ると、雨はますます／＼ひどくなつて、つる／＼滑る岩角を、一足ごとに踏みしめて行く、荷は相應に肩をひいて、びつしより濡れた頬を撫でる、岳おろしが冷や／＼と氣もちがい。

細徑は、唐檜も交じる樅の林の、下草を分けてうね／＼と雲につゞく、と、右側に氷河の裾は、いつのまにか眼下になつて、ある時は岩の崩れた薙を横ぎつて、やはり千鳥掛けに、上へ／＼と登つてゆく。ふりかへると、ルネチーネの流れをはさむ緑の牧の上に、なだらかな丘に建て並んだグリンデ



影撮氏助伊村辻　む望をシルホルーラテウラスーログ'リよ上頂シルホクッレユシスーログ'



ルワルトの村が、バツと亂れた霧の間に見え隠れして、その草野のそこ、から、遠く、風の絶えまにはクラリオンがひいて来る。霧はしきりなしに飛んで、脚もとにすく〜と、梢を並べた樅マツの森の頂さへ、見てゐる中に、す〜つと吸ひ取るやうに掻き消されて、見る〜私達の立ち止つた木立の奥まではびこつて来る、その木立には、風になぶられて、垂れ下つた下葉の、露にしつとり濡れて、應揚にうなづく樅、落葉松の、入り亂れた脚もとに、なつかしきはあはれ、横臥して、露に埋れたカムバストラの紫である。私達は花と、もに、露を旅服の襟に挿して、また山路に深く分けて入る。

崖路を登りに登つて、木立が盡きると、雲は深いが、左はメッテンベルクの頂らしい、岩の崩れに雪の積つた急な崖が、雲から逆落しに、細徑の上に覆ひかぶさつて、右はクレヴァースの多い、アイスメーヤのすぐ向うに、雪も氷もはじき飛ばした、アイガーグラート (Eigergrat) が屹えてゐる。ややなだらかな、山の斜面に、紅紫とり〜に彩られた、花野の上に、ベールエックのホテルが望まれた、そのベディクラリスの紅の上に。

### ベールエック (Bäregg)

着いたのが、一時十五分前、板敷の食堂に荷を卸ろすと、焚火にあたつて、汗と雨で、びつしより濡れた着物を乾かしながら晝飯にする、窓からは、アイガーの直下、アイスメーヤに碎け落ちた氷の山が、手に取るばかり近いが、上は、赤く崩れたギザ〜の岩角が、雲の間に隠見するだけで、千六百五十米突のこの宿も、谷底に沈んだやうにうす暗らい。雨は尙ほ窓をかすめて縦横に降りしきる。簡単な晝飯は、すぐに用意された、が、雨はますます〜激しくなつて、シュトラールエックの小屋までの四時間は、この降りでは一寸こたへる、それに雨上りでは、折角着いたところで、明日の登山は見込みはないから、一同相談の上、このホテルに一泊といふことになつた。ホテルとはいかにも體裁

はい、が、建て物からしてすでに小屋で、天井の低い、建てつけの悪い、寢室と名づけたのが、二階に六つばかりあるだけで、グリーンデルワルトから、日歸りに遊びに来る客はあつても、大降りにも出會さなければ、泊り込むものは殆んど無いさうで、宿帳を開けて見ても、知つた名前はほとんど見當らない。取りあへず、二階の片隅みの一室に這入り込んだが、傘からかさの下でも、潜つてゐるやうな雨の音が氣になつて、また、食堂に下りて来る、入口に出ると、南の風がなかく強く、夕立のやうに小屋を目掛けて、土砂降りに降つてゐるが、空はいくらか明るくなつて、アイガー、グラートのズイクザックは、この時、明らかに仰がれた、トレーガーの爺さんは、明日登つて来る約束で、村に引きかへず、刻煙草をもう一罐買つて来て貰ふことにして、扱てストーブを圍んで、落ちついてふかし初めた。倫敦でもさうだつたが、何が面白いつて、國にゐる山連の噂ほど、面白いものはない、小島君や梅澤なんか、こゝにゐたらどうするだらうなんて、質問は極めて簡單だが、想像の結果は大それたもので、やがて手紙になつて本人の手許に舞ひ込む時分には、こつちではどうの昔に忘れてしまつて、それからさんでもない頃に、素敵に憤慨した返事が來たりして、何を一人で怒つてるんだらう、大方神經衰弱にでもかゝつたんだらうなんて、また先生方は憤慨の種が増える。またそこが何とも云へぬ面白さで、幸ひ今日も、もとより用事はなし、相當に面白い材料がそろつて、御茶がすんだら、手紙でも書いてまた一つ口惜しがらせて見やうぢやないかなんて、怪しからん相談が成立する時分には、天氣もよほごなほつて、雲は厚いが、雨はもう小降りになつて来る。

そのうちに、外ががや／＼して、やがて登山家の一行が下りて來た、脊負つてゐるロープや、リュックサックから雫がぼた／＼たれて、見るから佗びしい濡れ姿、グリムゼル、ホスピツから、ウンテラールグレッツェル (Unteraar Gletscher) を溯つたが、シュトラールエックで病人が出來て、雪の降るのに二日半も滞在した上、病人をのこして今朝小屋を發つたが、雪があまりひどいので、シュワル

ツエックの小屋に晝過ぎまでゐたのだと云ふ、小屋の附近には、雪はかれこれ、尺近く積つて、これからの路も雨でなか〜難儀だなんて云つてた、そのうち仲間の一人が宿帳を見てゐたのが、私達の方をむいて、失禮ですが、ドクターはどなたですかつて聞いた、近藤君はたちが悪い。おい、ドクター、御用だよ、なんて澄ましてゐると、例の登山家は、一寸他處行きの顔をして、實は、先刻おはなし申しました通り、友達が腹痛で苦しんで居りますので、是非どうぞ御診察をつて掛け合ひだ、懐中には、日に焼けない御まじなひのグレッツェル、クレーム、それからコニャックは三本持參に及んだが、いくらドクターと宿帳に書いたつて動物の薬はついで感つた覺えがない、その由つぶさに言上いたすと、すつかり失望してしまつて、はたの見る目も氣の毒であつた。

雨はもうさつぱりと上つて、日こそささないが、表へ出ると、グウェヒテン (Gewächten, 3169m.) の岩角から、宿の屋根に落とす草原に、雨を浴びた山草の美しさ、私達は踏めばこぼれる露を分けて裏山に細そ〜とつ〜と小徑を、上へ〜と登つて行つた。

眼に映つるのは、山を埋めたアルペンローゼンの紅である、そして暗緑の小さな葉の重なり合つたあひだには、空色の龍膽 (*Gentiana acanthis*) や、名は知らないが、白馬アサツキのやうなアリウム、と、ハクサンイチゲ (*Anemone narcissiflora*) や、ゲウム (*Gaun montanum*) が一面に咲き亂れてゐる私達は知らず〜、小山の頂まで來た、宿はもう急な斜面に遮ぎられて、眼下にはアイスマーヤのひび割れた氷河と、そのすぐ向う側に、私達が登れば登るほど、高く〜せり出して行く、アイガーグラートの岩角を見るばかりである。草野の頂は、やゝなだらかに南へ開いて、そこに横はる岩の蔭に、黄金色のアルニカ (*Arnica montana*) が立派に咲いてゐる。二人とも、その大きな、灰色の地衣に覆はれた岩の上に腰を下ろして、じつと氷河の南を瞰下ろした。

アイスマーヤは、この山の麓から左に折れ曲つてをるが、シュレックホルンの方面は、な〜めに落

とすグウエヒテンの裾に遮られて見えない、私達の正面に、もうオレンヂ色に染められた夕空にきつと聳えて、氷河の南を限るのは、メオンヒから遠くフィンシュテラール、ホルンへつゞくフィーシェルグラート (Fischergrat) で、たつた今、雲の中から湧き上つた、オックス (Ochs, od. Klein-Fischerhorn 3905 m.) の、三方から削りとられた氷のアレットが、私達にはもう、山岳であるとは思へなかつた。雲を雲と仰ぎ、今までは流れをたゞ、渦まく水と感じた私にも、人格化された山を味ふ、詩人の心から離れて、なほ、何もものか力強く、胸にひやくのを覚える、空は静かに晴れ曇りして、この大宇宙に屹とした高山の思ふがまゝに、地を離れて、雲は、霧は、湧くと覺えた。

ゲウムの花の露にぬれて、斜面を南へ下りると、山の凹みに幾群の牛が放してある。さつきまで、幻聴と疑つてゐた、柔かいものゝ音は、やはりそのクラリヨンの響であつた。私は後の世があるかないか知らないが、もし有るならば、今と同じ境遇に生れたい、然らずばむしろ、いかなる階級に於ける人間の種類をも御免を蒙むつて、雪解の野にアルプの雲を仰ぐ、あゝいふ牛に生れ代りたい。クラリヨンの響とともに、日は次第に黄昏れて、ゲンツィヤナの花は、もう、これもく稠んでしまつた、私達は牧夫のやうに煙管をくわへて、阪路をそこく下りて来る、山の夕暮は膚に沁みて、ホテルの窓ごしに、赤い火のちよろ／＼燃えるのがなつかしい。私達はそのまゝ、表の椅子に腰かけて、アイスマーヤの氷河を瞰下ろすテレースに、静かな夕を味つた。

西北の空は、日の沈んだのち、湖のやうに静かに晴れて、氷河の開く向うには、グリーンデルワルトとゴブリエンツの湖水の間を限る、ファウルホルンやシンニゲブラットの、雪に新しく飾られた岩山が、ミラッシュ屋氣樓のやうに見わたされる、それ等のふもとは、雪に交じる緑が次第に濃く、樅とも思はれる木立から、グリーンデルワルトの斜面についてゐる。私達は、質素な晩飯が終ると、またテレースの小さなテーブルを圍んでカフェーを命じた、谷はもう暗くなつて、グリーンデルワルトの村には、あちこち



燈が灯された、私達はやはり黙つて、いつまでも、この静かな景色を眺めてゐる、氣がつくと氷河につづくフイーシエルグラートは、灰色の夕闇に蒼白くは仰がれる、その左、オックスの西のアルトは、星明りか、それとも残んの夕映えが、まだあの空中にたゞようてゐるのか、螢光を放つてゐるやうな、物凄光が望まれた。

グリーンデルワルトの村の灯は、ちら／＼また／＼いて、その度ごとに、燈火の數が増してゆくやうに思はれる、もう風も吹かない、夜は靜かに深から湧いて、この一軒家を包んでしまふと、晝は氣にもどめなかつた、アイガーグラートの絶壁の、氷を割つて沁り落ちる小瀧の、かすかな響が、何か意味のある、私達にも了解のできさうな、話聲のやうに聞きとられた、その言葉は、或る時は耳もごにそつとさ／＼やくやうに、とするとまた森を距てた行人の聲のやうに遠のいてゆく。

私達が、ほか／＼する食堂のストーヴの側をぬけて、怪しげな板張りの梯子段を恐る／＼上つて、寢室と定められた室に這入つた時は、もう八時過ぎであつた。荒造りの天井の低い、板敷には別に何も敷いてない粗末な室に、二人とも、はすつかげに向き逢つた寢臺に寝ころんで、別に話をするでもなく、ぼんやりした時は、いやに陰氣な感じが起つた、ナハト、ティッシュの上には、たゞさへ暗い蠟燭が妙にため息をついて、その度に、私達は寢床ごと、クレヴァースの中に沈んでゆくやうな氣がする、二人とも申し合せて、思ひ切つて燈を吹き消すと、カーティンも無い硝子窓から、蒼い星明りが、吸ひ込まれるやうに流れ込んで來た。

眠らうと思つて眼を閉ぢても、頭は變にさえて來て、遙かな、土の底に響くアヴァランシュまで、寝るな／＼、寝ればもう最後だぞと嚇かすやうに思はれてならない。

今夜もやはり白ら／＼明けになるまで、まんぢりごもしなかつた、アヴァランシュは時には耳元で續けさまに、または遠のいて遙かな國から響いて來る。しばらくうご／＼して、本當に眼が覺めたの

は六時頃であつたらう、山の朝は仲々寒むい。

晴れてはゐるらしいが、狭い窓の向うは、鼻がつかへるやうなアイガーグラーートの絶壁で、南へ入り込んだアイスメーヤに面した、こゝは、朝日をグエヒテンの連峯に遮ぎられてをるから、夜はどうに明け放れても、日の光りを見ることは出来ない。七時過ぎに、やうやく床をはなれて、旅服にあらためると、すぐ食堂に下りて来た、表へ出ると、晩秋のころに見るやうに、朝の空気が冷やつとこたへて、身體がひき締まるやうな気がする。空は名残りなく晴れ渡つて、前の細道を左に下りると、露を浴びた山草をわけて、アイスメーヤのほごりに出た。南の空を限るフイーシエルグラーートは、朝日を一杯に受けて、蒼空に屹とぬけ出してゐる。アイガーグラーートからメェンヒョッフホの方面は、グレヴァースの上に片蔭が出来て、赤黒く崩れた岩の破片が、氷河の上になうづ高く盛り上つて見えるのが、空気の澄んでゐるためか、手にとるやうに望まれる。

カフェーコムブレに腸詰ワルストを食べて、また表に出ると、昨日のカウフマンが、約束の煙草を買ひ込んで村からてくく登つて来た。九時五分にいよくべールエックを發つて、細道をだらくくに南に下りると、氷河につき出した岩角を左りに曲つて、雪解けのじくく濕つた草原から、すぐ急な岩山に取りついた。

### エーデルワイス

草には人の足跡がある、かすかながら、細道はくねく折れ曲つて、岩から岩に涉つてゆく。

昨日の暮れ方に、山上から瞰下ろした、牛小屋の下を過ぎて、どこまでも氷河に沿うて、南へくくと登つてゆくと、急ではあるが、別に苦しい道ではないが、十二キロに餘るリュックサックが、脊負ひ慣れない肩をひいて、登りになると随分息が切れる。

ガイド達は、感心に少しも休まない、コツリ、コツリと、アルペンシュトックを衝き立て、二人は先きに、カウフマンは一足遅れて、私達の後について登つて来る、アイスマーヤは間もなく二つに枝分れして、今私達がついて行く氷河は、オーベレス、アイスマーヤから、最後にフィンシュテラール、ヨッホ (Finsterar-Joch) となつてゐるが、對岸に折れ曲つたもう一つは、フィンシュエルグラートの北に横はる、フィーシエルフィルンで、今、私達の正面には、そのクレヴァーアの多いフィルンから、一段下の、このアイスマーヤに落ちる、花甘藍シラフネーのやうにゑみ割れた氷河で、中ノ島と云つた形に、黒く盛り上つた岩山が、地面にあるハイセプラッテ (Heisse Platte) であらう。

天氣は極めてよく、私達は、高く澄んだ蒼空の下に雪に覆はれて長がく、その空につゞく氷河の麓に、徒らに點せられた、黒子のやうに思はれる。風は此の時死して、岩に咲く山草の、とりくゝに美しいのも、露も重げにうなだれて、まだ、夢から覺めぬと見える。氷の上、彼のアイガーの頂には帽子雲がかぶさつて、いつになつても、晴れる様子は見えない。が、その雲を高く覆ふ蒼空には、磨きをかけて、一點の曇りもない。

昨日下りて来た人達のであらう、入り亂れた足跡は、たびく積雪の上を涉つてゆく。右は、時々近くはなるが、その上には下りずに、氷河を蹴下ろして、鋭い岩山の裾を縫つてゆく。と急に、先登のフオイツが、何か一大事でも話すやうに、聲をひそめてさゝやいた、言葉は分らない、指さした方を見ると、岩の上を、ちよろく驅けあるく茶色の動物が見えた、夏毛のフェレーである。小心な動物は、敵が近くでも思つたのだらう、私達の話聲を聞くと同時に、黒曜石みたいな眼をして、ちらつとふりかへつたと思ふと、這べるやうに、もう岩の蔭にもぐり込んでしまつた。

宿から四十分ほどたつと、ベーニセック (Bäniseck 1773 m.) の岩角に來た。今まで、東南について來た氷河は、こゝから眞南に折れ曲るので、私達の前を遮ぎる岩角に、打ち込んだ鐵棒にかちり付

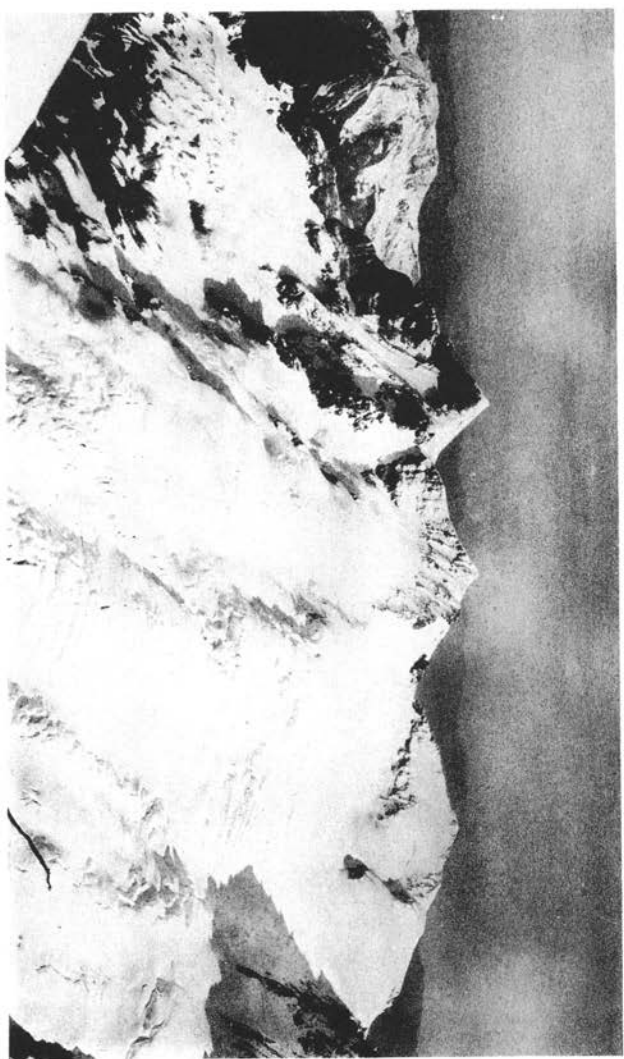
◎スウイス日記 辻村

一一二

いて、漸く頂上まで来ると、オーベレスアイスマーヤの上に、グロース、シュレックホルンが、殆んど頭の上に仰がれる。グロース、ラウテラールホルンは、その背後に現はれたが、この兩山岳をつなぐ山陵、——明日の朝、私達が攀ち登らうと云ふ斜面は、こゝから望むことは出来ない。

リュックサックを草の上に投げ出して、私達はペーニセックの頂に近い、草の上に休んだ。後ろは切つ立ての岩壁で、すぐ下は、氷河まで、殆んど直立の岩山になつてをる。草に寝ころんで、すばすば煙草をふかして居たフォイツは、その懸崖に、一群のエーデルワイスを見出した。スウイスの雪を憶ふものが、ヘルヴェツィヤにも、忘れることの出来ない、そのなつかしいエーデルワイスは、こゝに、と指すことの出来る懸崖に咲いて居る。アルプの旅人が、——幾億と知れない、——いろいろな心をもつて、山を仰ぐ幾億の旅人の、果して幾人が、この花を、手づから摘むことができるのだらう。夏になると、停車場の賣店や、通りのこゝかしこに店を張つて、花を賣るものが澤山あるが、これ等は云ふまでもなく、麓の庭に培れたので、手のとやく限りは、根を採ることは禁せられても、大抵取り盡されて居ると云ふ。私はいつも、その氣高い花を憶ふときに、これは手の届かない、高嶺の花であると思つた、——そのエーデルワイスの群は、氷河にのぞむこの、懸崖に咲き亂れて居る。

私は二人のガイドに、身體に縛りつけたロープの端を、しつかと押へてもらつて、絶壁の上にのり出した。岩の角から頭を出すと、遠い下の方に、アイスマーヤの、横にいくつとなく口を開いた、クレヴァースがのぞかれた。カウフマンは、この時私の足を引つぱつてくれる、無理に乗り出して、花に手をふれた時は、只もう無闇にうれしかった。あちこち捜し廻つて、漸く十一本のエーデルワイスを摘んだら、頭に血が下つて、眼が眩らむやうに覺えた、もう少し下の方にも、一群れあるが、これは宙乗りをやらなければとても採れないから、くわへ煙管で待つてる近藤君に、お譲りすることにしまして、一先づ上に引き上げると、人の氣も知らないで近藤君は、採るなら君が行くさ、妻子のあるもの





がする仕事ぢやないつて答へた、そんなら、いつそ山登りなんか止めればいゝのに。

私は花を襟に挿して、残りの十の、まだ朝露にぬれたのを、日記の間にはさんで、もう今は世に亡  
い、高野兄の愛嬢に贈つた、墓前に、花はまだ朝露にぬれてゐやう……。

何か人聲がすると思つたら、向うの岩角から、四人づれで下りて来る、今朝シュトラールエックか  
ら來たさうで、聞いて見ると、昨日噂に伺つた、御病人の連中であつた。腹痛氏は晝かきである、草  
の上で挨拶がすむと、悪い癖でスケッチブックを取りあげたから、これは物騒と、一同出發と云ふこ  
とにする。

路は仲々悪るいが、歩けさうもないところには、鐵棒があちこち、手がゝりに挿してあるから、別  
に困るほどのこともないが、日がちり／＼照りつけて、日影はさすが涼しいが、登つてゆく間は、例  
の十二キロが仲々の荷になる。

相變らず、登つたり下りたりして、いつまでも崖の中腹ばかり通つてゆく。漸くシュワルツエッ  
ク (Schwarzeck) の、小屋に着いたのが十一時四十五分、こゝで晝飯の用意をした。

小屋は、今度私達が泊らうと云ふ、シュトラールエックの小屋が改築されてからは、古さも古し、  
大きさから云つても、山に登る上から云つても、今では餘り重要なものではない。屋根に石をのせた  
平家で、二人の男が、土間の濕喰を塗つてるところだが、その半分はベッドに、半分はそのまゝ、土  
間に使ふらしい。湯をわかして貰つて、珈琲を入れて、冷肉にパンとチーズ、山に這入ると、三度と  
も同じやうな食べ物で、珈琲が御茶になつたり、スープになつたりするので、辛うじて、朝晝晩の區  
別をつける。

シュトラールエックの小屋が出来るまでは、シュレックホルンの登山者は、こゝを發足點としてを  
つた、カステンシュタイン、フィレン (Kastenst.-Firn) の落ち口に横たはる、大きな岩山の上に建

◎スウイス日記 辻村

一一四

てられて、すぐ後ろは、北にクライン、シュレックホルン、それから、最高峯の、グロース、シュレックホルンにつながつてゆく鋭い山陵の間には。ネッシホルン (Näsihorn, 3749 m.) が屹えてゐる。この小屋の附近で、一番眼をひくのは、オーベレス、アイスメーヤの對岸にそびえた、氷の障壁の眞上に、更らに高く、空に秀でたオックスの英姿である、そしてその障壁は、オックスから幾つも小さな孤を畫いて、アガシホルン (Agassihorn, 3956 m.) から、四〇八九米突の、フギザッテル (Hugi-sattel)、それからすぐ、最高點のフィンシュテラールホルンとなつて、その以南の山岳は、すべてこれ等の障壁にかくされて居る。

今まで登つて來た方面は、クレヴァースの多い、ウンテレス、アイスメーヤの途中から、アイガーの空にかけて、むくくした雲が湧き上つて、見るく蒼空にはびこつてゆく、その綿雲の、目をうけたところは、雪よりも強く反射して、日影は鼠が、つた陰氣な蔭が、今にも夕立でも持つて來さうに思はれる。然し、雲は高く登つては消え、消えては後から巻き上つて、いつまでも同じ高さに湧きかへつてゐると見えて、晝の日は、うららかに小屋の中までさし込んで來る。

食事がすむと、もう近くなつた、今夜の宿に向つて出發する。

シュワルツェックの、石片に覆はれた岩山から、足跡は、斑らに雪の消えのこる石から石へ飛び飛びに下りて、どうく、氷河の上に出てしまふ。私達は、用心にシュタイゲルアイゼンをつけた。氷の上は、新しい雪に覆はれて、グレッツェルグラス無しでは、もう眩しくて少しも歩けない。雪は柔く、一足ごとに踏んこんで、頗る歩きにくい、氷河のなるたけ端の方を通るのだが、左はシュレックフィレンが、いろく形の大岩石に距てられて、枝に別れて落ち合ふから、時によると、何だか、アイスメーヤの眞中を、歩いてゆくやうな氣がした。私達の登る路には、大きなクレヴァースは無い、然し右左には、積雪の下から、蒼く口を開いたシュバルトヤンクが、絶えずのぞかれる、そして足跡



のあるその氷河にも、雪の間に小さな穴が澤山あつて、こゝろみに氷の破片を落し込むと、響尾蛇のやうにかすかに、氷の擦れ合ふ物音が、深い／＼氷河の底から、うす氣味わるく響いて来る。

注意に注意して登つてゆくと、遠い岩の上に、シュトラールエックの小屋がのぞまれた。此の時アイガーの雲は、いつの間にか頭の上に覆ひかぶさつて、アヴァランシュだと思つてゐた鈍い物の響を、お、遠<sup>フェルチス・シュレン</sup> 雷！と氣がついた頃には、雲はもう眞白ろな霧になつて、ひた／＼と私達の後ろから包みはじめた、そして間もなく、氷と雪と、眞白ろな霧の間を、サクリ／＼積雪を踏んで、シュトラールエックの岩の上にたどりついた時分には、尾根のうしろに、私達には黒く見えた深い蒼空にぬけ出でた、グロースシュレックホルンの山陵も、もう霧の間にかくれてしまつて、汗ばんだ下着まで、冷や／＼しみ透るくらゐ、寒い風が、氷河の裾から吹き上げて来た。

霧はますます濃くなつて来る、氷河をはなれると、がら／＼の岩の間を登つたが、その大小に錯雜した、岩の透きまに獅噛みついた、サクシフラガ (Saxifraga) の、星のやうな花をまたいで、十五分も登ると、立派な小屋の裏手に出た。シュトラールエックのグループ、ヒュッテである。

### シュトラールエック

シュワルツエックを發つたのが、一時十分前であつたから、こゝまでは、ざつと一時間しかかゝらない。小屋に這入ると、何より先きに、着かへを取り出して、汗にぬれた下着をぬぎ更へた。霧は絶えまなく小屋を包んで、小さな二重窓からは、眞白にたいよふものゝ外は、何も見えない。ファイツが床板を開けて、椽の下ホルツカッセルの薪小屋から、大束の薪を持つて来る間に、ヘッスラーは、テーブルの上に、腸詰や冷肉を並べて、御茶の仕度に取りかゝつた、肉で御茶を飲んでも、山なればこそ腹に耐へない。室は、二つのストーヴを真中にして、廣さは十畳もあらうか、大きなテーブルが二脚、板張りの壁

の下には、腰掛が取りつけてある、二重戸の入口を、岩の上に下りると、シュートラールエックの氷からしぼれる水が、池のやうにたゞへてゐる。カウフマンはそれを汲んで、パチ／＼勢よく燃え上るストーヴにのせた、煙突は天井をつきぬけて、寢室になつてゐる二階の、廣間を温めるやうになつてゐる。食堂のうしろには、婦人の寢室があるが、廣さはやつと八畳敷ぐらゐで、通路で二つにしきられてゐる。

室には、食器は一通りそなへてあるし、隅の書庫には、英獨佛の聖書をはじめ、小説や雑誌などが可なりある、天井には、ベルンで見たやうな、擔荷が二つかけてあつた。小屋は、スウイス山岳會ベルン支部に屬して、千九百十年八月の建設、その標高、二千六百九十一米突で、會員は無代だが、然らざるものは、泊り賃二フラン、薪代は何れにしても、四キロの束が三フラン八十センチ、二キロの束は一フラン六十センチ、チーム拂へなんて、いろんな注意がしてある、入口に金箱がぶら下げてあつて、代金はそれに投げ入れるやうにしてあるが、此んな眞似まで日本でしたらなんて、心細い心配が起らぬでもないが、これはガイドの手前、暖氣にも出さなかつた。

備へつけの、毛の上靴に履きかへて、壁にかけたジークフリートの大きな地圖など見てゐるうちに、たちまち御茶の用意が出来る、簡単な食事でも、適度の運動と、標高も少しは手傳つて、なか／＼甘く味はせる。表は相かわらず霧がうづ巻いて、シュネーファンが、折り／＼岩の上を飛び廻つてゐた。御茶がすむと、表に出て口笛なんか吹きながら、岩の上を歩き廻る、折り折り霧が絶えると、南に高くアガシホルンと、その後ろに、フィンシュテラールホルンが表はれる、裏のグロース、シュレックホルンの方面は、いつまでも霧に覆はれて、その下に牙のやうに口をあいた、シュレックファイルンのクレヴァースが、透明な緑を含んで、何んども云へない氣持ちがする、明日私達が登るのは、この氷河のふちを登るのだが、どう行つたらいいのか、まるで見當がつかない。

空は霧ながら、眞白に冴えて、眩しいくらゐだが、そのまゝ晴れるでもなく、下手から吹き上げる霧につれて、さら／＼と粉雪が散つて來た。室に這入つて、窓からのぞいてゐると、芝居の舞臺で見るやうに、雪は殊さらに、小屋を目掛けて降り込むやうな氣がする。たちまちの間に、窓には綿の粹でもはめたやうに、眞つしろに雪が積つて、岩の上にも、もう、斑らに白いものが見渡される。此の雪の中を、カウフマンは、二十五フランの日當と、二フランのティップを貰つて、グリーンデルワルトへ下りて行つた、彼が入り口の扉を開けた時には、ストローヴに暖められた別の世界を呪ふやうに、雪は渦まいて板敷の上に亂れ込んだ、が、二重扉がびつたりと閉まると、點々と露を残して、忽ちに消えてしまつた。

私達は暖い室の中に、別にする仕事もなく、粉雪に暮れてゆく山の静けさを味つてゐる。アヴァラシシュは一時間に三四回、必ず、遠く近く響いて來る、そしてごーつと尾をひいてゆく響が、あちこちの山岳に反響して、だん／＼かすかに消えてしまふと、小屋はものゝ響から取り残されたやうに、前よりもかへつて寂しく感ぜられる。

室の隅には、危険信號用の旗がある、晝はこれを掲げるか、又は棒の先きに着物をつけて、一分毎に上げ下ろしする、夜は備付けのランターンを灯すことになつてゐるが、然しこゝは、村からは見えぬ、いざとなつた時、信號が役に立つかどうか、頗る疑はしいと思ふ。

窓の外に足音がしたと思つたが、その中一名のガイドをつれた、若い男が這入つて來た、先客のあるので非常に喜んだ様子であつた、彼はフランス人で、今朝グリーンデルワルトを發つて、明日は後ろのシュトラールエックを越えて、ウンテラール、グレッツェル (Unteraar Gletscher) から、グリムゼルに出るんだなんて云つてた、こゝで私達は、大分珍らしい話を聞いた、それは塊露の宣戦布告である。塊國皇太子がセルヴィヤで殺されたことは、私がベルリンを出發する前、號外で承知した、そしてそ

## 山

## 岳

れ等の國交が、危機にせまつてゐることは、その日の新聞に、盛んに書き立て、あつたが、いよく本式に戦争になるなんてことは、餘りかう云ふ問題に興味を感じない私には、まるで考へもつかなかつた。塊露が開戦となれば、當然、獨佛は動員するに違ひない。この新聞は今朝出がけに村で買つて來たので、途中で讀んでびつくりしたが、折角登りかけたものだから、大急ぎで一廻りして、グリーンデルワルトに戻つたら、ホテルに置いて來た妻子をつけて、すぐ國に歸るつもりだ」なんて、心配でもあるし、と云つて山登りもやりたしなんて、兩天棒をかけた心理作用が、人のよささうな顔に表はれて、かう云つては濟まないが、見た眼には頗る面白い。

國際關係は、此の際いづれにしても、旅人の表情の外、餘りに私の感興をそゝらなかつたが、さし當り、一番氣になるのは、小屋を圍んで降りしきる吹雪である、がしばらくするうちに、窓の外は眞白ろになつて、明日の登山はとても不可能となつてしまつた、さう事が定まれば安心である。

粉雪の中に日は暮れて、風に亂れて、窓に散るさら／＼雪は、靜かな、しかし何となく頼よりの無い感じを、旅人の胸に運んで來る。そして暮れると間もなく、マッギを溶かし込んだスープ鍋を圍んで、佗しい晚餐は、荒木の食卓の上に開かれた、スープの外の食べ物は、晝も夜も變りはない、しかしその味は、いつも變りない食慾を興へた。どうせ此の雪では、明日は晴れたにしても登山は危険だから、小屋にもう一日滞在と腹を据えて、食後は、咖啡にコンニャックを入れて、煙草をふかしながら話し込む。室は暖かいが、外の寒さは非常である、ほかに御客はなし、私達三人は、婦人室の兩側を占領し、ガイド達は二階の寢室に泊つた。

蠟燭を消して、いざ寝やうとすると、例の癖だが、眼が冴えて寝つかれない。窓にさら／＼雪は絶えず吹きつけて、一夜の中に此の小屋が、このまゝクレヴァースに沈んだやうに、埋りはしないかなんて、下らない心配が、頭の奥にきらめいて來る、と、クレヴァースの緑いろにすぎ透つた、物凄

有様や、その氷の壁が一時に崩れ落ちて、吹雪のやうに巻き上るアイスアヴァランシュやら、今迄見たり聞いたりした、山登りに伴ふいろ／＼の危険が、渦を巻いて頭の中に湧き上つた。

ストーヴはいつの間にか消えてしまつて、氣息が冷や／＼感ぜられる、備付けの毛布が充分あるから、氣温の冷えてゆくのを、厚い毛織りに遮ぎつて、スウェーターをぬいたまゝの旅姿で、海老のやうに丸まつて寝た、さん／＼寝返へりうつて、とろ／＼と寝ついたのは、無論真夜中過ぎであつたらう。ふと眼が覺めた時は、みんなおとなしく寝静まつて、まだ盛んに窓を打つ、吹雪の音ばかり、骨に泌みるばかりに響いて来る。マツチを磨つて見ると、二時半であつた、また毛布にもぐり込む。

四時頃にガイドが下りて来て、例の佛人を起してゐたのは、うす／＼承知したが、私達二人が起き上つたのは、もう七時過ぎであつた。あの連中は、もうどうに山越しにかゝつたと見える、雪は漸く止んだが、表は氣息がつまりさうな濃霧で、風は無いが非常に寒むい、ガイドはどうに、次の室に下りて来て、ストーヴには、ストーブでも掛けてあるらしい。私達はそれでも、毛布の中に丸まつて、中々起きやうともしなかつた。

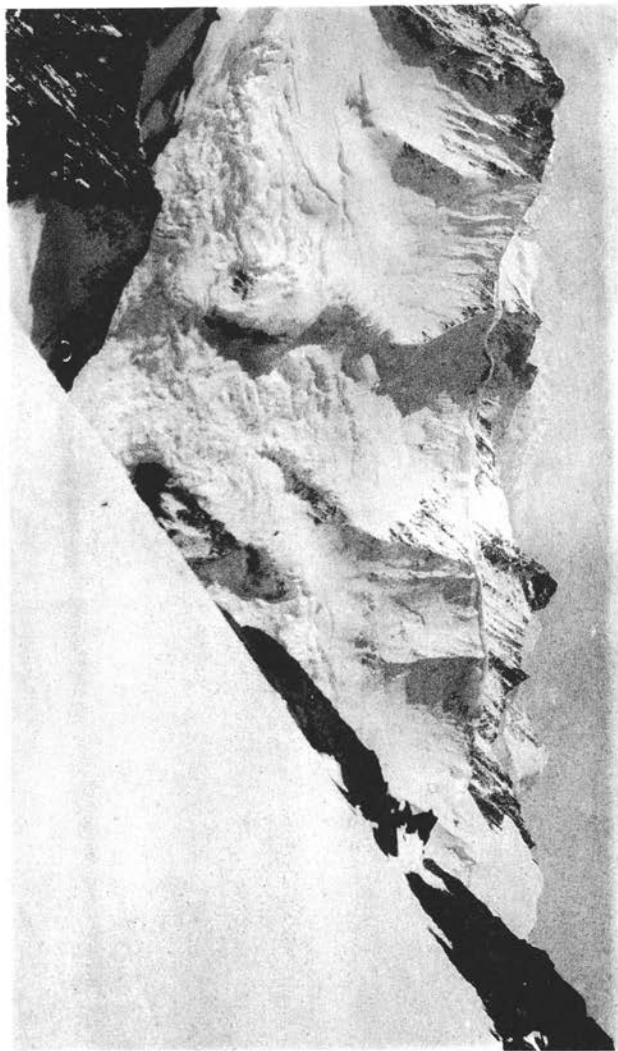
ヘッスラーが戸口からのぞき込んで、何だか天氣になりさうですつて知らせに來た、私達は漸やく起き上る、顔を洗ひに表に下りると、霧は淡いが、山は同じ色に眞白ろで、晴れてゆくのかどうかさつぱり見當もつかない。昨日の水溜りは、氷の上に雪がつもつて、ふちの方は、薄黄いろく滲んでゐるのが、氷河から滴たる爲めか、坦の粉を溶かしたやうに濁つてゐる。小屋の屋根は、綿細工みたくに覆はれて、昨夜の雪は四寸位は積つたらしい。室に戻ると、いやに顔がほてつて、かちかんだ指先きが氣持わるくむづ痒い。

朝飯はコンソメに、パンとチースで平げた。そのうちに窓の外は眩しくらゐに冴えかへつて、薄い霧ごしに日の照るのが、電燈の火屋<sup>キヤ</sup>でも見つめるやうな氣がする。私達の靴は、もう油にてらて

らして、室の隅にかしこまつてゐる、これから明日登る準備に、雪を踏みかためめに、シュレックフィ  
 ルンへ出かけやうと云ふので、日は照り初めたし、重い荷は残らず小屋に遺して、白のスウェターの  
 身軽なるなりで、寫真機と、幾巻きかのフィルムを携へたまゝ、小屋の裏手から、なそひに落とすフ  
 イルンの上を登りはじめる。丁度十一時であつた。

グレッツ チェルグラスをかけて雪を見ると、肉眼に見えないいろ／＼な細點が、顕微鏡をのぞくやう  
 に浮き上つて来る、そして山の輪廓が、恐ろしいほどはつきりして来る、その山々のうちに、シエト  
 ラールエックを訪れたものゝ、先づ第一に驚ろくのは、彼のグロース、シュレックホルンであらう。  
 小屋の後ろの雪の斜面は、急な岩角でくつきりと立ち切られて、その切り岸の崖の底は、シュレック  
 フィルンから、ぐつと一段低く落ちこんだ氷河で、私達はその崖のはづれを、岩をつたうて右に、上  
 へ／＼と登つてゆく、すぐ眼の下になつた氷河には、幾丈と知れない氷柱が錯雑して、その間は、  
 もうクレヴァースばかりと云つてよい。

もう十二時に近い、日は新雪をやけに照りつけて、すでに岩の上は、耐らえきれずぼち／＼滴り落  
 ちる雪解けの水に濡されて、足が／＼は極めて悪るい、此の絶壁の上からは、シュレックフィルンか  
 ら落ちる氷河の上とは、直立の断崖でたちきられてゐるし、またよし近づけると假定したところで、  
 その氷河には、十五分目に一度ぐらゐの割りで、すばらしいアイスアウツランシュがくり返へされて  
 ある、随つて登山者は、どこまでも崖の上を岩にすがつて、「岩登り」<sup>クラッククライ</sup>をくりかへさなければならぬ。  
 こゝから仰のくと、正面にはかの氷河のすぐ上が、やゝなだらかなフィルン (Schreck-firn) につゞ  
 いて、そのうしろを、ぐるつと取り圍む障壁は、有名なクーロアル (Couloire) となつてゐる。私達は  
 氷の上に腰を据えて、じつとそのすさまじい絶壁を見あげた。







## グロース、シュレックホルン

クローアルの上は、群峯の最高點、グロース、シュレックホルンから、ギザ／＼のアルトで、右のはづれに屹えた、グロース、ラウテラールホルンについでゆく、そこには多分、明後日登ることになるであらう。シュトラールエックは、その左の端から、麓の小屋の方面に引く山陵で、私達はこの直下を、左には深い底の方に、シュレックフィルの氷河を見て、ぐるつと大廻りにまわつて、彼のクローアルの下に行くのであつた。

今まで雪の上に點々と残された足跡は、岩壁の下で終つて、私達の登るシュトラールエックの方へは行かずに、左りに切れて尾根づたひに、シュワルツエックの方向に消えてしまつた、多分曉け方の霧で、山越しを斷念したあの佛人は、グリンデルワルトに歸つてしまつたのだらう。

岩<sup>クレッチ</sup>登はかなりつゞいた、然し大した苦しみは感せず、また、よし苦しいにしても、面白さに打ち消されて、樂々と私達は、ガック (Gack) と名づけられる岩山の、雪に覆はれた絶頂に達した、ロープで一同數珠つなぎになつてゐたのは云ふまでもない。こゝで、強く反射する積雪の上にロープを敷いて、私達は脊負つて來た晝飯をはじめた。

シュトラールエックホルンはもうすぐ上で、その鞍部を越して、反對に南に下りると、フィルの終りは殆んど直角に折れ曲つた、フィンシュテラール、グレッツチャーから、ウンテラール、グレッツチャーとなつて、グリムゼルへつゞいてゆく、これはグリンデルワルトから通ふ、比較的容易な路であつて、ガイド一人つれて、二日がりの山越しでゆかれる、その山のこつち側が、急なフィルになつて、もうこゝからは遠のいて見えない小屋の上に落とす、牙のやうな山陵にさえぎられて、フィンシュテラールホルンは見えないが、アガシホルンから段になつて、ぐつと低く、三千七百米突から五十

米突ぐらゐな高低しかない長いアレトは、アイスメーヤにながく平行して、對岸にいくつのクローアルを形づくつて、オックスにつゞいてゐる、アレトの後には、これも私達の計畫にあるグロース、グリーンホルンや、グロース、フィーシユルホルンが屹えてゐる、それからすつと右によつて、アイガーとの間に、メモンヒが現はれたが、ユンクフラウは前山に隠れてこゝからは見えない。

アイスメーヤの終りは、低いグリンデルワルトの谷は見えずに、その向ふのファウルホルンの連脈が、積雲の間に見えかくれする。氷河の右岸は、メッテンベルクから、クラインシュレックホルン、それからネッシホルンで、そのすぐ上がグロース、シュレックホルンとなる。

かう云ふ山々をくりかへし撮影して、また登りはじめた。午後の日は柔く雪を融かして、一足ごとに膝までぶくく沈んでしまふ。日は強く反射して、昨日からの雪焼けで、顔はたゞれるくらゐにびりりする、今、私達の進む正面に、平らなシュレックフィレンが擴げられたけれど、切つたてのクローアルの境には、二條の大きなシュバルトクが横つてゐる、どうしてあれを越すのかと、心配になつたからヘッスラーに聞くと、二條が入り違ひになつたところに、雪シュチーブリュック橋があるから、別に危くはないつて答へた。

私達はグロース、ラウテラールホルンの直下、三千三百米突と地圖に示した、シュレックフィレンの上まで来て引きかへすことにした。クローアルには、絶えず薄い霧が湧き上つては、濃い蒼空に消えてゆく、そしてその左には、じつとその霧の上に屹立して、シュレックホルンの鋭い岩角が、脚もこのフィレンに、蟻のやうに集まつた私達四人を瞰下ろしてゐる。

ふりかへると、フィーシユルグラートの背後、トールクベルクの上に、ユンクフラウがせり出して来る、私達はこゝから引きかへして、同じ雪路を、小屋の方に下りはじめた、踏みかへした足跡が高低になつて、時々つんのめつたりしてかへつて歩きにくい。山の急斜に、アヴァランシュはますます

すはげしくなつて、すぐ下のシュレックフィルの氷河などでは、二三十尺もある氷塔が砕け落ちて、水沫のやうな雪の粉が、私達のゐる崖の上まで巻き上つて来る。だん／＼下りて、例のクレッチェライを終つてから、小屋が遠い／＼麓の方に、ぼちつと指された。雪は二十度ぐらゐな傾斜で、シュトラールエックの麓をめぐつて長々と横はる。私達はロープをはづして、自由な身體になると、深い雪の上をまつしぐらに、小屋を目がけて迂りはじめた、私はいつの間にか、先登になつた、腰に躍る寫真機と一緒に握つたアルペンシュトックを後押へにつっぱつて、柔かい雪を蹶つて、ぐん／＼先きに下りてしまつた。

雪の傾斜は右に下つて、末はアイスマーヤに落ちてゆくが、その口元には、島の形に雪をめぐらした岩山が三つある、小屋はその最後の、一番大きな島に建てられてある、私は二番目の島の島まで迂つて来て、岩の蔭にちらほら咲き初めた、サキシフラガを摘みながら、みんなの下りて来るのを待つてゐた。

すぐ下のオーベレス、アイスマーヤには片影ができて、横にひ／＼割れた大きなクレヴァースが、まだ融けきれない新雪の下に口を開いてゐる、對岸の山陵、私が先きに、アガシホルンからオックスヘかけて、大した高低もなくつゞいてをると云つた、アレトの空に接した線は、眼の迷ひか、それとも實際薄い氷を透して、強い日が光るのか、空色よりはやゝ淡い光りが、例へば日向で光澤のある貝でも見るやうに、二重のアウトラインが畫かれてゐる。

オックスはむしろ氣味の悪いほど頭の上に近い。グロース、ファイシエルホルンは、いつの間にかその蔭になつてしまつて、こゝからは右よりにやゝ遠く、アイガーを望むだけである、その山頂に近く、日はもう傾むいて、ユバルトを含んだ淡い色が、瞰下ろす氷河の空に飽和されて来る、南には小屋の屋根の上に、フィンシュテラールホルンの鋭い鋒さきがつき出して、總ての山はそのうしろに

影をひそめてしまふ。遠くで呼ぶ聲がする。ふりかへると、ファイツと、少し後れて二人が、雪をこつて下りて来た、その斜面の上には、恐ろしい幻のやうに、鋼鐵で鍛へあげたやうなグロース、シュレックホルンが、半空高くがん張つてゐる、見れば見るほど恐ろしい山だ。

小屋に歸つてからも、私達二人は、雪にぬれた靴下や手袋を岩の上に干し並べて、またじつとその山頂を見つめてゐた、小屋の屋根からは、絶えず雪解けの水がしたゝつて、敷つめたごろた石にあたつてはぼち／＼碎ける、丁度春先き庭の雨垂れ落ちの小砂利に、淡い雪の滴が響くやうな、暢氣な調子が、あのいかつい山岳に、睨みつけられてゐる山奥の小屋と、何のかけかまひもない長閑なリズムをなしてゐる。

彼のヴェイツはハイランドの山を望んで、曾て驚怖の外に、何等の印象をも残さなかつた、蘇國民族の山岳觀を、不可思議と感じたが、草に寝て、紫だつた遠山を、原の彼方に眺めるのではなく、急流を涉り絶崖を攀ぢ、いく度か氷河を越えて、初めて、地の底から築き上げた山岳を仰いだ刹那、なほ恐ろしさのほかに、何等の感を胸に残しえたものが、果していづこにあつたらう、ありとすれば、それはまだ、山岳に對する經驗に乏しいのであるまいか、山に住む民族の歴史にも、又はそれをくりかへして山に入る旅人の心にも、——私には遂に疑問である。

山上の日は靜かに暮れて、私達はまた黙々として、彼の絶巔をながめてゐるうちに、小屋の窓をもれて、赤い燈が積雪の上を照らし初めた。

アルプスの旅行記に、マーティン、コンウェイ (Martin Conway) は、オーベルランドの山名をあげて、その名の優美なるを嘆賞したなかに、シュレックホルンのシュレックを英譯して、"Terror"と記してゐる。(The Alps from end to end.) が、彼れの譯は、"Berg des Schreckens"、として屢々くりかへ

された誤解であつて、Schnecken 又は Schicken は、Springen で、山頂の急に秀でたのを稱したのである、驚怖の意味ではない。

がいづれにもせよ山は依然として、その誤譯の通り、「怖ろしい山」である、千八百六十一年八月十日の午前十一時四十分には、サー、レスリー、ステイファン (Sir Leslie Stephen) の一行が絶巔に立つて以來、幾度の壯烈な悲劇は、その山頂に山腹に、絶えずくりかへされつゝ、今日に至つたのである。夕飯を早や目にしまつて、後かたづけが済むと、間もなく私達は床に這入つてしまつた。寒さは雪の昨日よりも一層はげしいやうに思はれる、寢室の小さな窓からは、星明りが蒼白く流れ込んで、私達の氣息まで、ほらうつと白く見え初めた、風は少しもない、只しーんとした山の奥に、アヴァランシュは、終日、終夜、遠く近く響いて来る。

私はとうとう一睡もしなかつた、只、毛布にくるまつて、キチキチ刻む時計の針を氣にしなから、寢がへりばかり打つてゐる。

## 登山の朝

二階の寢室で眼覺しがチリチリ鳴り出した、腕時計の針はとうとう午前一時を示してをる、いぎたなく寢込んでしまつた近藤君を叩き起して、隣りの室に出ると、上からガイドの連中が下りて來た。外は、山陵にたち切られた空に星が冷たくまたいて、風は無いが非常に寒むい、入り口の水溜りは、無論、厚く凍つて齒を磨くどころの騒ぎではない、簡単な食事を無理やりにつめこんで、登山服に身をかためて、扱て一つぶく煙草を吸つた上、室の中から、もうロープで數珠つなぎになつて、雪の上を下りた。とうとう午前二時である。

カチカチに凍りついた雪を踏みしめて、サツク、サツク、一足ごとに杖シュトックをついて、星明りに蒼く

光る雪の斜面にかゝつた時、曾て覺えない緊張した氣持ちになつた。先登はヘッスラーで、次が私、フォイツは後殿である、ガイドの持つたランターンが、踏み固めた雪路に赤く滲んで、東へ〜と揺れて行く。昨日の跡が凸凹に凍つてゐて、非常に歩きにくい、がそれが無かつたなら、ぼーつと一面に瑩光を登つて、闇に終る廣い雪の斜面に、私達は取るべき路に迷つたに相違ない。

星明りに登る雪路は、昨日迂り下りた足路を辿つたのではあるが、路が違ひはしないかと思はれたほど非常に遠く、それに思つたよりも急でなく、どこまで登つても果がないやうに感せられた。然しそれは、比較するものゝない夜路と、雪の上で、非常に手間どつた爲めであつたらう、私は危ぶみながら立ち止つて見廻はした、ランターンの赤く滲じむ幾尺の外は、沙漠のやうな灰色のフィルムである。

雪を散々登りつめると、急な崖に取つついた、北へ切れれば、シュレックフィルンから落ちる深い氷河で、雪の反射から黒い崖に移つた私達は、うす暗らいランターンに足もとの幾平方尺を照しながら、石垣の塗土のやうに、岩のかけらに喰ひ込んだ氷に杖を打ち込んで、又東へ向つて登つて行つた。私達はガッグ (Gagg) と呼ばれる岩角に來た。すぐ右手は、シュトラールエックホルンの尾根つづきであるが、頭の上まで薄蒼く、銀河のやうについた積雪のほかには何も見えない。

雪はガッグのはづれから、また急に深くなつて、右側の急斜に沿ふてぐるつと曲つて行くと、昨日の足跡はそこでばつたり留つて、眼の前には廣ろ〜とした雪田が横たはる、シュレックフィルンである。

蠟燭が惜しいので、ランターンを消してしまつて、この昨日踏み固めに來た終點で、曳いて來たロープの上に腰を下ろして一休みした。三千三百米突と、地圖に記された地點である。

ランターンを消してしまふと、眼は漸く暗がり慣れて、星明りが思つたよりも明るくなる。私達

の正面には、クローロアールが胸をつくばかりにつっ立つてゐる、まつくろに屹えたそのアレトに境されて、下はクローロアールの、「辛うじて積雪を留め得る」と記載された急斜で、上は満天の星が、グロリス、シュレックホルンの空にばかり集まつたやうに、忙しくまたゝいてゐる、アレトの上を斜めに流れたのを、銀河とばかり思つてゐたが、それは空に凍りついて、じつといつまでも動かない薄雲に過ぎなかつた。

もう四時半になつた、山は依然として薄暗く、空にはまだ曉の色はたゞよはない、そしてまた一同に立ち上つた折りも、再びランタンの光を借りなくては、クレヴァースの口を開いた、シュレックフィルンを横ぎることはできなかつた。

こゝからもう足形はない、雪は堅く凍つて、靴底の釘がガリ／＼喰ひ入るだけで、今迄よりもかへつて歩き易い、然し私達は、注意に注意して、大小のクレヴァースの間を縫つて、静かに、つま先上りのフィルンを登つて行つた。

或る時には、飛び越せると思つたクレヴァースが思ひの外廣くて、折角来た暗がりのフィルンを、あと戻りしてぐるつと遠まわりに向側に渡つたこともある、かうしてクローロアールの直下まで辿りつくど、そこに二列の非常に大きなクレヴァースがある、昨日雪踏みに来た時、遠くから眺めて、あれをどうして飛び越すのかと思つたが、近づくどヘッスラーの云つた通り、その二列はフィルンの間に喰ひ違ひになつて、狭い雪橋が斜めにクレヴァースを横ぎてゐる、私達は難なくそこを過ぎて、いよ／＼急なクローロアールに取つついた、これからアルペンシュトックをふるつて、一足ごとに足形刻まなければ登れない。

ネイルド、ブーツを重いと思ふのは、平地を歩く時だけで、雪にかゝると歩き方がまるで違ふから非常に樂だ、急斜にかゝつて平地と同様に歩いたら、氣壓の低い山の上では、とても苦しくて長く續

くものではない、ユンクフラウに登つた折にも経験したが、草鞋でとつと登る氣で、一息に頂上までやつつけやうなんて、野心をいだいたら最後、ガイドより先に息がきれて、空身のくせに吐息をついて、オイ一寸待つた、寫真を一枚なんて、カメラを飛んだだしに使つて、休憩の申しわけをするやうな。不體裁な始末が演ぜられる。急ぎたいは山々だが、せいては駄目だ、一足づゝに踏みしめて、兩足が平均に身體の重さを感じた後、始めて次の一足踏み出せばいい、隨つて時間は随分かゝる、そのかわり休息は二時間か三時間目に一息つけば充分で、結局早く頂上に着くことになる。

クローアールは成る程急である、柄を短かくシュトックを握つても、別に屈かむまないで足形スタツプが切れるくらゐに、胸を壓してゐる、さすがのガイドも、かうなるランタンが邪魔になるので、それに夜明けに間もなく、白らく明けとまではゆかないが、空には星の數が減つて、ふりかへると谷をへだてたオックスの上に、ピカッと曉の明星が光つてゐる頃で、消したランタンはリュックサックに仕舞ひ込んで、兩手にシュトックを握つて、せつせつとステップを切つては、一足づゝ高くく迫り上つた。

もう此の頃であつた、オックスからフィンシュテラールホルンへかけて、薄い山陵から斜面にかけて、次第く明るくなつて、それを見つめてゐた眼をそらして、初めてロープに縛られた仲間の人達を見まわした時には、違つた世の中で出つかしたやうに、變な感が起つて來た、特にひどいのは近藤君である。

が無理もない、氣の弱いものならびつくりしてクローアールから眞つ倒にころがり落ちたに相違ない、いやその時の近藤君の顔と來たら、友達ながらすつかり愛想がつきた、雪やけで鼻の頭が眞赤にたゞれて、ところくは皮がむけて、下の正味が顔を出してその上に、塗つたく監獄の塀だつてあゝ汚くは塗らない、一面に雪焼けのおまじなひに、グレッテェル、クレームをなすり付けて、それ



が下手な鍍細工みたいに、桃色の斑になつてゐるからたまらない、何だい君の顔は！

何うしたんだい、君の顔は！冗談ぢやない！！

二人の聲でふりむいたガイドは、聲を合せてウァッハッハと笑つた、私達もたまらなくなつてウァッハッハと笑つた、ウァッハッハはクローアールに反響して、ゴーンと陰氣に木魂をかへす、と、エコーにつれて、夏の短か夜は白ら／＼と明けかゝる、もう午前五時であつた。なだらかなフィレンはもういつのまにか足もどになつた。

もうフィンシュテラールホルンはシュトラールエックの尾根の上に、錐みたいに屹えてゐて、そしてその左に落とすアウトラインが、薄紅く光りだした、と思ふと殆んど同時に、オックスや、そのアレトの後ろに、頭だけ見えるグリーンホルンにも、さつと朝日が反射した。私達が一樣にグレッチエルグラスをかけたのは、それから間もないことで、朝の日の溶け込んだ蒼空の下に、一面に眞つ白ろな楯をついたクローアールを攀ち登るには、それ無しには眼がちら／＼して、我慢にも歩けなかつた。

頭の上には、雪の禿げた山陵が仰がれる、そのギザ／＼に崩れ落ちた岩の裾から、末廣ろがりに此のクローアールが沁つてゐる、その間々には、急な岩角が眞黒ろに脊を出して、取つ付けさうな斜面を、いくつにも距てゝをる、私達は、ヘッスターの意見で、すつと右寄りに、グロース、ラウテラールホルンの方に近いクローアールを登つてゆく、まるで蟻でも匍つて行くやうに。

いくら登つても雪ばかりで右へ、右へと、岩に距てられた路をどつて、——左側はなほ更ら急に鑄ぐれてゐるので、——もう足下になつたシュレックフィレンから、三時間半も登つて、やつといくらか岩の表はれた、山陵に近い急斜まで来た、この間には、ふりかへつて朝日にきらめく山々を、撮影するために二三度立ち休みしたゞけで、ろくに足を動かす餘地もない急なクローアールには、ゆつく

◎スライス日記 辻村

一三〇

りと腰を下ろすやうな場所は少しも無い。

岩角にはまだ氷が下つてゐる。私達は手袋をはづして、いよ／＼岩<sup>グレッツァライ</sup>登りをはじめた。洞穴のやうにゑぐれた窓の左を目がけて、雪の急斜に飛び出した岩の鼻にしがみつくと、ロープを出來るだけ延ばして、ヘッスラーが這ひづゝてゆくのを、たい見えてゐてもはら／＼する、随分きわどい岩登りをやつて、もうアレトの上に出さうなものだと思つたが、尾根は牙のやうな岩ばかりで、その東側の岩壁にかちりついて、登つたり降りたりするので、尾根の向ふ側はまだ見ることが出來ない。

岩壁の下は、深い底の方から、雪の急斜になつて、手をゆるめればそれつきりだ、壁を這つり上つて、岩の上に出ると、又その岩と云ふのがギザ／＼に缺けてゐるから、石は落ち易いし手が／＼はなし、兩手を擴げて、蝙蝠みたいに岩に喰ひつくやうな格構で、登つたり降りたりするのは随分たまたらない。

もうかうなると、登路なんて云ふのは當てにはならない、先登のヘッスラーが這ひづゝて行くから、すぐ後からロープに縛られて登つてゆくと、岩の向ふ側は斷崖で、行き止りになつてゐる、すると今度は逆戻りをして、フォイツが先登になつて別の岩に攀ぢ登る、Dehiとか、Chunn neha<sup>フムフム</sup>なんて言葉が、飽きるほど聞かされた。Dehiは hinaiti のスウィス語で、Chunn neha は Komn heraiti である、がそれに續いてガイドの間にくりかへされる言葉に至つては、此の岩登りと同様に、私にはてんで見當もつかない。

岩は崩れてカミソリのやうに鋭くなつてゐる、随分丈夫な切れ地を撰んだつもりだったが、倫敦仕立て下ろしのズボンには、方々に穴が開いて、下から血が滲んで來る、掌などは疵だらけだが、危くして手袋など箝めてはゐられない、只満身の力を兩腕に籠めて、機械體操の要量で、づり上るより外は仕方はない。

小屋を發つて、丁度八時間目に、やつと雪の山陵の直下に達した、考へて見ると、餘り大事をとり過ぎて、餘ほどグロース、ラウテラールホルンの方に片寄つて登つたやうに思はれる、そしてそれと、グロース、シュレックホルンをつなぐ山陵の上は、危くて通れないから、ターロアールに臨んだ崖に沿うて、這ひづつてをつたのである。

山陵の上に残つた雪の上に、荷を卸ろして一休みした、後ろはひどくゑぐれた深い崖の底に、ラウテラールグレッツェル (Lauterar Gletscher) がのぞかれる。その向ふはベルクリシュトックから、左に並んでウエツテルホルンの三山、こゝから見ると無論立派なのは真中のミッテルホルンで、左のハスリ、ユンクフラウは、頂上の岩が瘤のやうに瞰下ろされる。

朝の一時から何にも食べないんで、一寸休んだらもう我慢がしきれない、頂上は頭の上だが、そこにつゞく薄い山陵は切つたてになつてゐるから、随分骨が折れさうだ、四人とも云ひ合せたやうに、リェックサクと睨らめつこをしてゐたが、瘦せ我慢なんかする奴は、馬鹿だと云ふことに評議一決して、氷の角によりかゝつて、一同早や晝の食事でありつく、ところが昨日今日雪の上で思ひ切りよく晒らしぬいた顔の皮は、もとより尋常な皮膚のことで、ほてつてびりびりするし、かうなるぞグレッツェル、クレームなどに至つては、いやが上に穢く見せるだけで、何の役にもたない、それはいやが、件の顔で、肉をかぢると、厚く切つたベイコンなんか、頬張る程には口が開けないし、無理をするど顔が火のつくやうに熱く燻ける。

御茶がはりにコンニャックと雪を噛つて、一息いれた後、いよゝこゝを發つて、急な薄い氷の山陵にとつついた。左はシュレックフィレンまで切つ立ての崖で、右には深い底の方に、ラウテラールグレッツェルが覗かれる、此のアレットは、千八百六十九年の夏、こゝから江り落ちて微塵になつたと傳へられる、彼のエリオットの名をとつて、エリオット、ウエンタリ (Elliot Wangli) と呼ばれ

てをる。

◎スライス日記 辻村

一三二

私達は氷に足形を刻んで、静かにそのアレットを攀ち登つた、グロースシュレックホルンの頂上は、氷柱の無数に垂れ下つた岩で、もうすぐ頭の上になつたが、時間はなか／＼かゝつて、氷から柔かい雪に變つた山陵を、胸を躍らせてかけ登つた時、腕時計は、丁度午前十一時三十分を示めしをつた。絶頂の氷の上に、近藤君と抱き合つて喜んだのはこの時である、グリュッセを叫んで、ガイド達と互に堅く握手して、日の強い最高點に、躍り上つて喜んだのはこの時であつた。

八月一日の、午に近い太陽は、グロースシュレックホルンの絶頂に、私達の影をはつきりと書き出した。影はアレットに立ちきられて、三段に雪の上に亘つてゐる。



日本アルプス踏破團體を率ゐて  
得たる感想

一、踏破團の計劃

昨夏京阪神に在住せる日本山岳會の有志者の盡力により、日本山岳會關西大會を大阪に開催してより、所謂山岳熱なるもの、急激に關西の天地を風靡し、如何なる小新聞紙と雖もアルプスの記事を掲載せざるなく、實に空前の盛況を呈せしは、唯に同人の欣喜するのみにあらざるなり。曩に關西教育博覽會を、當市天王寺公園に開き、次いで、大和吉野に夏期山林學校を設けて、社會の先覺者となり、大に社會的教育に貢献し、其發展に意を注げる大阪市教育會は、團體として日本アルプス踏破の壯舉を實現せんとの議を提起し、役員

は滿場一致を以て之れが實施を可決して、京都帝

國大學小川理學博士に其計畫を依頼し同會理事橋詰良一氏(大阪毎日新聞)は、先づ旅行候補地と内定せし、徳本峠上高地温泉、及白馬山下の四家、及其一方の下山口なる越後糸魚川等に、實地踏査を試み、又小川博士の推薦にかゝる田中文學士(秀作)を講師と決定し、七月中旬其旅程役員等に至るまで、大阪市内の各新聞紙に公表し、會員の募集に着手することなれり。

團員は、主として京阪神に居住する人多かりしも、遠く東京、名古屋、香川、岡山、山口、佐賀等各府縣よりも申込ありて、其數實に七十餘名に達せるを以て、一團として、旅行不可能なれば、止むなく左の如く編成せり。

二、踏破團の編成

第壹種旅行

第一班

京都市駄屋町姉小路上ル  
同  
大阪商船會社員  
京都市東洞院佛光寺上ル  
同  
大阪府豐能郡北豐島小學校  
第四師團草樂隊  
大阪府豐能郡箕面村  
大阪府東區南新町二丁目  
大阪府西區西長堀南通四丁目  
神戸市山本通四丁目  
大阪府東區鎮町一丁目  
大阪府立清水谷高等女學校  
大阪府立市岡高等女學校  
神戸市兵庫小學校  
岡山市外關西中學校  
同上  
同上  
同上  
同上  
同上  
佐賀縣神崎町神崎銀行  
同上

西村善三郎  
西村次郎  
今西喜次郎  
下村逸進  
下村泰一  
仲井義胤  
長谷川萬龜藏  
里山大作  
郡山庄太郎  
吉村恭太郎  
小谷新太郎  
岩木一成  
辻彌三郎  
酒井國太郎  
内海五郎  
教員上田又次郎  
學生三宅秀夫  
池田寛一  
同 織國東平  
同 兒島一太郎  
野口萬平  
田中傳四郎

大阪府東區平野町三丁目  
滋賀縣高島郡西庄村  
大阪朝日新聞社  
同上  
同上  
大阪毎日新聞社  
同上  
講 師  
在京部  
大阪府立清水谷高等女學校  
大阪府役所學務課  
總 務 (大阪市教育會理事)  
大阪府立清水谷高等女學校長  
滋賀縣草津町  
京都市兩替町三條北入  
京都市東區永町小堀西入  
京都市大黒町五條南入  
大阪府立農學校  
佐賀縣小城郡牛津町  
和歌山縣那賀郡麻生津村  
大阪府西區北堀江通二丁目

三好米吉  
井花伊左衛門  
記者村上寛  
畫家水島爾保布  
寫真技師高浦吉三郎  
記者木下不二太郎  
寫真技師二瓶將  
文學士田中秀作  
文學士宇野武男  
書記荒木益藏  
大村忠二郎  
公吏馬場孫七  
學生稻垣玄三郎  
學生高橋勇次郎  
學生上田清太郎  
學生築山廣一  
久本榮治  
藤田義彦  
西井常藏

岳

山

山 岳

京都市乾尋常小學校 教員 竹 中國 二 郎  
 京都市生祥尋常小學校 教員 三 木 市 太 郎  
 丸龜市大字中府 竹 内 英 雄

大阪府東區北久寶寺町二丁目 堀 内 善 五 郎  
 大阪府西區第二高等小學校 教員 田 中 龍 七  
 同上 教員 河 崎 愛 介

京都市新島丸通夷川下ル松澤方 田 澤 哲 三 郎  
 京都市葛屋町一條下ル 能 勢 庄 吉  
 姫路市綿町藤岡方 古 林 巖

下關市關後地村 吉 岡 茂  
 大阪高等工業學校 學 生 江 木 完 治  
 大阪府東成郡片江 佐 々 木 忠 兵 衛

大阪南區二ツ井戸町 日 本 山 岳 會 員 山 口 末 次 郎  
 神戸市入江小學校長 日 本 山 岳 會 員 田 中 孝 雄

幹 部  
 大阪府立夕陽丘高等女學校 教 諭 竹 下 英 一  
 日 本 山 岳 會 員 教 諭 朝 輝 記 太 留

大阪府立夕陽丘高等女學校 教 諭 朝 輝 記 太 留  
 日 本 山 岳 會 員 教 諭 朝 輝 記 太 留

大阪府立夕陽丘高等女學校 教 諭 朝 輝 記 太 留  
 日 本 山 岳 會 員 教 諭 朝 輝 記 太 留

大阪府立夕陽丘高等女學校 教 諭 朝 輝 記 太 留  
 日 本 山 岳 會 員 教 諭 朝 輝 記 太 留

大阪府立夕陽丘高等女學校 教 諭 朝 輝 記 太 留  
 日 本 山 岳 會 員 教 諭 朝 輝 記 太 留

大阪府立夕陽丘高等女學校 教 諭 朝 輝 記 太 留  
 日 本 山 岳 會 員 教 諭 朝 輝 記 太 留

大阪府立夕陽丘高等女學校 教 諭 朝 輝 記 太 留  
 日 本 山 岳 會 員 教 諭 朝 輝 記 太 留

第 壹 班

第 貳 種 旅 行

名古屋市大池町三丁目 醫 師 館 野 正  
 大阪市築港尋常小學校 教 員 瀨 戶 彦 平  
 大阪市三軒家尋常高等小學校 教 員 西 井 芳 雄

◎ 雜 錄 日本アルプス踏破團體を率ゐて得たる感想

第 貳 種 旅 行

講 師 (大町對山館主)  
 日 本 山 岳 會 員

文 學 士 田 中 秀 作  
 文 學 士 宇 野 武 男  
 荒 木 益 藏  
 百 瀬 愼 太 郎

兵庫縣尼ヶ崎町築地渡邊方 小 川 正 十 郎  
 神戸市兵庫西部鐵道管理局 川 村 家  
 同上 財 滿 秀 雄  
 兵庫縣朝來郡竹田小學校 教 員 谷 田 四 郎  
 神戸三菱造船所 阪 田 治 三 郎  
 東京市小石川區久堅町 山 崎 武 二 郎  
 神戸市兵庫西部鐵道管理局 岡 村 信 三 郎  
 京都市立第一高等女學校 教 諭 平 山 政 道  
 (第一種旅行を終へて更に參加)  
 郡 山 庄 太 郎  
 吉 村 恭 太 郎  
 小 谷 新 太 郎  
 岩 本 一 成  
 野 口 萬 平  
 田 中 傳 四 郎  
 村 上 寬  
 水 島 爾 保 布  
 高 浦 吉 三 郎

第 貳 班

竹 下 英 一  
朝 輝 記 太 留 一

第一種第一班より

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

同上

木下不二太郎

二瓶將

長谷川萬龜藏

三好米吉

上田次郎

三宅秀夫

池田寛一

兒島一太郎

井花伊左衛門

馬場孫七

築山廣一

久本榮治

藤田義彦

西井常藏

竹中二郎

三木大郎

古林巖

吉岡茂

江木完治

佐々木忠兵衛

山口末治郎

田中孝雄

三、踏破團の旅程

日	八月五	日	八月四	日	八月三	日	八月二	日	八月一
雨		晴		晴		晴		晴	
上高地滞在雨のため石溪の上より引返したるものも焼		島々發徳本峠を越へ上高地瀧泉へ途中宮川池觀覽。		松本發馬車乗用鍋割所近の段丘見學ク平漂石風穴見學		朝名古屋乗換へ中覺ノ松觀覽午後四時松本投宿。		午後十時梅田驛前集會同十一時發車。	
日	八月五	日	八月四	日	八月三	日	八月二	日	八月一
雨		晴		晴		晴		晴	
島々發猛雨を冒して徳本峠を越へ上高地温泉に着。第一班と同宿す。		松本發馬車乗用鍋割附近の段丘見學ク平漂石及風穴見學。		朝名古屋乗換へ中覺ノ松觀覽午後四時松本投宿。		集合同十一時發車午後十時梅田驛前		午後十時梅田驛前集會同十一時發車。	



岳 山

八月六日 晴	一部は燒ヶ岳に登り一部は穂高の頂上を極む。	八月七日 晴	上高地發德本峠を越へ島々を経て松本飯田屋に歸泊。第一班解散。	八月八日 晴	松本發明科下車、池田を経て大町晝食百瀬、大町晝食へ北城村四ッ谷山木投宿。	八月九日 午前晴	四ッ谷發白馬尻より風雨を冒し團員全部困却して午後五時白馬頂上小舎着泊。	八月十日 午前雨	白馬頂上小舎出發國境線製鍊所跡を通過して蓮華温泉着泊。	八月十日 一日曇	蓮華温泉發木地谷中河原、寢小屋を經て糸魚川驛前早川旅館着泊。
八月六日 晴	午前九時より燒ヶ岳に登り新噴火口を極め大正池に出で温泉歸泊。	八月七日 晴	午前六時上高地發穗高岳登山、午後五時温泉歸泊、功祝をなす。	八月八日 晴	上高地發德本峠を越へ島々を経て松本飯田屋歸泊、第二班解散。	八月九日 午前晴	松本發明科下車、池田大町を経て三湖の兩景を賞しつつ馬車にて山木旅館投宿。	八月十日 日雨	雨のため午前中休養正午四ッ谷發二ノ股合流點附近より雨さなり全員濡れて午後五時半白馬尻小舎着泊。	八月十日 一日曇	午前九時白馬尻小舎發午後二時半頂上小舎着。夕方まで植物採集。

◎雜 錄

日本アルプス踏破團體を率ゐて得たる感想

八月十日 第二種旅行	八月十日 早朝白馬頂上にて來迎を見九時頂上小舎發製鍊所跡通過午後二時半蓮華温泉着泊。
八月十日 第一班解散	八月十日 前六時蓮華温泉發木地屋中河原寢小屋を經て午後四時糸魚川驛前早川旅館着泊。
八月十日 第二種旅行	八月十日 第二種旅行
八月十日 第二班解散	八月十日 第二班解散

四、團體の管理

凡そ事業の何たるを論せず、團體的に之に従事せんことを、其の統率者に對しては、相當權威を保有せしめ、其命令に服従せしめざれば、團體としての進退に、不利の多大なるは、茲に喋々を要せざる處なり、況んや普通の團體旅行とは、全く其趣を異にし、常人の難しとなす、高山大岳を跋躡せんとする我が團體旅行に於ては、各個人の我儘なる行動より起る、危険を、未發に防がんとするには、幹部は大なる注意を以て、終始團員を管理せざるべからざるが、何等訓練を施さざる團體

## 山

## 岳

を指揮監督するは一大至難事と云ふべし、幸ひに今回の團員の大多數は、相當の教育あり、社會に活動せる紳士を中心とし加ふるに、中等程度以上の學生より成りしことゝて、團員各自の自中心にのみ依頼して、大なる過ちと危険とに遭遇せざりしは、幹部の等しく僥倖とする處なり、殊に我が第二班にありては、最初より班員を四分して、A B C Dの四組を作り、組長を設けて、其組内の仕事は直ちに組長に於て處理せられ、必要に應じて幹部は組長のみを集めて、偶發の事件に對して、協議せしを以て、班全體として、確かに有機的に行動を共になし得たるは、誠に悦ばしき狀況にて、今後に於ても斯かる團體に對しては、家族的に實施さるゝ方双方共に平穩ならんと思惟す。

## 五、年齢、體力、足の強弱

團員七十名中最年長者四十九歳、最年少者十七歳（關西中學上田氏の同伴せられし息の十一歳は別として）其平均年齢三十二歳を算し、得たるが一般より見れば、體力充實の壯年期の人多數を占め、之が爲め歩行より來る疲勞を早く訴ふるもの

尠く、廿歳前後の青年期の者は、所謂向ふ見ずに無暗に速度を伸すも、壯年者は自重しつゝ歩行するが故に、却つて青年者よりも餘力の存するを見受けたり、殊に平素の生活狀態に比して、食物の嗜好を満足せしむるには、不便なるにつき、營養分の攝取さるゝ分量も隨つて少額なること、加ふるに身體の活動は劇甚なれば其疲勞より起因しして、發する諸種の病氣のあらざるなきかを心痛せしも、幸ひにして各自の攝生と精神の緊張とにより、此の難に罹らざりしは、團の幸福にして、團員各自が既往に於て、山岳に多少たりとも經驗のある人の集合なることを、證明するに難からず、夏期に於て、普通平坦なる土地といへども、長途の旅行は其履物の靴、鞋の區別なく、足部に損傷を受くるもの多きが例なるも、日本アルプス踏破は其行程に變化の多き爲めか、例へば森林帶の浸潤地を踏み、或は河川を徒渉し、或は高山植物帶の柔き御花畑を踏み、或は雪田雪溪を歩む等、足部の損傷を蒙ることの僅かなりしは、前者に比し好都合の場合多きものゝ如し。

## 六、團體登山の危険

少人數の登山としても、危険の免れ能はざるは事實なるが、團體としての登山に對しては、其危険率尙高く就中其第一に數ふべきは、峻嶮なる絕壁、或は岩壁を多人數にて昇降することにて、例へば穂高登岳の如きは、其最大難事とす、此にては、從來人足を加へて五六名以上の人數の登山せしことなしとの事にして、夫れ以上は、絶對に不可能なる由上高地にては固守せしが、今回の如き、我第二班二十餘名と、第一班の一部を加ふるに、東京高師附中の山岳會員十數名と、人足等を加へて合計五十餘名が、然も同時に一列の單縱陣を作りて、登降せしが故に、更に危険を加へ、各個人に於ては、小石の落下に充分の注意を拂ひたるも、過ちて迂り、無意識に足を動かさば、時には足元なる小石は落下し、下るに従ひて、石は友を呼び始めは小石にて然も落下の速度緩なるも、下るに従ひ大速度となり、之に命中して不慮の災を來すこと屢々ありと云ふことなるが、我團員中にも數回其失敗を演じたるも、幸ひに大なる災に

罹るものゝなかりしは幸なりしが、拳大の落石が頭部に命中せし人ありしが、幸ひに其人は品質良好のヘルメット帽子を被り居りしたため、之を遮り漸く事なきを得たるが、實に一步を運ぶに心膽を寒からしむること屢々なりき、第二に數ふべきは食料及防寒具なりとす、素より相當なる注意を以て準備し置かれなば、さまで危険を醸す事なきも、團體の常として、不統一に流れ、防寒具等に於ても、申譯的に携帶せる者などは、途中暴風の爲め全身濡れ鼠となり、其到着すべき處々夜中氷點下に温度の下降する地點等にありては、凍死するより外に術なく、又食料の缺乏を來せば、不食の中に一日乃至二日も山中を活動せざるべからざる事あり、我團員は、松本に於て防寒防水の不用意なるものには、更に準備せしを以て、第一班第二班は白馬にては暴風に遭遇せしも、大事に至らずして全きを得たるは、確かに用意の周到なりし事を記する餘ありといふべし、唯第二班は豫定以上の白馬尻泊を餘儀なくせしを以て、頂上小舎出發に際し、人足の朝食と團員の晝食とは、全く米の缺乏

となり、幸ひ第一班の残せし三升の米にて人足の朝食に充て、團員は晝食なしに蓮華温泉に向ひ、途中製練所事務所員他出中の爲め、此處にても米を得るに由なく、終には各自携帯せし少量のビスケット類にて餓を凌ぎて、からふじて蓮華温泉に着せし程なりき。

### 七、團體登山の利益

同じく山を愛し、山に憧憬を有する人の中にも極小人數二三名位にて登山せざれば、眞の山の情調を味ひ得ずと云ふ論者ありて、慥に一つの眞理は含有せらるゝもの、如し、然れども團體登山に於ても、又他に得られざる利益あるもの、如し、其第一例としては經濟問題なりとす、個人とし旅行するに團體として旅行するとは素より後者は、前者に比し自己の自由を束縛さるゝ嫌あれども、總べての經費に於ては、同一旅行中慥かに團體旅行の方經濟的にして、學生生活に行ふ登山としては、有利なる如く感せらるゝ、更に團員相互に於ける交際より受くる親密により互に慰藉を得、勞苦を感ずること比較的僅少ならん、然して他人

の災禍に對しても、非常なる同情を以て之に當る等、人生の妙味を味ひ得る機會多きもの、如し、

尙身體鍛鍊の意味から之を觀察せば、素より一定の行程に従ひて行動するものなれども、個人旅行にありては自由意志により疲れたる際には休憩もし、宿泊も隨意になし得る便あれど、團體登山にありては之を許さず、定まれる行動は是非遂行せざるべからざるにより、知らず識らず克己心を強め、忍耐力を増進し、ひいては身體修養上に裨益する所大なり。

### 八、團體登山の効果

登山より受くる効果を枚擧すれば、其數甚大にして、悉く之を認め得ざれども、個人として高山大岳に登攀するは、尋常事にあらずして、特殊のエネルギーの必要あれども團體とし登山せば比較的容易に成功し得ること多きが故に、之を山岳趣味の鼓吹上より見れば、少數の登山よりも多數團體の登山の方一般に向つて同趣味の擴張さるゝは論を俟たざる所なりとす。

之を要するに、大阪市教育會主催の日本アルプ

ス踏破團體旅行は、雄大なる計劃にして、其旅行前に於ける一般社會の批評は、大なる危険の伴ふ如く、悲觀的見地より之を觀察する人多かりしも、旅行場所の比較的交通便利にして、其目的の山岳も餘りに日本アルプス中の最難所にあらざりしと、日本山岳會役員並に山岳會の先輩等の注意を諒として、計劃せしにより、大なる過なく其行程を終り得しは、實に團員の満足教育會役員の期待に添ひしのみならず、我國山岳史上の新記録を作り得たると共に、社會の耳目に一刺激を與へたるものと云ふべし、宜しく今後に於ても周到なる注意の下に計劃され、各自の自重によりて其目的を遂行せられんこと、余等の希望して止まざる所なり。

(竹下英一、朝輝記太留)

### 傾斜角の感じられ方及山岳と雲霧との關係に就て

○前號ツルモドキ氏の「机上談山」中、私が前々號「山岳の聯想」中に述べた、傾斜角の感じられ

方及び山岳と雲霧との關係に就て、いろ／＼と御教示をして下さつたのは、大いに感謝の意を表する次第である、而して同氏の懇篤なる批評によりて、更に新たなる刺激を感じた様であるから、今一應愚説を述べて、同氏及び一般識者の教を仰ぎたいと思ふ。

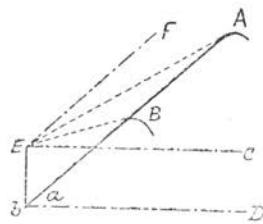
第一圖に於て、眼高から山頂を見た線と、水平面とのなす角が、山頂の高さが無限大の時は九十度になると推論したのは、 $\alpha$ 角が九十度の場合に限るのであつて、凡ての場合にさうなる様に言つたのは全然私の誤である。

然るに實際に於て、例へば富士登山の際の如き、二三合目あたりから頂上を望むと、五六合目から上は殆んど直立せるかの様に見える事がある、これに就ては、専門家の説明を聞いた事もなし、私は常に疑問に感じて居る處である、當分の安心のために、私は次に述べる様にも考へてゐる。

第二圖、A點よりBの山上を望むものとし、Bは高所にあるときは、ABは水平面とある角度をなし、水平的にABの長を目測したる時よりも、傾斜

のA Bは短かく感せられる、其短縮の源因が、A B線中に起るに非ずして、B點がB'の方に近接し、A BがA' B'の様に見えるのではあるまいかしら。吾々がAよりBを見たる場合に、Bまでの水平距離の想像は、Cがより手前のC'に、山軸となるべきB CがB' C'の様感せられる、従つてBもB'の方

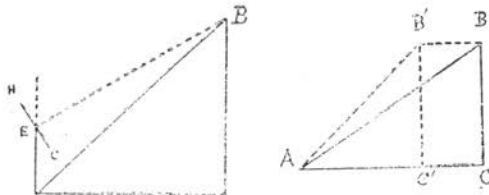
(圖一第)



方に近よつて見えるのではなからうかと思ふ。今一つはB點が高くなるに従ひ、眼球のみを動かして視線を高むることは出来ない、必ず顔をH Cの如く上方に向けなければならぬ、殆んど直上のもに見る時の様な構へになるから、急に感じられる様に思はれる、これはB點の非常に高い場合であるが、Bが若し左程高くない場合、即ち低い崖とか、土木工事の擁壁又は堰堤等の勾配を、大體に目測せんとする場合は、第一圖の如き關係が非常に影響してくる、かゝる場合には視線と斜線と一致する様にして見ないと、高さの如何

によりて大に目測に相違を來すものである、勿論眼高がbより高ければ、目測角は實角aより緩に見えるが、a角に對する經驗目測角は、Bの高さに於てB E C Aに於てA E Cとなり、AとBとの高低差に氣が付かずに居ると、往々目測に大差が出来る、これは自分の實驗に對して説明を加へたまで、ある。

(圖二第)

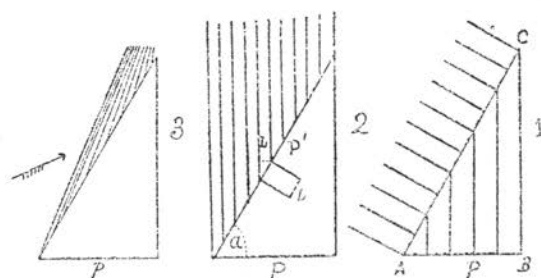


○山岳に雲霧の生じ易き理由に就ては、前々號「山岳の聯想」中に述べた如く種々の源因があるが、表面積を蒸發量との關係に就て特に精しく述べた積りである、然しツルモドキ氏の申さるゝ如く蒸發量は表面積の大小に正比例するとは言つてない、正比例しないまでも表面積即ち蒸發面が大なれば蒸發量も多くなると言ふた筈である、表面積の増加と同率を以て蒸發量も増加すると云ふのではない、今此處に第三圖(1)のA B

に於ては、前々號「山岳の聯想」中に述べた如く種々の源因があるが、表面積を蒸發量との關係に就て特に精しく述べた積りである、然しツルモドキ氏の申さるゝ如く蒸發量は表面積の大小に正比例するとは言つてない、正比例しないまでも表面積即ち蒸發面が大なれば蒸發量も多くなると言ふた筈である、表面積の増加と同率を以て蒸發量も増加すると云ふのではない、今此處に第三圖(1)のA B

の如き平地ありとし、これより五百グラムの水蒸氣を蒸發するものとせよ、而して平面積  $AB$  と同

(第三圖)



一なる  $AC$  なる傾斜地あり、其傾斜角を假りに六十度とすれば、 $AC$  は  $AB$  二倍となり、 $AB$  に於ける如き水蒸氣を含むものとすれば、約千グラムに近き水蒸氣を生ずべく、其水蒸氣が若し  $AC$  斜面に直角の方向に蒸氣する場合は、空氣の接觸區域も増大するから、空氣の湿度には何等變りはない、然るに斜面に於ても水蒸氣は平地に於けると

同様直上に向つて上昇しやうとする、故に空氣の接觸區域は  $P$  の平面も  $P'$  の斜面の場合も略同様である、唯  $P'$  の蒸發水蒸氣は、 $P$  より大であり其面

積は、 $P' \parallel P \cos \alpha$  の關係によりて、 $\alpha$  角の大なる

程だんぐ増加する、水蒸氣の濃密度を直線の間隔を以て表はし其狭きを濃密なるものとせば、

$D \parallel D' \cos \alpha$  の關係により、 $\alpha$  角の増大なる程、 $D'$

は狭く濃くなり、平地よりも濃厚なる水蒸氣が出来る、同圖(3)は矢の方向より風の吹ける場合にして、水蒸氣は山坂に沿ふて頂上に集まり、終に凝

結雲化することもある、第四圖に於ても同様水蒸氣は直上に昇らうとする、故に方々に散ることは

少く、上また上へと集合する、即ち底面積にして同一なれば、表面積の大なるもの程、濃密なる水

蒸發が出来るものと思ふ、勿論其濃密度は  $D \cos \alpha$

に正比例するとか、球面の曲率半徑に反比例するとか云ふ如き、はつきりした關係を有するものではないが、大體に於て表面積の増加する様な地形

に於て、濃密な水蒸氣が出来ると思ふ。

それから今一つは、第五圖に於けるが如く水蒸氣に富める平地に於て折角濃厚な水蒸氣が出來ても、周圍の空氣と流通平衡せられて、蒸發面附近

の空氣は、容易に水蒸氣の飽和點に達しない、然

◎雜

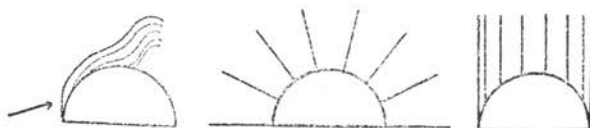
錄

傾斜角の感じられ方及山岳と雲霧との關係に就て

## 山

るに山岳溪谷に於ては、四方、三方、二方又は其一方が外圍の空氣を遮へぎらるゝから、平地の様に折角出來た水蒸氣が、外圍の空氣に平均せらるる事が少ない、それに加へて底面積の等しき平地よりも濃密なる水蒸氣が出來、そこに雲霧の發生を催進するのではないかと思ふ、谷間に於ては風力の關係で小旋風の起ることがあるから、其旋風系に多量の水蒸氣が巻き込まれて、終に雲霧の形になることもあらう。

(圖 四 第)



○他の凡ての條件が同一であること云ふ事は、甚だ稀有の事である、或る數個の條件に依りて生ずる一の現象があるとし、其各條件と一の現象との關係を論ずる場合は、一條件に就ては絶對的に其影響の

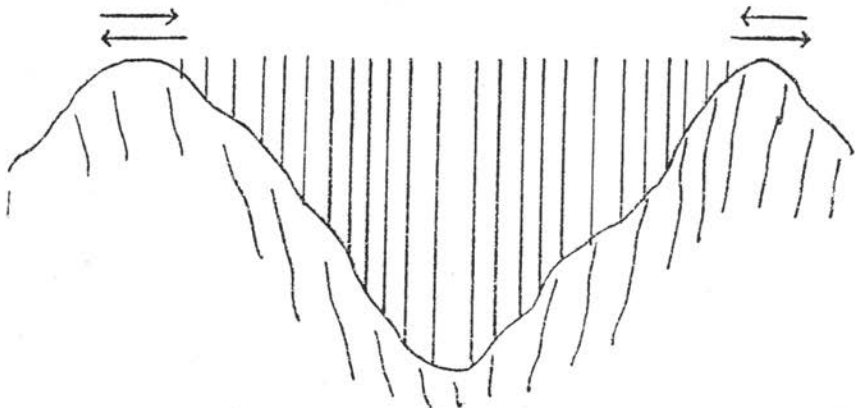
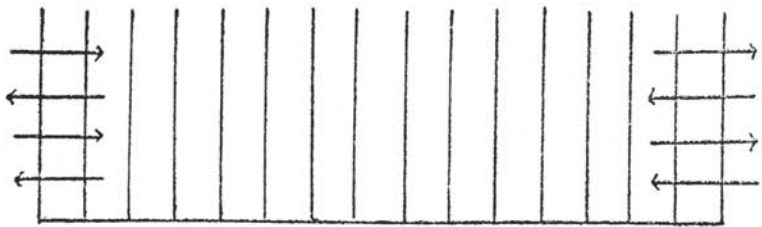
大小を判定するは出來ない、他の凡ての條件を同一なりと見なさなければ、一條件が或る現象に及ぼす影響如何を論ずるは出來難い、譬へば海面

高が増加すれば温度下ると云ふが如きも、南方に疾走する飛行機に取つては或る程度以下の海面高の増加は、必ずしも温度の低下を來さない、大體に於て降雨量は緯度の進むに従つて減少する言ふも地勢其他雨量を支配する凡ての條件が同一なる場合に限るのである、緯度と氣温との關係も同様である、三十度の傾斜地は四十度の傾斜地より歩

行容易なりと言ふが如きも、地表の状態即ち土質、摩擦係數等の凡ての條件を、同一と見做しての話だと思ふ、故に個々の條件と、一の現象との關係を論ずる場合には、他の條件を度外視してはなれば、其條件が一の現象に及ぼす影響を比較對照する事は出來ない、地形と蒸發水蒸氣との關係に就ても、水の存在しない處には無論當て嵌まらない、ツルモドキ氏の言はるる様に水分のない場合はどうするかと云ふのは、甚だ無理ではあるまいか、元より水分の關係は同一とて話である、同氏の言ふのは忠君愛國と武士道の精神があれば、戰爭に勝つと言つても、何等の兵器もなく、戰術も知らずに、錢が一文もなかつたらどうすると言ふ



(圖五第)



様なものではあるまいか、敵と同等とまでは行かずとも、或る程度までは、兵器、戦術、財力があるものとしていなければ、精神のみではいかなない事は無論である。

他の條件を同一なる前提のもとに論じた、水蒸氣と表面積との關係も、他の條件の同一なる場合は絶対にないからと言つて、其關係を無視する事は出来ない、他の條件が同一なる場合に於ける程多大の影響を及ぼさないかも知れないが、表面積の大きな方がこれが小なる場合よりも水蒸氣が濃密になる場合が多いものであると言つて、よからうと思ふ、水蒸氣の總量が同一であつても其水蒸氣を小區域に集團濃密にする作用ある山岳地方に於ては、平地より水蒸氣の飽和點に達し易いから、雲霧を生せしむる事が容易であると言ふのが、大體の論旨である。

○北齋の繪に就ては、ツルモドキ氏の言はる、如く、山の傾斜は急に見えるものなの

◎雜

録

傾斜角の感じられ方及山岳と雲霧との關係に就て

一四六

であるから、急に畫いたのだと云つてもよいと思ふ、然し一面に於てかういふ事も考へて見たい。

第一圖の關係によりて、高さの低いもの程實際より緩に見えるから、紙の上に小さき富士山を畫いても、其高さが五六寸となり、其繪の角度が實物と大差がないにしても、實物の何千分の一と云ふ縮尺で書かれたのだから、實物よりも非常に緩に見える、故に人間の眼に實物の様な角度を映せしむるには、實物よりも非常に急なる角度を以て表はさなければならぬ、北齋の繪とても一寸見たばかりでは實物より左程急なるものとも思へない、分度器を當て見るとか又は普通コンパス、定規、分度器を多く使用する人の眼からは、甚だ急に思はれる、換言すれば、縮尺が小さくなれば、實物と相似形とせず、角度を大きくしないと、人間の眼には實物と相似形に寫らない、餘り理窟に過ぐるかも知れないが、自分の性質として、何か當分の解決がなければおさまらない、今の處これが宜しいと思ふて居る。

○最後に私は勿論専門家でも何んでもないが、科

學に就て多少の趣味を有するものである、科擧の内容を能く知るものでない、唯自分のやるせない

智識慾にかられて、徹底した説明を得たいばかりに、いろ／＼に考へてみる、當分の安心にご自分勝手の説明もつけて見る、尙不安の點があれば、専門の學者も多數居らるゝ、山岳會の様な處に提供して教を乞ふのである、私の如きものは、一の新現象に對する原因を斷定推論するの資格のないものである、これを承知して貰ふために、あからさまに姓名を名乗つて居る、故に自分如きものゝ貧弱な説明を丸呑みに妄信し、先入主となり、眞正な研究家の發表に際して、障害を來すものがあらうとは思はれない。山岳の奥底に潜める新現象と思はるゝものを、多數識者の前に持出して、眞正な研究を希ひ、専門家に對しては多少の刺戟ともなり、或は研究の端緒ともなつて、我等に適當なる指南を與へられんことを望むのである、何等資格もない自分等の様なものは、動植礦物名を歌ふても、貧弱な知識を以て新現象を世の中に發表しても、ツルモドキ氏の心配せらるゝ様な、悪影響は

更にないと思ふ、若しあつてもそれは少しであつて、有利な事は多いに違ひない、私が耻を忍んで前々號に「山岳の聯想」を書いたが爲に、ツルモドキ氏の様な方が出て來られて、大に批判して呉れるのである、此點に於て、私は山岳に關係ある新現象は何くれとなく此誌上に發表したいので、新現象が舊現象であつて人の笑ひを買ふ様になつても、一種の御愛嬌で宜しい、純粹の科學とか學藝の雜誌ならともあれ、本誌の如きは、多方面の人々によりて成立して居るものであれば、成る可く種々なる方面の人々の感想を網羅し、其道の人から適當なる判斷と批評をして貰ふ方がよからうと思ふ、此の如き事も本誌の使命の一部分ではあるまいか、かくすれば雑誌も賑かになつて面白い。

以上の如き意味に於て、私は素人ながら身の程も考へずに、感想やら、意見やら、説明やらを出して見ののである、自分が見聞しないものは、必ずしも新しいんぢやないぞ知りつゝも、本會員には専門家も多い事を知つて居るが故に、叔父さんに訴へる積りで本誌に投稿するのである、登山の案内書

を書く場合は、宜しく専門家の意見に依る可ものであらうが、然らざるものは自分としての感想及説明を、ごし／＼發表してもよいと思つてゐる。

○山の雲が妙な處へ飛んで行つた様であるが、ツルモドキ氏の「机上談山」後段の主張に對する、私の意見を述べたまで、ある、同氏の他人を疑ふと云ふ眞正な科學的學究的態度には敬服するが、専門家以外には科學に對して沈黙を守れと云ふのは、本誌の如きに取つては餘り酷ではなからうか、山の兒に色々書かして置いて、其記文に對し嚴格なる批判を下してくれるならば、同氏を本誌の叔父さんとして、愈々尊敬すべきであると思ふ。

(山本徳三郎)

(669)

### 前の篇に答へて

○「机上談山」なる一篇の内容及びその執筆者に就ては、既に第九年一八六頁に於て充分ではなくとも、一通りの説明をしてあるの故、前號の同じ篇を書く場合に、自分はその説明を再添附する事

なしに、その件は承知して居られる事と思つて書いたのである、然し自分は當然執筆者としての責任は持つつもりで居る事故、自分の紹介し又は發表した種々の事についての非難に就ては、充分御答へを致すつもりである、で差當りこゝに山本徳三郎氏が書かれた一篇に就て、その事を致さうと思ふ。

○答は自分の便宜上山本氏の書かれた順序に従はないで致す事にし升、即ち第一に自分の態度の一二を説明してからかゝる事にしたい。

○前號机上談山の後段に書いた、科學の表面だけを見て云々以下の事は、少くとも自分は、山本君の記文に對して云爲したのではないと云ふ事を云ておきたい、これは如何なるものに對して云たのかは一寸明言しがたいが、萬一山本氏の今度書かれた如くに解釋されるのを心配して、……地質や動植物について……なる句を挿入しておいたのである、而して同じ篇の中に於て自分が山本氏の説に同意しがたいと云てのべた事柄の中には、地質や動植物に關する事がないと云ふ事を考へられ

たならば、自分の用意は明であり而して山本氏の説も從て變つて來られる事と思ふ、これに就ては自分から山本氏へ私信を以て申上ても濟む事ではあると思つたが、山本氏以外に同様な事を考へて居られる人もあらうかと思ふので、特に山本氏の説と自分の用意とを同じ誌上に並べあげて、机上談山の性質の説明の一助とする事としたわけである、それから自分が本名を書かないのは、自分の説が必ずしも自發的のものでないのであるからであつて、隨て篇中のある部分に對しての細密な間には、答を他人に譲らねばならぬ事があるからである、即ち机上談山の一篇はまづ依托販賣の様なのであつて、最後まで責任は執筆者は負ひがたいからなのである——と云て自分の店で扱ふ品に全然無關係である筈はないの故一通りの答は勿論自分から致す事にするのは勿論だが——而して自分は決して知名の人でもなし、學者と云ふのではないの故、決して匿名とする必要があるわけではない、匿名ならば如何な事でもやるが、署名したら何も出來ないと云ふのは、名前だけのする程

の人の事であつて、自分等の事ではないのである、而してこの署名は自らその内容と多少の響をもつて、つける氣であつてまア要するに一種の御愛嬌であると思つてはしいのである。

○楮てこれから答の本文に入る、傾斜面の見え方に就ては本誌だけでも第四年三七八頁に梅澤親光氏の説があり尙第五年二六四頁に藤島信太郎氏の説がある、尙他の本にも説がある事かと思ふが、自分は知らない、更にこゝに山本氏の説明を見たわけである、三氏の説は正しく一致はして居ないがと云てひどく食違つても居ない様である、自分が前號に述べたのは計算上の誤に就てゐあつて、それは山本氏が同意された事であるから、自分からの答は不用なわけだが事のついでに一言加へたいのは、この傾斜面が實際よりも急な様に思はれると、云ふ事は、三氏の説明された如き原因……これを引括めて多くの人の角度と云ふものに對する常識の錯誤と云ひ得やうかと思ふ……の他に光學的視錯誤の問題が入つて居るのであらうと云ふ事である。

○山岳に雲霧の生じ易き理由に就て、自分が前號に「……蒸發の大小が表面積の大小に比例する……」と山本氏が書かれた様に紹介した事は全然誤であつて、自分の生得の粗笨の致す處とこゝに謹んで御詫をして訂正しておく即ち山本氏は……蒸發量の大小は空氣の接觸する表面積の大なるもの程多い……と書かれたのである、而してその「空氣の接觸する表面積」と云ふ解の意味は本號に於て説明された如く、水蒸氣が直上に昇るものとして即ち一定の大きさの底を有する鉛直軸の筒内の空氣に接觸する地面の表面積と云ふ様な意味を持つものであると云ふ事を附加へて紹介をしておく、でそれに就て自分は直接には反對はしないが、山本君がその前提として「……他の條件が同一なりとすれば……」と書かれた事に就て、他の條件が同一なりと云ふ事は殆ど有り得べからざる事であると前號に書た、而してそれ故に山本氏の結論は成立し得ないと書いた、それに就て本號に於て山本氏は他の條件を同一なりと見做さなければ表面積（山本氏の用ひられた意味に於てゐある便宜な名

山

岳

と思ふので自分もこれを借用する」と蒸發量の多少は論じられないと書かれ、それに就て種々の例を引かれ、自分が前程非なるが故に結論は不成立なりと云ものは不條理であると書かれた、自分はこれに對して二段に答へをしなければならぬ。

○自分は事實に執着する性質であるから、乾いた理論を扱ふ事にはどうも興味を持たない、大切なものは事實であつて説明の路條ではない、それ故平地と斜面とが表面の條件に於て一樣である場合が稀であると云ふなら、その稀有の場合にしか當てはまらぬ説は、どうも大なる價值があるのだとは思へないのである、山本氏の例を藉りてこゝの處をも少し云換て見れば、事實に於て兵器もなく、戰術も知らず、錢もない集團に向つて、その集團が相當の兵器、戰術、財力等のあるものと假定をして、忠君愛國と武士道の精神さへあればどんな敵と戰つても勝てるかと説くのはいけないと云ふ意味である、そのいけないと云ふのは忠君愛國の精神さへあれば勝てるかと云ふ事がではない、それは恐らく誤りではあるまい、然しその事實に反する

假定を置いたと云ふ事がわるいのである、もしその假定を置かねば結論を仕上げる事が出来ないこと云ふなら、そんな結論は云ない方がよろしからうと云つてよろしいのだと思ふ。

○偕てこの表面の條件だが、自分の知て居る範圍では水は自然流下の傾向を持って居るものである——時として他の現象の爲に左様でない様な事を認め得るが、それは全く水の本性ではない、即ち毛管現象で水が上るのは、分子力の一種の發現に起因するものである等の様な——それで平面に於ては全部一樣に水分を含むと云ふ表面が、有り得やう、その時地表の地質が一樣で、地表に接する大氣の温度が一樣であつたらば、その如き條件にある範圍内に於ては、その端の處をのぞいては、一樣なる蒸發があり得るであらうと思ふ、然し傾斜面に於ては、上方から絶えず水分の一樣なる供給でもあるなら格別、普通には水分は漸々下の方へ行つてしまふであらう故、地表の各部が一樣に水分を含んで居ると云ふ場合はまづむづかしくはあるまいか、而して水の蒸發はその面に接する水

蒸氣の部分壓に大きな關係をもつもので、水蒸氣の部分壓が大きくなれば蒸發は遲緩するもの故、平地とは大に條件が違つて來るであらうと思ふ、それから傾斜が急な處は地質が大分堅いものでなくしては成立しない様である、即五十度位になると殆ど全部岩石であるのが普通だ、岩石は非常にわづかしか水分を含み得ない事は明である、自分が前號に書たのは結論を力強からしめる爲にこの特別なる場合をとつたので、それは全く特別な場合ではあるが、實際に於て傾斜面の多くは岩が大部分を占める場合が可なり多いのである故、特に珍らしい例をとつたとは云はれないつもりである、然しその極端な場合をのける事にしても、傾斜地は、同條件の下にある平地に比べて、水分を保持しがたいと云ふ事は云切り得ると思ふのである。○風が山に向つて吹く時は、もと下にあつた空氣が、山の斜面に沿ふて吹上げられる形になる、上層は氣壓が低い故、その空氣は漸々その容積を増す事となるであらう、その膨張の仕事に要するエネルギーは、これを自身の熱からとるより外は

あるまいから、その際に漸々その温度が降下して、遂にその露點以下に降つて雲を結び雨を降らす事があるのだと自分は聞て居る、山骨が冷たい爲にそれに觸れた空氣が冷されるのでは、風がふいてその空氣が新陳代謝する場合には、仲々左様温度が降下するものではあるまいと思はれる、これは事のついでに述べた次第だ。

○自分のまだ知らない事を發表するには、必ず誇張なしでその真相だけを報告する様にしてほしいと思ふ、元來新種だとか、新現像だとか云ふものは、必ず専門家をまつて、果して然るか否かを判定し得らるべきものであつて、その方面に充分の素養のないものには何とも判らぬのが當然であると思ふ、それ故自分に分らぬならばたゞ分らぬと發表すればよい、充分ではなくともその方面に於て相當の知識があるのなら、斯様ではあるまいかとの考を加へる事はその事實を説明するのに有方であらうから別に支障はあるまい、然し専門家を俟たずして決して斷定を下しては悪いと思ふ、自分が前號に書たのはこの意味であつて、素人が勝

手に新種とか新現象とか云ふ謹まざるべからざる詞を、濫用するのをがめた意味である、從來知られたる事實を、從來知られた科學をもつて説明せんとする人々の態度は、決して何等の誇張をも含んで居ないのであれば、自分は大に面白い企ていあると、私は賛成するわけである、それ故にたい山本氏の思ひ違ひと思はれる點に向つて自分の考へを前號で述べたのである、それ故山本氏が本號に於てものされた一篇の後段に書かれた非難は叔父さんと云ふ眞意不明の稱號と共に、決して自分が受けるべきものではないのだと云ふ事を更に茲に述べておく事とする。

○本誌は決して専門家の雜誌ではない、然し眞正の新種、新現象ではない事物を、新種だ新現象だと自分勝手に素人がきめて、發表する事はたしかによくない事なの故、自分は本誌の上に於てその事のない事を望む、而して本誌のみならず一般の書物、講演等からして、權威と證明とを共にもたない新種、新現象の追ひ出されてしまふ事を切に望むのである。

○答へが本文より長くなるのは妙でないから、枝葉はどうでもよいとしてこれで止めておく、筆の足りない處はよろしく御判讀ありたいとの希望を最後に加へて。

(ツルモド生)

## 藏王山

東北線の汽車が白石から大河原にかゝる頃左側の車窓から一連の高い山々が目につく、一體東北地方の高山は、北上山脈をのぞいてはみな火山だと断定しても差支へ無いだらう。此一連の山々は御多分に洩れず多くの火山の集りである。火山は雄大な裾野をもつものだ金華山沖で黒潮と寒流がぶつかる爲か此邊は水蒸氣に富んでゐる。私は數回此處を通つたけれど此雄大な裾野から上は常に雲がかゝつて全容をみた事があまり無い。天氣の良い日には仙臺の附近からもよく見える。仙臺邊で土地の人を捕へて聞いて見てもたゞ刈田岳だと答へるばかりで一々の峯は區別して居ない。地質



山 岳

熊野岳



學からは如何に區別して居るか知らないが大體の

地形は凡そ三つに區分される、一番北にあるのが一番名高い蔵王山で中が屏風岳で一番南にあるピラミッドの様なのが不忘山である。蔵王山は模範的火山として名高いのみならず信神といふ點からも人の多く登る山で可なり知られて居る。それにかゝはらず南の二つは蔵王と同じ位の高さでありながらまたかへつて蔵王より表の方にありながらあまり知られてゐない。今此等の連山に屬する主なる峯々の名と標高を表示して見ると、

千八百四十一米突

五色岳 千六百七十四米突

刈田岳 千七百五十九米突

以上蔵王主峯

杉ヶ峯 千七百四十五米突

烏帽子嶽 千六百六十六米突

屏風岳 千八百七十七米突

入道岳 千六百二十五米突？

馬ノ神山 千五百八十五米突

不忘山 千七百〇五米突

これによつて見れば所謂大和アルプスや四國アルプスをだてられた山々に殆んど同じ位の標高をもつてをるのみならず、雪は土用終るまで残つてゐるし頂上附近は草本帯になつてゐてあらゆる状態は非常に高山的である。

蔵王には無いけれど不忘山には偃松がある、刈田岳には駒草がある。此駒草は二高山岳會のしるしになつてゐる。

蔵王に登るには宮城縣の方からは、遠刈田、青根、峩々、新關等の温泉場があつて非常に都合よい。山形縣の方からは高湯温泉から半日で往復せ

られる位容易である。此方面では夏期開山中は日に三十人位づゝ先達について登る。先達料三十錢で御符を呉れる。今年は總計で千人以上登山したさうだ。此山はよく知られてゐるからこれだけにしておく。

不忘山と屏風は全く別の方面から登る。まづ東北本線の白石驛で下車して鎌先温泉に向ふのが唯一の道だらうと思ふ。鎌先は白石から一里半西北方にあつて馬車でも人力車でも通ずる。旅館は四軒位あるが一條と最上屋が大きい。一泊料八十錢位(宮城縣の温泉場としては物價の高い方だ)一條に頼めば案内を世話して呉れるだらうと思ふ。一條の家に居る獵師佐藤常藏といふ男は今年の六月朝日新聞の記者を案内して登つたさうだ。御進めするほどよい案内でもないかもしれないが相當に知つて居る様だし氣の好ささうな男である。

鎌先から湯川に沿ふて十丁ばかりで彌治郎といふ淋しい挽物細工をする部落に達しそれから西北方に向ふ丘陵を小一里をも登ると不忘山の裾野に出る。鎌先から背後の丘陵を登つて軍馬補充部出

張所の方に出ても同じ裾野に出るが少し遠くなる。此裾野は一面の草原であつて馬の放牧場になつてゐる。夏分は數十頭の群に所々で會ふだらうと思ふ。此處にたてば頂上が眞直ぐに見えてわけなく登れさうだ。細徑は爪先き上りに裾野を斷つて正しく西北方に頂上に向つてゐる。

此細徑の左にある原始的な澤は空澤と曰つてゐる二十五丁位で褒積に達する、此あたりから高山的になつて風の爲妙にひねくれた白樺の多い平が続いてその終りが急に四十度の角度をなして登つてゐる、此急斜面を登り盡せば山頂に達する。頂上の眞南は一大岸壁をなしてゐて其底は糞の積と曰つてゐるが、西の側の方の絶壁の下はナマリ河原と言ひそこから出てゐる澤をナマリ澤と言つてゐる。南東方の登路の南側の谷は「鹿かのまた」と常藏が言つてゐた。此れも殘雪の形から來た名稱で鹿の角が現れるさうである。此鹿のまた澤の末に爆裂火口らしい急崖がある此れを「大鈴?」と言つてゐるさうだ。不忘山は一名御前岳とも言つて權現が祭つてゐる。山麓の百姓が毎年百人位

は御参りするさうだ。不忘山から尾根を傳つて二番目の山頂は屏風岳で名の如く東方は絶壁をなして居るが西方は殆んど不忘山の裾野に等しい様な傾斜である。

此山にも賽の積があるさうだ。不忘山と相對して屏風に並んで西東に入道岳と馬の神山があり此間は深い谷をなしてゐるが此谷の名は聞きもらしたのか忘れたのか今書く事が出来ない。屏風から峯傳ひに杉ヶ峯を経て刈田岳にも行かれるさうだが非常に笹が深くて苦しいさうで面白い事もないといふ事だ。

鎌先を朝早くたてば屏風まで行つて日歸りに充分である。三月から十一月までは天氣さへよければ登山に差支へ無い。それに不忘山は非常に高山植物に富んで居るさうだ。常藏の話では仙臺から採集に来た人が大層ほめたさうだ。

兎に角名の知らない割に容易に登られるしかへつて藏王などより面白いかもしれないから東北地方を旅行される方は是非遊んでゆかれる事を望む。我二高山岳會でも來春中に登山し、各方面の

研究をしやうと思つてゐる。又高山植物の開花期中にも登つて見たいと思つてゐる。

言ひ落した事だが、入道岳といふ名も殘雪の形から來てゐるのださうだ。(二高山岳會)

## 八ヶ嶽

第一日 甲府より汽車にて小淵澤に下車し外輪山編笠岳を経て擬寶珠嶽の尾根に露營。

八ヶ嶽は甲斐の北巨摩郡信濃の南佐久郡諏訪郡の三郡界に跨り甲信國境上に聳え甲府平原を隔てて富士の巨峯と相對す休火山である。

富士山は甲府平原よりは御坂山脈を隔て、見るのであるから麓よりの山容は展望するを得ないから何んぞなく物足らぬ甲府盆地へ君臨するは白峯の農鳥山と根張り大きく西北に聳立して居る八ヶ嶽であると思はれる。

此山は活動した時を去る事が久しいためか侵蝕を受けて山容が甚しく破壊されて居るが尙一帶の外輪山があつて中央に火口丘もある、外輪山の最

山

高を赤嶽と云ひ北に延びて横嶽硫黄嶽となり之より彎曲して西に回り峯の松目となり又一方は赤嶽より權現嶽擬寶珠嶽編笠岳となり西に轉じて西嶽を外輪山の一端をなして居る、赤嶽より細き山梁を以て連接する中ノ嶽阿彌陀嶽の峻峯が所謂中央火口丘である八ヶ嶽と云ふ稱は鋸齒狀の此數箇の分頭の亂立より來りたるものであらう裾野は甲信兩國に跨り廣漠十數里三郡に亘つて其山麓を圍繞して居る。

八月十六日（大正三年）東海道の鐵道が不通で乗客の多い爲めか一時間許り延着した汽車で甲府驛を去つたのは午前六時四十分であつた、龍王驛を過ぐるとかつて登山した金ヶ嶽茅ヶ嶽及び麓の高原や登美穗坂朝神の諸村に今は耕地と成つて其痕跡を留めて居る泥流の丘陵や赤松の樹林などを見つゝ、韭崎驛に近づくと鹽川河岸の安山岩が風化水化の侵蝕によつて恰も柱狀節理の如く其層狀が見える。

七里岩が行く手に見える、往昔此大熔岩流を起した火山に自分は行かうとするのである。韭崎驛

から七里岩の上を汽車は行くのであるから其岩は見えない穴山驛を過ぐると山麓の高原を隔て、八ヶ嶽は外輪山西嶽編笠岳擬寶珠嶽權現嶽橫嶽阿彌陀嶽の東南面を示して高く天空に聳えて居る午前八時四十分小淵澤驛着、同驛で登山に要する補充品を購ひなごして時を移し此部落を出立したのは午前九時三十分、路は部落の西偏した中程から北するのである一里を歩みて山麓に長く横たはる棒道に出でた、棒道から以北は稍登りとなつて赤松多き高原を行くのである。姫甘草、車百合などが咲いて居る、高原を行く時驟雨的の微雨があつた雨氣をもつ空氣の爲めか頻りに睡い赤松の樹下に若真蘆を敷いて一時間許り睡眠し午睡から醒めて再び高原を北し編笠山の尾根に懸つた、尾根の稍東なる小溪流に下つて水筒を充たしたり渴きを醫した、編笠山の登路は倒木が少なく平易であつた鬱蒼たる梅の樹林を行くのである登路が急峻になつて灌木帯に入ると伊吹麝香、草芹葉鹽、釜紫蘇葉鹽釜、伊吹虎ノ尾、紅花蛇莓、舞鶴草、御前橋、女峯千鳥、岩鏡の愛らしき花、苔桃の紅色の小さき

質がわが眸中に入つた岩石の間に水の湧出する所に休息した汗に穢れし體を拭ひ、採集した女峯干鳥を整理した、坂路急峻なる登路に艱み暫くして「山姥の衣洗ひ水」と云ふ水溜りのある所に休憩した、底に水垢があつて餘り清冷の水でなかつた、此水は旱天久しきに亘れば溜るゝさうである、此處で路が分岐して右は編笠岳に登山せずして編笠山と擬寶珠嶽との鞍部に出づる路で左は編笠岳の登路である。

編笠岳の登路は急峻險惡で加之丈高き石楠花、偃松、白樺の密林である搔分け搔分け、登るので樹木の密生して先が明かでない爲めに道を失つたりして漸く此登路を経て山頂に近き崩壊した小岩石に掩はれた所に出でた、崩壊した小岩石を踏みつゝ行くと踏み徹へがなく小岩石が折々崩れた、山頂の少し下に偃松の枯れた幹が骨のやうに白く岩石に纏綿して居るのが痛ましく且つ物悲しくも思はれた、程なく山頂であつた山頂はかなり廣く偃松、岩蒿蘭、苔桃、岩鏡などある、山頂の少し下に梅鉢草が白く清らかに咲いたのが夥しくあつた。

三角點は二等で石の祠が傍にあつた石の祠の中に署名した紙片を入れた、山頂着午後四時十分、山頂の展望は茅ヶ嶽金ヶ嶽黒富士岳等の火山群や御嶽山附近より南に走向する低山を見七里岩は脚下に擬寶珠嶽權現嶽赤嶽阿彌陀嶽の外輪山と立科山の横嶽が見えた白峰山脈駒ヶ嶽山塊も皆雲の中である勿論赤石山脈も北アルプスも見える空ではない西南麓を瞰下すれば廣漠たる高原を彩る松樹の緑は壯美壯大たるものであつた、暫く其雄大なる美に我れを忘れた。

編笠山頂出發午後四時四十分國境の切開きを鞍部に出づべく歩を進めた、雷鳥が折々けたまゝしく羽音を立て、偃松の中から飛び出でた、編笠山の下りは岩石の夥しく露出して居る「ごつ」と俗稱する所で偃松岩蒿蘭が岩石の間に青く點綴して居る岩石の凹みに水の溜つた所が三四あつた、纏て鞍部を経て擬寶珠嶽の西々南の尾根に懸り國境より東南に少許離れて梅、白樺の鬱蒼たる樹林の中を野營地とした、野營地着五時十分梅の枯木を焚火の材料として蒐集し白樺の皮を剝いて梅の

## 山

枯枝に燃え付かせんとしたのが濕氣を帯びて居るので仲々に燃え付かない漸く焚火が燃え出して夕飯を濟まして横になつたが折々の微雨に翌日の登山が案じられて轉輾反側碌々眠られなかつた屢々眼覺めて焚火に薪を加へたりした、微雨がやみ空が晴れて星が樹間から見えたり亦微雨が降り出したります斯くして不安の夜は靜かに更けて行くのであつた。

第二日 八月十七日、擬寶珠嶽の尾根より權現嶽赤嶽中ノ嶽阿彌陀嶽の外輪山を経て諏訪郡に下山。

起き出でたのは午前四時三十分。雲低く空暗く絶間なく微雨が降るのである朝食後降雨の止むを暫く待つたが止みさうもない、高山の雨、糧食の缺乏、凍死などの聯想がせられて、雨中登山の無謀危険なるを思ひ詮方なく、擬寶珠嶽の尾根より編笠岳との鞍部に出で、下山の途に就いた「山姥の衣洗ひ水」に近付いたと思ふ所迄下つた時ふと空を仰げば雲はあはたしく走り動搖し風は西を吹き雲の絶え間から靑空が見えたのである自分は

踴躍して喜んだ躊躇する案内人を急立て、再び登山の途に就いた擬寶珠嶽の尾根に懸つて齧着たる梅に白樺を交へたる國界の切開きを行く急峻の登路に艱み擬寶珠嶽の山頂近き斜面の横路に出でた午前七時二十五分。

横路を歩む時燕萬年青、鈴蘭の結實したのを多く見た針長き鬼薊に惱まされ丈高き草の朝露に脚部は痛く濡れ絶壁を二度危く横切り偃松の中に作られた細徑を行き權現嶽の中腹なる御料局の界標ある所に着し少時休憩の後崩壊した細き山梁を傳ひ急峻の登路を攀ち行きし時駒草を採集した漸く權現嶽山頂着午前八時二十五分、山頂及び山頂近き所は巨岩が夥しく露出して居た祭神は荒澤不動尊であつた。

白雲に鎖された天空折々吹揚げる濃霧で山頂の展望は更になかつた往路を下山して再び御料局の界標の所に出で北々東に轉向する尾根の細き崩壊した所を行くのである蟲取葦々菜斑のある當藥龍膽の花が路傍に多く見えた暫く行くと赤嶽より源を發する立端川の溪谷の流聲が耳朶に響く、急峻

なる登路に艱み支峯の横斜面を経て赤嶽の三角點に限したは午前十一時五十分、三角點は一等で用石は石英閃綠岩であつた。赤嶽攀登の中途屢々濃霧に襲はれて咫尺を辨せざる爲め幾回も休憩を餘儀なくせられた事があつた、赤嶽の三角點の高所より西々北に四五米突高い所があつて小さき石の祠が見えた。

赤嶽山頂に四尺四方位で高さが四尺位の木造の粗末な社殿があつた大山祇命を祀つてあるらしかつた、直下の支峯に唐金の不動尊の立像や其他種々の如何はしい神佛の名を刻んだ碑石が數多立つてあつた、赤嶽の展望は横嶽硫黃嶽を霧の霏れ間に見たのみである。下山して巨石の側面の凹みに水の湧く所で晝飯をした、長之介草や花をつけた當藥龍膽や岩蒿蘭が多くこの邊りに見えた、偃松の蟠つた所を赤バグ尾根の鞍部に出で中嶽の山梁にかゝると濃霧に包まれ微雨に襲はれつゝ踏み堪えある岩石の露出した所を登攀した濃霧の中で突然日光が横から襲ふ位いやな不快の事はない、小灌木の密生した所を経て一隆起に達した山頂かど

思ふとさうではなかつた鞍部を経て中嶽山頂着、午後零時五十分、再び崩壊した細き山梁を辿り岩石の重疊した所を針金を力として登り急坂路の攀登に艱み漸く阿彌陀嶽二千八百七米突の山頂に着したは午後一時五十分。

山頂の展望は濃霧の爲めに皆無であつた山頂は廣く地藏佛の座像が二體と例の如く種々の神佛の名を刻した碑石が十許りあつた、阿彌陀嶽の支峯に賽の河原と云ふ小岩石を積み重ねた所がある午後二時十分山頂を下山した下山路で岩梅を採集した、長き長き尾根を下るのであつた單調なる下山路同一の樹林に倦意をおぼえた。

暫くして樹木が山麓帯となつて、名知らぬ草花が咲いて居るこの邊りを過ぐる時虻や蜂等に汗臭き私は屢々襲撃された、麤がて高原に出でたが一の樹木がなく没風趣であつた。地梨と木瓜が夥しく徑路にあつたがまだ熱さないものであつたから食へなかつた阿彌陀嶽の下山路に諏訪明神の御柱を伐出す御柱山を右手の方に見た檜や杉が密林をして居る山であつた。赤松が茂つて居る所や畑や

◎雜 山岳雜話(山水と主人公)

田のある所を輕て諏訪郡の原村の字中新田に出でた、大門峠街道に沿つた部落で三四十戸あると思はれた、武田信玄が軍を率ゐて松嶋村を過ぐる時瀧坂に棲む老嫗が謠歌して「いざや、まいらう、信濃の國へ坂はないもの善光寺」と信玄に告げたと云ふ傳説がある、瀧坂とは松嶋村より登美村の大宇園子に行く坂である、八ヶ嶽山麓に長く横はる所謂大門峠街道は一つの大門峠が中途あるのみであるこのことは甲斐國志から描出したのである。

中新田より間道を辿り瀨澤新田の傍を過ぐる頃は日は暮れてしまつた小田原提灯に點火して約三里を歩みて中央線の富士見驛に着したのは午後八時三十分であつた。

驛前で夕食をすまして一時間餘延着した汽車に乗つた乗客が多く腰を掛ける事が出来なかつた二日の山岳旅行に疲勞した足で立盡して甲府へ歸着した十二時を過ぐる四十分であつた。諏訪湖に入る宮川に注入する柳川は阿彌陀嶽の火口瀨から發源するのである赤嶽より發源する立端川は落合で

笛吹川に入るのであることを附記して置く。

(小佐野追々)

### 山岳雜話(山水と主人公)

有名な山岳溪流、其他の勝地には、よく聊想さるべき人物がある、耶馬溪といへば直ぐに山陽を思ひ出し、鹽原といへば直ぐに紅葉山人を想起し、華嚴の瀧といへば誰の頭にも藤村操が浮んで來る。私はそれ等の人物を假りに山水の主人公と稱して置く。この主人公にはいろいろ種類があるやうだ。而し大別すると左の三種類に別つことが出来るであらう。

- 一、山岳の開祖——主として宗教家。
- 二、史蹟の中心人物。
- 三、隠れたる勝地を文學によつて發表したるもの。

一、往昔の碩徳や高僧の苦心して開いた山岳は勿論其開祖が主人公たるべきものであつて高野山に於ける弘法大師、比叡山に於ける傳教大師、大



峯山に於ける役行者、白山に於ける泰澄等はこの第一種類に屬すべきものである、是等の主人公は其資格を得る爲には餘程苦心慘憺を重ねて、千歳不滅の功績を残したものであつて中には是が爲めに殆んど半生の心血を注いだものも少くない。宗教上の信念の餘程強固な大人物でなければ企て及ばない話である。

第二、は歴史上の遺跡として偶然に主人公の地位を占有したものであつて、楠正成の金剛山に於ける、後醍醐天皇の笠置山に於ける、名和長年の船上山に於ける、赤松圓心の摩耶山に於ける、佐々木高綱の宇治川に於ける、大塔宮の十津川に於ける、上杉謙信の米山に於ける、日本武尊の伊吹山に於ける、文覺上人の那智に於けるが如きは何れも此種に屬するものである。近代に於て是等の仲間入をやつた一つの奇跡は華嚴の瀧に於ける藤村操であらうか、そして不思議な事には華嚴瀧を見る時藤村操を追懐するの強きは他の主人公の比ではないらしい、或る點に於て多少共鳴するのかも知れない。此種に屬するものは古來の名勝に史的

趣味を添えて益々勝地の名を高めてゐる。

第三、は文學上の効果に依て主人公たるの資格を占有したものである。古い處では三笠山の仲丸、富士山の赤人、天の香久山の持統天皇等最も著名なものである。近世では頼山陽の耶馬溪に於ける、橋南豁の霧島山に於ける、齋藤拙堂の月ヶ瀬に於けるが如きは最もよく知られてゐる。而し乍ら仲麿赤人等は別段此勝地を天下に發表しやうとも何とも思つたのはあるまいだらうから云はゞ偶然の結果に過ぎないが、山陽、拙堂、南豁等は何でも此隠れた奇勝を廣く天下に發表しやうといふやうな考へがあつたのかも知れぬ、山陽の如きは「耶馬溪を以て天下の絶勝となすことは乃公が始めである」といふやうな氣焔を吐いてゐるではないか。兎も角是等の文人達が隠れた勝地を社會に公開した功績は決して少なくはないのだから主人公の地位を與へられたのは當然の報酬である。

明治時代に於て勝地の主人公たる名譽の月桂冠を得た文人は比較的多いやうである。鹽原の勝景は紅葉山人の金色夜叉に依て名高くなり、武藏野

◎雜 錄 汽車の窓より

の郊野は獨歩に依て其趣味を教へられ、信濃高原は吉江孤雁、鳥崎藤村の二氏に依て詩化せられた、藤村氏は千曲川の主人公、吉江さんは西清三湖の主人公たるの光榮に浴する権利がある、箱根の桂月、雄鹿半島の銀月、蘆花氏の阿蘇山なども稍々それに近い、其外瀬戸内海や、十和田湖や、天龍川なども近代的の名勝だが果して何人が主人公たるかは不幸にして私は知らぬ。

開關以來神祕の雲に鎖されてゐた日本アルプスの連山は山岳會員諸氏の努力に依て公開せられたが主人公の月桂冠はやつぱり鳥水先生のものであらう、部分々に就て云へば随分熱心な量負があるらしい。志村さんの白馬山に於けるが如きは最も著しい、近き將來に於ては必ず御嶽、乗鞍、穂高、立山、劍岳、黒部川谿谷、槍ヶ嶽、白山、赤石山、白根山、鳥海山など有名な山々には何れも一人づつの主人公が出来ることであらう、單に文筆のみに止らず、科學者、畫家、などの中からも此種の主人公が生れるかも知れぬ、世界の絶島には發見者の名を冠してゐるものが澤山ある、我邦に

於ても探検者の名をとつた間宮海峡の如きがある。

歐洲のアルプスには登山の先鞭をつけた人物の名を冠した峯が随分あるとかきいてゐるが日本には先鞭を付けて見たいやうな山は残念乍ら残つて居らぬ。

(古家實三)

### 汽車の窓より

汽車の窓より山を眺むる事、觀山旅行の一なるべし、中央線、信越線は云はずもがな、人口に膾炙したれど、東海道線に説き及ぼしたるものなし、山見えざるに非ず、よく南北、中央アルプスを一望に觀得る所あり。

今年二月中旬朝西の京を發し(二列車にて)東上す、列車京都驛を發して鴨川を渡る、先づ左窓に映するは比叡山なり、京の四周を圍る山々、愛宕、鞍馬の山々も、やがて、列車稻荷山の邊りを左折して見えず、逢阪山の隧道を過ぎて大津邊りの左窓、湖岸に比叡、尙ほ北にして比良の長大なる

山容を見るべし、比良殊に雪多く朝日に輝きて美し、湖畔を廻りて、米原驛を過ぐる頃左窓行く手に雪白き大坊主山あり、之れ伊吹山なり、伊吹支に名を知られし、此山も今は、關西に於ける「シールフェルト」として名あり、吾が會の中山京都二中校長、神戸の今村幸男君あたりの獨專場なり否苦戰場なり、山低しと雖も雪多し、夏なりせば草青き坊主山も、今は白銀の兜着けたりとや云はん、美事にして其姿今に忘れ難し、汽車は走せて窓外の景亦飛ぶ、山の形又自から變化あり、見來り見去つて盡きず、關ヶ原のあたり、殊に車中より眺むるによし、大垣に近づくあたり、御岳も見ゆべしと、窓外を眺むれば驚くべし、碧空に大曲線を畫いて瑠璃色なせる大山脈の濃尾平原の彼方に延々たらんとは、此れ他なし中央アルプスの大障壁たりしなり、列車は馳せて、岐阜驛を過ぎ線路は急角度に屈折して、南下す、一ノ宮驛の附近殊によく見得べし。

先づ最北、木曾川谷の右岸に長く裾野を引けるは、御岳なり、白き冠を戴ける事問ふまでもなし、

御岳の左遙に遠く白き裳裾を引ける山あり、即ち乗鞍なり、乗鞍の彼方、白き山あれど、何山なるか、定かならず思ふに飛驒寄りの山なるべし、木曾谷を隔て、中央アルプスの全容は指觀の内にあり、深淵を見る如き碧白色に大曲線を引きて、北より南に延ぶ、駒、空木岳のあたり特に高く寶劍岳は、一きは鋭し、駒ヶ岳のつゞき、中央アルプスの北の果てから南は惠那山迄、其全容を望むべし、惠那の左肩遙に、肩巾廣く張れる白き山見ゆ、即ち赤石なり、其外南アルプスの一、二見ゆれども、其何山なるか定め難し、南北中央アルプスに亘りて一望の下に見得る所、茲の外になけん、殊に中央アルプスの雄麗なるを見んごせば、他に比すべき所もなかるべきか、車は馳せて名古屋市に近づくに従ひ又車窓より眺むべからず、斯る眺めは、天候の幸あるに非ざれば得べからざるべし、夏ならば見得べしとも覺えず。

名古屋を過ぎて復山容に接せず、天龍川の邊り北に當りて白き山見ゆれども、只其先端のみにして、定め難し、静岡に近づくに従ひて、又白き山あ

り、黒法師の邊りなるべきか、岩淵を過ぎ、富士驛のあたり北に白き山見ゆべしと聞けど、此日は知るべくもなし、愛鷹の裾を廻り、列車の函嶺にかゝりし頃、日暮れて、夕陽雲に映じ、紅をなす歐洲アルプスの「夕映え」を思ひつゝ、汽車は東へと走る。

東海道線尙は見らるべき山多し、東京近くにては、大森、蒲田のあたり、秩父山塊、丹澤山塊、箱根火山を眺むべく、尙ほ冬期遙に丹澤山塊と秩父山塊の落ち合ふあたり、白峯三山を望み得べき事、既に知られたり、國府津に近く、伊豆の天城山を見るべし。

大阪四近にては、生駒、六甲など数多かるべし。車窓に映じたる景、一幅の畫圖として捨つべからず、旅行く人、心して見落すなからん事を。

(岳 雄)

## 各地の山岳會彙報 (三)

各地山岳會の景況、計畫に就て投稿あらん事を

乞ふ、本會は本欄を特設して、廣く同志諸君の使用に任せんとす。

### 京大登山部の實況

海國の日本が登山ばかりの大騒ぎやるのは、憂ふべき現象である、或論者から攻撃の矢が飛んで来る程、山岳趣味は普及した、例證するに、諸國の中學校にたとひ、山岳會の名は存在しなくても、實際登山を奨勵實行してゐるものは少なくない、全國を通じて八箇しかない高等學校の過半は、具體的に山岳會を設立活動してゐる、未だ其運びに至らないところでも、實質に於て登山熱は旺盛なもので、早晚火の手を揚げるに相違ない。

京都の小學校では、昨夏休暇中に全市の兒童を東山々頂に毎日登山せしめて好果を奏した、曉明朝霧を破つて數千の兒童が、唱歌の聲勇ましく登山の壯觀は、聞くも痛快なことである、慶應義塾神戸高商、夕陽丘女學校等に登山部のあるはよく世人の知るところである。

獨り小中學高等專門學校にあつて、大學にないのは、種々の事情もあらうが、奇怪なものである、男子の學生々活中、大學位個人主義、排他主義のところはあるまい、此弊を一掃し、剛健なる氣風を鼓吹し、明敏な頭腦を養ふに登山旅行に若くもはない、京都大學に登山部の起つたのは、寧ろ遲過ぎたくらゐで、決して偶然ではない。

學生と登山に就き大ざつばに按ずると、小學校の時は只何の考へもなく山に飛び上るのである、中學に至り多少山岳に關する知識感情を理解して登山をするが、其妙諦は未だしであるが、高等學校程度に入ると、知識慾の熾烈と、一生中又とない鬱勃たる元氣が加はつて、審美的理智的に山岳を觀賞し、山岳に親しむのである、それが大學に入ると學生の氣分がガラリと豹變する、内外の事情に支配されるのか大學に入つて登山でもあるまいと萎縮してしまふ、然らばノートと首ツ引かどいふと、さうでもない、高等學校のアルピニストも四周の氣分の不可抗力のため、漸次麻痺してしまふ、是から離脱するためには、矢張り登山部と

いふやうな團體機關が必要だ、希望者は勿論永い學生々活中、不幸にして登山の趣味を解せぬ哀むべき輩も、提撕誘導しなければならぬ、「旅行したいが連がない」とこぼす人は、決して少なくない、教授には屈指の「自然の説明者」は多い、社會に奮闘してゐる人よりも、學生は潤澤な餘暇がある此好機會を逸してならうか。

多年成立すべくして成立しなかつた、登山部は初めて孤々の聲をあげた。

幸に、京洛の自然は美にして探り易い、一度設立の宣言が揭示や、學友會雜誌に現はるゝや、多數の賛同者を得た、先づ槐より初めよ、低少なりと雖も、鞍馬愛宕四明や、行場廻りは大和天峯山の本場とも謂つべき鷲峰山、アルプスの風貌を呈する所謂比叡アルプス、三日天下の天王山等は繰り返へし々々々登山される、殆んど毎週の日曜には團體の登山旅行は開催され、空線を縫ふ草鞋の殘骸は其數を増すのである、雪中伊吹登山は痛快に、深山の兎狩は時にとりての餘興、兎汁に腹鼓み打つて無邪氣に一日の行樂をさることもあつ

た。

本會の成立は決して學生のみの微力ではない、登山の必要を認めた學生監、熱心なる諸教授の賛同によつてなつたのである。

初め京大學友會のお定まりの十數の運動部があつて、其中に陸上運動部があり、運動會を唯一の目的としたものである、ところがこの運動會は往々にしてお祭り騒ぎになり、弊害を醸すこと少なくなかつたので、殆んど休止の姿であつたのを、時こそあれど其事業を登山旅行を主たる目的に改め、こゝに盛大な團體登山が出来たわけである、特に誘示すべきは、教授諸博士が率先して登山に講演に加入せられることで、感謝に堪へないのである、此夏には是非とも日本アルプスを踏破せんものと、一同手ぐすね引いて待つてゐる。

次に發會式(十二月四日)の山岳講演會の様子を書いて見やう。

學術講演會は最高學府のことであるから珍らしくなく、毎週揭示場に満ちてあるが、山岳講演會のそれは場内の異彩を放つて特に注目された、講

演者は皆山岳研究家、或は登山趣味に對して一騎當千の教授であるから、一同當日を待ち焦れた、今回の講演には特に神戸住友支銀行店長今村幸男氏を主賓として招聘し、講演を御願ひしたのである、今村氏は喋々する迄もなく關西に山岳熱を鼓吹し、風靡せしめた功勞のある先輩である、日本山岳會々員の紹介者たること數十度であるので分る、一度訪問せんか山岳に關する談論風發盡きることを知らず、寫真に繪畫に書籍に遠くアルバインミュージアムに行つたやうな氣がする、勿論バンカービジネスマンとしての豊富の書齋に就ては、こゝに關係があるから言はない、かゝる人の講演を仰ぐのは吾々の本旨なのである。

愈々當日になつた、委員達は大講堂の隣室を陳列場に宛て、襖衣一枚になつて整理陳列する説明札をつける、教壇一つばいにレントを据えつける開會前には見せない筈であつたが、續々詰めかけてくる、やがて準備全くなつて、委員は開會の辭を述べ、第一席に中島博士悠揚登壇すれば、拍手は急霰の如く起る、教授は諄々と壯重に説き去り

赤城山の雪中登山の困苦をジエスチユア入りで面白く話す、教授は嘗て歐洲アルプスの氷河を踏破してきたのである、次に田中博士は其研究になれる氷河に就き、科學的にしかも碎いて分り易く簡單に述べられた、次に臨時飛入の市村博士は獨特の元氣な態度で登壇すれば、さらぬだに油の乗つた學生はどつと喝采する、例に依り明快な語調諧謔續出壯重にして洒脱笑聲堂を割れんばかりに起つた、一先づこゝで打ち切つて陳列室を開放する、忽ち狭い教室は人で埋まつた、この陳列品は全部京都の山岳會員の好意によるもので深く御禮するのである、再び講演に移る小川博士登山の注意を丁寧に説き、萬般に亘り簡明に話され聽衆を了解せしめた、次に雉本博士は譬へば急瀬奔注石に碎けて玉散る如く流暢に、日頃の感想抱負を吐露して、聞く者をして卓を叩かしめた、最後に講演會に似合はぬ旅装した今村氏は、滿場の喝采を浴びて登壇された、此時暮色漸やく追つたが片睡を呑んで一同謹聽してゐる、日本及び歐洲アルプスの登山實況を該博なる知識、豊富なる經驗、斬新なる

意見を附して一時間程、熱烈に真摯に説かれた、歐洲アルプスこそ實踏せざれば新著の書籍をぞし感じがする、講演中下鴨に出火あり揭示をしたが出場したのは僅か二人、しかも後で聞けば危く其人の隣家であつたさうな、之を以ても同氏の講演が如何に聽衆を魅したか、想像される、閉會の辭を述べたのが電燈煌々たる五時半であつた。

直ちに學生集會場で晚餐會が催はされた、集まるもの二十名、各自起つて登山談をなし、愉快に時の移るを知らなかつた、特に新城理學博士の山岳の成因に就て、從來の學説を根本的に破壊し去つたのは、意外の産物であつた、何れ御研究の後發表されるさうである、學界に貢獻するところ大である。

かく盛大に終つたのは、今村氏、教授諸博士、山岳會員諸氏に厚く御禮するのである。

## 京大陸上運動部主催山岳

### 幻燈講演會の記

兼てから吾部でアルプス幻燈講演會を催はず希望があつたが時至らざるを憾んでゐた、丁度此二月高野、辻村兩幹事が奈良に招聘されるといふことを小耳に挾んで此機會を逸してなるものかと一席御講演を願ふことにした。

扱わざ交渉となるオインレと不二山を登るやうに御安く行くものでない、「急がしいから御免だ」果ては假病迄つかつて逃げを張る文通は面倒だ直談判に限ると奈良の途中を擁して京のプラツトホームでお目にかゝる、「どうか京都で御願ひします」「ヘエ？何をですか」と空惚ける辻村氏の人惡るさ。

樓上の都ホテル出張店で朝飯をやりながら、未知の登山者が嘉門次を引張り出すやうに御頼みする、この一事たる荒天アルプスでも縦走するやうに悲惨なものだ、よしアルプスは高くとも登るに難くない、よしクレブスは深くとも越ゆるに苦し

くない、會員六百の繁雜な事務を一人で片付けてしまふ高野氏と日本は愚か歐洲アルプスを一蹴し去つた辻村氏を厭應無しに引止めるべく餘りに困難であつた。

結局奈良迄來いとの事だ、こちらも夏の山の天氣のやうな曖昧な返辭をして置く、奈良迄油を絞られに行くほど自分は脂肪質でない、兩氏獨特の惡口毒舌に血を吐くほど自分は多血質でないから。

奈良の講演會の模様や歐洲アルプスのお話を承る、奈良では三日間に亘る講演なさうな山水無盡藏の兩氏でも同一の映畫を對象として毎日性質を一變してしやべるのは聊か閉口らしかつた、辻村氏のお話によると、ユンクフラウの雪中登山は正月のことだ、吾國で雪中登山をするに新聞雜誌で二號活字で書き立てる、八木氏の『雪の上高地越』も會員間に驚異の眼を以て迎へられた、冬季に槍ヶ岳や白馬岳に登つたといふ人を聞かない、未だまだこんなことでは日本の登山も幼稚なものだと思ふにやに下つて老爺ぶるもかくいふ拙者五千尺に



足らぬ低少伊吹山に雪中登山をして尠なからず尻口垂れ明かに前項の漫罵は失言として取消したくなる、しかしながら行く々々は必ず夏期登山に満足せず晩冬早春にも決行するやうになると思ふ。

奈良の講演會は十一日から三日間である、行きたかつたがこちらの準備もあるし口の悪い兩氏に比して餘りに善人なるために止めてしまつた、それでも復讐は來た、京都の晚餐會の豫定を一寸口を迂らすと早速奈良ホテルから御丁寧に今村氏迄を味方に入れて一通のハガキが舞込んだ「洋食を喰い倦いてゐる際に清新な京都料理の御招待に與つて今から咽喉が鳴つてる」と、此夜僕高熱正に四十度に及ぶ。

愈々當日になつた、肝心の兩氏も未だ入浴しなければ、どうに着いてる筈の幻燈機械も杳として音沙汰ない交流直流の電流問題も未解決であり内憂外患交々至るの慘狀でもう開會まぎはの午後になつた。

やきもきしてゐる中に嬉しや高野氏から電話がかゝつたすぐ訪問すると奈良の木本氏が居て初對

面の挨拶をする、自分の焦慮する様子を見て「司會者となると心配ですなあ」と同情してくれたが此傍に居ながら悠然と落ちつき拂つてゐる高野氏の小面憎さはない、すぐさま機械の一部とスクリーンを停車場迄受取りに行くべく駆けつける、此間珍談續出したが樂屋落になるから略して忽ち講演會に移る。

未だ會場の準備も出來上らぬ中に定刻の一時前から續々聴衆が殺到してくる、大部分は大學三高の學生であることは言ふ迄もない、尤も案内狀は山岳會員に特に敬意を表し招待席を用意して出したが出席は常に四分の一にも足らぬのは遺憾である。五時にさゝやかな兩氏の歡迎會を會場内の食堂でやつた、出席者次の如し。

主賓 高野、辻村兩氏  
 山岳會員 石崎、高瀬兩氏  
 學生 中原、高橋、宮下、谷村、岸本、杉

若、磯貝、山岸、小島、外二君

六時過には早くも二百餘名集つたので委員が開會の辭を述べた、次に拍手浴びて高野氏が其肥満

な軀を壇上に運んだ時は四百名を越えてゐた。

高野氏は開口第一にアルプスの語源意義を簡單に述べ終つて愈々各論に亘る時合圖と共にスウィッチは切られ機械はシューツと唸り初めた。聴衆は一言一句も聞き残すまいと一同は膝を進める、鮮明なる映畫に從つて日本アルプスの地理的説明から其特色、歐洲アルプスとの比較研究に及んだが主に日本アルプスの代表的景勝を紹介する、簡潔にしてしかも肯綮に中り要を取り疏に流れず山色水態を從横に説き來り論じ去ること五十分、聴衆は或は大自然の威嚴に打たれて啞然とし或は天巧地奇に恍惚とし時に拍手し時に喝采す、充分に満足を與へて辻村氏に演壇を讓る。

耳を聳する拍手止むや徐ろに歐洲アルプスを説き出した、明快な調子と洞朗な音聲で名句快辭が滾々湧き出づる如く吐露して底止するところを知らず、流暢なる佛獨英語を頻發して聴衆を煙に捲き、歐洲アルプス會遊者は勿論未知者と雖も吾國屈指の映畫と相俟つてさながら實地を逍遙するの思ひあらしめた、されば五百の頭腦咳もせず森閑

として酔へるが如く聞き惚れた、只壯快な映畫に對する發作的歡聲と反射的拍手が時々寂寞を破つた。

殊にアヴランシュ遭難の前後、人事不省から覺醒してクレヴァスを覗くやうに見えた五人の尼僧の段に及ぶや、鬼氣人に迫まり肅然として聲を呑のみ物に嚥はれ水をかけられたやうな氣がした。かくして講演は二時間にして終つたが此位緊張した講演は稀有なものであらう満場割るゝばかりの拍手で降壇された時小川博士が飛んで來て氏と熱い握手を交換したのも最もと頷かれた。

山岳に對する多大の感動と印象を與へられて聴衆は満足げに散じた、散會後休憩室で歐洲アルプス會遊の中島、雉本、小川三博士は頻りに辻村氏と語り合つてゐた吾々もあそこかたづけをしてゐる最中も兩氏の講演並に幻燈畫の優秀逸品のことばかり饒舌りながら、時の移るを知らなかつたが九時半に解散した。

京大學生集會場由山岳幻燈講演會は是で三度であるが何れ劣らず盛會であつた、一度は三高山

岳會二度目は關西山岳會三度目が即ち吾部の開催である、高野氏は三度とも御講演下され、辻村氏は二度で、殊に初めは歐洲アルプス出發の前夜出演せられたので歸朝後再び同會場で講演されたるは吾々に於ても同氏に取つても感慨の深いことであつた。

高野氏は多忙な業務を控へ御合息の看病を棄て臨時講演に出席せられ、辻村氏は既定の歸郷を枉げて延期し快諾され其他兩氏は幻燈機械スクリーンの貸與等尠ならず便宜を與へられたに就て吾部は滿腔の謝意を表するのである、又本學教授雉本、中島、小川、齋藤、青柳、大井諸博士を初め多數の來場を得て光彩を添え、大學電氣術の中島氏が専ら幻燈の監督を斡旋せられ、三高山岳會員の諸氏が本會の大半の準備をせられたに就き謹んで敬意を表するものである。(S・K生)

## 一 高旅行部近況

十年一號所載の報告につゞいて部の近況を報ず可く誌上を拜借

◎雜 錄 各地の山岳會彙報(三)

させて戴きます。大正四年二月茶話會を開く、生憎朝來の雪に來會を約せられた田山花袋、泉鏡花、二氏の來會なくいさゝか失望した人もあつた様であつたが、梅澤、辻村等の先盟方雪にもめげず出席せられ、數十名の部員は旅語り山話に楽しい夕を送つた。なほ當夜左の談話があつた。

一、大臺原登山談 (實物幻燈使用) 部員

一、樺太旅行談 (同) 同上

五月講演會を開く。昨冬歸朝せられたる辻村先盟の歐洲アルプス談を願つて午後六時から喫鳴堂で大袈裟に聞くことにした。

一、山の 話 丸山晚霞氏

一、歐洲アルプス旅行談 (幻燈使用) 辻村伊助氏

山岳會から高野氏梅澤先輩等來られ種々御盡力下さつた。諸先生を初め校友堂に滿つるの盛會を呈し、趣味ふかき丸山氏の談に目醒むる斗りの幻燈にあらはるゝスウイスの高山深谷に辻村學士の旅談りに夜の更くるをも知らざる有様であつた。

夏期休暇には例により左の數組の旅行隊を各方面に送つた。

第一班。赤城山長瀬沼川俣日光方面。 一組

第二班。常念山塊槍ヶ岳上高地方面。 二組

第三班。針ノ木峠を経て立山劔方面。 三組

其他別働隊として白峯縱走及白峯荒川赤石方面へ一組づゝ、なほ個人として南北アルプスを股にかけて縦行横行を恣にしたもの數は甚多い。願望旅行は六月下旬尾瀬行に初まつて八月上旬赤石登りに終る。

なほ我部では今夏を期して山東滿韓方面へ團體旅行の計劃を立て

てたが此舉は瀬戸校長の熱心なる賛成を得四月に開かれた高等學  
校長會議に於て同校長の發議は各校長の賛同を得更に文部省及陸  
海軍省の多大なる好意によつて南洋新占領諸島及支那滿韓方面へ  
旅行團を出さるゝ事となつた。故に本部に於ては本校内の旅行希  
望者の世語に任ずる事となり廣瀬部長及谷山生徒監の盡力により  
此行は多大の効果を齎して成功に終つた。

本部員も此の行に加はるもの多く歸來これが報告講演會を開く  
事とした。

九月下旬於て喫鳴室二日に涉り寶物幻燈を使用し午後六時より開  
會した。

南洋旅行報告講演會

一、南洋の人情風俗

一、船中生活

一、南航雜感

一、寫眞説明 (寶物幻燈約八十枚)

支那旅行報告講演會

一、滿韓方面旅行談 (寶物幻燈使用)

一、支那本部旅行談 (同上)

一、泰山と曲阜

一、青島より北京まで

後數日動物實驗室に於て展覽會を開き主として南洋よりの採集  
品參考品等を陳列した。開會日數二日校友以外の來觀者も多數見  
受けられた。

山崎博士那須學士青木學士辻村太郎氏等種々の採集品を出品し

て陳列場を賑はして下さつた。

十月末行軍後三日の休暇を利用して秩父方面に二泊旅行を試み  
た。

即ち青梅より雲取を越え三峯に下つて歸るものである、天候不  
良のため好成績を擧ぐる事は出来なかつたけれど十名の隊員は愉  
快な旅をする事が出来た。

大正五年二月茶話會を開き、

一、歐洲旅行談 (寶物幻燈使用)

丸山教授

一、歐洲アルプス土産 (同上)

大關學士

の二新歸朝者の耳新らしい談を聽いた。

春休みには次の班の旅行隊を送つた。

第一班。富士裾野及富士川下り

第二班。伊豆及天城山

第一班には丸山教授が獨逸仕込みのリュックサックを春にして  
参加せられるなど三月一日夜の東京停車場はなかく賑ひであつ  
た。

最後に平常多大の好意と指導を與へて下さる山岳會及諸先輩の  
方に感謝して今回の報告を了る。

● 雪中登山

○ 雪の金剛山へ

▲當地夕陽丘高等女學校登山部では數日前金剛山上に八寸餘の降雪があつたさの音信にさらば踏破の狀態を試みんと二十七日年少女生徒中の健脚者三十餘名を選抜して河内から大和方面へ雪の金剛越えを行つた。

▲三十餘名の女生徒はいづれも甲斐々々しい輕裝にシヨタマ糧食を詰め込んだ下袋を一様に背負ひこんで同校登山部の朝輝、竹下、山田の三教諭に引卒され午前六時半高野鐵道の汐見橋驛を出發するさ次の驛から秋山、駒井、長安の三女教師が乗込む。

▲いづれも昨夏大峰入りを企て、途中から拜み返された女先生達である。

▲午前八時過ぎ三日市を發して觀心寺着、急阪十八丁の樺峠に寛るさ女生徒の追抜き競争が始まる、女先生までが敗けてはならじと駆け上つたが先登はいつも柁木その子(十五)池田みよ子(十四)の兩生徒で健脚の竹下教諭も舌を捲く。

▲十時二十分早着十一時過二十七町を一散に正午過ぎ金剛絶頂へ着いたが八寸から降つたさいふ雪は僅二寸ばかりの残雪に落膽

した。

▲ソレでも記念の繪葉書に萬年筆や色鉛筆を走らせ午後一時四十分絶頂を越え一里二十町の下り道を強行して北宇智驛着、豫定通り汽車で無事大阪へ歸つた。(大正五、二、二九 大阪毎日)

○ 積雪尺餘の上を

京都二中、三高、京大學生及京都少壯實業家よりなるスキー團十二名は中山二中校長に引率せられ二十日午前五時京都發八時長濱驛着伊吹山麓春照村に着すれば既に今村住友銀行支配人の如き前夜より泊り込み一行を待ち居れる熱心家あり氣勢頗に昂れり一行は直に用意を調べ登山の途に着けり伊吹は連日の降雪にて既に▲山麓積雪五寸 に及びスキーを肩にせる一行は氷雪を踏み約三百米突の高所に登れば一帶の尺餘の積雪堅く凍りて鏡面の如く滑らかなり一行は第一回の練習を試みるべくスキーを着け中山校長指揮の下に縱横に滑走せり見渡せば琵琶湖を眼下に瞰下す幾十町歩に亘る斜面には一樹一石の露出するなく白布を述べたるが如きに時々全山を覆ふ。

▲猛烈なる吹雪 の襲ひ來る中スキーの雪を蹴つて矢の如く飛び交ふ機真に痛快なり午前十一時頃には京大山岳會員三十名も來り會し雪中にて運動家の健康を祝福し合ふなど此日の伊吹は京都運

動物家の爲に征伏せられたる體なり、午後も亦數回練習を試み薄暮引き揚ぐる豫定なり。(近江伊吹來電)(大正四、二、二一、大阪毎日)

### ○伊吹山頂で

二十日朝登山、伊吹山の一合目杓子ヶ原で京二中の關西スキー團と別れた。

▲遊人數三十餘 名の京都帝國大學登山隊は伊夫岐法科大學生の案内で四千六百尺を踏破すべく軍歌を高唱しつゝ頂上指して一足毎に深く入り行く白雪を物かはさ踏にちり登り始めるを、

▲不審や標の跡が續いて居る扱は誰か登つたに相違ないを憤慨しつゝ勇を鼓して四合目まで達したりし時も吹雪が襲うて來た一同は痛快痛快と喜び叫び六合目に達するを雪は腰を埋め吹雪は刻一刻降積り、

▲一寸先見えす 此に進退の自由を失ひ危険状態に陥つたが約十分間程して少しく歇んだのでやれく胸撫て下し七合目を過ぎ八合目九合目を突破して午後一時三十五分若森法科大學生は第一着に頂上に着き、

▲先陣の功名を 恣にしやうとしたが十一時半頃露の標主人公古屋第八高等學校山岳會員一部三年生毛利子爵の令息從五位毛利高亮氏外四名が陣取つて居た、二時を打つた時一同揃つたので日本武尊の石像前で八高生と固き握手の交換をなし陛下の萬歳を三唱した頂上は吹く風強く、

▲骨を刺すやうであつたが約三十分間脚下に横はれる琵琶湖の風光を賞へ二時半意氣天を衝くの概を以て八高生と共に急返は仰

向けとなり反駁をついた姿勢々下り三時一合目に降り着いた、此處で、

▲スキー團と共 に五時山を辭し長岡驛八時發の汽車で京都に歸つた本年頂上へ始めて登つたのは此の一行である。(大正四、二、二二、大阪朝日)

### ○雪中大峰昇り

山勝教會大阪組連中七人が頭巾、錫掛姿に身を固め法螺貝を吹き鈴を鳴らし二本の大シヤベルで雪をかきわけ三日がかりで大峰山を踏破した、その中に矢内ひでこ云ふ四十一の

▲酒屋のふっみ さんが一人加はつてゐるのは面白い、明治六年にお山を開いてから女人の登山を許したにも拘らず、麓の洞川村の若者達が承知せず三四年前に先達一人を運れた女連れが登山を企てた時には村會まで開いて妨害したと云ふ有様、それを憚つてお秀さんは藏王堂から五六町上つた愛染で待つてゐて一行の來るのを反對に迎へ厭應無しに従いて行つたと云ふ、扱二十二日午後六時に湊町驛を發した一行は、

難波寛二、山田次吉郎、佐野甚六、友田藤次郎、新田虎治郎、山野三次郎、平井富藏。

▲前述のお秀さんを加へた八人で、  
▲何れも不動様 此役の行者を心に祈り雪を犯して登つたがその日は百町目の炭焼小屋で一泊した、此處までは些したる困難も無かつたが翌日はお山第一の高峰大天井を通る事さて連中は一生懸命揃つて草鞋を穿き代へるやら鉢巻をしめ直すやら、やがて大天

井の下まで来るに眼前に銀の柱何十本さなく突立つてゐる、云ふ迄も無く夫れは大氷柱で直径が一尺長さが一丈八尺と云ふのだから驚かざるを得ない、大天井の次の例の

▲蛇原の難所 谷には水が凍つて氷さなり、その氷の上を猪や狼がウロウロ食ひ物を見つけてゐるに聞いては尙更に恐ろしい、猪や狼さ云へば谷間ばかりで無く昨夜宿つた炭焼小屋の近所にも梅鉢のやうな足跡が所まんだらに着いてゐた、今宿のあたりは、

▲雪の深さが四尺 を過ぎシヤベルを使つて掘らなければ通る道も無い有様、折柄風は吹き猛り木が折れる雪が飛ぶ二間の先が見えない中を鈴の音ばかりがチリンチリンと聞えてゐる、桐辻、油こぼし、金かけなどの難所が雪や氷に閉ざれて居る事まで危険は言語に絶してゐる、斯うして本堂へ着いたのは二十三日の午前八時で護摩を焚いて祈念を凝らし凍えた手足を暖めた時始めて人心地が付いたといふ。(大正五、一、二六、大阪朝日)

### ○雪の六甲の娘子軍

夕陽丘女學生の登山

夕陽丘女學校登山部にては數日前より今年度の最終登山として生駒より信貴への縦走を計畫中十一日六甲に降雪ありとの通知に接し急に計畫を變更し一行百三十名の女生徒は竹下、朝輝、峰谷納谷、中村、長安、潮田の七教諭引率の許に十二日午前七時阪神電鐵樫田より乗車東明に下車し午後一時過ぎ山頂に達しゴルフクラブワンドにて雪合戦を行ひ居る折柄神戸住友銀行支店長今村幸男氏家族一同を引連れて登山し來り同氏は此機會を以て「女子と登

山」の題下に一場の講演をなしかけて約二時間後下山五時無事梅田着一同解散せり。(大正五、三、一四、大阪毎日)

### ○盲生の雪中比叡登山

私立京都盲啞院にては市より兎角の干渉ありしにも拘らず血氣に逸る生徒の希望抑へ難く十九日午前八時二十分、

▲盲生部の生徒 男女有志二十餘名を廣瀨校長以下職員七名が引率して雪の比叡山に壯快なる盲人登山の新記録を作りたり此の京都附近は十二月に入りてより始めての降雪にて一行は距離の短縮を圖る爲登山道な

▲最も峻しき 雲母坂に取りたるため山麓なる修學院村にて既に二三寸の降雪あり登るに隨つて雪は膝を没する程となりしが更に屈せず力足を深りながら踏みめめて登山を續く、一行中の最年少者は漸く今年、

▲十四歳の少年 盲人にて中には六名の盲女生徒ありしが何れも袴の股立を高く擡げ一本の杖を頼りに轉びつ轉りつ聲を揚げて遮二無二雪を掻分けて攀登り午前十一時には早くも、

▲絶頂に迫つて 四明ヶ嶽なる將門岩に於て一同天皇陛下の萬歳を唱へ午餐を喫したる後折柄

▲降り頻る吹雪 の中を物さもせず江湖版本に降りて更に木津迄を徒歩し一同疏水運河の船に乗つて夜に入り無事京都に歸着したるが一行中には高足駄を穿きたるまゝ杖を振廻して行程、

▲七里餘の雪山 道を踏破したる強の者あり、此行に参加したる同校の特待生にして目下減按科第二年に在學せる中瀬三郎は元氣

## ◎雑 報 初雪 登山者の氣焔

好き面を輝かしつゝ語る「夏の山と違つて冬の山は」

▲手で探つても 雪がわかるので愉快です一本の杖でヨク足場を測つては登るので随分轉びましたが雪があるので怪我をする恐れがありませぬ段々高くなるぞ、

▲空氣の感覺で 一種云ふにいはれぬ氣分になり寒くさへなかつたならコンな處で勉強したいと思ひました、霧の巻いてくる時はヨク香でわかります寒さは随分こたへましたが此處が愈々絶頂ださ聞いた時と皆で萬歳を唱へた愉快さは一生忘れませぬ阪本へ下山の道で我々一行中の、

▲盲女生が杖を力に降りて行くのを折柄登つて來た東京高等師範學校の生徒が見て肝を潰したのは實に痛快でした「さ意氣軒昂たり同校にては二月頃の大雪に際して第二回の雪中登山を爲すべく計畫中なりと。(大正四、一二、二二、大阪毎日)

## ●初 雪

## ○信飛國境の初雪

松本地方は近頃俄かに冷氣となり最低温度は三十三度の日もありきアルプス連峰は穂高嶽を中心として初雪に白く成れり。(大正四、一〇、一七、信濃毎日)

## ○初 雪 降 る

四阿の高嶺より菅平へ長野市附近に茲數日來俄に冷氣を加へ十四日朝の長野測候所最低氣温は四十七度三分まで下り上信國境に

當る四阿の高嶺より菅平一帯に亘り初雪を降らしたり。(大正四、一〇、一五、信濃毎日)

## ○淺間蓼科の初雪

廿六日早曉淺間及び蓼科八ヶ岳の諸山は初雪眞白に降積りたり(大正四、一〇、二七、信濃毎日)

## ●登山者の氣焔

—冬の登山も面白い—

京大陸上運動部の主催で四日の午後一時から法科の大講堂に第一回山岳講演展覽會が行はれた、中島博士は其の高等學校在學中赤城山で經驗した大危険な物語り山を南側より登る場合は北側よりする場合よりも雪の有無に就て特に注意せねばならぬ、余が此の危難に遭遇したのは四月の初旬で山の南には既に若草が萌え出て居た位であるから頂上の雪が深いなど夢にも想像しなかつたので飛んだ間違ひを惹き起した自分の經驗によれば積雪は樹木の近くが深く木の無い所が浅い様である又湖水を渡るに人夫は中央を行きさ教へた理窟を聞いて見ればなる程と思ふけれども増殖よりも賢く又物凄程

▲澄み切つた水 の面を無雜作に真中を歩む勇氣は出ない自然さ端の方を通り度なるものであるなど、頗る印象深い話を終ると年の若い田中理學士が私は氷河に就て手引の様な事を話しますと前置して先づ氷河の概念を説明し最後に日本に氷河有無の問題が起



つたのは極く近い話であるが明治三十五年山崎博士が飛騨を旅行して多くのカールを發見してから我國にも昔は氷河があつたのだと主張した然るに當時横山博士などは日本の氣候を理由として之に反對したのであるが矢部博士は地層の關係から氷河肯定説を主張した、偶々ヘットナーが信州島々村で有力な證據物を發見してから肯定説が益々優勢となり小川博士も肯定論を助けた余も亦信州に旅行して「ヘットナー」石に類似のものを發見したのである、なつかしく歐洲に於て喧しく云はれる

▲氷河の壯觀 は今日日本に於て觀る事は出來ないけれども地質時代と交渉のある痕跡を索れる事も亦登山者に取り一つの樂であるらうと遽に科學者らしい話を終へると霸氣横溢と云つた市村博士が腑腹圖になつた「ミュンヘン」を中心とする兩獨の山河を指しつつ得意の辭を振ひ苟くも獨逸に遊んで獨南の山河を跋渉しない者は未だ以て獨逸を讀るに足らないとの大氣焔で席を小川博士に譲る小川博士自分等の學生時代には修養と云ふ詞は無かつたけれども事實そのものは旅行に負ふ所が甚だ多かつたと思ふと底力のある聲で多年山岳の間に養ひ來つた氣魄を虹の如く聽衆に投げつけて置いて後ち、

▲旅行に關する準備 の大切な事例へば行定を豫定するはは平面距離の測定と同時に高低の度を參酌せればならぬ事濃霧には必ず毛織物を用意せねばならぬ事服装中最も注意すべきは腰部以下にある事其他携帶品の注意を實驗に照して丁寧に話し次に雄本博士は山を樂むの臆駭と題して山に關する種々の經驗を面白く話し要するに予が山を樂むは上戸が酒を樂むのと同じで只何と云ふ事

なしに之を樂むのである必ずしも山の高低を論せず山の氣分を愛し此の氣分に接して囚へられざる氣持を獲得する事を非常に愉快とするので明鏡靜水の境に立つて學問を研究したいと云ふのが予の理想とする所であるを述べて拍手の内に降壇すると最後に登山服に身を固めた長鬚緒頭の今村氏が潤達の声を以て先づ實觀し來れる高山の風趣を讀嘆し滿堂の聽衆を樂天地に誘ひたる後徐ろに話頭を轉じて一千八百六十年以後に於ける

▲登山界の狀況 を述べた其の説く所の大要は此頃歐洲で登山家と稱せらるゝ人々は從來の如く甲乙丙と云ふ様に薄山の山を一夏に登る事をしないで或る一つの山を這び之を中心として種々の研究をする事云ふ事が流行し色々の著書も出て居る其から幾多の高山に登つて山岳趣味が次第に濃厚になつてくる事斷崖絶壁を繩に依つて攀ち上る事云ふ事をするのでロッククライマーに取りては山の高低は問題で無く只氣の弱い人が身憚する様な斷崖絶壁を最も愉快とするのである日本では種高槍嶽と云つたやうな山々がよいので兎に角面白味と困難の程度が正比例するのである又第三の流行は無案内登山で人によらず案内記を東道として行くのであるから危険程度は非常に多いアクシデントの八十パーセントは此の無案内登山者と云はれて居る山上の氣象は變化極まりなく到底地上の如きものでないので山手の好く靜かな山容が、

▲瞬間にして修羅地獄となる事は常であるアルプスの一角で二人の案内者が天候激變の爲に非常な困難に遭遇して居たのを山麓で望遠鏡を見て居たものに發見され一人は漸く孔隙から救ひ出されたが他の一人は即死して居たと云ふ話もある又蜜乳月の若夫婦

## ◎ 雜 報

## 奧様連の山登り

一日半で大阪から富士山往復

一七八

が登山して飽かぬ眺めに耽つて居る内夫が千仞の谷底に陥つた、めに新婦は氷河の流れを三箇年間待ち暮し漸く夫の死屍を麓に得た云ふ憐れな話もある此んな風であるが普通の人の爲には専門の案内人が必要で黙米では非常によく教育されて居る従来登山は夏のものこそせられて居たが近頃冬の登山も云ふ事が流行し殊にスキーが出来て以來之を利用するものが年々多くなる様であるスキーに依つて相當の斜地まで登り得るから絶壁の所丈ロッククライミングをやりさへすればよいわけである而してスキーに依れば、▲一時間六十哩の速力を出し得るから非常に早く目的地に達する事が出来る最後に山岳會は世界各国に出来て殊に獨逸の如きは九萬の會員を有し種々の設備も出来て登山趣味を有益に助長して居る我山岳會は目下六百名を有するに過ぎないが將來益々之を發達せしめ體力の旺盛を必要とする今日の社會的需要に應じなければならぬと結び五時半散歸したが近來稀に見る沈着いた興味深い講演會であつた。(大正四、二二、六、大阪朝日)

## ● 奥様連の山登り

▲ 楽しみと云へばお茶と花の稽古ばかり、殆ど一年中坐つて居る大阪の奥様連中に少し山登りの面白さを知らせたいと高安やす子夫人が發起となつて四月の中頃花の美しい時に比叡山登りを試みるさうです、面白いでせう参りませうと賛成をした方々は久保知事夫人、新妻警察部長夫人、麻生日銀行支店長夫人と令嬢など▲「山登りには全く経験のない方もありますから駕をよこつて疲

れた人を代るふのせたらい、と思ひましたけれど腰押しの方が樂ださうです、からそれに致します、私は六甲山に度々登つた足です、からそんな心配はありません」と高安夫人のお話。(大正五、三、二六、大阪朝日)

## ● 一日半で大阪から富士山往復

□ 横に走るさ二百八十五哩

□ 縦に上るさ一萬二千餘尺

大阪から土曜日半日、日曜日一日で富士山に登つてや來うといふので私は飛出した、富士山くさ大きくいふも一日あれば十分登つて來られると思つてこの七日の土曜の午後一時三十四分大阪發の東行列車に乗つた、草鞋、金剛杖、着蓆などは御殿場で調へるこゝにして手頃のバスケツトに夏服一着其他。

地圖四枚(富士山、御殿場、山中湖、大宮以上陸地測量部五萬分一) 磁石、足袋、手拭、保温壺、空氣枕、氷砂糖、石鹼、扇子、寶丹、楊子、齒磨、書籍四冊 ▲ホケツト富士案内(御殿場町富士通信社發行) ▲野中至氏宮土案内(春陽堂) ▲横井春野氏富士と足柄(東京散文堂) ▲小嶋鳥水氏不二山(如山堂)

等を詰め込み裕衣、けて三等室の一隅に虐待されつゝ八日の日曜の午前三時四十八分御殿場に着く、御殿場の町はまだ夜が深い驛前の富士屋で登山支度を濟せ握飯一包み、青草鞋一足を腰につけ荷物を預けて番號札を受取り、涼しい間に太郎坊迄の歩行は樂

であるが餘力を剩すためと時間を節約するのために二合五勾の終點迄馬脊に倚ることをして直ちに淺間神社に賽し、其處から馬脊に打乗つて午前四時十分御殿場の町を離れる、着車より二十二分を要した、尤もこれは手頗よく行つたので、普通はまづ四十分と見て置かねばならぬ。

□ 火山灰の砂原を

□ 霧地頂上に突進

與平治茶屋迄來るまでつかり明放れ當面の富士は六合目邊りに帶雲を繞らして静かなること夢の如く天際に變えてゐる、馬は途中瀧ヶ原と太郎坊で休むことにしてゐるが瀧ヶ原の立場における休息時間約三十分、之はヨウ少し急がねばならぬ、一里松、馬返しを経て太郎坊まで行く間に二度ばかり雨に逢ふ、八時過ぎ二合二勾に着き此處で馬を棄てる、御殿場から乗馬代一圓五十錢、直ちに徒歩に移つて火山灰の砂原を電光形に登つて行く、雲が非常に深い、五合目から道が稍急になるので、緩歩して大股に歩く、一帯の雲霧で、下山連中の白衣が際涯のない雲の波から泳ぎ出て來る有様は、富士でなくては見られぬ大観である、七合目で突如として頂上を望む、到る處飯の上の蠅にも似たる無數の登山者を眺めて、其盛なものに愕かされる、八合目以上、所謂胸突八丁に約四十分を費して九合目着、此處から頂上迄は十五分で直に到着。

□ 頂上の萬年雪を

□ 覺法場でお土産

頂上では噴火孔に一寸挨拶して直ちに左に廻り午後一時奥宮淺間神社に賽して携へた靈食をしたゞめる、社前に繞らした風除

◎ 雜 報 一日中で大阪から富士山往復

けの石垣に躡つて、寒氣に慄えてゐる人々の中に七八歳から十二三歳位の女の兒が三人許りゐた、顔色蒼白、唇の色さいふものがない、宮傍の頂上郵便局から大阪本社の不染氏に向け「アスノアサマンネンユキチサシアゲマス」といふ電報を打つ、それから直ちにも鉢巡りにかゝる、内輪巡りの三十丁、外輪巡りの五十丁兩方の内外輪巡りと定め左廻りに劍ヶ峰、雷岩、虎岩、白山ヶ岳、金明水、久須志ヶ岳、成就ヶ嶽を経て銀明水に歸る間に要した時間實に一時間十五分、途中劍ヶ峰から大澤に下る道が頃日の暴風雨で崩落して居るのに出逢ひ携帶品を吊り下して斷崖を這ひ下らうとし風に吹き飛されて五六間墜落したのを、覺法場の効力如何を見るため金明水傍の萬年雪をそれに詰めてゐたので多少の時間を要したから、天候の危険でない限り鉢巡りは一時間と見れば大した相違もあるまい、頂上は暗れてゐたが七合目邊りから下は全體に霧に包まれ富士の見界距離百二十七哩一六さいふ外巡りの大観は遂に得ることが出来なかつた。

□ 銀明水から一散に

□ 其夜御殿場出發

午後三時過ぎ愈々下山に決し銀明水から一散に走り下る、七合目の雲に入りて石室に到着する迄約四十分（上りより早きこと約一時間）七合目より道を寶水山の砂走りに取つて、一氣に三合目に馳せ下る迄約四十分（上りより早きこと是も亦約一時間）砂走りは雨のため足の運びに任せたので走れば二十五分三十分に三合目に到着することが出来る、二合目からは緩傾斜を緩歩して午後六時太郎坊着、其處から下りの乗合馬車に乗じて馬返しを経て

◎雑 報 一日中で大阪から富士山往復

瀧ヶ原迄下り御殿場は七時四十二分の西行に危く乗り損じて止むなく八時二分の東行で同五十四分山北に下車、西行の三等急行を待つ一時間餘の間驛前の旅館で夕食を済ませて一風呂浴び濡れた夏着や不必要品を小包に託して元のやうな浴衣がけに富士の頂上は何が寒いといふやうな顔して聊か手摺れのした金剛杖を小脇に十時發の三等急行に乗る。

□ □ 一日半富士往復に

□ □ 要したる諸種の記録 □ □

歸りの汽車も可なりの混雑であつた途中靜岡で、九日の午前零時に入り、名古屋で夜が曉けて九日午前十一時一分大阪驛に足を下した、三十七時間を以て横に走るこゝ二百八十五哩、縦に上るこゝ一萬二千四百六十七尺、一寸した鑿を描いて來た譯である九日正午拂へて行つた島津製の魔法場を開くさ八日の午後一時中頂上で取つた噴火孔の萬年雪は、十二時間後に於て形態少しも變らず、溶解した約二分の冷氣骨を刺す淨水の中に玲瓏さとして固まつてゐた、(其後尙貯蔵して此固形體は屢々外氣に觸れたに關らず全く溶解する迄には二十五時間を要した) 今回の登山に於ける記録は左の通りである。

▲往路(七日)土曜日

	時間	歩行時間	休憩時間	各距離
大坂驛	午後一、三四分			
濱松	一、一、四分			
沼津(八月)	午前三、三分			
御殿場	三、四、八分			

一八〇

同出發	瀧ヶ原	一里松	馬返し	大耶坊	二合目	二合五勾	三合目	四合目	五合目	六合目	七合目	七合五勾	八合目	九合目	頂上(銀明水)
四、一〇分	五、〇五分	五、五五分	六、一五分	六、四〇分	七、三〇分	八、一〇分	八、三五分	九、〇〇分	九、三二分	一〇、〇八分	一〇、四七分	一一、一二分	一一、四七分	一二、三七分	一、〇二分
一	五五分	二五分	三〇分	一五分	二〇分	四〇分	二五分	一五分	三二分	三六分	二〇分	一五分	三五分	四〇分	二五分
	二五分			三〇分			一〇分			一九分	一〇分		一〇分	一〇分	一〇分
	一里八丁	廿二丁	廿五丁	二十丁	十六丁	十四丁	七丁	五丁	七丁	五丁	四丁	三丁	四丁十間	七丁	二丁

▲頂上を鉢巡り(外巡り)

(八月)日曜日

銀明水發	一、〇二分				
奥宮	一、〇七分	五分			
劍ヶ峰	一、四七分	一〇分			
金明水	二、二二分	三〇分	一〇分		
久須志神社	二、四二分	一〇分			

五里六丁廿五間

山 岳

銀明水 三、〇二分 二〇分 一五分

▲歸路(八日)日曜日

時 間 歩行 休憩 標 高

銀明水 三、一七分 | 一、二、〇〇〇 尺

九合目 三、二七分 | 一、〇〇〇

八合目 三、四二分 | 一、〇、六九〇

七合目 四、〇二分 | 九、九〇〇

寶永山小屋 四、一二分 | 八、七〇〇

三合目 四、五二分 | 四、〇〇分此間砂走り 七、一〇〇

二合目 五、一七分 | 五、二二〇

太郎坊 五、三七分 | 二〇分 一五分 四、三〇〇

馬返し | 三、三六〇

瀧ヶ原 六、三七分 | 四五分 二、〇八〇

御殿場 七、二二分 | 四五分 一、五〇〇

同 發 八、〇二分 | | |

山北着 八、五四分 | | |

同 發 一、〇〇分 | | |

靜 岡(九日)午前、天分 | | |

名古屋 五、一〇分 | | |

大阪着 一、一二分 | | |

▲登山に要せし時間 十時間五十二分

休憩 時間 一時五十九分

◎雜 報 京の山岳趣味

▲下山に要せし時間 四時間五分  
休 憩 時 間 十五分

▲往復の經費

▲五圓十二錢三等往復割引乗車券(大阪御殿場間) ▲五十錢歸路  
急行券一枚 ▲十五錢金剛杖 ▲二十錢着席 ▲廿五錢草鞋五足 ▲一圓  
途中休憩料、葛湯、スタンプ代等 ▲二十錢繪はがき一組 ▲一圓五  
十錢御殿場より二合五勺迄乘馬賃 ▲一圓五十錢辨當五食代 ▲一圓  
茶代其他 ▲二圓雜費 ▲合計十三圓四十二錢(北尾生)(大正四、八、  
一五、大阪毎日)

●京の山岳趣味

摺鉢の底の様な京都は、どちらを向いても鼻を打つ、その鼻を  
打つのが四面の山である、だから京都人は金に不自由はするとも  
山に不自由なことはない登らうと思へば何時でも登山が出来る昔  
からの相場が斯う極つて居たかして私の藏して居る書物の中に、  
山本世端は曇り夜の曇らはしき、こなく、朝日子のかけあきら  
かにあきらめたる人なれば、誘ひて日枝の山に採薬せばやとて  
友がきそゝのかしくれば、打連れ曉より立出づ、八瀬のわたり  
を行に、かしこの田面、こゝの山そばに、名も知らぬ草ごもの  
茂れるを摘まり、或は指さして問ふ、木にまれ草にまれ、其名  
の知りたるのみかは、能毒をもつばらに考へ覺えて、此草は其  
の薬よかの木は斯る能ありて、漢の聲はしかなり、大和にては

一八一

かくいへりさ、眞つぶさに教へければ、供ふ人々蕨草を摘み、木を手打つて、左より右より、ひまなく問ひきくは、いさかしましき日となりけり、己れも草を摘みさりて

いかにさもいささら露の草の名を

君によりてそ覺えそめける

さ口吟み、八瀬より日枝に上るに、或は獸の名をちほせたる、鳥によそへたる、或はみやかなる艶なる、はたいやしげなる、懐かしげなる名さも、百千にもあまれば、いかでかそらには覺ゆべき、されど十が中の一をだにさて、此草の名によりて詠めるは、いさもくつたなきわざながら、たゞその名を忘れしめてなん、歸るさは無動寺より白川山かけて、峰に上り谷にありつゝ摘るるに、もたせつるかたみもふもげになんありける。

夏知らぬひへの山百合花さかは

一もさむくれ木こり柴人

夜をこめておもひたゝすはほのくさ

曙草の花をつまめや

(千種有功卿日記)

かくの如く文政頃には採集旅行の爲に登山は旺んであり、又山岳に祭祀せられてある神社、佛閣に參詣する團體が多く、京都の山岳はこれが爲に開かれて、秘密の境さては一さしてなくなつたのである。

□ □ 山岳趣味の普及に

□ □ 功ある今村君 □ □

近來山岳會が京都に開かれてから一段と山岳趣味は鳴道され

た、大學や三高の學生連中にも勃然として登山熱が起つた、そして京都で山岳趣味を解するものは、今村幸男君の名を知らぬものがあるまい、君は早くから登山を奨励してゐる男で、いつかの新聞にも記した通り、京都在住中甚だしく比叡の峰を愛し、八十幾回も登山して、其絶頂をほしいまゝにした、神戸に赴任してからは六甲山下に閑居し、益々山岳趣味を鼓吹して、ツイ此間も京都から友人が氏を訪れると、夫人は妾達迄も此頃には主人にすゝめられて六甲の山登りをやりますこの話であつた、これを見て今村君が如何に登山を奨励して居るか判明するのである、今村君は猶神戸にあつても比叡の峰が戀しいと見えて、閑ある毎にテケテクと京都に来て、石崎光瑠君の宅などに一泊して比叡に登つて行く、元來今村君の登山は唯山に登ればよいのであるから、始終山にも登れたのである、山に登つて寫眞をとるさか、何か希望があるさ中々に面倒であつて容易に登山は出来ないものである、ある男の話による今村君は健脚であつて、信者が不動寺に參詣するのと同じ氣分で、山登りをするのであるといつて居つたが、マアそんなものであらう。

□ □ 雪櫃熱は大に

□ □ 奨励せられたが □ □

これもある男の話であるが本年は雪櫃は非常に奨励せられて、此間も會合の席上で例の雪櫃の奨励者である中山二校長は旺んに雪櫃の奨励をしたが、直に今村君を始め二三名の人々は雪櫃の道具を買込んで、これが練習をやらうとの意氣込であつた、京都の山岳では雪櫃の練習をする場所がないので、態々伊吹山三界に出

掛けるのだ、伊吹山の中腹には平地があつて、雪橇練習には好適の地勢である、六甲のゴルフ場も雪橇には適當せる土地であるから六甲山に雪が降ると今村君から同好者の下に電報が来て、雪橇の先達である中山校長が、同好者のためにも師匠さんになつて雪橇の練習を始めるこの事である、雪橇の練習には奈良の嫩草山が一番よいのであるが、嫩草山には餘り雪が降らぬから駄目である

□ □ 山岳趣味で影響を  
受けた文展の出品

近時京都美術界には山岳趣味が非常に涵養せられて、山岳を揮毫せぬものは畫家でないと思はれる位になつた、山元春舉畫伯は山岳趣味に富んだ人で已に日本山岳會會員になつて居る、時々伊吹山などを跋渉して畫材を求め、青年畫家石崎光瑤君は度々日本アルプスを跋渉した豪の者、川村曼舟君亦登山黨の一員、毎回文展の出品畫題が山岳であるのを觀ても其一斑が知れる、それから山下竹齋君亦絶えず愛山黨の一人である、文展の出品畫は近來山岳が多くなつたといふのは、全く山岳熱が旺になつた結果であると思ふ、大谷光明師は洩らすべからざる愛山黨であるが、悲しい事には近來耳をわづらつて東京築地別院に靜養して居る

□ □ 比良はツマラヌ  
山で極めて急坂

京都では随分世間に名高い山が多く、比叡、愛宕は東西に相對して居るが、江州の比良は有名であつても、登山者が甚だ少いがこれは山上にこれといふものがないからである、琵琶湖に面して居る方面は餘りに急ではないが、京都に面し方は險峻である、小

山源治君は曾て江州小松から登山はしたが、山道は澤山にある、さりながら無趣味の山だといふて居るが京都の方面には水晶が澤山に産出して鑛物學研究には餘程面白いこの話も聞いて居る、蓋し雪中比良登山した團體は先づ滋賀師範だけだらうこの事だが、何しろ山は君子の好む所であるから益々山岳熱の旺なることを希望する。(大正五、二、一九、大阪朝日、京都附録)

●團體と登山研究

——日本アルプス踏破團に就て——

大阪市教育會にては十八日午後六時より今回の日本アルプス踏破團に参加せる講師田中、宇野兩文學士、竹下、朝輝兩教諭、荒木市書記を始め朝日、毎日兩社の同行記者、寫真班員及び山府理事官、宮島市學務課長、府市視學等を招待し本山理事長、大村湯淺、橋詰各理事等出席の上日本ホテルに踏破團報告及び結果攻究に關する晚餐會を開催し席上各自の報告及所感談あり食後別室に於て概要左の如き談話の要領を取纏め、更に講師及團員の詳細なる意見を附して之を公表することとなしたり。

▲團體のアルプス登山 北部アルプス中の上高地温泉を中心とする登山地點までは六七十名迄の團體の入山可能にして寧ろ二三十名宛に團員を區分せざるを便とす但し穂高山、鎗ヶ嶽の如きは二十名以上の登山危険なり、機嶽其他は此限りにあらざるべし。尙ほ北部アルプスの白馬越え其他の如き山上小屋の假宿を

要するものは十八内外を限度とするも今回踏破せる白馬より糸魚川に越ゆる道は三十名の團體にても越え得べし。要するに今回の團體踏破によりて餘りに誇張されたる縦路の報告を平易ならしめたる點の少からざるは喜ぶべし。

▲女子ミアルプス 上高地温泉までほ子供及女子の團體も入山するに適せり。徳本峠を越えて上高地に出て、雪の峻峰を歴観して白骨より歸るは實に得易からざる女子と大山嶽との接觸地點たるべく、此際最も平易通俗にして親切なる「女子の入山案内記」や「アルプス各方面の團體入山案内記」を編纂發表すべし。▲登山趣味の普及 今回の壯舉が一般の登山趣味を刺激し剛健なる氣風の養成に大功あるを認むると同時に、今後の登山計畫に資するため九月に通俗アルプス踏破報告幻燈講演會を開催して團員の講話をなすと同時に寫眞及記事、批判、研究等を一括せる記念書冊を刊行すること等。(大正四、八、二三大阪毎日)

### ○苦い土産

■今度の大阪市教育會主催日本アルプス踏破團は多數の人を高山に引き上げたといふ新記録を作つたに相違ないが然し此くの如き事は一度ありて二度なすべからざる事であると思ふ出来ぬ事はないが出来すには種々の周到なる準備がいるそれでも猶且危険が伴ふといふ事を明白に經驗した。

■準備の第一として實地踏査が肝要である事はいふ迄もない例令ば白馬山上の石室の如きも始めは二十人をいれて餘りある様に云ふてゐたが抑も間違ひであつた道入るに道入れぬ事もないが危険

を覺悟せねばならぬ。

■山に慣れたものからいふと白馬嶽位は何でもないといふ事實白馬の路は自分にまつてさまで驚かるゝ程でもなかつた一方山に慣れぬ者は兎角山に勿體づける中には自分の登山を誇るゝ云ふ幾分虛榮心の爲に誇張の說を吐く多數を動かしといふ場合に實地踏査を要するは是が爲である今回の旅行で第一班團員が不安の念を抱いたのは多く茲に因してゐる。

■高山に登るには是非とも防寒具が必要である山を見送るに必ず失敗する白馬山上雨と嵐とに襲はれて冷氣人に迫つた時何のこれ式の事と平氣に——でもないが——打勝つを得たのは是等の用意が出来て居たからである其他冰糖糖、金剛杖、ピッケットなど一寸考へて見れば殆ど取るに足りない様なものまでも非常な補助となつた。

■天候の變化は致し方がない一人や二人の旅行者ならば何時でも旅程を變更して勝手に行動することも出来るが多數團員を有する場合には豫じめ是等の計畫を立てゝおく必要もある。

■荒木幹事が明科の馬車屋で御者から笛を買取り山に遺入つて類にブー／＼鳴らしたのは常意即妙これが爲に濃霧の中にあつても團員相互の連絡もこれ後れても路にも迷はず迷ふても慌てず一致の行動に出る事が出来たので觀十字草ものだ。

■眞に山の趣味を知らうまには日本アルプスを踏むに限る穂高の秀麗燒岳の豪壯白馬の珍奇これを俗化した富士に比べるゝ同日の論でない。

■白馬の大雪簷を渡り盡して葱ッヒラに上る俗にいふお花畑であ



るが百草今を盛りと咲き亂れ、黄紅白、淡正に春の最中であつた他に、見られぬ高山趣味はこの邊にある。

關雪嶺の崖にリ、雷鳥の包圍攻撃、高山植物の採集など餘興は、それからそれへ、團員を喜ばせたが、一々書けば際限がない、これ以上は言はぬが花。(歸版して村上聖彦)(大正四、八、一五、大阪朝日)

## ●京都二中健兒の叡山登山競走

▲京都第二中の健兒百十名は、六日午前九時、から比叡山の峻峰四明嶽(海拔二千七百呎)を決勝點とし、京大裏門の百萬遍本堂前から登山競走の壯舉を試むべく、九時十分一同スタートを切つた。

▲競走の條件は道を違はず早いもの勝である、白川を取れば道は容易であるが、七八十町もある雲母を取れば、道は三十六町で餘程近いが、總じて險しい坂である、而も中途には胸突八町山砂利の難所があつて、一歩踏れば二歩に落ちると云ふ様である。

▲三、四、五年生は皆近道を、二、三年生は平易な白川坂を取つた。

▲決勝點の四明嶽には目標として、校旗を懸へし中山校長、松下、大原兩教諭などは百餘名の健兒を導ふべく、力餅、煎餅汁等を用意し、前夜來登山して待つ内に、

- ▲第一着 四年甲組 菱田齊次郎(五十七分) ▲第二着 三年乙組 内藤勝藏(五十九分三十秒) ▲第三着 四年丙組 平井晃三(一時間二十分三十秒) ▲第四着 三年甲組 石井重三(一時間三分) ▲第五着 二年甲 吉田二郎(一時間三分三十秒)。

◎雜 報 京都二中健兒の叡山登山競走

▲此れを昨年二月七日に舉行した第一回の登山競走第一着五十八分三十秒に比較すると、時間に於て一分三十秒の成好績を示した。(大正五、二、七、大阪朝日)

## ○決勝點は將門岩

關西の運動界に於て愛知一中と其弱を競ひつゝある京都第二中學にては、野足登山の新レコードを作るべく、六日午前九時全校より選拔せる百十名の健兒を、洛東百萬遍に召集し、標高三千尺の比叡山登山競走を試みたり、此日洛北の空は密雲低く垂れ、今にも降り出さん、模範なりしも、健兒の群少しも怯まず、直に用意に着手し、思ひくの輕装にて九時スタートに立ち、會園を待ち居る矢先、楠本同校運動部長は、

▲勸聲一番「進め」の號令を下げば、百十名の健兒は、黒の制服白シヤツ一枚の姿にて入亂れて、雲母坂若くは白川越に向ひ、力足踏みしめつゝ、一散に駆け上る勇ましな、云ふ許りなく、決勝點は四明嶽、絶頂將門岩とし、茲には監督として大原同校教諭、前夜より登山、萬端の準備を整へ待つ間程なく、午前九時五十分頃、雲母坂の彼方に當り、白シヤツ一枚の健兒は、胸づく許りの峻坂を、事さもせず、エイエイ聲して、駈上り來るよき見る間に、又もや四五町、彼方の熊笹を、蹶分け押分け、遅れじものこ

▲ヘビーをかけて、上り來るあり、折柄、雲霧油然として、決勝點なる將門岩附近を包みて、全く咫尺を辨せず、此時四年級甲組の菱田齊次郎(十九)は、突如決勝點に現れ、第一着を占めたるが、此レコード▲五十七分にして、峻坂六十八町を登破し、昨年の五十九分に比し

## ◎雜 報 山のローマンス

二分早く次で二分後れて三年乙組内藤勝蔵(十七)到着、更に三分三十秒後れ四年丙組平井晃(十八)到着せり、かくて順次決勝點に入り最後者は一時間半にして之も昨年に比し二十分早く一名の落伍者もなく全部登嶽し萬歳を三唱して取敢ず根本中堂迄下山し境内の廓庭にて柏汁を焚き出し食事となし互に其健闘を祝福し合ひ午後一時過下山の途に着きたるが此時

▲驟雨全山を 掩ひ壯快云ふ許りなかりき因に第四着以下第十着迄の氏名左の如し。

▲第四着 三年級甲組石井重三(一時間三分) ▲第五着 二年級甲組吉田二郎(一時間三分半) ▲第六着 二年級甲組吉田道雄(一時間四分) ▲第七着 二年級丙組岡田義雄(一時間五分半) ▲第八着 二年級丙組八木康夫(一時間六分) 第九着 二年級丙組廣野巳代治(一時間六分) ▲第十着 二年級甲組可兒茂(一時間六分半)。(大正五、二、七、大阪毎日)

## ●山のローマンス

## (一)戀の雜炊橋

中央アルプスの虎口にある鳴々の宿の薄暗いランプの蔭で、明日は私の荷物を持たうといふ案内者の佐内といふ男が、濃い茶を暖りながら「男と女の思ひ合つたのも恐ろしいものだ」と味なことを語り出した。それは此鳴々の絶壁から梓川の龍宮淵を跨いで對岸の橋場といふ小村へ掛け渡した剣木作りの「雜炊橋」に宿つて

居る戀物語であつた。今は昔、鳴々に美男と唄はれた清兵衛といふ男と橋場村の美女と唄はれたおせつこの二人がなかに人知らぬ思ひの糸は結ばれたが、峻しい崖と激しい流れに身を迷わされて春ならぬ日も眼の震むまでに泣き暮した。ここに二人は他人に使はれぬ身分であつた。ソツと忍び出て三里の廻り道に積る思ひを語り合ふただけの自由もなかつた。で、僅ばかりの手當のなかから世帯の資を積み立てながら互に双方から組木を崖へ削出して、夫れへ段々に組木を纏き足して、何時のほどにか二人は其の橋を架け合せることが出来た。それが村人の大層な便利にもなつたといふので領主からの恩賞があり、特に二人の勤儉を記念するために雜炊といふ名にして爾後の架着は殿様の御支配と定まりおせつ清兵衛は樂々世を過ごし橋の架着には渡り初めを仰せつかつた。それで今におき、此の橋の普請といへば鳴々から清兵衛人形、橋場からはおせつ人形を吉例として擔ぎ出すことになつた。「今ぢやア夫れだけの辛抱つよい男も女もありましれエが」と佐内はニコニコ笑つて居た。

## (二)鳴々谷の哀史

佐内は私の行李一切を輕々と脊に負つて、折りく／＼私を顧みながら其の翌日の鳴々越えにポツリ／＼と又も谷の月に深く隠された昔話の緒を手繰り出した。「何時のこつたか知んれエだが、飛騨の松倉といふお城から殿さまの坊さまと、お姫さまが信州の方へ落ちて來なりましたダ、坊さまは三木秀綱といふて十三、お姫さまは十七、松本の近に在つた畑のお姫さま所エ手寄りなさる

積りだつて申しますが、總田信長の家來の金森といふ奴に攻められて、斯んなオツカない山の中へ、氣の毒なこんだ」と佐内は今更のやうに聲を低くした。馴れぬ路に姫は若君の手を執つて園境に納得させて、姫は徳本峠から此の嶋々谷へ、若君は大野川の方へ別れ／＼に彷徨つた。そして若君が入山といふ村まで来るゝ早や峠々追ひかけた勢子の姿が見えただので一軒家に逃込むと、其處は蠶飼の眞最中で桑の葉を山々積んだ中へ若君を隠して呉れた。馳つけた勢子は承知をしないで、家を焼き掃ふといふ、さらば罪なき蠶を他へ移す間の御猶豫を頼んで蠶を移し、次に桑の葉を頼んだが、他意なき主の顔を見て勢子はその儘に去んで仕舞つた。其の後で主が差上げた粗末な盛飯に舌鼓を打ちながら、これが粟のめしだと言ひしめて、『さては姉さまに逢はれぬといふ謎ではないか』と若君は泣き沈まれたが、二度の追手に押へられて角が平の露を消えて仕舞つた。さうとも知らず姫は一心に三木の再興を祈念しつゝ嶋々谷を下りて来て細への道を獵師に問ふた、普通人ならずと見た獵師は姫を大きな梨の木へ縛りつけ懐中の黄金奪つて其の傍へ埋めて置いた。そして程經て其所へ来て見ると、姫は縛られたまゝ容姿依然として衰へず、獵師の顔を見て物凄くニツミ笑ふたまゝ崩るゝやうに姿が消えた。爾來獵師の家は癩病になり、姫の縛られた梨の實は生つても／＼澁くて／＼喰ふことが出来ぬ、といふ筋を語りながら『ソラ、あそこに見えませ彼の古い樹が、その可愛さうなお姫さまの梨だア』と佐内の指さす嶋々の暗い／＼谷の汀にボンヤリと哀史の籠が立つて居た。

◎雜

報

御嶽登山

私は思はず身を頼はせた。(せみ耶) (大正四、七、二六、大阪毎日)

## ●御嶽登山

夏でも寒い御嶽山だけあつて秋立つことは早く既に頂上には暮秋の色たちこめて流石修験の行者の身にも骨を刺す寒さ耐え難き程なるが、秋山と稱する登山の書入時も追々終末に近づくにつれて白衣の姿は日に減り虫の聲のみ濃くなりまじり行きつゝあるが今福嶋驛の統計を本として八月中の登山客を概算するに約三萬八千人に達し前年同期に比して五千人の増加を示したり、而して

▲是等の登山客は 何れも巧に汽車の發着時間を利用して成るべく宿屋に泊ることを避けんとする傾向増加しつゝあるが如しさいへども尙往復何れかに於て福嶋町に一泊するは餘儀なき状態にあれば一人平均の一圓と見るも大約四萬圓の金が福嶋町に落ちたるものと見らるべくそれに前後の七九兩月を合算して少くとも五六萬圓の金は居ながらにして福嶋人の懐に入る次第なるが是は福嶋町民の天賦の恩與なると同時にやがて福嶋町民を禍するものなるは考ふるべきことなり、而して福嶋驛に於ける電報取扱數を見るに平均の四五通なるに比し毎日

▲約三十通に上り 何れも無事下山の旨を知らずなりといふは登山熱の流行せる今日山登りを左様に心配せぬやうになりたれど尙信徒を代表して參拜する代參や何十人かの指導者たる先達にまりては殆ど命を賭しての登山なるを知るに足るべくその一行の無

◎雜 報 御嶽登山の通信數 燒嶽爆發の農事關係

一八八

下山を祝して進進料理に杯を擧ぐるはやがて福嶋町の唯一の収入たるを知らば無事下山したの電報も福嶋人と重大なる關係あるを感ぜざるを得ず、概して關東方面に比し關西方面に年々増加の傾きを見つゝあるが尙聞く所によれば御嶽教本廳にては近く福嶋町に常設の遊拜所を設けて更に信徒の參拜に便することなれば年々共に登山者の増進を見るべしとの事也。(大正四、九、二一、信濃毎日)

●御嶽山の通信數

御嶽山頂の臨時郵便局は例年の通り七月二十一日に閉局し九月二十日に閉鎖したるが其成績は登山人員が昨年の一萬七千七百九十六人に對し今年は一萬七千九百二十人にして僅に百二十四人の増加を示したるに過ぎざれども郵便物は非常なる激増にて左の如き結果を生じたり其原因は今年に學生の登山者多くして繪葉書等の發送を爲したるに依るべし。

大正四年度	通常	差立	一八、四九五	小包	一三五
		留置	七五九		〇七
同 三年度	同	差立	八、五七六	同	一三〇
		留置	六〇二		二六
(大正四、九、二一、信濃毎日)					

●燒嶽爆發の農事關係

▲噴出物と水質 而して梓川に於ける水質並に水質の變化狀況を

見るに、前者は主として降灰量と激甚地たる中堀澤、下堀澤の崩落押出しに依り一時堰止められたる反動により、又後者は既往に於ける噴出物の崩落と共に濁水となり押流せるものにて新噴出物に大なる意味を有せざるは新降灰と濁流とが何等關係なき色紫を有するを以ても明か也。

▲國有林被害 以下少しく國有林に對する被害程度を記さんに今回の爆發は安曇事業區第一一九林班の内、中堀澤と下堀澤との中間に位し舊噴火口よりは遙に下部なり、而して其被害の猛烈なりしは、

第一一七林班 面積一二五丁六反五畝

第一一九林班 面積一一二丁五反八畝

第一二〇林班 面積一二一丁七反三畝

並に梓川を隔て對岸に臨める

第八 二林班 面積二一二丁五反五畝

第八 三林班 面積二二三丁九反六畝

右の五箇林班の大部分、並に第一一九林班は殆ど全滅の有様なり、而して其被害狀況を見るに爆發に際し大地震大鳴動は猛烈なる暴風雨と共に新火口附近の岩石地物は言ふも更なり、有らゆる附近の轉石、自然石を飛ばし其處に介在せる立木諸共に梓川に向ひ押し出したるものにして目下、林地は堆積せる火山灰より成る一面の泥土深さ一尺乃至二尺を以て覆はれ、尙到る處、抛出轉下せられたる巨岩の地下數尺に撃ち込まれたる痕跡無數に存在し、又直徑數尺に及ぶ老大なる立木が飛岩の爲め中部より打ち裂かれ尙一面に密生せし根曲り竹、熊笹が地上僅に二三寸を残して跡形

# 岳 山

もなき等當時の慘狀を説明して餘りあり、被害程度の比較的少かりし附近各林班の立木も尙降灰に伴ひし降雨のため恰も天鉄羅狀となり枝葉は表裏の別なく極めて微細なる火山灰にて覆はるゝを以て呼吸作用も同化作用も全く停止せられ打ち萎れたる有様は無惑の極なり。

▲大正池の現出中掘澤下堀澤は泥土並びに大小無數の轉石を此の暴風雨に際し盛んに押し出し其甚其勢言語に絶し餘勢は忽ち梓川を堰き止めたり其の結果第一一八林班並びに第八四林班に亘り一大湖水を生ぜり其面積は目下尙盛んに擴大し停止する處を知らず、上高地は之れが爲め一層の勝地となりたり、松本小林區署にては之れを大正池と命名せり斯くて一日堰止められたる梓川の水勢は折柄の暴雨に伴ふ水量の増加により偉大なる勢を得て茲に此障礙物を押し流し幾多の土砂、岩石、漂流木を含み猛烈の勢にて流域一圓の地を流し、梓川筋林道に於ける橋梁、棧道は言ふまでもなく路體全部を破壊し、稻核、鴨々を経て犀川本流に入れり、尙又、降灰は松本小林區署の全管内に及びしも爆發當時、火山雨甚だしかりし爲め其影響を受くる面積は發煙地附近に止まり殊に其の後連日豪雨打ち續けるを以て全般には大害なかりし。

▲其後の噴煙 前記大爆發以來、新たに生じたる數箇の火口は目下尙盛んに黒煙と水蒸氣とを噴出し風向並に風速により各方面に降灰しつゝあるも其量は漸次減少せり、故に此分にては今後差したる顧慮なかるべきか。云々。

▲正誤 前號掲載の『降灰と植物』とある項第一一林班とあるは第一一九班の誤植なり。

◎雜

報

燒嶽爆發の農事關係

▲爆發影響別報 六日燒嶽の爆發以來硫黃質の土砂梓川に崩落し赤灰色の濁水となり南安曇郡に於ける同川を用水として灌漑に使用する下流は水田に沈澱物を生じたために其表面緊縮し日光の透射空氣の流通を妨げ被害も從て少からず徑二寸の樋を以て水面の下一尺位の處より方六尺の箱に水を通じ置けば晝夜に八寸餘の波動物を堆積するの狀態なれば郡農會にては水田の水に沈澱物を設け俵蓋等に於て濾過して灌漑すべき機注意をなして勵行しつゝあり。

▲藤澤技師の談 燒嶽の變動に伴ふ梓川河水灌漑區域の影響に就き藤澤本縣農會技師は曰く新聞には左程農家が心配すべき現象には非ざるやう報道せらるれども我等は之を以て決して安堵し得らるゝ現象と見る能はず吾等の目撃したる所によれば梓川の水を灌漑せる田は一日約八寸の厚さの沈澱物を見加之是を手に取りて臭氣を検するに硫黃の臭氣を有し直に硫化物の多量を包含せる事を知り得られ其沈澱の下層は固く締て足も徹らざる有様なり是が稲に害を及ぼさずとは如何にしても想像し得ず今に於て何等か之が防禦策を講ぜざれば南安曇全部及び東筑摩大部分の梓川關係耕地の收穫上多大の障害を來すべし併し桑葉には左したる障害無きが如しと。

▲降灰と農商課 本縣農商課にては燒嶽の降灰及び梓川流出沈澱物につき農事試験場をして目下分拆せしめつゝあるが是が成績を見次第技術員を南安曇及び東筑摩郡に派して耕地の沈澱物につき相當指導を爲さしむる筈なるが之につき長田農商課長は語るらく目下分拆しつゝある所によれば沈澱物は硫化物をめ含るに相違なきが硫化物は少量なれば却て耕地を刺戟して稻の爲に良好なる結

果を見るべきも多量ならば何か硫黄と混合若しくは化合するものを施し緩和せしむれば差支なき譯なりき。(大正四、六、二〇、信濃毎日)

## ◎吉野群峯

### ○雲の美、林の美

雪なき山岳の縦走——登山に容易なる大和アルプス

北 尾 生

大和アルプス最高點の佛經ヶ岳が漸く一、九一五米突、(近江伊吹山を抜くこと五四四米突)、また雪線に入つてゐないことは山の雄大を語る上に於いて信飛連嶺、赤石連嶺などに比して一籌を輸してゐるのは止むを得ない。併し、彌山には今年も六月の末雪を見たとはいふし、國見ヶ岳(七曜岳)の東側嶮崖の下にある七ッ池(空池)の傍には笹の葉隠れに盛夏能く残雪を見るさいふから、夏の大峰連嶺に高山の表象たる鳩の柔毛にも似たる白い雪を絶對に見ないさは限られない。廣大なあの針葉樹林、急峻驚くべき浸蝕谷彎回に覆伏せる幽婉な石英斑塊、あゝ若しあの深い山谷に一條でも雪の線が入つてゐたならば——。

私は高山脈縦走さいふことについて、いつも雪の恩恵を思はずにはゐられない。常念山魂、槍、穂高、白峰三山などの縦走には絶對に水を得ることが出来ないが、幸ひに四時消えない雪を溶か

して水を煮つゝ逆行を續けることが出来る。縦走さいふ尾根傳ひに第一の困難事は水であるが、大和連嶺三十五里の尾根傳ひには頂上まで林の繁茂してゐるため左程水に困難はしなくてもよい。私等は多人數のため一日の行程を稍水に左右せられた氣味はあるが、山上ヶ岳から南へ水のある處を一寸數へて見ても

小笹の宿——行者選岳——一の峠——(目下乾燥せり)——聖寶八丁——彌山——深山岳——前鬼山——平治の宿——忍田の宿  
近きは二里、遠きも五里の間には天水又は滾々たる清水を求むることが出来る。若し探したならば尙此上の泉を求むることは決して至難ではなからう。

雲は連嶺に威嚴を添ふる無言の表示である。雪のない代りに變現極りなき此山の雲を思ふ。輻員の廣い、牛嶋の脊梁を成してゐるだけに、四方に延びた支脈が極めて雄大で、谷は深く、密林を充し、濕氣に富んで、水蒸氣の多いため、連嶺に日の影を見るのは極めて稀で、例年の比例を取って見ても、山上ヶ岳で晴天を見るのは月に漸く十日の割合たさいふ。私等は釋迦ヶ岳の絶頂に立つた時、脚下を繞る白雲の奇怪な運行に引付けられた。信飛邊りの山で見るやうな、急速なものではなく、れち／＼と山腹を嘗めつつ、這ひ上る雲の陣が、私等の立つ峰の上迄来て、風もないのに亂軍の如く吹き散らされる。そして北より西に連亘して佛生、孔雀、七面の山々が、其暗綠色を帯びた素肌を磨かれて、幻の如く空間に隱見する、南西の空、中八人山の上邊りは既に蒼い空を見せてゐるに拘らず、頭を圍らすと、東北方に吹き溜つた雲の層はいやが上にも厚くなり、前鬼の谷を埋め盡して、脚下一面灰汁の

如き雲海を現出し、其下に涼々たる早瀬の音を傳へる。冬の富士で見た朝の雲海、淺間の火口壁から見た夕映の雲、焼岳の頂上に見た脚下の大雪雨、高山の雲もいろ／＼見たけれど、鼻曲りに手を擡げて、窪々たる肩肉をそびやかした笠捨の全表を撮らうとする、二瓶氏のレンズの傍に二時間さいふもの立ち盡しながら、始めて大峰山脈には雪の代りに雲があつて、始めて山の威厳を保つてゐると思つた。雨暗れの雲の運行を、あれ程近く鮮明な色彩もて親しみのある見方をしたのは私には珍らしいことであつた。

花崗岩の噴出が天斧の如き峭壁をなすところ、白馬岳の葱平、稔高山麓の神苑上高地、白山の五色濱、高山には雪と雲に培れた高山植物に富む高原の一ツ二ツは必ず有してゐて其突兀たる尖銳に疲れた山登りの神經を緩和して呉れるものであるが、併し、不規則な放射山脈の幾多を有する大峰連嶺には猫額の平だに求むることが出来ない。連嶺の側谷、東に面する方は、殊に急峻な山谷を作り、下瞰すれば足の軟くのを禁じ得ない。其孔雀ヶ嶽から釋迦ヶ嶽に至る貝摺り、縁の鼻邊りは石英斑岩の湧出が殊に雄大で鋸齒の如き峻巒絶壁、天斧もて削り成したる如き岩角に雲の吹きつけて來る處は宛らに信飛アルプスの盟主楢の北面にも似てゐる。行者還岳も銀ヶ岳といふし、此宏大な中生層を貫いて西に噴出した稻村ヶ岳、朝鮮岳（頂仙岳にも作る）のピークが急削天を摩するもの、堂々連峰の玉座として根を張つた彌山と相對して、此檜曲山脈中の一偉觀である。七面山の峭壁鏡の如きもの、高さ或は百五十尺大日嶽の頂上花崗石の突出するもの、淡靑白色の靛を振立てる其形状、恰も甲州アルプス中の雄峰鳳凰山の地蔵佛に

似て奇怪を極めてゐる。從て規模こそ小なれ、距離こそ十分のいなれ、釋迦嶽より前鬼谷に下る道も、昨年常念山脈を大天井の裏から槍の澤に下つた赤岩嶽の惡絶にも似寄つた箇所がないでもなかつた。私邊は可なり急速な足並を續けながら大日嶽から一里餘の下りに約二時間を費さればならなかつた。

標高低き大和アルプスに求むる一二の長所、前鬼以南を縦走することは、山も低くなり、展望もなく、笹の繁茂のため植物分布上の價値も尠く、たゞあの重疊たる山岳を紀州に抜けて、靜八丁から熊野川を新宮に下り、汐の香の高い勝浦の温泉に連日の疲勞を發する興味を以て進行を續くべきものである。信飛アルプスと比較して大峰連嶺の劣る處は

- (一) 雪線に入ぬので壯大な觀念に乏きこと
  - (二) 疲勞を慫むる温泉のないこと
  - (三) 密林多く害虫などの夥しきこと
  - (四) 山の褶曲が急峻で道路の峻なると暑熱の甚だしいこと
  - (五) 標高低きため、高山的の諸現象を見るに難きこと
  - (六) 信仰上の蒼魂き約束多きこと
- 若し、此山を讚美すべく強て求むるならば、
- (一) 未だ學術的の記録尠きこと
  - (二) 針葉樹林の宏大なこと
  - (三) 防寒具の必要なく比較的登山に易きこと
  - (四) 史蹟に富み、露場として有名なこと
- 等である。尙天候の不長が多いこと、迷路が多いこと、古趾の多いのなどに依て、案内者なしに登るべき山でないと思ふ。

○ 大和アルプスに登るには

▲山上詣の奥駈、山上ヶ岳を起點として南方玉置山迄、所謂大和の脊梁山脈、大和アルプスの縱走を企てるには山上山麓の洞川村、又は吉野で準備をしないでならぬ。山上ヶ嶽への登路は此二箇所、吉野からは頂上迄六里(吉野輕鐵吉野口驛下車)洞川からは頂上迄三里(吉野輕鐵下市口驛下車)下市から洞川へ行くには可なり急峻な峠を四つ越えて五里を歩かねばならぬ。時間に依つて双方共其日の中に山上ヶ岳の頂上迄至難でないが、準備の必要上どちらにしても途中駈に一泊する位の餘裕は存した方がよい。

▲第二日は山上ヶ岳頂上に一泊の豫定で其日の中、裏の行場、も花畑、日本岩等を経巡るがよからう。裏の行場を巡るには約廿分を要する、其他一時間も充てゝ置けばよい。山上には五六ヶ所の宿坊があり高山の宿所として、風呂、蒲團、丹前などもあつて設備は完全してゐる。(宿料精進料理で七十錢位)。

▲山上ヶ岳から一日の行程として早晚に出發すれば、連續中の主峯、彌山までは容易であら。笠ヶ嶺、鷲ヶ嶺、經稻石等名所を巡るには約四時間位の餘裕を見て置ければならぬ。山上から彌山まで九里八丁といふが、實際は六里位である、途中々々大普賢から國見嶽にかゝる處は少し峻ではあるが、國見の頂上で晝飯を喫するこゝにするさよい。彌山には行人の小屋があつて食糧さへ持つて行けば焚火に不都合はない(宿料は志であるが五十錢位)。

▲彌山から前鬼谷まで九里八丁、之も六里位のものであらう、途中最高峯の佛經ヶ嶽明星ヶ嶽の大山連帶群落、七面山の斷崖、線

の鼻の峻峭、霧迎、大日嶽等道は最も壯快を極め前鬼村の裏の行場は水が豊富で山の脊を來たものゝ一見する價値は十分ある。巡るには半日はかゝる。村には森本坊小仲坊の二ツの宿坊がある(宿料は七十錢位)

▲此處から河合に一泊の後、大靈ヶ原山に登り振出しの吉野に歸るのもよからう。尙峯續きに紀州へ出るならば前鬼から嫁越峠に登り、途中怒田の宿(七里半)に宿營する。小屋は大破してゐるが、宿營に差支へはなからう。山が低くなるから、此邊へ來れば最早防寒具の必要はない。

▲更に地蔵ヶ岳の麓を傳つて笠捨峠に登り、十津川の上葛川に宿泊する。(宿屋あり宿料五十錢位)

▲此處から玉置山(二里)を経て田方(二里半)に出て壽八丁に一泊するが、直ちに舟を雇へば十里の熊野川を下つて、紀州新宮迄約八時間で達する。(舟賃一船六圓位)

▲奥駈の案内者は一人一日賄付一圓五十錢、人夫一日同一圓を相持なれど古參な人夫を得れば別に案内者の必要はあるまい。人夫の資糧重量は六貫目としてゐるが奥駈には少し超過するやうである。

▲日本アルプスなども違つて冬の外套位を持って行けば殆ど防寒具の必要はないが、「タニ」「シオカラ」「ヒル」などの害虫が多いから、無論大したこゝにはないが止血薬、蛇頂石、蚤取粉などの少し位は容易して行つた方がよい。食糧は信仰上山中皆精進であるが、織語などを持つて行つても差支へはない。山上ヶ岳から玉置迄天氣都合さへよければ五日で行ける。



## ○大峰の花木

花の王は石南花と大山蓮華

竹下 英 一

名ばかりのち花畑行者羅と矢車草の群落 七月十日午前、山上ヶ嶽の瀧泉寺宿坊より日本岩を廻りて最高點の御花畑に出づ。南方に展開して稍平坦、一面に小笹茂生して、處々にツツジの矮樹を見るのみ。小笹の間を押し分けて珍らしき植物もがなごあされども、只ヒカゲカヅラ縦横に匍匐し、時々リンドウの幼苗を見る位にして、何等高山植物らしきものを發見せず。却つて登路の鐘懸岩、西の視附近には、ゴセンタチバナ、マヒヅルサウ、矢車草など咲き亂れて高山的景観を呈せり。樹木は一般に矮小にして、ドウダンツ、ジ、シガ、モミ等の幼樹、イタヤカヘテ等あり。三角點の附近には、殊にギョウジャヤカヅラ（方言）多し。ギョウジャヤカヅラは山上ヶ嶽より前鬼に至る間、到る處に繁茂し、天賦の鐵鎖となりて、我等の顛落せんとするを救ひたること屢次なりき此植物は葡萄科に屬し、未だ花を開かず。花後紫色の漿果を結び深山を分くる行者の渴を醫するを以て「ギョウジャの水」といふ。此外大山蓮華、シモツケ草等あれども是亦花を見ず。ち花畑より一旦藏王堂の前に出て、更に右折すれば愈奥駈の本道に入る。大鉢アセ、小鉢アセ等を通過して小笹の宿に着す。西面せる山懐にして、清泉湧出するあたり、矢車草、オタカラコウ（方言行者露）等群生す。矢車草は虎耳草科の植物にして、深山陰濕の地に自生するもの、葉の大なるものに至りては、全徑二尺乃至三尺に達

するものあり。其群落は見るものをして一種壯大の感に打たれしむ。谿漸く深くして森々の聲を聞かざるの處、矢車草の大群落に逢着すれば、身は既に塵界のものにあらざるを悟るなり。オタカラコウは菊科に屬し深山に生するもの晩夏の候葉間に莖を抽出する。三四尺にして、楡上にツツアキに似て稍小なる黄花を總狀に開く。山上ヶ嶽の頂上及び洞辻茶屋の附近に其大群落を見るべし。ギョウジャヤブキの名あれども食ふべからず。

喬木帯に入る環路の様なベニダウダン 小笹の宿より次第に深く分け入るにつれ、樅、樺、山毛櫸、槭樹等合圍の喬木鬱蒼として茂生し、枝極密撥して日光を漏さず。既に喬木帯に入れるを知る。約山地植物の分布は五帯をなすを得べし。即ち第一帯は山麓帯にして、喬木帯之に次ぎ、灌木帯となり、草本帯となり、更に登れば地衣帯となりて終るものなり。我大和アルプスに於ては灌木帯に終りて、草本帯を見る能はず。是れ日本アルプス等に於て見るが如き百花爛漫、鮮紅、深紫、黃白、赤褐相映發して、山神の花園にあらずやと疑はしむるが如き御花畑なき所以なり。然れども此の如き林下には又陰濕を好む矮樹草本多し。路の左右には、心臟形の光澤ある葉をもてる矮小愛すべきマヒヅルサウの密生せる處あり。花梗を抽くこと一二寸、楡上に白色四瓣の小花を開く。花美ならざれども之を平鉢に密植し、更に小盆石を配すれば以て高山的趣味を味はふを得べし。此外ママドコロ、エンレイサウ等に混りて時々我等の眼を慰むる紅花の車百合あり。トリカブトは數尺に成長すれども未だ花を見ず。林下を進むにつれて我等の驚きたるは、石南花、五葉薔薇、ベニドウダンの多き事な

り。五葉繖躑は躑躅の一種にして、桔梗の紋章の如く五葉づゝ規則正しく輪生的に着生するを以て此名あり。花は白色にして、春開化する。大峰山中殊に多く、南進するにつれ樹幹の大なるものを見るべし。太きものは莖周一尺餘、高さ十數尺のものも珍らしからず。次に多きはペニドゥガンにして時々落花散り敷きて路爲に紅さなれるに驚かされて仰ぎ見れば多縁反轉せざる壺狀の紅小花、細長き花梗の先に懸りて天女の瓔珞かき懸はしむ。故に又ヨウラクドゥガンの名あり。尙之に類せるものには白色壺狀の花を付くるドゥガンツツツあり。

峰中一の名花高山の靈木石南花 峰中を通じて最も著名なるは石南花なるべし。大譽賢ヶ岳より七ヶ池に至る間、其丈餘の純林を見たりしが、峰中之を生ぜざる處なし。元來石南花には三種あり、即ち紅色の普通種、白花石南花（一名白山石南花）、黄花石南花是れなり。石南科の代理的植物にして、古來山中の靈木として尊重せられ、殊に大峰地方に於ては之を佛前の供花として用ひ、或は其材を以て箸を作る時は暗齒を保護すといひ、或は其種子を浸出して不老延命の藥となすと傳へられる。常緑の灌木にして、花形は躑躅と殆んど同一にして、十數個を梢頭に簇生し、紅色にして頗る濃艶の趣あり。憾むらくは花既に謝して果實半ば熟せるを。若し全山の石南花、悉く笑みほころぶの時、此の山に入らば眞に天の樂園に遊ぶの感あらむ。石南花は高山植物なれども、必ずしも翠微天を摩するの邊に生ずるに非ず。時に頗る溫暖なる處にも産することあり。故に石南花は庭園に又は盆栽に、栽培すること容易なり。近時舶來のロードデンドロン（石南花）の紅白紫

黄、妍を競ふの美は、我邦産石南花の比にあらず。近時日本庭園にも之を利用し、楓樹鬱蒼として、繁茂せるの處、奇岩怪石を布置して之を植ふ、所謂ロックガーデンを作る人多し。白花石南花は之を黄花石南花に比ぶれば樹容に於て劣り、紅花石南花に比ぶれば、其色に於て下る。然れども閑雅優遊の情致に富む。余嘗て之を自由に於て見たることあり。峻潔幽寂なる印象、今も忘る能はず。而して最も得難きは黄花石南花なるべし。即ち磊々たる火山岩、偃蹇たる偃松の萬年雪に灌がるゝの邊に於て、初めて之を見るを得べし。葉は普通の紅花石南花に比して頗る小さく、長さ二寸内外、花は淡黄色にして徑一寸内外なり。之を盆裡に移植すれば忽ちにして、數十年の老木の觀を呈する余昨夏之を日本アルプス槍ヶ岳にて採集し培養せるに生育頗るよろし。大峰山脈の石南花に普通種のみなれども、其分布の廣さと豊富なる點に於て隨に峰中の珍とするに足る。

下生植物の大群落破れ傘、針落、蟹草など 七月十一日、露營地行者還りを出で、濃霧中を進む。路は依然として昨日の如く繁茂せる大森林にして、東側は千尋の断崖なるを以て西側の急斜面を蛇行す。行者還より一の峠に達する間、廣大なるヤブレカサハリブキ、クサアササヒ、カニクサ等の群落を見たり。ヤブレカサは菊科の植物にして葉の形破れたる傘に似たるを以て、かくは名けられづたるものなるべし。クサアササヒは虎耳草科に屬し、恰もアササヒに似たり。處々開花せるを見る。ハリブキハ方言「鳥トマラズ」と稱す。幹及び葉の表裏共に鋭き刺を生じ容易に觸るべからず。落葉灌木にして高さ三四尺に達するもあり。其果實は

肺病の妙薬なりといふ。尙此等植物の群生せる間に點々として、丈四五尺に垂んとするパイケイ草の齒開せるあり。不思議なるは此の植物多くは道路の左右に疎らに生ずることなり。花は一種雄大の感を興ふるも、根に激毒を有す。一の峠より針葉樹次第に多し。彌山頂上へ七八丁の邊より途急に峻しくなる。茲に聖賢理源大師の銅像を安置す。此前に大なる一株のナツツバキを見る。樺の一種にして、花色白色、普通白樺の小なるものなり。然れども葉は彼れの如く厚からず。嶮阪に差懸れば、植物全く一變し、全く針葉樹林となりて山愈々高きを知る。山人のニレモミと稱するシラベ最も多く、之に混りてモミ、ツガあり、四十分にして頂上に達す。辨天の小祠附近殊にシラベ多し。十二日は雨天のため行人小屋に滞留、膳草の手入れをなす。

右も左も大山蓮華、白井理學博士の激賞。十三日朝早彌山を發す。佛經ヶ岳に至る間シラベ、トウビ等の針葉樹多く、明星ヶ岳の邊大山蓮華多し。次で佛生ヶ岳附近にて其大叢林に遭遇す。路の上下左右、見渡す限り此花を以て充たされ、幹の多くは根元より叢生し、大なるものは丈餘に達するものあり。大山蓮華は木蘭科のものにして、葉は白木蘭と同じく、花は純白にして徑二三寸、花瓣は六個乃至九個、高潔幽寂の趣あり。蓋し峰中の名花として石南花と共に特筆大書すべきものか。白井理學博士の紀行に曰く。「予は從來四國、九州、近畿の諸山にて大山蓮華の稀に自生するを見たれども、未だ一處に多く叢生するを見ざりしが、嘗て毛利梅園が百花譜の中に「大山蓮華、木蘭の一種、特別而和州出大峰、故大山の名を得たり」との文を見て此山に此樹の多きこ

いふ事を知り居れども、之を目撃して確めたる人あるを聞かざりしなり。それ故今回特に注意して此木の有無多少を探究せしに前記の場所に於て此木が殆ど純林状をなし、山谷に瀾々するを發見し、初めて先人の所説の虚ならざるを証し得たり。樹は高さ五六尺に過ぎざれども根上より分枝し、枝條が地に附いて夫れより根が生じ、蕃衍して一所に叢生する状態あり。土人之を白蓮華と云ふ由案内者は云へり。花時此處に來りて其純潔雪白の花容と馥郁たる清香に接せば實に仙境に遊ぶの思ひあらむ。漢名「天女花」の稱ある亦頗る適切なるを覺えたり。」

釋迦以南の植物叢林を分けて南へ、夫れより貝摺を経て縁の鼻に至り、一同晝食をなす。此あたりの岩壁に白米ツツツ、ダケカンバ、五葉ツツ、タイモンツツサウ、イワレンゲ、シモツツサウ等あり。斯くて釋迦ヶ岳を経て大日ヶ岳に至る間別に變化を認めず。只大日ヶ岳の鐵鎖にて登る附近の岩間に初めてイハナンテンを見る。イハナンテンは石南科の高山植物にして常緑、莖長五六寸より二三尺に達するものあり。大日ヶ岳より前鬼に下る道は恐らく全峰中に於ける最も嶮惡なる道にして、道といはんよりも寧ろカラ澤なり。而して洞樹葉鬱蒼として繁茂せるが故に、山徑多く加ふるに暮色漸く疎り、ひたすら歩調を早めて駆け下る。前鬼以南の諸山は標高の次第に低きと、熊野灘に接近せるため漸次暖地性となりて平凡となりぬ。殊に嫁越峠以南笠捨山に至る間は笹竹のみの間を進みたるを以て別に變りたる植物を認めず。只山く毛摺等に着生せる植物に多少の變化を味ひたるのみ。(大正四、八、一、大阪毎日)

# 會 報

## 第九回本會大會豫告

來る五月廿八日(日曜日) 東京市赤坂區溜池町  
三會堂に本會第九回大會を開く、順序及び講演左  
記の如し。

午前十一時 陳列室開場午後五時閉鎖

午後六時 講演幻燈開始

一、Matterhorn 初登山に就て(幻燈)

工學士 岩 村 圓氏

一、日本の氷河問題(幻燈)

東京高等師範學校教授

大關久五郎氏

△山岳に關する總てのもの、御出品を希望す、獨

り珍藏するなく、廣く同趣味者の爲め公開あらん  
事を乞ふ、出品物は適當の方法にて本會より拜借  
に上るべし、成る可く多數の御出品あらん事を乞  
ふ。

△大會期日に就ては特殊の變更なき限りは、別段  
御通知せざるべく本文を以て御了承ありたし。

△會場は前回と同一の場所なり、東京市電車外濠  
線葵橋にて下車あらば一丁程に過ぎず。

△場内下足の設備あれど雨天ならざる限り、混雜  
を避る爲め靴、草履を着用ありたし。

△場内にて聊かながら食事の要意は致し置くべ  
く、適宜御命じありたし。

△會場には知友御同伴あらん事を乞ふ、一人にて  
も同趣味者の多からん事を希望せり。

## 第十四回有志晩餐會記事

大正五年一月二十三日午後四時、第十四回の晩餐會を京橋あさり河岸の竹葉亭で開きました。來り會するもの十四名、この日はなま暖かい大風の日で風に煽られて障子が幾度か部屋へ舞込む騒ぎでした。すると隅の方で誰やらが野宿よりは餘程増しだせと云ふ。汗がだく／＼出て火鉢が邪魔になる、扇子が欲しいはちと大袈裟だが。丁度名古屋から上京されてゐた八木君も加はつて、何時もながらの清宴に時の經つのを忘れた。今年は近藤君と高野君が、五色ヶ原邊りで無料宿泊所、山迷者救護班を計畫されるのださうです、然し實現は決して受合ひません。

次回の當番幹事を左の方々に御願ひしました。

高野鷹藏、加山龍之助、北澤基幸。

來會者芳名

忽滑谷安美、岡埜徳之助、北澤基幸、加山龍之助、高野鷹藏、辻村伊助、梅澤親光、近藤茂吉、木村鑛吉、茨木猪之吉、八木道三。

◎會

報

第十四回有志晩餐會 第十五回有志晩餐會

郷都三郎、服部與兵衛、冠松次郎。(當番幹事)

## 第十五回有志晩餐會

花も盛り、四月十六日鶴見、花香苑に開く、春の氣にそゝられてか、當番幹事豫定より期を早めて開く、會するもの廿二名、亦春の氣にそゝられてか、騒ぎ一方ならず、高談放論、風なきに散る藪椿一輪。花もよし、話もよし散する時初更、やみに光る星亦よし。

場所は東海道鶴見驛を去る五丁、眼下に東京灣を俯觀する丘陵に位す、家を司る人、長谷川時雨女史なり。

特に畏友市河三喜君來席クリト島アイダ山登山の話さる、感銘に耐へず、夜幻燈を映じて樂しむ、熱狂して嬉ぶ、山狂と云ふべし、尊重せざる可らず此山狂の狂たる、興盡きて散す夜十時、東西に別れて、尙ほ耳底に響くものは、松籟にあらずして、山談なり。

快中の快、即ち樂しかりし一日の清談なり。

一九七

次回の幹事は左記三名の各位に依頼す。

濱名増雄、寺内安能、三枝守博。

來會者（順序不同）

木村鑛吉、梅澤親光、村川章次、植有恒、内田節三、冠松次郎、岡埜徳之助、郷郁三郎、濱名増雄、三枝守博、寺内安能、鳥山悌成、辻村伊助、加賀正太郎、市河三喜、岩村圓、忽滑谷安美、茨木猪之吉、服部與兵衛。

當番幹事

加山龍之助、北澤基幸、高野鷹藏（岳雄記す）

### 名古屋の第二回有志晚餐會

昨年八月、名古屋在住の山岳愛好家ばかりで小集を催し形でこそ小さかつたが極めて有意義な満足を味つてから、第二回目の有志晚餐會が二月二十五日夜六時から場所も前回と同じ納屋橋畔得月樓で開かれた、出席者は十八名で顔振れは前回と大分違つて居るが數に於て三名を増加して居る、僅に三名の増加ではあるが私共同志の趣味が

或る力を持して私共の周圍に擴充しつゝあるからだと知つては非常な心強さを覺えずに居れなかつた、日銀支店長結城豊太郎君は立山の話をなし山岳獨特の妙味はこの頂上に於て殊に充分に味ひ得らるゝと語り尙山岳を知らない者に山岳趣味を説明したとて駄目だから宜しく理窟は廢めて黙て開の者を山岳の頂上に連れて行くが好い、彼は始めて山岳趣味の値打を悟るに違ひないと氣焔を擧げ、是峯八木道三君は一昨年正月嘗て誰も試みなかつた雪中の上高地を踏破した時の苦心談をなし、充分に天候や其他形而上の準備と心の持方との二つさへ自信あらば我が行く途には險山も無ければ胸まで埋まる深雪も亦怖るゝに足らないと述べて一座を緊張せしめたり各自に既往の得意や失敗談を吐き交つたり今夏の計畫を語つたり『疊の上の懇親會は畢竟我々の趣味に背くから次回は近くの八事山にでも天幕を張つて壽き焼を突つかう』など、振るつた動議が祖父江君から持出されたりして心置きなく好きな山の話で腹一ぱいに愉快な心持になり散會したのは午後十一時であつ

た、第一回もさうであつたが今回も何等七難かしい題目や目的があつての集まりでは無かつた、恐らく今後回を重ねてもこの調子を碎しはすまい、私共の會合は活きた自由な大きな趣味の結晶であるからである。(治夫記)

出席者氏名(▲印は山岳會員である)

- ▲柴山乙彦 木村知四郎 丹羽默仙  
▲淺野信二 ▲八木道三 ▲佐々木綱雄  
▲結城豊太郎 鎌瀬貞藏 久野眞苗  
下出義雄 ▲村井徳三 可知治夫  
三成 昱 ▲祖父江重兵衛 ▲中山益太郎  
▲春日井丈太郎 ▲矢田城太郎 吉澤愛三

### 今村氏送別及京都有志晚餐會

多年京都住友銀行支店長の職にあり、劇務の傍ら個人として登山趣味を鼓吹し、講演に、幻燈に自ら陣頭に立つて多衆を率ゐて、登山し、或は京都大學諸教授の同志を語らひ、踏雲會を組織し、萬丈の氣焔を山頂に吐き、山岳會員としては會のた

め多大の盡力をなし殊に關西に於ける斯界の先輩として、啓發透導された者は少なくなかつたが、八月突如神戸支店長に榮轉せられ、吾々には轉た寂寥を感じざるを得ない、早速送別會を開くべきところ、休暇のため延期——十一月二十日山岳會に縁故の深い、萬養軒で盛大に催はされた。

夏期登山の天狗談もあり、且は在京會員の久瀾の對面も希望して、山岳會有志晚餐會を兼ねた通知狀は發せられた、時恰も、京洛の天地は晝夜打つ通しで、曠古の大典祝賀のため、市民は總出になり、熱狂し市中は目覺むるばかり華麗に裝飾せられ、鳴物入の行列耳も聳するばかり、景氣のいいこと夥だしい。

新築の會場は、市内目抜の場所四條通りに、巍然と聳え、群小を脚下に踏む高山の觀がある、定刻の六時には早十數名着到し、休憩所のアームチエーヤは忽ち不足して、立ちながら登山談に耽つてゐる、三階の大食堂に一同着席、主賓今村氏に對し、主催者石崎氏は感謝の辭を述べ、尙送別會を兼ねた、有志晚餐會を開く旨を挨拶した、次に

## ◎會 報 奈良市に於ける山岳講演會

今村氏は謙遜な答辭あり、之が終るや酒三行、漸やく熱し來り、酒豪天下に並びなき市村博士の快氣焰、アルプスも素飛んでしまひさうな激越な能辯に堂を震はし、同行登山の際弱り込んだ實況を、今村氏に素ッ破抜かれたのは面白かつた、雉本博士の立山登山談、中山二中校長のスキー談、斯界の先達とて傾聽せしめた。老て益々盛んは先生に奉る頌辭に非ずして何ぞや、一日に愛宕比叡を、上下して平然たる田中氏、快活で書生氣質の森、東氏は、日本アルプス登山談で其蠻勇振を發揮し、エンサイクロペツアとして輿論の一致した好事家小山氏、畫伯石崎、高瀬兩氏及大阪から唯一人の來會者加賀氏は、或祝辭を包圍的に浴びせかけられ其他大學三高の學生連等縱談放語四方山話、初めこそ峯の松風寥々の音の如く穩かであつたが、中頃勁風颯々人語辯せず、終には轟雷獅子吼床も抜けんばかり、漸やく醋に高調となる清興何時果つべしとも見えない、此時窓外脚下に當り長蛇の如く練り來る一團、又一團陸續として縦横に銅鑼鉦鼓を打ち美裝花と見まがふ子女、狂ふが如

く躍り喧々轟々、吾々の會合を祝福するものゝやうである、好客來る何ぞ辭せんや一同走つて窓に倚り蠻聲を張つてハンケチを振る、譬へば天に接する山頂より山麓の一隊を呼ぶ如しだ、一隊又呼應し熱狂快哉を叫んでゐる、かうして緊張した晩餐會を閉會したのは九時過であつた、會場を出ると忽ち人の渦卷に吞吐されてしまつた。

## 奈良市に於ける山岳講演會

本會々員木本光三郎氏の主腦たる、奈良縣下に於ける産業銀行は、毎年一回奈良市に公會講演を催し、廣く一般人士の爲めに趣味と學術の涵養に勉められつゝありしが、今年其第三回を舉行するに當り、新に其姉妹銀行として貯蓄銀行條令に由り、産業貯蓄銀行設立され、其記念講演會を兼ねて、二月十一日より三日間奈良市に山岳幻燈講演會催されたり。

其より先、木本氏よりの招聘に由り本會は、幹事辻村伊助、高野鷹藏兩氏出張講演すべき約なり、



十一日より三日間奈良市尾花座に於て山岳幻燈講演をなせり。

二月十一日午後六時奈良市尾花座に産業銀行第三回講演會として且つ産業貯蓄銀行設立記念山岳幻燈講演會開かる、初め同銀行總支配人杉原守茂氏開會の辭あり、會の由て開かれたる所以を述べられ次で、本會々員今村幸男氏の「山岳と人生」なる講演あり、氏は己れの本縣人なるを以て、此國の山岳の爲め論せざる可らずと冒頭して、數千言人生に對する山岳を論じ、登山の奨勵すべきを説き、引て此國の山岳國たる所以の吉野群峯に關する説をなして壇を降る。

次で本會幹事高野鷹藏氏「日本アルプス」なる題下に幻燈四十枚餘映寫し、日本アルプスの語源其起因、歐洲アルプスとの比較、各其特征等一時間に渡りて説明せり。

第三席として京都府會市部會議長鈴木吉之助氏輕妙なる口調を以て有益なる講演約一時間に及びり次で、

本會幹事辻村伊助氏「歐洲アルプス」なる題名

◎會報 奈良市に於ける山岳講演會

に由りて、氏のアルプス登山談を幻燈に由りて説述せり。

斯くて閉會したるは、十二時に近く、來會者は主として、縣の有力者多く、山岳趣味普及の上に益する事大なり。

翌十二日及十三日は、初日と同一順序に由りて開會されたり、此兩日に渡りては同縣下の各學校殊に奈良女子高等師範學校學生及各中學校學生等來會するもの多く、極めて盛會の内に三日間の講演を了したり。

幻燈講演會を開くと共に十一日より十三日迄奈良市役所樓上に山岳に關する陳列會を開催されたり、主として吉野群峯に關する圖書、標本等多く、殊に昨夏（大正四年）木本氏主催の元に吉野群峯登攀の際得たる寫眞、動植礦物の標本等見るべきもの多かりき、中に就て昆蟲類にては、特異とすべきものなかりしも、ヒノピウス（サンショノ魚の一種）は同縣下特有のものにして、珍品たるを失はず。

因に昨夏此登山に於て得たる結果は一冊とし

て、「吉野群峯」なる表題に近く木木氏に由りて公にさるべきを知れり。

木木氏今回の企ては、吾人の最も感謝と喜びに耐へざる所にして、山岳趣味の普及傳達の上に及ぼすべき効果極めて大なりと云ふべし。

終に際し、本會は木木氏の斯道の爲め此企てありし事と、本會幹事兩名に對する好遇を最も感謝する所なり、尙ほ奈良市及び同縣よりの好意及び幹事兩名の爲め知遇を辱くしたる諸賢に特に感謝の意を表す。

## 會員通信

△僕は公務上の都合により今夏京都より神戸に移るこゝになつた。若し僕に登山日記なるものありとせば其日記中重要なページを占める京都。その京都を去るのであるから何んぞなく名残惜しいことは云ふまでもなかつたのである。

乍然神戸の地にも塚本永堯君（山岳會員）初め幾多の熱心なる會員が陣取つて居らるゝ事を前々より承知して居たので一時は一寸と失望したものゝやがて新生活に入る様にも思はれて寧ろ心筋に據々の期待をもたらし來つたのであつた。

果然塚本君と數度往復の機會を得亦た同君の案内により神戸背

後の山岳を縦横に駆け廻るチャンスが度々あつたのである。加之塚本君の引合せにより神戸外人中尤も六甲通の一人なりと自認し亦た他人も許せるドント氏と知合になつたのは所謂生活に入りたる第一の獲得物であつた。

同氏の著述に係る *Yama* と題する紀行集は已に二巻迄出版せられ同好の志に傾かたれたのである、その中には日本アルプスの紀行も少なくないのである。今夏同氏は赤石山と笠ヶ岳に上られたる由を聞きその見聞の大畧を我「山岳」に投稿せらるゝ事を追つたところが早速快諾せられ愛に之に之れを我會員に紹介することの出來たのは誠に愉快とする處である。外人會員が此例に倣ひ今後續々其所見を我「山岳」誌上に公にせられんを希望して止まないものである。（大正四年十二月十一日、今村幸男記）

（編者）此通信は本誌附録に載せたる H. E. Damm 氏 "Akai's Mountain" の冒頭にもせられたるものなれど組版の都合上茲に載せたり。

△貴會愈々御隆盛の段慶賀之至りに御座候陳れば山岳會の大に高山趣味を唱導せられし以來都人士の登山し實地に其趣味を試みるの紳士の年増に増加し我中央アルプス連峯も數年前迄は山岳會先置の登攀以外は恰と人跡なかりしに漸次に増加し昨大正四年度は登山者約三百名に達せり其内重なるを擧ぐれば第一高等學校旅行部會員第三高等學校山岳會慶應義塾山岳會高等商業學校公孫木會等各團體理學博士池野成一郎君一行鹿子木慶應義塾教授三枝山岳會幹事八代準君一行葛原崗君黒田清君一行京都の藤井大學教授下村君一行名古屋の山本君一行等又美術家には東京の池上秀畝齋白

巖瀬東畝五島耕畝松田秀石鯨島寛海伊東龍涯大阪の高木厚涯の諸先生を初め数名の登山あり其中三枝幹事は登山者の爲め山案人の監督の會用を兼ね葛原君は餓鬼岳探檢の爲め(餓鬼岳は中房温泉の正北三里強高標九千尺北アルプス針の木峠附近を眼下に眺望する處なり)秀畝齋伯はアルプス寫生にて文展に二等賞を得たり其他外國人は佛國男爵ドルワルド君英人五名とす以上大畧を報告すると共に以後中央アルプスに登山諸君に御注意願ふことは一松平驛にて信濃鐵道に乗り替有明驛に下車すること二有明驛より中房温泉へ四里此の處に案内所あり詳細問合せ手荷物頼む事三携帶品は必要品のみとし食料品其他は中房温泉に準備しあれば温泉場に求むる方却て便利なることに候。(百瀬支三松)

△今度は年末御繁忙の際誠に御面倒なる事御依頼いたし候處。直に御許被下早速スライド多數は送付下され雖有正に拜受致候。さてスライドを頂きたるも一向に地理に暗きためにわからず急に地圖を引ずり出すやら又種谷君等にも見て頂き漸く地方的に分類いたし更に紀行的に配列いたして次に器械は工業學校にて供用したし候。舊式にてかさ高く抗抵器など不完全のため閉口いたし候。かくして一月四日に漸く準備を整へ郷里豊岡へ出發いたし候。五日前來寒氣甚しく積雪あり電氣工事を命じ六日夜舉行いたし候。寒き晩なりしも相當に集會有之候。少年の側には如何なる反響ありしやわからざりしも地方有力者は多くは小生等の小供の時の友人のみで大抵町會議員と郡、縣會議員とになり居るもの多く是等の連中には大に感動を興へたるらしく候。併し多くは俳句等に趣味を持ち居る人多く御座候。

◎會 報 會員通信

以上の如き結果にて我が郷里に之れより多少山岳に注意する人多く相成事と大に喜び居り候。(大正五年一月、竹下英一)  
△八木下出の兩氏と八時半長岡に下車驛のラムプ暗し伊吹は黒く静なり十時上野村松井着。鼠色敷布せんべい布圍山に雪なし。  
(重兵衛)

信州雪中登山は人夫を得ざるため中止致し名古屋で平凡な新年を迎へ候。

明日雪中伊吹登山の豫定にて参り候處多分雪少なく失望致す事と存じ候。準備の大袈裟なりしにきまり悪しく候。(是峰一月八日夜認む)

△すまじきものは宮仕へ臺灣に参り一年に相成るに山らしい山に登らずやつと今日出張の序を以てこゝへまゐり候。(三千七百尺)こゝは合歡山、蒼葉山、能高山登山の策源地として好個の處に候來年もう一度來て山登り致度ものに候。明日埔里社に下り更に日月に参るべく候。只今著人の跡を見物した處に候。(南投廳下霧社にて關口泰)

△恭賀新年 大正五年一月二日。夜例により卅一日夜は熱海に一泊、本年の初登山として元旦は午前三時に起され未明出帆の渡船に乗り波浪高き相模灘を航し酒で無くして船に酔ひつゝ稻取に、着近年に無い雨の元目で夜に入り非常のドシャブリとなる!!熱川温泉に一泊、二日は白田川を三里餘登りて天城連山の白田入りの頂上を越へ(時に三時相洋の雲海及天城連峯を展望して壯觀く!!)湯ヶ島に着、今日はグツシヨリ汗になりました、別天地に悠々自適、爽快限りなし!!!。(伊豆湯ヶ島にて岡野金次郎)

二〇三

△小生去月末江州伊吹山に登山仕候。二月十九日友人三名と出發其夜は山麓なる伊吹旅館に投宿仕り候。宿帳に八木、祖父交、佐野諸氏の御芳名拜見仕候。翌朝八時半出發詠より雪を踏みて一合目に達して輪カンヤキを穿ちて登り申候。四合目に到着致したるは十時半、晝食を終つて十二時發頂上には一時三十分頃に着仕候頂上にて京都大學々生約三十名其他二三子と會し、爲めに伊吹山頂は時ならぬ眼を呈し候。少々吹雪に遇つて眺望なし、二時頂上日本武尊の石像の下を辭し九合目より七八合まで雪上を滑りてまたくまに四合目の小屋に着致候。一體に雪や深く候ひき、下方にて京都二中の中山校長其他諸氏のスキー練習中なるに會し候。上野村者三時半即日歸名仕候、右御通知まで。(長谷川敏郎)

△賢正、七日當地より案内を履ひ和田峠の西南に逸ゆる一高峰、鉢伏山(一、九二八米)に登山致し候。當地方數十年來の暖氣にて山上少しの積雪もなく、往復約八里の行程一日中に易々上下致し候。

當山標高の割合に眺望の豊富なる事一驚を喫し候。先づ南方より東へ双眸に収めた主なる山を一巡書き並べ候。

信州駒岳、御岳、乗鞍、穗高、槍、野口五郎、三岳、針ノ木、蓮華、鹿島槍、立山、五龍、白馬、戸隠、黒煙、武石峠連山、淺間、日光、八岳、不二、地藏、鳳凰、甲斐駒、白峯、仙丈、赤石。(大正五年一月八日、下諏訪にて忽滑谷安美)

△拜啓昨今冷氣著しく相加はり候折から今朝の當地新愛知紙上に右の如き記事有之候まゝ御通知申上候。

近州伊吹山頂に二十日朝降雪あり。

東渡、惠那山 十九日午後二時より降雪あり。  
同阿木山 (大正四年十一月廿二日名古屋降生)

### △信濃鐵道の現況

御葉書を有難く頂戴いたしました、大變御無沙汰なしましたので申譯なく思つてなります此四五日來急に暖かになりましたので大町も漸く春の様になりました、しかし私の頭はまだ冬籠りの永い夢から醒めぬよう、此頃の山のように茫やり霞んでゐます、東京から箕作さんや石川さんや一高の旅行部から答もう人夫の先約の申込があるので急にまごついてゐます。

信鐵の工事は意外に進捗して來ました、今高瀬川の鐵橋工事最中ですが、それもこゝ旬日の間には竣工される事と思ひます、現在の「信濃大町驛」は高瀬の對岸にあたる松原の中にあります「大町から約六十町」、がそれは暫て佛崎驛と改稱されて會社側の豫定では遅れても來月初旬までには全部の工事を完了するそつです。

大町驛は丁度私共の家の向ひの田圃中です、公式に開通するのは六月一日だそつです、北松本驛から約二時間半かゝります、只今の所院線との連絡は貨車だけですけれど全通と同時に客車の連絡もされる様になるそつです、貨金は四十二錢です、いづれ全通の後時間割の改正や貨金の改正も行はれる事とせう、それに目下私の知人が編輯中の信鐵案内が出来ましたら御送附申上げるつもりであります。

現在の大町假停車場から小松原を隔て、仰がれる蓮華から白馬

の連山の眺望は全く嬉しいものです、真白い河原の真中に懸け渡された赤い鐵橋が矢張り山と對照されて美觀を添える事と思ひます。

登山者達は鐵橋の上を走る可愛らしい汽車の窓から顔をだして快哉と叫ぶに相違ありません、(車は甲武線の電車の古々何々です) 花盛りの都の傾りを新聞で見えておます、大町には碌に花らしい花がありませんのでたゞ東の山のだんく青くなつて行くのを待つばかりです。

松橋の葉が艶々しくなつてグット葉をもたげて來ました、堅そうな幣も十日ばかり後には紅くなるでせう。

今日落葉松を描きたいといふ日本畫の人が北へゆきました、木崎の赤魚がされたしました。

信鐵利用の木崎遊覽團體がぼつ／＼見えます、先日武石峠の麓の村の親戚へ行つてそこから槍ヶ岳と乗鞍の姿を見ました、それから鹽尻の友の家へ廻つてそこではあの穂高の輝燦な姿をなつかしく眺めました、今年には是非御出かけ下さいませないづれ其中に詳しくお報せする事があると思ひます、まづは (大正五年四月百瀆憶大郎)

## 會員に由りて成る近刊

△會員別所梅之助氏は「霧の王國」と題して、氏の登山紀行を公にせらるべく、發行書肆警醒社な

◎會報 會員に由りて成る近刊

り、收むる所の記文左の如し。

一切經山。忘れずの山(藤王山)。出羽の旅(西吾妻山)。那須のけふり。鹽原の溪谷。白根のほつり。日光一筋路。赤城山。霧の王國。輕井澤より。碓氷から妙義へ。木曾の御岳。八ヶ嶽。雪の武石峠。小佛峠。和ひき光。武藏驛。知らざりし人。大東日記。冬の箱根。箱根の神山。駒ヶ嶽。箱根の秋。豆相の境を。晴の富士。雨の富士。吉田口から。初秋の富士。越の立山。加賀の白山。京の二日。

本會々員によりて成れる寫真數多を挿入し、來る六月には上梓さるべしと聞けり。

△會員木本光三郎氏は「吉野群峯」<sup>ヤマトアズマス</sup>と題して、昨夏吉野群峯より得たる材料を編輯整理して近く出版さるべしと云ふ。

△本誌に掲載し來りつゝありし、幹事辻村伊助氏の「スウイス日記」は増補訂正の上、氏自から撮影にかゝる寫真數十葉を加へて、近く某々書肆より發行すべし、装幀挿畫、一切を擧げて本會々員の手によりて成さんどす、此れ本會々員の努力奮勵の結晶せるものと云ふべし。

紙數約三百頁、氏は三度瑞西に旅し自から撮影せる寫真約三百枚を越ゆ、本書挿入の寫真は成る

◎會 報 白馬岳案内丸山廣太郎死去 新入會者  
 可く、「山岳」に挿入せるものと異りたるものを撰  
 むべし。

裝畫に印刷に最善にして最近モダーンの方法を取るべし

### 白馬岳案内丸山廣太郎死す

白馬山麓北城村の産白馬登山案内として、名あり性潤達、聊か饒舌なれど好個の良案内たり、余の初めて祖父谷を下る、時に彼れも亦未知の難路にして、途中暴風雨に遭ひ、將に一同死せんとして生還するを得たり、其後遂に復相會ふの機なく今や彼れ永遠に去つて白馬山下、秋風獨り高原に鳴る所に眠る、一掬の涙なき能はず、彼れの靈果して白馬山頂に在りや、悲し。(高野生)

### 新入會者

岳

山



110







obtained from the top of this mountain. No time was wasted on the summit owing to the weather conditions, which, if anything, became steadily worse as we descended. Owing to the rain great care had to be taken coming down the forest-clad spur, as the ground under foot was very wet and greasy. Considerable quantities of decayed timber covered with moss and lichen had to be crossed, and half-hidden roots of huge trees had to be negotiated with much caution. The going was very treacherous under these conditions, and unless great care was exercised the foot would sink heavily into gaps between the roots of trees and rank vegetation, making the descent most trying. To make matters worse the rain came down very heavily during the latter portion of the descent, and all of us were very pleased to reach the river again at noon. We pushed on through sheets of rain to the Onsen which we reached at 3.20 p.m. We were told by the guide that if the water in the river was a dark-brown colour it would not be safe to take the route we had come up by, as there was danger of being washed away by the rapid current, and in this case we would have to climb the spur opposite to the one we had come down and proceed to the Onsen by another route. However we managed the return journey without any mishap, and reached the Onsen at 3.10 p.m., having crossed the Koshibu-gawa no less than 103 times in our two attempts on the mountain within the space of four days.

Given fine weather conditions the ascent of Akaishisan would be very enjoyable, and seeing there is nothing difficult about the climb itself it should be considered by those climbers who wish to be well off the beaten track. Our original intention was to cross the range and descend into the valley of the Oigawa river, and from there proceed to Narada with a view of climbing other peaks in the Southern Alps, but owing to the weather conditions and the expense it was decided to leave the district and proceed to Kamikochi with the object of climbing Kasadake, which mountain we were very anxious to climb. The accommodation at the Onsen is rough, but the hot sulphur bath makes up for a good deal. It goes without saying that foreigners should take all the food they require with them. On our way back from Okawara to Akaho in the valley of the Tenryugawa we secured some very good views of Akaishisan from the road leading up to the Ichinose-toge.

(End.)

steep scramble up a long slope covered with loose boulders, and crossing over a long ridge we descended 500 ft. to the camping place, where there is a large spring full of good water. This spring is reputed to be the source of the Oigawa. At this point there is a large rock with a crack in it, which latter is used as a shelter. We reached this point at 5 p.m., having taken 9 hrs. and 20 min. from Koshibu. The altitude is 9,000 ft. above sea-level, and the weather turned very cold at night.

A very red sunrise on the 25th was followed by heavy banks of mist surrounding the top of the mountain and our camping place. Higashi-dake and Arakawa-dake, two peaks on the range to the north-east of Akaishisan, were visible, but were soon hidden by heavy banks of clouds and mist. At 7 a.m. rain commenced to fall, and the weather remained dull and showery during the whole day with very strong gusts of wind from the south-east. We decided not to climb owing to the weather, seeing there was no prospect of getting any view from the top of the mountain. All that night the wind blew hard, and the barometer dropped over ten points. We thought we were in for a typhoon. On the 26th we left the camp at 6.20 a.m. in a thick mist, and proceeded up the gorge towards the highest point of the mountain. Rain commenced to fall, but ceased on our reaching the summit of the ridge. To the top of Akaishisan from the camping place we estimated the distance to be one ri, as after getting to the top of the ridge several intermediate peaks have to be crossed before reaching the summit.

Akaishisan in shape is very similar to Shirouma-dake or Hakubasan in the Orange-yama group, inasmuch as to the south of the mountain itself falls away in sheer precipices thousands of feet, whilst to the north there is a steep slope covered with patches of reddish rocks, sprinkled with the ubiquitous haimatsu. It is from these red rocks that the mountain takes its name.

On reaching the summit, 10,200 ft. above sea-level, at 8.14 a.m. the temperature was 52° F., and a cold northerly wind was blowing hard. Owing to mist no views in any direction whatever were obtained. On a fine day, judging from a photograph given us by Mr. Mayezawa Masao of Okawara, a very fine view of Fujisan can be

F. Leaving the Onsen at 6.25 a.m. we descended at once to the bed of the Koshibu-gawa, with the stream running very swiftly in those places where the river took a turn. The scenery on both sides is magnificent, the sides of the forest-clad hills rising to a height of several hundred feet straight up from the bed of the river. On the lefthand side, about one hour's walk from Koshibu, a very fine waterfall drops over a cliff into the river. We passed several huge boulders, and some of them must have been at least thirty feet in height and as many feet wide. Before reaching the foot of the forest-clad spur, where one leaves the river, crossings had to be made no less than twenty-seven times. There are no bridges of any kind whatever, and it would be useless to attempt to make them, as in flood time they would undoubtedly be washed away.

At 9.25 a.m. rain commenced to fall in heavy showers, and after waiting for over one hour at the foot of the spur with no prospect of the weather clearing, we decided to retrace our steps to the Onsen. Owing to the rain the water in the stream had risen considerably, and great care had to be taken at some of the crossings as the river was now flowing very rapidly, and there was considerable danger of being washed off one's legs. It rained heavily all the way back to Koshibu, so the hot sulphur bath, when we reached it, was very much appreciated.

On the following day, the 24th, a fresh start was made at 7.40 a.m., the temperature being 69° F. The sky was overcast, but the inn-keeper assured us that the weather would clear up and remain fine for three days. This prophecy, however, did not come true. Proceeding up the river-bed, with the water considerably lower than the afternoon before, we reached the edge of the forest at 10.20 a.m., where some fine views of Arakawa-dake—one of the peaks on the Akaishisan range—were obtained. This spot is about 4,800 ft. above sea-level. After a halt for lunch we commenced the ascent of the forest-clad spur leading to the summit of the mountain. This spur is very steep in places, and hands as well as ice-axes had to be freely used. We passed out of the forest at a height of 9,100 ft., after which we encountered haimatsu or creeping pine. From this point there was a

**AKAISHISAN.****H. E. DAUNT.**

Very few foreigners living in Japan have climbed Akaishisan, which is one of the highest peaks in the southern part of what is known to them as the Southern Alps. The writer of these lines met a learned professor from the Tokyo University in the Nagoya Hotel before climbing the mountain last summer, and on being asked where he was going to, he replied: "Akaishisan," whereupon the professor stated he had never heard of such a mountain. This is a case in point of the fact that very few foreigners in Japan know very much about the geography of the country they live in. Akaishisan is over ten thousand feet in height, and one of the highest mountains in the main island.

Our party left Nagoya on the 19th of August, and reached Iida in Shinshu on the 20th, travelling up the Nakasendo by train as far as Midono, and from there after sleeping the night at Tsumago, walked over the Odaira-toge the next day. At the Shogodo Hotel we met Mr. Gausden, from Yokohama, and reached Okawara on the night of the 21st. Having had to wait at Iida for letters, a very late start was made, and Okawara was reached at 10.15 p.m. The distance from Iida to Okawara is 11 ri.

At Okawara we got a guide, and engaged coolies for the ascent of the mountain. The agreement made was ¥1.75 per diem for the guide and ¥1.50 for each coolie, they finding themselves in board and lodging.

The scenery from Okawara to Koshibu is very fine, and on either hand forest-clad hills rise to a considerable height from the gorge through which the Koshibu-gawa flows.

From the village of Kamazawa the path becomes narrow and steeper. The Koshibu Onsen (marked on some maps as "Yuba") was reached at 7.30 p.m., where we found a fine bath containing water impregnated with sulphur heated to a temperature of about 105° F.

On the 23rd we made an early start, the temperature being 70°

大正五年五月十三日印刷  
大正五年五月十五日發行

\*\*\*\*\*  
定價金七拾錢  
\*\*\*\*\*

發行兼編輯者  
新瀉縣三島郡深才村深澤  
高頭仁兵衛

印刷者  
橫濱市太田町五丁目八十七番地  
村岡平吉

印刷所  
橫濱市山下町百〇四番地  
福音印刷合資會社

發行所  
橫濱市本町四丁目六十七番地  
高野鷹藏方  
日本山岳會事務所

(振替貯金口座東京四八二九番)  
電話特長百七十一番

東京市神田區表神保町

發賣所  
東京堂



著作權所有

## 「山岳」需供欄

△「山岳」第一年第一號より第十年第二號迄、新舊會員各位中特志の方に譲りたし。小高秀一  
△山岳寫眞の交換を希望す、特に關西地方及び東北の山岳を希望す、幻燈映畫の交換も亦希望す。

高野鷹藏

此欄は、會員及び讀者の爲め、公開せるものにつき、一般人士の利用を望む。  
(係り)

## 登山地圖に就て

従前東京市健全社書店に販賣方  
依托し來り候處全店都合に由り  
閉店致し候につき、自今當事務  
所に於て直接販賣致す事に相成  
候。

大正五年五月 日本山岳會事務所

近刊 !!

ヤマト、アルプス

「吉野群峯」

奈良市寺林町

木本事務所發行





